# 不連続殺人事件(坂口安吾)

## 一 俗悪千万な人間関係

してもらいたいのだ」 「実はね、だしぬけに突飛なお願いだが、僕のうちで一夏暮

る。 の家が酒造家で、酒がのめるという狙いの筋もあったのであの文士仲間は、戦争中彼の家へ疎開していた。ひとつには彼きわまる山中なのである。そんなところだから、私たち数名スを降りてからも一里近く歩かなければならないという不便一馬の家は汽車を降りて、山路を六里ほどバスにのり、バ

がつづいてやって来たのだ。妹の珠緒の奴が誘いの手紙をだ月王仁の奴がふらりとやってきた。すると丹後弓彦と内海明「わけを話さないと分ってもらえないが、この月の始めに望

たり、 実はあさって一緒に出発することになっているんだがね」 も来てもらいたいのだ。木ベエも小六も来ることになって、 ろ、居てくれた方が助かる。まぎれる。 彼らもそれを望んでいるが、僕らも実は助かる。彼らは退屈 そこで誰言うとなく、いっそ昔の顔ぶれ、戦争中疎開に来て くもうゆっくり本を読むような心の落着きが持てないのだね。 合で、僕らのイライラ不愉快になることと云ったら、まった なんだよ。僕らはやりきれやしない。からんだり、睨みあっしていやがる。珠緒の奴はそれが面白くて誘いをかけた仕事 怪だから、差引なんにもならない。三人もつれて喧嘩ばか 彦の奴がうわべはイギリス型の紳士みたいに叮 重 という奴は、粗暴、傲慢無礼、鼻持ちならぬ奴だが、丹後弓 手のつけようがなくなっていたのだ。御承知の通り望月王仁 うち半分ぐらいはフラリと上京してどこに泊ってくるのだか、 まぎらしのつもりだけれども、僕らは奴らだけじゃ息苦しく は飲食店が休業だから丁度よかろう、なんてことになった。 のスッキリしたところがあるけれども、 しているけれども、こいつが又傲慢、ウヌボレだけで出来上 お話するが、 したからで、 って、ほかに息ぬきのできる人たち、 いた顔ぶれだね、一堂に会して一夏過そうじゃないか、 つけたりね、一人の姿を見ると一人がプイと立去るという具 ったような奴で、陰険なヒネクレ者でね。内海明だけは気持 いうことは全然 喋 らないから今もって分らないが、ひと月の セムシの奴なんぞは時々立腹して食卓の皿を床に叩き 一夏うちへ泊るという。君だから恥を打開けて 珠緒の奴、この春、 堕胎したのだ。 木ベエにしろ小六にし 別して君には是非と 例のセムシで姿が醜 重で取り澄ま 相手が誰と IJ

## 「宇津木さんもか」

事にした程だから」「むろん一緒だ。胡蝶さんもくる。その為に一夏舞台を休む

離婚を承諾した。一馬も元々秋子にてこずり、発ど未練はなで、終戦、東京へ引上げるという時に話し合いの上で一馬がなものだけれども、問題は一馬じゃなくて、望月王仁だ。疎の上で別れたことで、文学者同志のことだから、あとは綺麗の上で別れたことで、文学者同志のことだから、あとは綺麗女流作家宇津木秋子は今はフランス文学者の三宅木兵衛と

かったのである。

ろう。 ن にすまして、くだらぬ女に惚れてひきずり廻されて、唯々諾々にすまして、くだらぬ女に惚れてひきずり廻されて、唯々諾々に 渉が深かったのだが、王仁の奴が全然貞節の念をもたない いる。一馬の招きに応ずるなどとは全くバカげた奴だ。 というのだが、そのくせ嫉妬で胸が破れそうなことも云って までは済まない筈だが、木兵衛という奴、理知聡明、学者然、 なる痴呆的なところがあるから、山荘へ行く、王仁とそのま 慢無礼、粗雑、野性的なところが肉感派の秋子に魅力なの 相当王仁に参っている。王仁は天下の流行作家であるし、 秋子なんぞは食後の果物、オヤツ程度にしか心得ていないか で珠緒とも関係があり、女中だの村の娘だの八方に情痴沙汰、 秋子は非常に多情な女だ。疎開中は木兵衛よりも王仁と交 秋子もあきらめて、木兵衛と一緒になった。然し内心は 秋子は本能の人形みたいな女で、 抑制などのできなく だ 傲 奴

孤独に閉じこもったように見えた。

によるものと思うけれども、一馬自身がこの計画に乗気の理私は然し、この招待は、なるほど一馬の述べたような理由

私はそう思う。はむしろ胡蝶さんにあるのだろう。胡蝶さんがよびたいのだ、はむしろ胡蝶さんにあるのだろう。胡蝶さんがよびたいのだんのものは別に隠されているのだろうと思った。狙い

暗澹、 うに、あの時はむしろ厳しい勇気にみちて、 と共に去る。元々未練のない女とはいえ置き去られては心中 てて一馬に走るぐらいの気持はいだいている。 六などはネチネチ執拗で煮えきらなくて小心臆病、粗暴な野性派が嫌いで、理知派の弱々しい男が好き 情慾をそそる肉感に充ちているが、 去った。 は一馬が好きで、一馬の方が積極的に出さえすれば小六を捨 で人なつこいタチなのだが、つきあいにくい男だ。 あの頃は然し一馬は臆病だった。宇津木秋子は三宅木兵衛 明石胡蝶は劇作家人見小六の奥さんで、女優だ。満身色気、 疎開客は終戦と共ににわかに去り、小六も胡蝶さんも 彼は孤 独というものが何よりも自分の望む愛人のよ 理知派の弱々しい男が好き、人見小 胡蝶さんは王仁のような 一同を見送り、 根は親切 胡蝶さん

女学校を卒業すると、もう一馬を訪れはしなかった。 は附焼刃で、実際は詩などに縁もゆかりもない人だ。だから を作っていたそうで、主知派の異才歌川一馬といえば文学少 を作っていたそうで、主知派の異才歌川一馬といえば文学少 をがかさんに会った。あやかさんは女学生のころは詩など のあやかさんに会った。あやかさんは女学生のころは詩など ないと月ふた月に一度ぐらいずつ上京のたびに、世相の変転

同棲していた。彼の絵は最もユニックだと云われ、鬼才など去年再会したときに、あやかさんは土居光一という画家と

り燃えあがらせる、 リズム ともてはやされているが、私はそうは思わない。シュル で、時代の嗜好に合わせて色をぬたくり、それらしい物をで 独とか虚無の厳しさは何一つない、 な詩情をたたえている趣きのあるのがミソで、 式 の 構図にもっぱら官能的な煽情一方のも ちょっと見ると官能的と同時に何か陰鬱 彼はただ実に巧みな 然し実際は の をぬ 商 レア 人 孤

食い下ったものである。もう女に亭主のあることなど眼中にない執拗さ、ひたむき、とられているんだ、何かそんな居直り方のアンバイで、全く変転、彼に発散の糸口を与えたものか、オレだって女房を寝一馬は別人のようだった。色々抑えていたものが、時代の才だのユニックな作風などと巧みにもてはやされている。

誌社や文士に渡りをつけて、

挿絵の方で荒稼ぎ、相変らず鬼

売込みの名人で、

終戦後は画

家の苦境時代だが、

彼は

雑

っちあげる名人だ。

だから絵自体の創作態度も商品的だが、

数十万町歩の 来が大金満家の御曹子のところへ、時局的にも酒造家であり、 りこむ、 かいたりして収入のある方だが、この物価高ではタカの まり貧乏が何より厭なのだ。土居光一は画家の中では挿絵 がない。しかしシツコイことが嫌いなようで、 あやかとはうまい名をつけたもので、 柄に合わない居直り方にシカメッ面を見せる気配も見受 ŧ あやかさんは美しい。 上京のたびに金庫からチョ 一足の絹靴下も買ってもらえない。 и́ こういう人を天来の娼婦型とでもいうの 林は持っている、 飛び切りという感じがある。 イヤでも闇の大金がころが ッと一つかみ札束つかん 遊び好きで、くったく 一馬の執念深 馬の方 か、 は元 知 れ を つ

> の、 下々には見当もつかない景気で、遊ぶこと、 いが、 婚した。それが去年の晩秋ごろであった。 まった。 でくる、 美しい着物、 鼻紙みたいに掴んでくる札束が七八万円 一つかみぐらい減ったって減ったあとも分りやしな アッサリ土居光一に引導を渡して、 豪奢の好きなあやかさんはお金に惚れてし おいしい食べも 正式に一馬と は あ るとい う

に値切って出たが、十五万円でケリをつけた。んだから二十万円でミウケしろという、私が間に立って十万膝づめの商談、女郎だってミウケの三万や五万は今時かかる、尤も商才にぬかりのない土居光一のことで、即坐に一馬と

帰ってくらあ。 ないか。 するぐらい喜ぶんだからな。吹けば飛ぶような三文詩人じゃ でなきゃアね。 なアに、 まも あの女はオレでなきゃアだめなん なくオレのところへ涙を流して、 オレの肉体は君、 ヨーロッパ べだよ。 の娼婦でも卒倒 あやまって、 俺 の 肉 体

ないかと私は思う。自分のよりどり随意の品物に見えるというような楽天家じゃの男ぐらい屁とも思っていないので、世界中の男が、つまりァン先生もこいつはダメだろう。あやかさんという人は一人土居光一は私にそう言った。然し、自信満々の和製ドンフ

いう話であった。ども、大変な見幕で怒ったもので、ひどい喧嘩別れをしたとられ無性腹を立て、ゲキリン、復讐、復讐もしなかったけれなんか屁とも思わぬくせに、小さなことでひどく誇りを傷けいに誇りを傷けられて、まったくこういう楽天的な麗人は男土居光一がミウケ代と称して二十万円を請求した時には大

いか、 な、 しになる条件があるということなんだ。 やしないや。ひどい喧嘩別れをしたというのは、 そのことを私が言うと、土居光一はゲラゲラ笑って、バカ 喧嘩なんて、男同志だって結局仲直りのチャンスじゃ 男と女の喧嘩なんて、他人同志なら元々喧嘩なん 。 わかったかい。 ひどく仲良 彼は かし

自信、

ウヌボレの化身であった。

衣通姫の一類で、全身の輝くような美しさ、水々しさ、そのはない。あやかさんは衣の下から身体の光りが輝いたという には一顧にも及ばなかったが、 まったく定跡のない人物なのである。 夜はその衣裳をつけ靴をはいて寝てしまうというテイタラク、 なことには無関心、冷淡、 くせこんなに美しく色っぽく見える人は御当人は案外情慾的 ではなかったようだ。尤も別に浮気をするというような事 もとより土居光一の予想は外れて、 お気に入りの衣裳や靴ができてくると、喜び極まり第一 ただ上京のたびに豪奢きわまる買物をして、大喜 興味がすくないのか、浮気なとこ 然し一馬も決して幸福な結 あやかさんはもはや ·彼 で

亭主が何をしても平気の平左という様子、これが一馬には物 あべこべに立腹されてしまうから、 足りない。 ら、亭主へのサービスなどは思ったこともなく、したがって、 人の心をシンシャクしない。女房の義務など考えていないか なツンとした女王性は微塵もないけれども、わがままであり、 万事につけてひどく愛くるしいから、 ノレンに腕押しの力負けで、物足りなかったり、 自分一人を特別の男として特別に見てくれる風が 無念であったり、 それで恨みを述べると、 一馬先生顔色を失い、こ クレオパトラのよう

> なさ、それとなく懊悩、 のところ全く圧倒されて、男一匹、わが身の拙なさ、 叛逆の色も深い。 だらし

実際はあやか夫人に惚れすぎているからのことであ る

する気もない。するほど惚れていやしないのだ。 が愉しいので、それは趣味上のこと、浮気というようなもの れとなく素知らぬ素振りでその愛情を「弄」びいたずらするの ひそかに自分を思ってくれるというようなことを確めて、 子をしてみるのが好きなのだ。特に人の奥さんが亭主よりも は人に好かれるのが嬉しくて、それを知らぬふり、そんな様 るもので、 こうなると、浮気みたいなものがしてみたいような気持にな ではなくて、自ら飛びこんで口説くことなどできやしない。 夫人が狙いの筋ではないかと思った。彼のような坊っちゃん 私は疎開愚レン隊を一 夏招待、 これはどうも胡

を弄び虐待し、そんな気持があるので、本当はあやかさんに を招待 理はよく分るのである。 う外部の形式が感覚的に残念無念で、私には彼のそういう心 れてふり廻されるハメに立ち至ったから、ふり廻され なる。私はそんな風に考えた。 惚れているのだ、 そういうタチの一馬が、 して、ひそかにその愛に甘え、むしろ胡蝶夫人の純愛 ウッカリすると取り返しのつかないことに だから充ち足らざる部分を胡蝶夫人 自分がはからずもあやか夫 いるとい 人に

きるべき御仁のことで、私がそれを気にやむまでのことはな 然しいくら坊ちゃんとは云え、 魔に魅入られても十字架は自分自身で負い 年齢四十、立派な文学者で

私は然 私一 個の私事として、 この招待には応じ得ぬ理

のは尤もであるが、古い腐った蜘蛛の巣みたいなものがネッね合っていたんじゃ、外にお化けの一聯隊でも呼びたくなる ながり、からみ合い、 トリからみ合った男と女を一堂に集めて、その陰鬱陰惨なつ いう陽気なセムシが乗りこんで、 由がある。 そこへ丹後弓彦という取り澄したヒネクレ者と内海 なるほど、望月王仁という無法者が乗りこんでい 思っても不快、悪趣味、厭じゃ この一聯隊でも呼びたくなるからみ合い、睨み合い、す 睨み合い、 か。

開させた。 妾や手カケの数あるうちで、 京へ引揚げてきたのである。 は梶子夫人がまだ存命であった)、自分の村の一軒をかりて疎 私の女房の京子は、一馬の親父の歌川多門の妾であった。 私は京子と恋におちて、 まさか自宅へ入れるわけには行かないから(当時 特別寵愛のこもった女で、 終戦と共に強奪して、 だか 東

そこに私が加わると、

尚更いけない理由があった。

追放後の閑のからだを今では十九の小娘を寵愛して鼻の下を小間使いに、つまり侍女、妾、それで御機嫌が直ったそうで、 すっかり苛々、私がつまりその苛々の分まで憎まれ役に廻っ さまらず、 まもなく下枝という村の相当の家の娘に目をつけて、 ていたようなものである。然し去年の夏、梶子夫人が死に、 天下と大いに希望のあったところを、 多門の怒りは狂暴なもので、風の便りにもいっかな余憤 ているという話であった。 あいにく又、大臣級の政治家で、これからオレ てもなく追放になる、 の お

> ないからな。僕はともかく、 京子は身ぶるいするだろう。そ

僕の精神上の極 れは出来ない相談だね」 にだけは、 いささか通俗的な犯罪実話もある」 然しね、 すべてを打ちあけてお話するつもりなのだから。 まア、もうちょッと我慢して、 めて雰囲気的なお伽話もあるし、 きい て欲しい。 それから、

「見てごらん。こんなイタズラをしかける奴があるんだ」 ごく有りふれたレターペーパアに、次のように書いてある。 彼はポケットから一枚の封書をとりだした。

憎しみも呪いも悲しみも怒りも。 すべては一周忌に終るであろう。 梶さま 誰 に殺され た

降りることになる。彼の家は更にそこから七里ほどバスで山径る発信地は、近くの町で、東京から行けば、その町で汽車を を走らねばならぬ。 に合せる。 も近い都会であり、 のインクを使い、 巧い字じゃ ·ない。 シミがたくさんできている。 村人の買い物は概ねこの町を利用 然しともかくこの田舎町は彼の村から最 然し手蹟を隠して書いた字だろう。 スタンプによ

文学的だな」 「これは然し、 「この手紙は僕に宛てたもので、犯人を誰とも書いてないけ 僕に宛てたところをみると、 イカラな文章じゃないか。 僕を犯人に当てている ハ イカラ以上に、

しても、

ないか。

僕はそのいくらかでも不快な思いを好んで見たくは

のかも知れないね。御承知の通り、

うちの母は二度目の母で、

御尊父の御機嫌がいくらかまぎれているに

「モクベエや小六と違って、僕がまさか君の家へ行ける筈が

を殺 だから、 じゃい これに学費を給与して内科を学ばせ、 ない、 僕の母が死 もとより毒殺などとは誰一人考えた者もなく、 死斑も特別なものは何もなく、 うことは別として、 られても見 だろうから、 いうことはない。然し苦悶の様相 メだった。 しりながら苦しみ死にを遂げたもので、何本注射をしてもダ のも堪えてい は医者を怒っていたが、 不服であったほどで、こっちへ来てから表面従順 的によびよせた。 から、と云って、 が村のためだと云うのを、 のは反対で、 兼ねなければならないから、 を与えて開業させた。 老塚というビッコの医者、これは った。 ソリが合わなかった。 心臓ゼンソクという奴だ。 け 去年八月九日に四十二で死んだのだ。 ない 腹這いにタタミをむしる。 これは心臓ゼンソクの 分けはつ 理由があるだろう。 ん ので、 ここへたとえば毒殺という外からの手段が たようだ。 だ後お嫁にきて、 全科にわたって一応習得させる時間を与える方 医者の当人が学究肌だから、それが非常に 卒業後研究室に一年ぐらいいただけで強 苦悶 か 外科も耳鼻科も眼科も、 山中の無医村で開業するには内科だけ な ゜ゼンソクという奴はひどい苦しみ方 逃げられると困るので、 の様相だけでは、 恩を忘れて不親切だと云って、 いいえ、 父などはあまり早くよびよ だから年も僕と三つしか違 この母は元々ゼンソク持ち 死んでからは 落はは 出 のうちのたぶん極限 普通のことで、 それが怖 、私のためによぶ医者です まったく母はタタミをむ 血 とか 五年ほど前、 した遠縁の子弟だ ね。 いものだから、 死 歯科 安らかな顔 斑とか、 葬ったのだ。 然し、 不満が ゠゙゙までー では 特別どうと がこ 村へ住居 そうい 出血も の あ 加え ある いせる ŧ った 手に 制 母 母 0

う。 あいつにしたって、こと、 ぼしやしないんだからな。 くせに母親が死んだって悲しむどころか、全く涙ひとつ、こ タズラをしたがる奴なんだ。 がった。 を毒殺したんだなんて噂があるそうよ、 きたような偏屈なところがあって、 をしないタチなのだ。ビッコで、そういう不具のヒガミから 医師にききただしたら、 そんな話になったのだろうが、 悶の様子を見ている。山中の暇な村人だから尾ヒレがつい そんな。噂が私たちの耳にとどいたのは今年になってからだろ 後釜を狙 て相当の交情 かに父と関係は いうまことしやかな風聞 カな冗談も言わないので、 いつときたら、 なかった。 いう看護婦、あれのことだ。 いに私に向って、近ごろ村じゃアお兄さんがうちのお母さん い男だ。 月並なものさ。 ピラに大いに遊べるとハリキッたような始末なのだ。 的人間関係じゃ 臨終には女中から出入の者まで集ってい むろんこれは冗談だ。 そのうち、 ったという、 あれはそういう人物で、 が あ あった。 あいつはお梶お母さんのたった一人の実子の こんな噂があるから、 ないか。 つ 食事に家族が集ってる時、 たことも これは如何に 君がお京さんとああ があ 大きな目玉をむいたきり、 農村 いやしくも殺人犯だから、そうバ 叱る人がいなくなって、 実は当時、 人の一番いやがることをね。 った。 事実だろう。 変に色ッポイ女だからな。 ほッてもおけないから海老塚 の あいつはそういう人の悪い 噂なんて、 君達 も村の噂に手頃の新派悲 お喋り嫌 分りきったことには返 別に犯人は誰それだと ŧ と大きな声で言 妹の奴 それ 知っている諸 なって後は みんなこれ たのだ いの人づきの 珠緒の奴 で 母 安心してあ これで大 から、 を殺 返 がふ て、 あ 1

ツ

した。 んなひどい冗談を言いやがった。むろん誰もゾッとなんかし 凄味なんか、 僕自身は、 やっぱり寝ざめは悪い」 ないからね。ゲタゲタみんな笑いだ

ろう。 ない。 鼻息 り澄しているくせに内心は淫らなものだ、案外ウブなもんで かけたが、全然手ごたえがなかった。 変に情熱があって一晩はよろしいものだ、 月王仁は、 均斉のとれた美事な体格で、 夢は見がちのもので、看護婦ならみんな戦地へ志願しそうな 戦争ともなればただの娘も看護婦になって従軍するぐらい 諸井琴路という看護婦は今はたぶん、ちょうど三十前後だ だい 冷めたい女であった。 五尺四寸五分だとか、 のだが、 ああいう女はムッツリ助平と云って、冷めたく取 たい女、若い女というものは英雄愛好家だから、 この諸井という女は別で、 顔もまずくはない。 日本の女に珍しい延び延びして 男の冗談などには取りあいも などと大いに働き 凡そ架空な夢 漁地 の望 の

の

と巧くいかない。

せる。 海老塚 家には外に二 無医村 看護婦 く貴重品 戦争になって看護婦というものが戦地へ駆り立てられ 自分の都合もあるけれども、 医院 1の看 が戦地へ徴用されちゃイヤだなとこぼしていたので、 になったとき、東京のかかりつけの病院 へおかず、 :護婦という立派な口実に許可を得て連れてきて、 組の病人があった。 自宅 の一室を与えて昼だけ医院 外にも名目があってこの いたこの へ通わ ひど

中風で寝ついている。 ステリー 歌川多門の実の妹だ。 つはここへ疎開 の気味で、 お梶さんとは特別折合いが悪い。多門と の この人も半病人で、 南雲一松という老人がここへ来て 一松の妻女はお由良婆さまとよばれ、 生来の虚弱からヒ から

家の飼い殺しの下男と女中頭で、喜作爺さん、

この人の母親は死んでいる。お祖父さん、

お祖母さんは歌川

題

の人だ。

お伝婆さん、

もう一人の病人は加代子さん。これが大いに問

門の子供みたいの年で、昔から反目していたから一緒に住む けれども女はそうはいかない。別してお梶さんは後妻で、多 あり自分の邪魔になるところは何一つないから、 手当をしてやれ、それだけのことで、 開する、よかろう、面倒みてやれ、病気になった、よかろう、 ならなんでも鵜呑みに気にかけないタチだから、 にかけない。そんな人間共が寄食していることも忘れている。 いう人は特に肉親の情熱などはないけれども、世間並のこと 大きな家で金も物資も ちっとも気 家が

らけ、 梶さまは和歌など物して短歌雑誌に投稿している人だから、 意味のないことまで悪意にとって恨んでいるから、 悪でひねくれており、ヒガミが強いから、 草さんは以ての外の不美人で、目がヤブニラミでソバカスだ 千草さんが犬猿ただならず仲が悪い。珠緒さんは美人だが千 二人死んで一人は嫁に行って満鉄にいる。末娘だけが未婚で、 地へ行っており、この戦争に潜水艦で死んだそうだが、 あって、 オットリ奥さま然としているけれども、 つける。 は腹に物をためておけないタチでガラガラピシャピシャやっ 緒に疎開しているのだが、お梶さまの娘の珠緒さんとこの お由良婆さまの子供は男一人女四人だが、男は技術家で外 豚のように肥っている。肥っているのに神経質で意地 これ 嫌いだすと百倍嫌いになるようだった。 が又、 母親同志 の反目の種になるのである。 病的に潔癖な神 奔放な珠緒さんの 珠緒さん

-7-

どちらも人の好い、いつもニコニコ、大へん感じのよい召使

とに美しい。清楚、純潔、透きとおるように冴え澄んだ美しっぱりした都会風のものを当てがわれている。この娘がまこ手伝いをするわけでもなく、服装なども華美ではないが小ざも、実は多門の落しダネで、女中の母親が身ごもり生み落し加代子さんは言うまでもなくこの二人の老人の孫だけれど

さん二十四、千草さんはその二つ年上で、二十六になってい珠緒さんよりも二ツ年上、珠緒さんが二十二なら、加代子たり起きたり、たいがい読書をしている。で発病して一時入院したが、退院後は女中部屋の一室で、寝けれども十七の年から肺病で、女学校の四年の時、寄宿舎

である。

るだろう。

さだ。

含めたそうだ。

含めたそうだ。

含めたそうだ。

ないの際し子の存在にはお梶さまも相当煩悶した曲であるが、この隠し子の存在にはお梶さまも相当煩悶した由であるが、この隠し子の存在にはお梶さまも相当煩悶した由であるが、

附添わせる。南雲一松翁さんやお由良婆さまが相当の変調でだから加代子さんに微熱があると看護婦を病院へやらず、

凝っていたわけだ。いで、よく面倒見てやらない。その呪いがお梶さまに集まりから、愚痴っぽくメソメソとヒステリーじみた南雲一族が嫌う。諸井看護婦が又、冷めたい女で、俗な情愛の稀薄な人だも、いいから病院へ行ってきなさい。忙しいでしょう、と言

実際はどう言ったのか、分りゃしないわ、と言っているそうたので、お梶さまの枕もとに一番近く坐っていた珠緒さんも、雲一家の者はあっちへ行ってくれという意味のことを言ったったの言葉は殆どよく聞きとることが不可能だったが、南お梶さまは危篤の時、死の直前のもはや畳をむしる苦悶のお梶さまは危篤の時、死の直前のもはや畳をむしる苦悶の

お京さんが必要なんで」い我がままだけれども、君よりも実のところは、どうしてもよ。僕が君をたよりにしているのは、これは僕のあまりひど村の疎開者かなんか、暇で、ヒネクれた奴のイタズラだろういことだから、手紙の文句の方は、僕は気にかけていない。「この脅迫状は全くバカげたものさ。こっちは身に覚えがな

ていたんだね、その上に、君、あれぐらい毎日何かしら読書ていたのだ。困ったことに、加代子の方が僕以上に僕を愛しわり、聖母を敬慕するような、そんな風なやさしい心をもっだから、僕は色情的なものを、極めて精神的に変形し、いた昔から、加代子を熱愛していた。然し、ともかく兄と妹なん「余分の註釈はよしにして、いきなり言ってしまうが、僕は酒の酔いもさめたように、彼の顔色は青ざめてきた。

か、 いと思った。 情熱で思い決しているのだから、 達がそうでなければならないの? かせても、 て愛してい しているくせに、 もう眼 どうし 崇高そのものですよ。 入れたくないの て? 非常識 は 世間の人がそうだって、どうし 恋をしちゃい な話だけれども、兄 がだね。 僕は打たれた。死んでも 君は信じられないかね。 向う見ずだよ。 け それが処女 な しい のだと言っ の僕を恋人とし の 世間 本がなのん そ私 てき

のだ。 のも これ以上 ねない。僕はそんなに単純じゃな ず許してくれる。そして、死にましょう、 であったと言う事ができる。 代子は僕の手を握りしめた。 からだにふれてはならぬ。 はどうなると思う。 神様にやさしくだかれて悪事をささやかれたら、 抜いているさ。僕はふらふらした。 ように知ってい 子は世間 しい接吻だったが、二人はまるで水のようにただ一つのも 加代子は聡明そのものだ。 !を捨てているんだからな。 の崇高 然し、 はないですよ。 加代子は言うのだ。 犯さずにいられそうもない気がする。 僕は然し危いところで思いとどまった。 見抜いているのだ。 たとえ死んでも。 崇厳そのものであった。 僕たちは接吻した。 なんと云ったって、 なんでも知っている。 ねえ、そうだろう。 罪を知らないのじゃ 僕は悪党なんだ\_ 結婚 自分の宿命だって見 とね。僕は しよう。 僕は神様を犯せ 冷めたい いったい 神様は必 然 悲痛 もし 神 な 加

悲

の

加

「そんな風

に言ってくれると、

れ

るが

ね。

君

の

言

葉

猛獣みたいにおとなしくなって、 ヤラカ ・ ボ ー の言葉は痙攣的な叫びになった。 - イで、 一向感動し な い から、 然し僕が生来 だんだん動 物園 の

ア

死

の チ

怒ったかね。そうじゃない なんでもなく、 時には口説 あやか夫人にもゾッコン参りすぎている。 話の途中じゃちょッと冷や冷やしたね. 少はムホン気もだしたがい 女性に圧倒され徹底的に降伏状態にあるんで、 している雰囲気で、根は処女の魅力、 の ン気も出したいからな。 いかな。 「そりゃ分っている。君ぐらいの年になりゃ誰だって悪党だ。 男は眼中にあ 、然し実のところ、ほんとにヤッちゃったのかと思って、 根をつきとめると、 てもみたいだろうし、 りゃしないからな。 案外近親相姦でも 兄と妹、 いさ。 か。 実は案外、 君は実際はあ 発散すりゃ、 恋愛、 なく、 さ。 然し、そりゃ、 魔力、 加代子さんは君以外 薄ッペラなも 大いによろし みんな君自身 胡蝶さんにだって、 それだけじゃな のやか夫 ちッとは それでい 崇高 人 のさ。 の ム 非処 でも 朩

代

い

の

多

い

るのだからな。 ものだからな。 して、懐かしんでいるのだよ。 た一人、お京さんの外には。 というのは、 貰えれば、 だけ信じてりゃ が当っているとは思わないが、 つ 里の山道を歩いて、よくお京さんのところへ遊びに行った 起きられるようになると又で 加代子の気持をなだめて貰えぬものだろうか。 憎んだものだよ。だから君、 僕としては本望なんだからな。 加代子には友達というものが一人もない。 叱られても、又、 僕はあのころ、 いいんだ。君から、そうやって、 加代子は毎日お京さんを思い 病気に悪いことを知り 僕も救わ お京さんが加代子を殺す妖婆 理窟は止そう。 行 く。 かける。 熱をだして寝つい お京さんに来てもら それ 理窟 で 君 いたわって は僕 でかけ · お願 たっ だ

る。 う役割を果し得る人といったら、 に仕向けて貰いたいのだ。 だけれども、 イないのだから、 然し僕の全力で足りそうもないから、 僕のことをもう諦めて、 僕がいかにも意気地がなくて申しにくい 勿論、僕自身からも、そう仕向け お京さんの外には金リンザ 外に心をまぎらすよう お京さんに助太刀

ない。 困った役目だ。 もとより私の一存で返事のできることじゃ

を頼むのだ」

りや、 しては、 にモクベエと小六の両夫妻を同道して山へ帰った。 まかせ、 は草津の湯でもと言うから、 京子の決意が石の如くであるから、 戻って京子に言ったら、 こっちの寝ざめが悪いばかりだ。それに京子の立場と 成行きにまかせることだ。 あの山荘へ再び顔をだしたくないのは当然だった。 マッピラ御免だと言う。 誰の匙加減でもダメ、当事者に 加代子さんが自殺でもす 一馬も諦め、 恋の 三日の後 病 い

## 意外な奴ばかり

いた。 七月十日 の朝であったが、 馬から次のような手紙がとど

だから、 頼む。尚、三枚の切符のうち一枚は巨勢博士のものさせるから、その日の終列車で来てくれ。ぜひとも 七月十五日にツーリストビュロオから切符を届け 口説き落して、 ムリムタイにでも同道たの

> 京さん。 々の血が。 い血の海が見える。 怖るべき犯罪が行われようとしている。 、お京さん! 君と巨勢博士だけが頼みだ。そして、 たのみます。 待ってます。 多くの人 お

することができると云う。 分だから、 枚の切符を持ってきて、 十五日 の午後、 N町へ翌朝七時ごろつき、 実際にツーリストビュロオの使い N町行きの終列車は二十三時三十五 バ スの始発にレンラク の 人が三

企画に参与するのだそうだ。 一馬はツーリストビュロオの嘱(託なのである。 宣伝文化の

と言うので、文面の示すところに従い巨勢博士を訪れた。 ろに所詮ホロリとしているのだ。じゃア思いきって行きます、 は始め厭がったけれども、 何かというとホダされて、 きあいにくい。 は要するにスミレ詩人で、 一馬は時々生一本に思いこんで凄むから、私はどうも、 私は然 Ļ 崇高なる近親相姦、そういうとこ 文面が凄すぎる。それよりも、 どうもいけないタチである。 至ってツキアイのいい方だから、 -10-

若僧なのである。 どころか私や一馬に比べると十一も若年のまだ二十九という 巨勢博士と云っても、 実際は博士でもなんでもない。それ

きなさい、 シの若僧に弟子入りしたって仕様がない、 になりたいと称して弟子入りにやってきた。 彼は十七の時、 と言ったら、 まだ中学生であったが、 若い者は若い者同志でさア、と変な 大家のところへ行 私のところへ文士 僕みたいカケダ

ほかの科へ入学不可能な宿命を自覚したからの結果なのであ いうシャレたものを勉強したが、これはつまり奴が不勉強で、 然しまもなく彼は探偵に凝りだして、然し大学では美学と

る。

嗅ぎ分けること、怖ろしい時がある。彼にかかると、犯罪を 奴の用いる公式が我々には呑みこめない。 でてくるのだが、それがどういう算式によるのか、変幻自在、 れてしまう。全てがハッキリ割切られて、計算されて、答が めぐる人間心理がハッキリまぎれもない姿をとって描きださ 奴の観察の確実さ、人間心理のニュアンスを微細に突きとめ である。我々はイヤというほど実例を見せられ、全くどうも 然し彼の探偵の才能は驚異的なものだった。まさしく天才

りうるのだが、奴にとっての人間の心は常にハッキリ割り切 迷路は永遠に無限の錯雑に終るべきもので、だから文学も在 られる。 我々文学者にとっては人間は不可決なもの、人間の心理の

「それくらい人間が分りながら、君は又、どうしてああも小

理を射抜いた卓説で、彼の人間観察は犯罪心理という低い線 説がヘタクソなんだろうな」と冷やかしてやると、 「アッハッハ。小説がヘタクソだから、犯罪が分るんでさア」 こいつはシャレや御謙遜ではないだろう。この言葉も弥真

なのである。 いように、 で停止して、その線から先の無限の迷路へさまようことがな だから奴は文学は書けない。文学には人間観察の一定の限 組み立てられているらしい。そういうことが天才

界線はないから、 奴は探偵の天才だが、 全然文学のオンチな

のである。

本、 強の怠け者を敢て博士と尊称することにしているが、然し めは肩のこる学問は知らない代りに、下らぬものなら、 んでも知らぬというものがない。 然し我々は彼の探偵手腕を絶対的に認めるから、この不勉 、落語全集等の高級品から下は猥本、 そういうものは徹夜で耽読するから、下らぬものならな 映画雑誌、 相撲の番 奴

か。然し、今晩はダメですよ」 「そうですか、避暑はいいな。 私が出かけて行って手紙を見せて応援をたのむと、 料理も食えるし、酒ものめる

「なぜ」

・ビ・キ。分りましたか」 「つらいな、開き直られちゃ。 ちょッとお耳を拝借。

お先きに。あの子もつれて行きたいな」 「やいちゃ、ヤボです。先生。 明日の夜行で行きます。 一足

「博士も亦然りか。どうせ相手はパンパンだろう」

「つれて来たまえ、遠慮なく」

「ダメ、ダメ。神聖なる処女は虎狼の中へ連れて行くわけに

行かないです」

博士は少女趣味 かい。 やれやれ。 俺はトンマな趣味の奴に憑

かれているんだ」

私は手紙の指定通り出発した。

眠ることができず、 汽車はこの節としては大名旅行で、腰かけることができず、 便所へ行くことができない程度の穏やか

な旅行であった。 N町へ降りると、 思いがけない人物が乗り合せていたのだ。

乃さんだ。 私は呼びかけられて驚いたが、神山東洋とその奥さんの木曾

歌川家ではみんなに毛嫌いされて出てゆけがしに扱われ、どか暴力団のような見るからガッシリ腕ッ節の強そうな大男で、々訪ねてくるのだそうだ。弁護士という頭脳的な商売どころた男だ。木曾乃は元は新橋の芸者で、落籍されて多門の妾であるが、弁護士で、八九年前まで歌川多門の秘書をやってい神山夫妻は戦争中、ちょッとばかり山へ顔を見せたことが

なんだな。恐れ入りました。今後よろしく御指南願いますよ」文士なんて、おとなしそうで、やっぱりその道は猛者ぞろいっていましたよ。先生も見かけによらない。そうなんだな、「これはお京さんも。そうそう、矢代先生と御結婚の由、『承しかけても、誰も返事もしないのである。

っちを向いても、女中にまで渋い顔を見せつけられ、誰に話

「矢代先生も歌川さんでしょう。お伴いたしましょう」

私は返事もしなかったが、

「あなたも歌川さんですか」

ことがあるものですよ」「ハア、何ですか、招待状が参りましたもんでね。珍らしい

した奴だ。 後へ上げるのだから、人をバカに拶したが、前へ下げずに、後へ上げるのだから、人をバカにっている。ヤア。彼は当り前というように、頭をガクンと挨厭な奴、思いがけない奴にばかり出ッくわす。土居光一が乗ぶしバスに乗りこむと、私は暑れ返って、ウンザリした。

「ヤア、君はどこへ行くのだい」

ちへ行くにきまっているさ。君はそうじゃないのか」ろへ来て、どこへ行きようもないじゃないか。歌川一馬のう「どこへ行くって、こんな安達ヶ原に毛のはえたようなとこ

こいつが然し、何の用で行くのだろう。

「君は何か用があるのか」

と思ったが、酒があるなら、つきあってもよろしかろうじゃいうから、変なことを言ってくる呆れたオッチョコチョイだがぜひとも御光来、一夏をお過し下され、酒も料理もあるとしてしまったけれども、後をネダルほど零落はしないよ。奴ミウケの金はちゃんと貰ってしまったから、とっくに飲みほ「バカにするな。あんなヘッポコ詩人に何の用があるものか。

彼は京子を見て、フンと笑って、

「あなたがお京さんか。

、なるほど美人だ。色ッぽいな。

ないか」

歌川家へ乗りこむなんざア、矢代文士も御心臓じゃないか。京さんはオレが抱いてあげたんだがな。然しお揃いで堂々と三足おくれたわい。オレが戦争中この村へ疎開してりゃ、お厚く、又、浮気心も深しか。いい色気だなア。残念だ。二足

君の小説は子供ッぽくて読めないがな」

がが企まれていることは、もはや確実と見てよかった。や私もひどく不安になってきた。何かが起る。少くとも、何は彼の手紙からは主としてナンセンスを感じただけだが、今いったい一馬は何を考え、何を企んでいるのだろうか。私

はやりきれない道中である。ここから一里近く山の小径を上ったり下ったり、疲れた時にバスを降りると若い下男が荷物を運びに待っていた。まだ

淑徳

宇津木秋子であった。私たちを迎えに来た様子であった。木蔭から二人の女が私たちの方へ歩いてきた。あやかさんとようやく歌川家の近く、鎮守様の下へさしかかったとき、

が先に声をかけた。の目を疑るような風であったが、それを見ると土居光一の方しまった。何がなんだか、わけが分らないという顔で、自分然し、あやか夫人は私たちに近づくと棒のように直立して

オレが久々に可愛がってあげるかな」「よう、大富豪令夫人。御出迎え、御苦労。どれ、お駄賃に、

く抱きしめ接吻ぐらいしようという気勢であった。彼はツカツカとあやかさんの方へ歩いて行った。それは全

「何しに来たの? あなたは?」

「ヤア今日は。あんたは、どなた?(え?)宇津木秋子さん。人の女を一緒にまとめて抱いてしまうぐらいの調子で、うに退いたが、光一はそんなことは意ともせず、なんなら二あやかさんはジリジリ宇津木さんのうしろへ、身を隠すよ

これは美しい。いずれ、ゆっくり御挨拶します。昔の色女があ、高名な女流作家、お見それしました。まだ若いんだな、「ヤライトは、おんだは、となが?」えて「写達才利ラさん」

待ちかねていますからね」

「悪党! ろくでなし! お前なんかの来るところじゃない。りはらって五六歩逃げて、

光一はあやかさんの腕をつかんだ。あやかさんは激しく振

帰りなさい。ねえ、誰か……」 お前なんカの来る

て、逃げだした。その後姿に目もくれず、光一はハンケチをかかろうとするので、言葉をつづける暇もなく、顔色を失っ私たちの方をウロウロ見たが、又光一がシャニムニつかみ男・ださし、オラー記が、

だして額の汗をふいて、

が足りないからね、そうでしょう」えないのかなア。ねえ宇津木さん、日本の女は色ごとの訓練うして女という奴は、待ちこがれた人に、待ちこがれたと言「いとしい人に出ッくわすと、女の子はとりのぼせるよ。ど

一馬とセムシの内海だけが私たちの到着を待っていた。歌川家へつくと、来客諸公は滝ツボへ水浴にでかけた由で、

「ようやく、お目ざめ。もう、みなさん、お酒めしあがって洗っていると、女中が迎えに来た。そこへ京子も迎えにきて、身に山の冷気は快適で、私が目をさましたときは、もう、た身に山の冷気は快適で、私が目をさましたときは、もう、た水がの中食をとり、目がとろとろ開かなくなって、部屋へ寝、私は喋る力もない。一風呂あびると、ビールとサンドウィ

私は大きなアクビをして、階下へ降りた。「まったくグッスリねむったものだな」

るわ」

### 三 招かれざる客

天下の女はみんな俺の女のようなものだとうそぶいている。ろか、暴行強姦もやりかねない奴で、だから未だに独身で、も思わない。礼儀作法を弁えず、人の面前で婦人に接吻はお好きだという者はめったにない。才筆を鼻にかけて人を人と私は望月王仁が大の嫌いであった。尤も文壇で望月王仁が

ッぱなれがよいことと、ジャーナリズムは思想性よりも筆力けれども彼はジャーナリストに人望がある。それは奴が金

に、さすがに一般と神経が違うなどともてはやされる有様できゃ芸術はできないなどと、逆に彼の傲慢が美徳の如くに評当然とうけいれ、却って自信があるとか、あれだけ信念がなるから、彼が第一級の流行作家であることから、彼の傲慢はズムは事物を歴史的性格で判断せず、現実の現象性で判断すで評価するから、彼の才筆に眩惑される。それにジャーナリ

全然角突き合わないのである。か者で、粗雑のようでもヨタモノ仁義の神経は発達していて、ところが期待を裏切られた。奴等はやっぱり海千山千の強

「やい、ピカー、お前は酒を飲まないのか」

ようなものかも知れぬ。はないのだろう。酒に酔っては睡気を催し腕がにぶるというで平気の平左で女をだいたり口説いたりする奴は、酒の必要酒を飲まない。まったく奴のように酔っ払わなくとも、人前工仁が言ったが、光一はニヤニヤしている。彼はあんまり

王仁ときては酔っても酔わなくても、女を口説きたて、酒

をガブガブ浴びるが如くに闡りたてる。

をつかんで、突然光一が立ち上って胡蝶さんの前へ行った。いきなり手

ざ、踊りましょう」があってね、この悪徳が私は好きなんだ。いズというところがあってね、この悪徳が私は好きなんだ。いいうんだなア。シャルマント、デリカ、それにオルグイユーして人知れず思いをこがしていたけど、あなたは麗顔麗姿と「踊りましょう。胡蝶さん。かねがね舞台では拝顔の栄に浴

胡蝶さんは静かに手をひっこめて、冷めたく、

「いやです」

あった。

王仁がゲタゲタ笑いだした。

よろしい。即ち、かくの如し」
ウヌボレさ。人前で口説くのは娼婦のイミテーションが最もだ。娼婦は淑女の如く見せたがるから、まったく、ヒガンだに通じないな。娼婦というものは人前で口説いちゃダメなんかがわれる。お前も然しフランス仕込みにしちゃ、泰西の学婦を第一番に口説いたところに、お前の浅からざる素養がう「ピカー、よろしい! アッハッハ。そのルイ王朝的三流娼

るわね。そのとき顫えちゃダメですよ。私は顫える男は嫌い「どう?」ピカーさん。あしたの晩はあなたにこうしてあげ珠緒さんは平気であった。存分接吻して顔を上げて、ぐ、だきかかえて、ソファーヘドカンと腰を下して接吻した。彼は立って珠緒さんの手を引っぱりあげて踊りかけて、す

目もくれず、もう内海の方へ歩いていたから、取りすまして円後は首をふった。然し首をふりかけたとき、珠緒さんは

なのよ。ねえ、タンゴさん、タンゴを踊りましょう」

首をふる丹後の首がオモチャの人形みたいであった。

浴びなきゃいけないわ。片隅にひっこんで、いじけずに、堂「さア、内海さん。あなただって、たまにはフットライトを

内海は人の好い微笑をうかべて、

々と、圧倒しちゃうのよ

だけさ。その節は共演をたのむぜ」(僕がフットライトを浴びるのは、ノートルダムの主演の時

ょうよ。人見さん、手頃に脚本書いてちょうだい」「あら、そう。すばらしいことね。この夏、ここでやりまし

「ようしゝ。ナレが舞台を置いるる。寸りをこ興庁しい、「いっぱ」と、「人見さん」手塚に脏才書しても。ごだし」

姓どもの新円をまきあげてやろう」「よろしい。オレが舞台装置をやる。村の衆に興行して、百

ス、外に何があるものか。ザッと、この通り一ざ、止すがいい。これだけ女優が揃っているから、エロダン「ピカーの舞台装置じゃ百姓のお客は逃げ出すさ。芝居なん

ス、外に何があるものか。ザッと、この通り」

りでた珠緒はビクともしなかった。茶化すような顔でもなかーピースをぬがせた。シュミーズ一つで王仁の腕からころが王仁はいきなり珠緒を抱きかかえて、ひったくるようにツ

「もういいの? もう、ひとつ?」

い一の一のでは、「お前はもう引込みなさ)の一馬がイライラ妹の腕をつかんで、「お前はもう引込みなさ

「どうせ、ついでだ。手数がはぶけて、ちょうどよい」

「おい、よせ。あくどいぞ」王仁が珠緒を抱きあげると、

「兄さん、怒るな。まさか、鬼でも、かわいい子を人前でほ

見物人はお断りだ」のでという私事に属する演劇だから、んだよ。これからは、恋愛という私事に属する演劇だから、どツイデだから、ちょッと借りて行くぜ。芝居の方は終ったんとにハダカにするものか。然し、手数がはぶけて、ちょう

抱きかかえて、ドッコイショ、ハイ、ゴメン、自分の寝室

へ立ち去ってしまった。

のピカー先生も呆れた様子で、んなことは、そこでもメッタに見られやしなかろう。さすがンチキ・バア、インチキ・キャバレはあるかも知れぬが、こ五分、十分、二人は戻ってこなかった。都会のどこかにイ

相手は、今晩は、どなたですか。ケイシュウ作家、青鞜詩人、も若年から登山の趣味を養うところだったよ。ワタクシの御な娼婦宿だな。フランスくんだりをウロウロしないで、オレ「はてさて、ききしにまさる豪傑だ。歌川家は、然し、優秀

宇津木さんはつくり笑いをして、いかが」

主人の三宅木兵衛の腕をとって、「じゃア、お先に」「ええ、いずれ、よろしく。今晩は先約がありますから」御

「はア、そう。さアさア」

イラして、
イラして、
なきとると、すぐ後から、一馬が来た。イラーの要領で、いとインギンに頭をたれて、お通りを見送る。の要領で、いとインギンに頭をたれて、お通りを見送る。の要領で、いとインギンに頭をたれて、お通りを見送る。の要領で、いとインギンに頭をたれて、お通りを見送る。の要領で、いとインギンに頭をたれて、方道の手者がら廊下へつづく扉をあけて、ホテルのボーイ、宮殿の侍者がら廊下へつづく扉をあけて、ホテルのボーイ、宮殿の侍者がら廊下へつづく扉をあけて、ホテルのボーイ、宮殿の侍者がある。

「実際、君、醜態だ。どうしてくれたら胸がおさまるのだろ

う。締め殺してやりたい」

私も慰める言葉がなかった。

ったい、どうしたことだろう。僕には、わけが分らない。君「君とゆっくり話を交す暇がなくってね。これは、然し、い

はツーリストビュロオの切符を受取ってきたのだろうね」

ーそうさ」

「僕の手紙はとどいたね?」

緒に来れなかったけど、今夜たつから、あした、くる筈だ」「むろん見たよ。さもなきゃ、来やしないさ。巨勢博士は一

「巨勢博士?」

「なんだい?」

ね

「わけが分らないな。君の手紙に巨勢博士をつれてきてくれかい」「巨勢博士がどうしたんだ。誰かそんなことを言ってきたの「巨勢博士がどうしたんだ。誰かそんなことを言ってきたの

「僕り自氏こと」皮は関うとうもて仏と思ったら。と書いてあるからさ」と書いてあるからさ」を一わけか分らないな、君の手紀に巨勢博士をつれてきてくれ

に、何たることだ。どいつが、いったい。僕はもう怒り狂っ君に宛てた手紙だけじゃアないんだからな。きいてくれ。実れと書いた筈だ。いや、分る。カラクリは分っているのだ。「そんなこと、書きやしない。僕は君たちお二人だけ来てく「僕の手紙に?」彼は杲気にとられて私を見つめた。

勢専士だって、頭みやしなハー出してはいる。然し、それは、君たち御夫婦二人だけだ。巨

勢博士だって、頼みやしない」

然疑ぐっていなかった。たしかに見なれた彼の筆蹟だったの今度は私が呆気にとられる番であった。私は彼の手紙を全

だ。なぜなら、僕の文章がそのまま使ってあるから。いいか「僕の手紙をいっぺん開封した奴が、書き直して、送ったのそれを取りだして見せた。彼はそれを睨んでいたが、ケットに入れた手紙をそのまま持ってここへ来ていた。私は私は然し、幸い巨勢博士を訪ねたとき彼に見せるためにポ

々の血が。』君『と巨勢博士』だけが頼みだ。そして、「「怖るべき犯罪が行われようとしている。多くの人だから、』(お京さんを)口説き落してムリムタイにでも同道たのむ。三拝九拝。 ているいい その日の終列車で来てくれ。ぜひともとせるから、その日の終列車で来てくれ。ぜひともとりに、

暗い血の海が見える、これはたしかに僕の文章だ。あのときものが、どこにも有りゃしないじゃないか。最後の結びの、の部分が省かれているのだ。怖るべき犯罪だなんて、そんな「つまりね。『』印の部分が誰かの書きたしたところで、( )

かにツーリストビュロオに切符を届けるように手配の手紙をロオの使いの者が切符をとどけているのだからな。僕はたしけとっている。おまけにちゃんと、君と同様ツーリストビュ

待状を発する筈がないじゃないか。

しかも奴らは招待状を受

神山東洋夫妻だの、まして、土居光一に、あいつらに招

何者のイタズラだろう。僕は

お京さん。

お京さん!

たのみます。待ってます。

血の海が見える。

ているのだ。然し、まったく、

僕は、 兄と妹の罪の血の暗い幻想に悩まされていたからさ。 正直のところ、 誇張なんだよ。 君たちが来てくれない

海が見える、あさましい文章を書いたんだ。お京さん、 と困るから、別してお京さんの純情に訴えるために、文学者 止めてやりたい。誰だって君、今このうちに住んでいりや、 殺したいよ。どいつも、こいつも、アア、畜生! 息の根を んじゃないかね。まったくさ。僕だって、君、今なら、人が を企んでいるのだろう。もしかすると、ほんとに犯罪がある て下さい。然し、どうも、これを書き変えて送った奴は、 の文章上の誇りをすてて、お京さん、お京さん! 暗い血

りに筆をまねた形跡もうかがわれた。 然し筆蹟はたしかに彼のものだ。然し、 よく見ると、

念 入

人の二三人殺さずにいられるものか!」

「この紙は?」

「うちの用箋さ」

「どこに置いてあるのだい」

「さっきの広間 の 隅のデスクに、これとインクとペンはいつ

も具えつけてある。むろん封筒もおいてある」

「手紙は誰が投函したのだ」

出す者が勝手に自分で投げこんでおくのだ。だから、 うちから出す郵便物は玄関に桐の箱が置いてあって、 だけ、やっぱり配達の時間にわざわざ取りに来てくれるのだ。 から取りにくる、昔からの習慣なんだ。尤も郵便を配達に来 で、こっちから投函に一里も歩いたものだけど、今じゃ向う 「君たちの疎開中は郵便局に人手がなかったし、 ついでに持って帰るのだ。うちへ届ける郵便物のない 時局が時局 手紙を 手紙を 時

> すりかえるチャンスは誰にでもある」 「まア、 いいさ。幸い、 あした巨勢博士が来るから、誂え向

何 博士を嘗めているなら、大失敗だよ。あいつは全く、その道らな。なぜ巨勢博士を呼びやがったかな。この犯人め、巨勢 きじゃないか。尤も手紙の犯人が自分で指名しているのだか ない組織になってるところが、恐らく異例の才能なんだな」 を探すに手頃で、それ以上はダメ、そして、それ以上へ行か では、天才なんだから。つまり中途半端な頭なんだよ。犯人

の

よい、やたらに犯人を製造するばかりさ。全くもって、小説 たって、全然ムダだ」 家にとっちゃ、犯人ならぬ人間は有り得ないから、考えてみ 「そうしたまえ。我々が犯罪をつき廻したって、迷路をさま

「じゃア、又、あした」

一馬は自室へ戻って行った。

どの部屋からも、もう物音がなくなっている。

「なんだか気味が悪いわ。私、 怖しくなってきたわ。 ほ んと

に何か、 「どんな怖しいことが?」 怖しいことが起るんじゃないかしら」

「どんなって、分りゃしないけど。 でも、何か、ほんとに起

りそうじゃないの」

挨拶程度のお話だけですけれど、ね。たぶん、予想以上だわ。 ったものですって。人間が勝手にこしらえた観念ですって。 然し、まったく、 ほんとうに兄さんを思いつめているようすよ。罪は人間が作 「私、きょう、加代子さんとお話したのよ。まだ、 「そうかな。娼婦宿の犯罪事件か。ピカーめ。娼婦宿とは。 ひどい話さ」 ほ 6 の御

は、たったことになる。 自然のままの人間にどこにも罪なんか有る筈がないんだって

ね、そんなことを私に仰言ったわ」

「恥があるから、罪もあるんだろう」

のよ」
「あなたの屁理窟なんか、加代子さんの悩みの垢みたいなも

よう。然しねられるかな」「分った、分った。諸嬢の悩みは深遠そのものだ。さア、ね

かると、だんだん大声にそしてバタバタ駈け降りて行った。ソンらしいものを唄って、珠緒さんが通りすぎた。階段へかそのとき、廊下を、私の知らない何かフランス語のシャン私は昼寝しすぎたのだ。けれども、ねむくなってきた。

時計を見たら、十一時十五分。私は電燈を消した。やれやれ、珠緒太夫の御帰還か」

原稿料は差上げませんよ。たいがい、差上げずに、すむでしょう。定、大いに皆さんと知慧くらべをやりましょう。当らなければ、はいずれ、誌上に発表しますが、だいたい、九回か十回連載の予格優秀な答案に、この小説の解決篇の原稿料を呈上します。細目附記 この探偵小説には私が懸賞をだします。犯人を推定した最

#### 四 第一の殺人

説があって、水の涸れることがないそうだ。
この三輪山中、ブナの密林にかこまれて周囲三町ぐらいの池のは大木の密林ばかり、ホコラはオモチャのように小さい。のは大木の密林ばかり、ホコラはオモチャのように小さい。奈良朝頃からの由緒ある氏神の由だが、名残をとどめている奈良朝頃からの由緒ある氏神の由だが、名残をとどめている。望朝、七月十七日午前六時半、私たちは散歩にでた。三輪翌朝、七月十七日午前六時半、私たちは散歩にでた。三輪

ラダをふいて、体操している。とすると、猿又一つの海老塚医師が、裏庭の清水の流れにカに戻ってきて、裏門をくぐって、酒倉にそって表門へ廻ろうた。このへんを一まわりして、七時半の朝食に間に合うよう 18-静寂を宿して、私にとってはこの村の最も大きな魅力であっこのへんの風景は色彩の激しさと孤独の深さ、胸にしみる

るような様子で、 れている。 リと見ただけで、 酒席の隅に息を殺しているのだそうで、 の相違がハッキリ分る。 いが、そのくせ、 「ヤア、ゆうべはお泊りでしたか」と言葉をかけると、 御当人はそれで結構たのしいのかも知れない。 小児マヒからのビッコで、裸になると両足の 我々が話しかけても返事もロクに 返事をしない。まったく、変人で、ひねく .荘に文人連が泊って以来毎晩遊びにきて まるで我々全体に敵意をいだいてい まるで怒った顔 しやしな ジロ 付だ

坂口安吾

広間へ行くと、みんな揃っていて、食事の支度ができたと

て、 いうから、食堂へはいる。海老塚医師が遅れてきた。 宇津木秋子がモーローたるていで現れて、 つづい

るのね」 皆さんお集りのきまった時間て、 「なんだか、頭が痛むわ。御飯が欲しくないのだけれども、 なんだか寝ていられなくな

「ゆうべ徹夜なさったの?」と、胡蝶さん。

的な生活すると、健全みたいで変にたのもしくなるのだけれ 中は眠いのかしら。ふだん生活が不規則だから、たまに規則 眠りすぎちゃって、 いまだに、ねむいのよ。 山 の

「悪徳高き淑女は善行を愛するもので、 そのタグイですな」

とピカーが大声で言う。

کے

「お水だけ、 いただくわ」

「うん。無芸大食の私が、 「御病気じゃないの?」と、 食慾がなきゃ、 あやかさん。 病気かもしれない

わね」

「ツワリじゃないですか」とピカ

「海老塚さんに診ていただくがいいさ」

ムッツリ不機嫌だが、 Ł 一馬が昔の女房をいたわる。今の御亭主のモクベエは いずれ彼等は別れるのだろう。

「知慧熱というのさ、宇津木さん。ちかごろ、知慧ざかりじ 「あらあら。ほんとに病気にされちゃ、いやだわ」

最大流行児で、 人の内海がひやかす。けだし秋子女史、終戦後は女流文士の ゃないか。 発育とみに御活溌であらせられる」と、セムシ詩 あられもなく書きまくっていらせられるから

である。

彦、皮肉の針をチクリとさす。 さ。宇津木さん、天才になるんじゃないのかな」と、丹後弓 神様の御罰も食慾不振ぐらいが限度でね。 「人生たのし。別れも愉し。宇津木さんぐらい御隆盛の時は、 神様も力及ばず、

「アッハッハ。悪徳高き淑女の食慾不振は気にか かるな。

何

かの方が不振じゃ、なさすぎるからだろうな」

ピカーの言葉はいつも汚らしい。

食事の終るころになって、 珠緒さんが、 やってきた。

「あら、もう、みなさん、コーヒーなの? 寝すごしちゃっ

た。とてもねむい」

をいれる。 「あたりまえさ。あなたが眠いのはね」又、 ピカーが先ず口

「何もたべたくない。王仁さん、まだ、ねてるのね」

王仁だけが、 まだ顔を見せていなかった。 ピカーは相好く

ずして、

ことは題材にならないから、 ね。宇津木さんの小説だよ。絵の方じゃ、そんなエゲツない のか。王仁ほどの御体格でも、 「それ、それ。やっぱり男の方が余計ねむらなきゃならねえ 絵は 御疲労は珠緒さんに超えるか ノーブルなもんだ。 文学は

「起してこよう」

真ッ蒼だった。目が焦点を失っている。ちょッと、 段を駈け登って去ったが、まもなく、 珠緒さんは平然と言いすてて、シャンソンを唄いながら階 音もなく、戻ってきた。

ができない様子であった。 「王仁さんが、死んでる」一馬がビックと顔をあげて、

-19-

「王仁さん、殺されている」

しながら、 うに放心した。 あいている椅子のひとつヘフラフラ腰を下して、化石のよ 一馬がのろのろ立上って、 頻りに人々を見廻

「寸兵。君だけ」と、私によびかけて、

しょに。それから、海老塚さん」 「皆さん、待ってて下さい。私が見てきます。寸兵だけ、

ら歩き出たのである。 った。そして私たち三人だけが、 一座はまったく無言であった。 シワブキもない沈黙の室か 私と、海老塚医師が立ち上

た。心臓を一突きにやられている。その短刀が彼のカラダを ピンでとめているように、突きさしたままだ。不思議に、 まさしく王仁は殺されていた。一糸もまとわぬ裸体であ 血 つ

たく、小気味がいいと思う心が強いだけで、あんまり何でもうな気かしたた・ナーミュン されてるように不安であった。 うな気がしなかった。 などとは嘘のような話で、まるで、 が殆ど見られない。コイツ奴が人を殺さずに、人に殺され 誰が殺したって、こんな奴。 現実の事件の中にいるよ 私はまっ る

海老塚医師は脈をとり、目蓋をひっくりかえしたりして、

「とっくに死んでます」

「自業自得さ」そういう言葉が自然に私の口をついて、「ロヒニラロヒヒヘ 出て

「じゃ、ともかく、 一馬は黙って凝視していたが、ようやく我に返った様子で、 この部屋を出よう。 このままに、 してお

> 仕方がない。 警察へ内密に、ごまかすことも、 できな

と、八時二十二分であった。 から食堂へ戻って、沈黙の一座が言葉をうながしているのに 我々が廊下へでる。そのとき、気がついて、腕時 村の駐在へ電話をかける。 計を見る それ

「ハッキリ他殺か。 「王仁は死んでます。殺されています」 分るのか」と、ピカー。

一馬も海老塚も喋らないから、私が、

が、自分の心臓へ短刀をぶちこむ芸当は、 「ハッキリ他殺。王仁は君と同じぐらいの怪物かも知れ たぶ λ できない ない

そそがれているのを見て、急にきびしく私を見つめたが、 なかった。ビックリしたのだろうか? だろうな」 緒さんだ。急に秋子さんを指して、 しそれを私以外に観察していたもう一人の人物があった。 「犯人はわかっています。 私はそのとき、秋子さんの表情が大きく動いたのを見逃 女流作家、宇津木秋子先生。 ヒステリックに叫んだ。 何を? 私の視線が さ

ぱり偉いのね。人殺しぐらいできるんだから」

す。 皿には、 津木先生以外にダンヒル御使用のハンサム・ボーイはいない が昨夜あの部屋を立去るまでは、こんなものはなかったので から。王仁さんの枕 しめていた小さな何物かを、 「このライター、 珠緒さんは立上って、手品の種あかしをするように、 全巻の終り」珠緒さんはライターを食卓の上へ投げころ 口紅のついたシガレットの吸いさしもあります。 宇津木先生御愛用のダンヒルでしょう。宇 元のデスクにあったのです。 指先につまんで人々に示した。 デスクの灰

「私が殺したなんて、嘘ですわ。短刀なんて、そんな、私はように顔をふせたがやがてビリビリふるえる顔をあげて、んは宣告を受けた罪人のような顔だった。そして、力つきたがして、アクビでもするように、椅子にめりこんだ。秋子さ

「止しましょう。犯人だなんて。それは確かに誰かが殺した知りません」

連絡する。

でしょう」私がそう言うと、海老塚が、るよりも、無罪歎願書の相談でもするのが我々の偽らざる心に犯人という称号は当らないや。犯人さがしに内輪もめをすじように持ち合せているだけのことさ。尊敬すべき代表選手んでしょうけど、誰だって、あいつを殺したい気持なら、同「止しましょう。犯人だなんて。それは確かに誰かが殺した

「百鬼夜行。あたりまえだ」

しょう|「海老塚さん。調べがすむまで、我々が動いちゃいけないで「海老塚さん。調べがすむまで、我々が動いちゃいけないでは、その呟きがきこえた。彼が立ち上って去ろうとするから、そう、呟いて立上った。私は彼と並んでいたから、私の耳に

「気どり屋、伊達者、名医先生」ピカーが後姿へ蛮声をあびもの生えたようなものでも、虫けらよりは貴重ですから。虫んか。遊戯の果にすぎんです。百姓どもの命なんて虫けらにおんぶされて、未明から三里も山道を歩いたり、ね。殺人な「私は有閑人種じゃないです。患者がつめかけてきています。

ノンキなもんだな」精神病院で見かけたぜ。気違いに脈をとらせて、山の奴らは「せっかく患者殺しに精をだすんだな。あんたの目玉の色は

を乱さないように心得をおごそかに申し渡して本署へ電話での扉にペッタリと封印の紙をはりつける。一同に向って現場だから、全身緊張そのものにハリキッて、いと物々しく現場は愛読しているがほんものの事件にめぐり合ったのが始めて駐在の巡査が駈けつけた。この南川友一郎巡査は探偵小説

本署に文学巡査はおらんですか」文士、分らんかな、三文文士の反対じゃよ、ええ、面倒な、流行の人気の文士の望月王仁氏、流行の人気の文士、ハヤリ「大事件が起ったですが、ふむ、きこえとりますか。東京の

#### 五 猫の鈴

果をあげる」
は、別の御辛抱によって、犯罪科学の偉大な機能が成協力、数時間の御辛抱によって、犯罪科学の偉大な機能が成ですか、これが鍵となる。微妙なるものですな。皆さんの御ん。犯罪はですな、毛髪一本、靴から落ちた一粒の砂、いい「アア、いかん、足跡が消える。廊下もうろついちゃ、いかカンヅメにして、外へ散歩にも出してくれない。

しか見えなくて、喧嘩となると素早やそうだが大探偵の面影マン丸いクリクリした顔、愛嬌のよい二十三四の小僧ッ子に待ちかねていたのであるが、何がさて五尺そこそこの小男で、一時半ごろ巨勢博士がきた。私はその来着を一同に披露して一本の通路をきめて便所へ歩かせてくれるだけである。十

同を食堂

る。ところが南川友一郎巡査のうるさいこと、

の本署から一行が到着するに五時間の余もかかるのであ

県

訊問を受けているように、ハア、ハア、と恐縮して承っていなどはどこにもない。一馬や私が説明するのをまるで自分が

を見破ることはイト易いことだろう」 「これがその偽造の手紙だが、君の眼力にかかっちゃ、 真相

もらった。

る。

か。 歌川先生の本当の筆蹟ですか。ウハ、 「とんでもない。僕なんか、とてもダメだな。へ、こっちが ウメエなア。 本物と見分けがつかねえもの、 おんなじじゃないです たいしたも

ら、御婦人連には大もてで、 クリクリ可愛くて、 だから巨勢博士は全然評判が悪い。その代り愛嬌があって、 、御婦人に丁寧で、 まったく凄味がないか

を命じる。

んですね」

「巨勢さん、 いい人いらっしゃるの?」

「 え ? ・ハア、 おはずかしい次第で」

「つれてらっしゃればよかったのに。電報でよんであげなさ

「人見知りをしますんで。 十七の可憐な少女ですから」 いな」

「それが、一度。なんです。彼女はマッカになって、しかし、 「あらあら、じゃアまだ、接吻もなさらないのね」

怒らなかったです。ハア」

およびしましょうよ、 「それじゃアもう新婚旅行なさってもよろしいわ。さっそく、 ねえ」

たことがなかったもんで、目下練習中なんです」 の食べ方を知らないものですから。ナイフとフォークを握っ 「それが、ここのウチじゃア具合が悪いことがあって。 洋食

友一郎巡査にカンヅメにされているから、巨勢博士を慰み

ものにしてウップンをはらしている。

二時半に予審判事、 一馬から頼んで巨勢博士を警官なみに現場出入を許して 検 事、 警官の一行が官用の自動車で到

現場をジロリと三睨み四ツ睨みして、あれこれと綿密に捜査 グリ警部」といえば、その道では全国的に名が知れている。 破ってしまう。田舎にはモッタイない探偵の大親分で「カン 捜査部長平野雄高警部は心眼の眼力、いかなる智能の犯行も 一目でカングリ、二度三度、四度目にギロリと睨む時には見 警察医の検視が終り、現場からかなり多くの指紋がとれ

まれたときに、稀に内出血だけで終ることが有りうるのです。 は俗に心臓タンポンという奴で、心臓へ直角に兇器が打ちこ でに死んでいたとか、 「出血がないのは特別の理由があるんじゃないですかな。す ゙解剖をしてみなければハッキリは申せませんが、この場合 何か」 -22-

だしてしまう鋭敏な六感、 県内きっての探偵だ。どんな手口でも嗅ぎ分けて犯人を嗅ぎ 然し、解剖の上でなければ、何とも断定は申されません」 目おかれている敏腕家であった。 の小さな鈴を拾いあげた。この刑事は、荒広介という部長で、 「はてな。これは何だろう」刑事の一人が寝台の下から、真鍮() 解剖のため、屍体をトラックにつんで、県立病院へ送った。 刑事仲間で「八丁鼻」といえば一

たまにブラ下げるような鈴である。 「鈴ですがね」見たところ、極めて安っぽい品で、 何だい、それは」

猫の首っ

ビだから、 寝台の下に、 もぐってみろ\_ もっと何か な い か。 お い 読ミスギ お前

チ

だが 渾名をとった。こんどの事件は東京から来たインテリゟだなとった。こんどの事件は東京から「読ミスギ」く解釈して一人で打ちこんでしまうから「読ミスギ」 似合 とコンビに連れてきた。 ウマが合うかも知れ 雑な犯罪らしいから、 れない。 心得などがあるが、 本名は長畑千冬というのだが、どこでどうして覚えた と八丁鼻が兄貴風を吹かせる。読ミスギとよば ぬ 根 単純な犯罪を複雑怪奇に考えすぎ、 知識がある。 慌て者の一人呑みこみ こんどの事件は東京から来たインテリ連 な 探偵のこととなると決して敏腕 ドイツ語などを齧っておって、 案外こんどの事件に限って読ミスギに い 八丁鼻は八丁先を鼻で嗅ぎだす敏 とカングリ警部が考えたから八 田 舎 の 犯罪に 途方もなく難 は ħ とは た刑 力 ンは とい の 医学 申さ だ 事 腕 う は

崖 雲家使用座

> かだけれ しょ があるのであ ども、 った。 インテリ の 計 画 犯 罪には読み方の足らな ĺ١ 憂ゎ

が、 読ミスギはベッドの下へもぐりこもうと四ツ這 い に な つ た

ある」 おや お こり ゃ お か L い よ。 べ ッド の 卜 に洋 服 の F 衣 が

ど雑巾のように何かを拭いた跡をとどめている。 上衣をひきだしてみると、一 ヶ所に埃がベッ ij, ち ょ

「おやおや、 どこを拭いたんだろう。この卓の上かな、 机 の

上かな」

るじゃないか。 「そんなところでこれだけ 上衣のあった場所さ\_ のゴミがつくも の か い きま っ 7

ベッドの下ですか

のぞいて見ろ

す。 血も水も、 ウム、 しかし、 なるほど、たしかに、ここをふき廻した跡がありま なんだってベッドの下を拭きやがったんだろう。 |滴もこぼれた跡もありゃしないに

上衣は、 被害者のものであった。 男間り(土

さん 枕元 紋は フラスコにはごく小量の暗い褐色の液体が残っていた。 同の指紋をとって合せてみると、 現場の綿密な捜査を終ったのが夕方で兇器には指紋がなく、 :明かにフラスコを握ってコップに注いだものであ !の指紋と秋子さんの指紋がピッタリ合う。秋子さんの指 ?の卓上のフラスコとコップから、 いていたのか 被害者の指紋の外に珠緒 いくつかの指紋がでた。

ッド · の足 の 方の 窓は 明けっ放してありました。 然し、 犯

窓は始めから開

ムダに張番していたわけではない手並のほどを披露に及ぶ。 けた跡も、よじのぼったあともありません」と友一郎巡査が 人はそっちから侵入したものではありませんな。ハシゴをか

り線香をいぶす瀬戸物の容器があるでしょう」「とんでもない。ヤブ蚊の名所ですよ。そこの違い棚に蚊と

「このへんは蚊がいないのか」

、これ、うこ、こうごに「それぐらいのことは知ってる。然し中に線香の灰が残って

紙、整頓して、手のふれた跡はない。部屋をかきまわしたあれの上には五十枚ほど書かれた原稿と、五百枚ほどの原稿いないからきいたのだ」

とはなかった。

のインテリ御婦人が、マンジ巴とからんでいるから、こっち「おい、あした、アタピンをこっちへ寄こせ。どうもお歴々そのとき一行を送って出たカングリ警部が一人に向って、日駐在所に泊りこむ数名を残して鑑識の一行はひきあげる。解剖の結果を待って正式に訊問を始めることにして、この

これを小耳にはさんだから私も驚いて、

は苦手だ。アタピンに限る」

「何ですか、アタピンというのは?」

県じゃア前科十犯の人殺し屋でもチヂミ上るという八丁鼻が、う男を鼻息で吹きちらかして尻にしきまくる魂胆なんで、本ッかりからかってオダテたが最後、つけあがること、男といちょッと、からかいたくなりますぜ。ところが、ひどい。うすがね。ちょッと小生意気な美人で色ッぽくて、なんですな、田舎の警察じゃ役不足の掘りだしもので、飯塚文子と申しま「アッハッハ。きこえましたか。本署の名物婦人探偵ですよ。

ン助ぶりはジンソク突入流線型、見事なものですな」 いそがしく賑やかな頭でさア。あなた方のインスピレーショたれば沢山さ。なんでもかんでも頭へピンピンくるのだから、いたものアタマヘピン。黙って坐ればアタマヘピン。 尤も八天才的な心眼で、なんでもアタマヘピンとくる。見たもの聞アタピンにかかっちゃ鼻先であしらわれていまさ。その代り、アタピンにかかっちゃ鼻先であしらわれていまさ。その代り、

ンクリですな」 カングリ警部の一行も、一緒に夕食のテーブルにつく。八カングリ警部の一行も、一緒に夕食のテーブルにつく。八カングリ警部の一行も、一緒に夕食のテーブルにつく。八カングリ警部の一行も、一緒に夕食のテーブルにつく。八カングリ警部の一行も、一緒に夕食のテーブルにつく。八カングリ警部の一行も、一緒に夕食のテーブルにつく。八

夜這いと申しましてね」なんて存在しませんから。もっとも夜間の侵入者はあります。「この山奥に鍵をかける家なんて有りませんよ。泥棒の恐怖「すると入口の鍵などは極めて精巧なものですな」いになりますか。母屋の方は、百五十年ぐらいになります」「そうです。ライト式という奴です。建ててから十五年ぐら

ませんよ。分りきった話です。そんな風にいたわられるのは、 「警部さん。無役な話は止しましょう。犯人は外から来やし

我々の神経には、からかわれると同じ意味にひびくのです」 私はいささか気を悪くして言った。

そういうもので、私たちはそのやり方に馴れているのだから、 変に持って廻って言われると、こっちはヒネクレて、 「何でもズバズバ思う通り言い切って下さい。文学の仕 返事も ·事 が

か

する気がなくなりますよ」

ぜでしょうか」 は分りきったことが、我々には分っていない。そこを教えて しますが、 いただかなければならないのですよ。 れから知らなければならないのです。ですから、あなた方に か知っていらっしゃる。ところが我々はまったく白紙で、 「いや、矢代さん、あなた方はこの事件に就いてともかく何 犯人は外から来やしないと仰言る、 では矢代さんにおきき そのワケはな

ら誰かがやってきますか」 「物盗りの仕業でないからですよ。 あいつを殺す目的で外か

いがいの連中が望月の息の根をとめたがっていましたよ。外 「そんなことは 「この家の住人以外に望月さんを殺す者が有り得ないという 知りませんよ。 ただ、この家の住人なら、 た

から、先ずそこへはいってみる、 かったという理由にはなりませんな。廊下の出入口からはい って階段を登る、登ったところにあるのが望月さんの部屋だ 「なるほど。然し、 御説 の内容だけでは外部から犯人が来な 目をさましたので殺す」

から来るまでもないのだから」

そこから持ちだしたのでしょう」 内部の事情に通じた者でしょうな。 のじゃありません。 「兇器の短刀は談話室の棚に飾られていたのだから、犯人は 「なるほど。然し、それも必ずそうだと断定しうる性質のも 短刀はその日もそこに飾られていました 始めから殺意があって、

馬が答えた。 誰も返事をする者がなかった。 飾られてあった筈ですと一

「昨夜も皆さんはこうして食卓についておられた。 それから

たが」 りの広間でおそくまで飲んだり話したり踊ったりしていまし になるのですが、ゆうべは矢代たち新客が到着したので、 「それから? いつもでしたら食事のあとはみんなバラバラ

す。私はタバコを吸いませんから。私は電燈を消して部屋を 王仁さんはもう眠っていました。そしてその時はデスクの上 何時頃だか覚えていません。私が王仁さんの部屋を去るとき、 仁さんと私は一足さきに王仁さんの寝室へひきあげました。 が殺したか。それだけでしょう。 先生が話して下さる番ですわ。宇津木先生、 でました。それから先は、 に、このライターも、口紅のついた吸いがらもなかったので 「兄さん、よして。警部さんは何が知りたいの? いつ、誰 このライターの持主、宇津木秋子 私が教えてあげますわ。

.私が王仁さんのお部屋へ行きましたのは、 秋子さんはすでに覚悟していたようだ。 時ごろです」

キッパリ言った。

ありませんので、椅子にかけて、タバコを一本吸ったのです」まちがいはありません。揺りうごかしても目をさます気配が「王仁さんは眠っていました。イビキをかいてらしたから、

「ええ、飲みました。ハくうも桟っていなかったので「そのときフラスコの飲みものを召上りましたか」

「あの飲み物は何ですか」「ええ、飲みました。いくらも残っていなかったのです」

お茶の代りに毎日ガブガブ、ゲンノショウコを召上る習慣で「ゲンノショウコ。王仁さんは丈夫そうで、胃が悪いのです。

「失礼ですが、あなたはちょッとよその部屋へ行かれるにもした」

ライターを持ってお出かけですか」「失礼ですが、あなたはちょッとよその部屋へ行かれるにも

持って、思いきって出直したのです」 してみると、ありました。で、ついでにライターとタバコをんの鍵は偶然私がお預りしていることに気付いたのです。探戻ったのですが、考えてみると、おかしいのですわ。王仁さです。するとドアに鍵がかかっていたのです。それで一度は上らないのです。私も昨夜はライターを持たずにでかけたの「いつもそうとは限りません。でも、王仁さんはタバコを召

と、珠緒さんが叫んだ。「嘘おっしゃい!(私は鍵なんか、かけてきやしなかったわ」

「でも、鍵がかかっていたのですもの」

たか」 「ははア。それは奇妙ですな。そして、その鍵はどうしまし

して、私の訪れに気がつくように。そして、誰かが鍵をかけザとライターを置き残してきたのです。王仁さんが目をさま「又、私が持って戻りました。お部屋に鍵をかけて。私はワ

残されてきたのでした」御存知でしょう。私のダンヒルはその抗議を語るために置きをかけ得るどなたかも来た。そのどなたかは王仁さんだけがたことにも気がつくように。私もきた、然し、私のほかに鍵

ドアの鍵はかかっていません。現に鍵を持たない私が、あの「嘘です! 大嘘。私が今朝王仁さんの屍体を発見したとき、

「はてさて。ややこしくなりましたな。いったい、このウチ部屋へはいって屍体を発見したではありませんか」

は、各々の部屋の鍵が共通ですか」

「いいえ、各々違っています。

然し、

内からも外からも一つ

そのほかにあの部屋の鍵をかけたり外したりできるのはどな「すると、望月さんの鍵は宇津木さんが持っていらっしゃる。で間に合う鍵なんです」

たでしょう。同じ鍵を持ってる方は?」

間のデスクのヒキダシにほうりこんである筈です。もう一束皆さんにお渡ししてありますし、一つは、まとめて、隣の広「そうですね。三ツずつ同じ鍵をつくらせたのです。一つは

は、たしか金庫にある筈です」

要に応じて勝手にとりだす仕組になっていたのである。 -ム入りの用箋や封筒原稿紙など入れてあり、来客一同、必全部、紛失していた。広間のデスクのヒキダシに歌川家のネー馬と八丁鼻はたしかめに去ったが、ヒキダシの鍵は一束

「僕は見たよ」と、セムシの内海明がアッサリ言った。「どなたか、ヒキダシの鍵束を見た記憶はありませんか」

「いつですか」

原稿紙が却々見つからなくってね。来てまもなくだから、 う一ヶ月以上の昔の話さ。何月何日だか、分りゃしないよ」 というから、ひっかき廻したんだけど、用箋と封筒ばかりで、 「そうだな。僕は原稿紙を持たずにきたから、原稿紙がある ŧ

も勿論ありました はお渡してありません。然し、 「 部 屋 の鍵は?」 のドアは鍵をかけたままで、その鍵はお客様方に 盗まれた鍵束の中にはその 鍵

「望月さんの部屋と隣室の間にドアがありますが、あのドア

ます。 部屋の位置をしるしてもらった図面をひろげて、 「ああ、丹後弓彦さん。作品はかねて雑誌で拝読致しており 「あの隣室はどなたでしたか?」と、 昨 夜は何か隣室に変った物音をおききになりませんで カングリ警部は各人の

したか」

がありますか だろうな。 けちゃいられませんさ。王仁が死んで、今晩から安眠できる 「毎晩変った物音ばかりきかされていますから、一々気にか 愛慾の音と殺人の音と、 いったい、どこかに区別

丁鼻がだしぬけに、あやかさんに呼びかけた。 食事が終ってドヤドヤ隣の広間 へ流れて行く波の中で、 八

「もしもし、奥さん。失礼ですが、そのスリッパは」 はア、 なんでしょう、 このパントウッフル」

すな。 「パントウ、はア、なるほど、スリッパじゃアない、 ずいぶん悪趣味だと仰言るのでしょう。皆さんにカラカワ そのお靴はいつもはいていらっしゃいますか」 お靴で

> るわ。その日の気分で、あれをはいたり、 なんですもの。外に七足ほど似たような悪趣味な部屋靴があ れるのよ。でも、こんなオモチャみたいな華やかなのが好き 「みんな鈴がついてるのですか\_ これをはいたり」

「鈴のついてるのは、これだけ」

「昨日もそれをおはきでしたか」

はきましたわ。なぜですの」 「昨日。 昨日ね。そう。 昨日もはきました。 でも、 外のも、

覚えてい

らっしゃいませんか」 「鈴がひとつとれていますが、いつなくなったか、

よ。とんだり、駈けたり、つまずいたり、私はチョコチョコ なのよ。 してるから。でも、このパントウッフルは、 よう一 「そう。この鈴がひとつね、 可愛いいのよ。 ねえ、そうでしょう。 今 朝、 はくときに気が 私は特別に好き そう思うでし うい たの

「ハア、いや、まったく。 我々はどうも、 我々の 町じゃア見

まり酒好きでないモクベエが深酒をして、 かけたことがないもんで」 警官たちが引きあげたあとで、我々は又、酒をのんだ。 宇津木秋子も飲めないビールを時々一息にのみほしてい 押しだまっていた

うなものだが」 「僕たちはここへ来る以前から、 すでに夫婦ではなかったよ

見ることができず、 ざめ、目が気違いじみている。 モクベエは低い声で言いだした。不馴れな深酒で、青 あべこべの方角に視線を向けて、 然し、 弱気の彼は秋子さんを

-27-

それが羞しくなった。あれにかかると、我々自身が犬になる これは品性の問題じゃないか。 んだ。犬の恥辱を感じるのだ。 た、それを僕はひけめに覚えていなかったのに、今になって、 「然し、ともかく、同じ屋根の下で、ほかの男とたわむれる、 ところが御当人は全然人間の 歌川と別れて僕と一緒になっ

こには貴様の友達はおらん」 貫してらア。おめでたい話じゃないか」 「だまれ。無頼漢。 か。ここで出来て、ここで別れりゃ、因果テキメン、首尾 つもりだから、笑わせるよ」 「今どきハムレットもどきのセリフまわしは止そうじゃない 秋子さんは黙っていた。するとピカーが口をだして、 貴様は貴様の友達にだけ話しかけろ。こ

λ 日たらしめようではありませんか」 を描くことができませんよ。我々は本日をもって我々の記念 んな奴と一緒に暮してたんじゃ、いつまでたっても本当の男 いるから、日本はいつまでも田舎なんだよ。ねえ、宇津木さ 生活のトンチンカンなこんな奴が外国文学の紹介なんかして ぶからにはライオンぐらいの精神力を持つがいいや。思想と な。女を犬よばわりのハムレットはないからな。女を犬とよ 元々オレは男友達は嫌いのたちだよ。宇津木さんはさすがだ 「何が無頼漢だ。昔の女房を犬呼ばわり、紳士面が呆れらア。 そうでしょう。 我々はお友達になりましょう。第一、こ

記念日ならざる日はなし、ですよ。我々も亦天主教にならっ

カトリックの暦をくってごらんなさい。

すべて記念日たらしめなければならぬ」ピ

「チェッ。

ナイトぶりやがる。

ヨーロッパなみに決闘を申込

「あなたのお幾つ目の記念日?」

「それは、あなた、

て三百六十五日、

は退いて、 カーは遠慮なく立上って秋子さんの手をとったが、 「あなたもお人の悪い方。殺人事件の犯人容疑者をからかう 秋子さん

流転。これでなくちゃア」 生々流転は人生の真相だから、 吻をささげるとは、 なんて」 「アレ、 古風なことを言うお方だなア。 神聖にして純粋なる志というものでさ。 恋人の殺された当日から生々 王仁追悼に 我 Þ の接

うとする、 ふり、椅子にもたれてアラヌ方を見ている。 ゴルフボールはさっきからあやか夫人がお手玉にして遊んで ボールがとんできて、頭へ一つ、つづいて一つ肩へ当った。 いたのだから、ピカーがふりむくと、あやかさんは素知らぬ 「私は今夜は頭痛がするわ」秋子さんは振向 「この野郎」 ピカーが後を追おうとすると、いくつかのゴルフ いて、立ち去ろ

噂の高 人見小六の見幕が物凄い、彼は昔は左翼の闘士で喧嘩名人のビールの空瓶を握って立上った。私がピカーを突きとばす、 ずニヤニヤ酒をたのしんでいるが、イザとなれば加勢にくる 顔役でもあったのである。 にしてタッター人で血の雨をふらしてヒケをとらない裏街の がいるからで、彼は学生時代からヨタ者の十人ぐらいを相手 と思っているから、 し倒すところであったが、 ピカーはあやかさんに飛びかかり、首をしめて椅子ごと押 い男だ。 私は然し更にそれ以上に安心なのは巨勢博士 私も大いに気が強いのである。 博士は我々の 私が立ち上る、 彼は昔は左翼の闘士で喧嘩名人の 喧嘩の方は目もくれ 同時に人見小六が

むなら、一人ずつ、相手になってやる。 も出来やしねえだろう。バカめ」ピカーはテーブルの上 かたまらなきゃ、何 の ピ

のみにしながら、庭の方へ出て行った。 ールを二本、栓をあけて、 一本ずつ両手につかんで、ラッパ

何ですか」 度のす必要がありますな。 ぐるりと囲んで鉄拳制裁 がは如

びに行ってそっちでは喋りまくっているそうだが、 神山東洋が言った。彼等夫妻はたいがい使用人の溜りへ遊 我々の一

「君は腕ッ節が強そうだな。ギャングが商売じゃないの?」

座へまじると、殆ど口をだすことがなかった。

る。 は常にニコニコ、 とセムシ詩人、遠慮のない直感をアッサリのべる。 悪意がないから、 誰も腹を立てないのであ 然し彼

ないな」

気も弱く、腕ッ節も全然見かけ倒しなんですよ 「恐れ入りましたな。 そんな風に見えますか。 これ で実は、

拳の用意が必要らしいや。どうだい、モクベエ、フランスに 恋愛の資格もないのだろうな。時代は益々麗人のために、鉄 「僕みたいに御婦人のために鉄拳をふるう実力がなくちゃ、

もセムシの剣客というのは、 「内海さんは私のために詩集を作って下さるのよ。 ないかい?」 心病 め

る

ですもの。 んと私を讃美するのよ。そうすれば鉄拳の必要はいらないの 醜婦のために、という題なんですってさ。 からかわれたことがないのですから。 いいでしょう。う その代り、

きになれない。心がひねくれているのである。 私も陽気なセムシを讃美礼讃してあげるわね」 と千草さんが言った。私はどうもこの、 醜いお嬢さんが好 卒直正直のよ

> け、卑屈にひねくれているのである。 醜婦と云うが、内々はウヌボレがあ うで、実は言ってることがみんなアベコベで、自分のことを ij 自ら醜婦と称するだ

「心痛めるだけ余計だよ。 僕のは、 ただ、 醜婦 のために歌え

るというのさ」

るくせに」 「あら、 柄になくテレるわね。二人の時は色んなことを仰言

じゃないのだからな。 ウチなんだよ。僕にくらべりゃ、 知れず胸をこがし、醜男は美女のために悶死するところがネ ·醜婦が醜男を口説いちゃだめだよ。 詩も僕よりは巧そうだ。 シラノなんぞは醜男のうち 醜婦は 美男の 僕には取柄が ため

ぐらい、彼の顔は小さかった。 いた。両手で頭をかかえると、 内海は両手で頭をかかえた。 セムシ詩人は立上った。 彼の指は細く長く、節くれて 両手の中に顔全体がおさまる

めに 「どれ、僕はひきあげて、 今夜は詩でも作るかな。 醜婦 のた

ないでしょう 「待ちなさい。 「決して希望はしてい ちょッと散歩しましょうよ。いや? ない ね 厭じゃ

しょうよー のみにしている筈だから。 のみにしている筈だから。こっちの方から、ブナの杜へでま「こっちの庭はダメ。ピカーさんがどこかでビールをラッパ

えた。 高飛車にセムシ詩人をうながして、 と、千草さんは戸棚のヒキダシから懐中電燈をとりだして、 食堂の出入口から外へ消

「イヤらしい」珠緒さんが吐きすてるように呟いた。

「なかなか可憐じゃないですか」

るいな寺こ、『『葉をおうはさい皆まない。」と、神山東洋。彼でなければ、不快な意味が目に見えてい

るこんな時に、言葉をさしはさむ者はない。

のよ。千草さんは美人なみに、男をあやつッてみたいのよ。「あれが可憐というの?」可憐とは、どういう意味のことな

女王のつもりなのだから。なんてまア汚らしい。孔雀の羽をセムシ詩人なら、あやつれるというツモリでしょう。あれで

つけた鳥だって、まだ、ましだわね」

ら、相当目つきも変っていた。それも今日は不機嫌に、押しだまってグイグイ呷っていたかにつくものらしい。珠緒さんは先刻から相当酒をのんでいる。美しいものよりも、汚らしいものの方がはるかにハッキリ目女という人種は意地の悪い観察にかけては天才なのである。

「今日はウンと飲んでやるわ」

から」「もう止しなさいな、珠緒さん。あとで、吐いたり、苦しむ

と、あやかさんが言う。胡蝶さんも口を添えて、

「本当よ、珠緒さん。そんなに飲んじゃ、毒だわ。もうよし

なさいね」

よ。たしかに鬼の顔よ。ヤキモチの鬼の顔」の人が短刀をふり下すときの表情まで、実に歴々と見えるのよ。王仁さんが殺されている幻が。ハッキリとよ。一人の女私ね。こうして、黙って飲んでいるとね、幻が見えてくるの「ええ、でもよ。もう、ちょッとだけ、飲まして。だって、

「よしましょう、そんな話。今日はもう、やすみましょう」

「ええ、ごめんなさい」

しいが、秋子さんがアニヨメのころは事々に衝突、そのころきだした。このアニヨメと珠緒さんは気持がシックリいくら、珠緒さんはあやかさんの手をとって、やがて、シクシク泣

から犬猿の仲であった。

きて、去る。十分ほどして戻ってくると、追っかけて女中がやって去る。十分ほどして戻ってくると、追っかけて女中がやって、さだした珠緒さんを抱くようにして、あやかさんが連れ

海老塚さまに」海老塚がムッと顔をあげて、「奥様、お嬢さまはゲロはいて、苦しみなすっていますが、

王様だってありゃせん。さがれ」凄い見幕だった。「バカな。ヨッパライの介抱に医学者が往診するなんて、女

「琴路さんに願いなさい」

「ハイ」

をキッカケに、さア、寝ようぜ、とみんな立ち上る。そのとき、十時五分。そこヘピカーが戻ってきたから、それて、お嬢さまはスヤスヤおやすみになりました、と報告した。琴路というのは看護婦の名だ。三十分程して再び女中がき

向きだな」で、行った。オレは静かに一人で傾ける。あつらえア、行った、行った。オレは静かに一人で傾ける。あつらえ「なんだい。俺が来たからって、逃げなくともよかろう。さ

て下の気配をうかがうと、あやかさんが血相変えて逃げてきるとセト物だか酒瓶だか荒々しく割れる音がする、扉をあけそれを聞きすてて私たちは各々の部屋へひきあげたが、す

「どうしたのですか?」

ヽスタスタ邨下を生って守った。そのとき、邪屋化の命の音立ちどまって、フラフラして、気をとり直して自分の部屋「ええ、アイツ私があと片づけしていたら、いきなり」

なく不安になった。が耳についた。私は八丁鼻刑事の言葉を思いだして、なんとが耳についた。私は八丁鼻刑事の言葉を思いだして、なんとへスタスタ廊下を走って行った。そのとき、部屋靴の鈴の音

私は巨勢博士の部屋を叩いた。

「どうだい。目星はついたかい?」

気絶をくいとめているようなものでさ」争う方が精一杯でして、東京のアノコの面影を思いだしてはもエロチシズムの刺戟の方が強すぎますよ。こっちの刺戟と全然五里霧中ですよ。ボクは第一、ここのウチは、犯罪より「買い被っちゃいけませんよ。ホルムズ先生じゃあるまいし。

パントウッフルの鈴が一つ落ちてたんじゃないか」「ところで、もしや、王仁の殺された現場に、あやか夫人の

「御察しの通り、ベッドの下に」

「さて、ネ。それは僕には分らない。一馬にきいてみようじれは誰の意志ですか。内海さんだけ、階下にいるのは?」よ。ところで、この図面ですが、皆様方のお部屋の配置、こ「まさか。猫だって、鈴をぶらさげて鼠をとりに行きません「やれやれ。何たることだ。あやかさんが第一等の容疑者か」

さ。土居光一が現れ、怖毛をふるっているわけさ」「さア、どうぞ。あやかは昨夜から、僕のところへ泊りこみいるというので、ちょっと外で待たされた。私たちは一馬の部屋へ行った。あやか夫人が着代えをして

「だって普通じゃないのですもの。誰かが何か企らんでいる

ゃないか」

「それほど神経質になる事はないよ。巨勢君も来てくれたこゆわえて。いえ、ハリガネでなきゃ」か。誰かが鍵を持ってるなんて、ねえ、あなた、ドアを紐でとしたら、いったい、お母様の命日に、何が起るのでしょうのがハッキリしているのですもの。今日の事件も企みの一部

「内海の場合は内海の意志でね。階段の上下が疲れるから、たか、知りたいそうだが。内海だけが階下にいるわけは?」「巨勢博士が、客人の部屋の配置について、誰の意志が働い

とだから、犯人の寿命も、長くはなかろうよ」

だとあやかが云うから、二階にまだ空室もあるけれども、下ようなものだが、土居光一だけ、同じ二階に泊めるのはいや別に特にどうということもなく、僕が当てズッポウにきめたというのだよ。それに便所もすぐ近いから。その外の方々は

屋の二階に当る三間が私たちのお部屋なんです」よ。母屋の裏屋敷、珠緒さんが寝室に使ってらっしゃるお部「私たち、お客様のない時でしたら、この洋館は使わないの

の日本間へ部屋をあてがったというわけさ」

「神山は以前父の秘書だったが、その後、秘書をやめてから一馬はしばらくためらっていたが、語りだした。

「神山東洋という方は、お宅と利害関係がありますか」

ついての秘密じゃないかと思ったこともあったけれども、みました。嫌い方が尋常一様のものじゃないので、もしや母にいのです。昨年死んだ母が、神山を毛虫のように厭がっていけ、父にきいても、深い事情はきかせてくれないから知らなていて、たぶんユスラレているのじゃないかと想像できるだる、出入りをつづけているのだけれども、父が弱身を握られ「神山は以前父の秘書だったが、その後、秘書をやめてから

供の僕が、それをたって訊きただすわけにも行かないから、活をやっていたから、ユスリの種は相当あるのが当然で、子んな僕の想像で、ともかく僕の親父は相当に策略的な政治生

くばかりだよ」

「時々やってくるのですか」

きいてみたこともなかったのです」

想像なんです」

「年に四、五回はくるでしょう。昔父の愛妾だった今の妻君、「年に四、五回はくるでしょう。昔父の愛妾だった今の妻君、「年に四、五回はくるでしょう。昔父の愛妾だった今の妻君、「年に四、五回はくるでしょう。昔父の愛妾だった今の妻君、「年に四、五回はくるでしょう。昔父の愛妾だった今の妻君、「年に四、五回はくるでしょう。昔父の愛妾だった今の妻君、

ないようなものだ。

微妙な技巧が施されていた。に西洋風な加工をほどこしたような、そして色彩の組合せにとられていた。それは最も手のこんだ衣裳の一つで、支那服私はあやか夫人のパジャマが、あんまり華麗なので呆気にあれまりを

の着物が置いてないから。朝昼晩、きまって着物を着かえる。呪いながら着代えていたところなんだよ。この部屋には自分づけて着るのが残念だというので、今もブツブツ土居光一を来年の今ごろは何十着になることやら。同じネマキを二晩つ「こんな晴着みたいなネマキばかり十四五着はあるだろう。「奥さんはネマキの方が晴着じゃありませんか」

髪の形を変える。

首飾りをつけかえる。

根気のよいのに、驚

しまった。

可愛く、美しく、先天的にそれだけしか思いめぐらす本能がのようなものだ。あやかさんは殺人犯人を怖れているが、然どんなに可愛いいだろうか。それは全く夜のために生れた女せられていることを確信しているのだろう。この人の愛情はた。どのような表現によって話題にされても、要するに極愛あやかさんは幽かに笑っているばかりで、返事をしなかっ

いけないんですって」にきて下さいって。出向いて行きたいけれど、おからだが、「今、旦那様の小間使の方がきて、あした朝食のあとで二人私が自室へ戻ると、京子がいくらかムッとした顔付で、

て。琴路さんとうまく行ってるのかしら」
て、琴路さんとうまく行ってるのかしら」
で、琴路さんとうまく行ってるのかしら」

私もいささか酒がすぎて疲れていた。そして、すぐ眠ってさんだ」

-32-

#### 六 第二の犯罪

翌朝、警官の一行は六時前にやってきて、すでに何かやっ

て

いた。

街道を全速で馳せて到着していたのである。その結果、新たな事実が現れたらしく、鑑識の一行が未明の昨夜から深更へかけて直ちに解剖が行われた由であるが、

筈になっている。 筈で、さっそくダビにふして、今夜は遺骨でお通夜をする手た。王仁の屍体は解剖後の始末をつけて、これも午頃到着の社長だか社員だかが、例の夜汽車で宍頃、くる筈になってい王仁の遺骨を受けとりに、王仁の弟子と関係の出版会社の王仁の遺骨を受けとりに、王仁の弟子と関係の出版会社の

た。カングリ警部は慇懃に一礼して、我々が朝食を終ると、待っていた警官の一行が食堂へ現れ

ます」 によって は催眠薬は よって刺される前に、 皆様からも、 な事実が現れましたので、 「早朝からお耳を汚すのは不本意ですが、 飲ましめられたという事が、 現れ 我々の調 御助言を仰ぎたく存じます。 ませず、又、 かなり多量の催眠薬を服用されており べました所では望月さんの所 ザックバランに申上げて、 調査 の 結果、 ほぼ 望月さん たぶん他 解剖の結果、 明かとなっており 他の何人か が持品から は 短 同 万に 時に 意外

「そうです。何か御心当りがありますか」「催眠薬は、もしや、ゲンノショウコの中に……」「アア」秋子さんが小さな叫びをあげた。

「それに?」なんでしょう?一伙子さんはチラと一座を見廻から。それに……」「昨日の朝、変にねむくて頭が重くて。変に思っていました

したが、「それに?」なんでしょう?」秋子さんはチラと一座を見廻

ッと今、ただそんな風に頭に閃いただけですけど」たようですから。たぶん、珠緒さんもお飲みでしょ いで吐き苦しんで、朝の食事は見るのも厭に相違なかった。 「珠緒さん 「ゲンノショウコは誰が煎じる習慣でしたか」 珠緒さんだけが、 ŧ ねむ まだ食堂に現れていなかった。 いとか、 頭が 重 い とか、 仰言しゃ ようと、 つ 深酒 て い b のせ

ら」 「王仁さんは珠緒さんが御招待したお客様ですから、珠緒さ 「王仁さんは珠緒さんが御招待したお客様ですから、 「王仁さんは珠緒さんが御招待したお客様ですから、 「王仁さんは珠緒さんが御招待したお客様ですから、 「王仁さんは珠緒さんが御招待したお客様ですから、 「田代さんは 「田代さんは 「田代さんは 「田代さんは 「田代さんは 「田代さんは 「田代さん 「田代 「田代さん 「

勝手に手を入れると御機嫌すこぶるナナメだから、 ミサンが珠 訊きに行ったのです。あの方は御自分でやってることに人が していたのよ。 しを受けにでかけなければならないのよ。 コを煎じたのは珠緒さん御直々ね。私もお料理のお手伝 **ゆうべ、じゃなかった、** あやかさんがこう説明するのをひきとって、 緒さんのところへゲンノショ コンロが足りなくなったから、 おとといの夕方 ウコを下し すると珠緒さんが か、 千草さん ツボ平のオカ ゲンノショ て 一々お許 ゥ

コへうつしたのです。 オカミサンと一緒にきて火から下して、冷したあとでフラス 「ええ、肉パイをこしらえて。私のただ一つの御自慢だから」 あのとき、 あやか様もいらしたわね」

「いや、どうも、 「次はウナギの蒲焼ね ヨダレの始末に苦しみます」 我々シモジモには、 お話を承っているだけ

と、カングリ警部は柄にもなくわざと下品な笑い方をして

みせた。 を煎じているあいだに、 「お嬢様方お二人、奥様、ツボ平さん御夫婦、五人の外に薬 調理場へどなたか見えた方がありま

にかで時々いらっしゃるわね。 んはビールをとりにいらっしゃるし、 調理場は冷めたい清水が流れているから。人見さんと王仁さ がとても往復なさるのよ。 「もう一々記憶していないわ。だって調理場は、あれで殿方 雪で足をひやすのよ。 内海さんは、雪くれないか。 変な人。 あの日は宇津木さんもい '冷めたい水は丹後さん、 一馬兄さままで何かか らし

それを見学して、それから何やかやお手伝いして。 合せましたわ」 さんがゲンノショウコをコンロから下しにいらした時も、 「ええ、ズッといたのよ。あの日はオソバを打ったでしょう。 私は珠緒 居

仁さんのお部屋へ持ってらしたのよ。 「珠緒さんが清水の落ち口で冷して、 「で、ゲンノショウコはズッと調理場にあったのですね フラスコへうつして王 珠緒さん以外はどなた

も触れる余地がなかった筈ですわ」

えて持ち去ったのも珠緒さんですね」 けたのも、煎じたあとでコンロから下してフラスコへつめか 「するとゲンノショウコを袋からヤカンへ入れてコンロにか 千草さんは断言して、賛成をもとめるように見廻した。

嬢さんも飲まれたらしいようですから、望月さんの飲んだの 死量ぐらいになるでしょうが、宇津木さんも飲まれたし、 ありませんでした」 は全体の三分の二ぐらい、それによって死ぬという分量では ノショウコに投入された催眠薬をまとめて一飲みにすると致 「ええ、その通り」と千草さんは、 「いったい王仁は催眠薬で死んだのですか」と私がきいた。 「いいえ、催眠薬で眠らせて短刀で刺したのでしょう。 取りすまして言った。

眠らせたのと刺したのが別人の仕業でないとは言えないでし のですか」 ょう。それとも、 れに警部さんは催眠薬で眠らせて刺したと仰言るけれども、 でしょうね。そこに何か意味があるのじゃありませんか。 |催眠薬で殺せばいいのに、どうして二重の手間をかけたん 同一人の仕業だという証拠があがっている

知っていたとすれば催眠薬は殺す目的でなしに眠らせる目的 れたということの二つの事実だけ、そしてもしもこの二つが れたゲンノショウコを飲まされたことと、睡眠中に刺し殺さ 分っているのは、望月さんは何人かによって催眠薬を投入さ 薬で殺さなかったか、我々にとっても不明でありま に用いたらしいということ、殺す目的にしては、分量がやや 同一人の仕業なら、犯人は催眠薬の致死量を知らなかったか、 「ごもっともな疑問です。同一人の仕業かどうか、 す。 なぜ催

少なすぎるという事実です」

れぐらいのイタズラはやりかねないよ。浮気封じに昏々と眠 言う。警部はちょっと考えていたが、 白そうなことだからな」と、セムシ詩人がニヤニヤしながら らせてやろうてんで、チョイとフラスコヘイタズラする、面 「ちょッとしたイタズラじゃアないのかなア。あの人ならそ

らかとなりました」 ハキダメに残っていた煎じたカスの葉ッパを調べた結果、 煎じつつあるヤカンの中に投入せられたもので、それは今朝、 ません。然し催眠薬はフラスコへ投入されたものではなく、 「そうですね。あるいはそんな軽い意味のイタズラかも知れ 明

「あの日の調理場はオソバを打つやら賑やかでしたから」 と秋子さんが言いかけると、千草さんがひきとって、

がないから、誰も近づきやしませんわ。 か様が肉パイをこしらえていらしただけ、ゲンノショウコの のは窓のところで離れているのですもの、 気コンロは扉に近い隅のところですし、私たちが騒いでいた 「そうよ、大変な騒ぎだったわ。だけどゲンノショウコの あっちの方にはあや あっちの隅には用

香りがお嫌いだからブツブツこぼしていらしたわね」 ヤな匂い、マッコーくさいんですもの」 「ええ、私コウヤクだの煎じ薬だの古風なものは大嫌い、 1

「あの日じゃないの、

窓の外でピカーさんが大蛇をつかまえ

腹をさいて晩メシのオカズを出してやるから庖丁もってこい、 「一間ぐらいの青大将にすぎないのよ。ニワトリのんでる、

> なんて、宇津木さんたら物好きね、あんなもの見に行らっし ゃるのだもの、私は蛇きらい、見るのもイヤだというのに」 「私は蛇、 怖いけれど、怖いもの見たさ、惹きつけられるの

ょ 窓からとび降りて」 「ツボ平さんたちもとびだして行ったわ。オヤジさんなんか、

「珠緒さんは蛇を平気でつかんでブラ下げるね.

え、あやか様。私たち二人はピカーさんなんか振向きもしな もないセムシさんが。私たちは蛇なんか見るのもイヤよ。 かったわ。スサノオのミコトみたいな、そんなの、イヤらし 「そうお、そんなんが好きなの。トランク一つブラ下げる力 とセムシ詩人が言うと、千草さんは御機嫌ナナメの顔で、

「スサノオのミコトか。 なるほどね。 奥さんはアマテラス大 -35-

御神かも知れないけど、千草さんは何だろう」

「オカメのヒョットコよ」

千草さんは真剣に怒ってしまったから、 シラノ二世も降参

して、

せに、こんな時には喋ってくれないのかな。 しい紳士だからさ」 トとなると下界の奴らと話がしたくなくなるわけかな 「オレは美人以外に話しかけないという戒律をまもる行 「ピカーさん、あんたはやたらに出シャバッて喋りたがるく スサノ 才 じ 正

そのとき誰かが扉をあけた。

八重という女中である。扉につかまって人々の方を見たと思 扉の開くにつれて一人の若い女がひょろひょろと現れた。

と思ったが、 うと、ヘタヘタと坐ってしまった。なんのために坐ったのか 実は腰がぬけたのだということが、 後になって

「お嬢さまが」声がつづかなかった。

分ったのである。

「 え、 なに?」

「……殺されて……」

カングリ警部は私達に向って、

「皆さん、しばらくここからお動きのないように」

駐在の友一郎巡査を見張にのこして、現場へ去る。巨勢博

士と一馬だけが一緒に行くことを許された。

四十五分ほど経て、 巨勢博士が一人もどってきたから、

「珠緒さんが死んだ? え?」

「ええ、殺されています」

「毒殺か?」

やかさん。秋子さんも。たぶん。 せんけれど、電気のコードでクビをしめ殺されております」 「ああ」女の二三名が同時に溜息をもらした。胡蝶さん、あ 「さア。また催眠薬でも飲まされてるのだか、それは分りま

「自殺じゃないの、巨勢さん。覚悟の自殺」と千草さんがき

すね。 されたもののようです」 ないようです。酔っ払って熟睡してるところを、 「そうですね。一見絞殺と見えるような自殺が、あるもので 然し珠緒さんの場合は、どうやら他殺は疑いの余地が なんなく殺

「何一つ手掛りはありませんよ。ただ、例によって物盗りの 「何か犯人の手掛りは?」と私はさっそく訊いてみたが、

仕業じゃありません」

一座は深い沈黙に落ちた。

「どうも、変ね。じゃア、いったい」

千草さんが一訝しそうに口走って、何か、 考えこんでしまっ

附記 外のものから犯人を推定することは決して致しません。 ことだけは断言致しておきます。巨勢博士も読者の知った事実以 事実の中に犯人を推定しうる明確な、 事件が起ります。然し、読者は全てを知らされ、読者の読まれた 今から犯人を当てようたって無理ですよ。まだ次々と殺人 ぬきさしならぬ証拠がある

ないですよ。 が過ぎてのち封をあけて、原稿を印刷へ廻します。邪推の余地 を厳封して、応募答案の〆切前に編輯者に渡します。〆切の期日 して解答を寄せることになっております。即ち私は解決篇の原稿 正大、第一この懸賞には、この雑誌の編 輯 者まで読者の一人と から犯人のつかまるタメシがなかったのですよ。然るに私は公明 るそうであります。全く彼らときては、常にかくの如く邪推深い ら、犯人をつくりかえるんだろう、と失敬千万なことを申してい せる由、商売柄、邪推深いものですから、僕らの答案を読んでか 八丁鼻氏もカングリ警部氏もこの懸賞に応じて犯人を当てて見

胆に相違なく、これには困りました。すると郡山千冬のはからい すから、僕の質問にヒントを得て秘密を見破ってやろうという魂 の最も無能な敵手の一人で、したがって深く恨みを結んでおりま でしたが、彼たるや実に探偵小説の犯人の当てッこでは僕の年来 法医学上のことに就いては知友長畑一正先生を 煩 わすつもり

ムにまいておこうという深謀遠慮です。探偵小説ともなれば、色どと法医学の大権威のお名前を持ちだしておいて、実は読者をケにあずかることができました。厚く御礼を申上げる次第です。ないらっしゃい、という好意を受けましたから、そこで色々御教示で、東京医大の浅田一博士から、いつでも教えてあげますから、

先生。読ミスギ先生。アタピン先生。以上(八月七日) 江戸川乱歩先生。木々高太郎先生。カングリ警部先生。八丁鼻 さて、最後に挑戦状。私より解答の御寄稿を挑戦いたす方々

のですがネ

々策を施しますよ。あなた方を相手に、そうまでする必要はない

坂口安吾

## 七 探偵小説狂の老政客

たった一つだけ、変ったことがあった。 とかかっていて乱れがなく、蚊帳も吊られたから、全然抵抗のいうことだが、泥酔して熟睡中をやられたから、全然抵抗のいうことだが、泥酔して熟睡中をやられたから、全然抵抗のいうことだが、泥酔して熟睡中をやられたから、全然抵抗のいたが、これはその寝室の棚に置かれていたものであった。 珠緒さんの首にアイロン用のコードが二重にまきつけられ来緒さんの首にアイロン用のコードが二重にまきつけられ

が、ヤカンとコップの水にモルヒネの粉末が投げこまれてい聞紙をしいた洗面器と盆の上に薬鑵とコップが置いてあった、珠緒さんは泥酔のあまり吐いて苦しんだから、枕元には新

であるが、これをよんで、富岡八重という二十六の丸ポチャのちょッと可愛いい田舎娘これを発見したのは八丁鼻で、昨夜カイホーしたという女中、りあげて、すかしてみると、かすかに白い沈澱がみられる。盆の上に少しばかり白い粉末がこぼれていた。コップをと

「このコップは塩水かね」

ハア。いいえ、真水でございます」

水にとりかえてきて、と言った。て持って行くと、一度うがいのあとで、塩水はイヤだから真ぷ洗面器をもって駈けつけて、それからヤカンに塩水をつくっ女中の話によると、珠緒さんが吐き気を催したから、先ず

にふいた。そのときバケツと雑巾も持ってきて、汚れたところをキレイそのときバケツと雑巾も持ってきて、汚れたところをキレイーそこでヤカンとコップを持ち帰って真水をみたしてきたが、

紙をしいて持ってきて、汚物のあふれた洗面器は持ち去って諸井看護婦がこう言ったので、女中は新しい洗面器に新聞らった。珠緒さんはいくらか吐き気がおさまってきたが、き下ったのはこの時で、仕方がないから諸井看護婦にきても女中が広間へ海老塚医師をよびに来て怒鳴りつけられて退

それから後は、もう殆んど吐かなかったから、この洗面器

洗い流した。

には小量の胃液が吐き残されているだけであった。

「お嬢さんは真水でウガイしたかね」

一さあ?」

ばかりである。 女中は茫然として、ウロウロし、又、泣きだしそうになる

あげて、 およりない様子であった。然し、ふと顔をキもないような、たよりない様子であった。然し、ふと顔をか、分らないと言う。考えだし、追想を新にする頭のハタラのだろう。オロオロして顔をあからめて、有ったか無かった女中は益々泣きだしそうになった。血のめぐりの悪い娘な「この白い粉はあんたが盆を運んできた時から有ったかね」

と言う。「私の立去るとき、コップの水は八分目どおりありましたが」

ことであった。カンを本署へ送ってモルヒネの検出が報告されたのは翌日の事実コップの水は八分目通りあった。このコップの水とヤ

はなかった。
胃の中にもモルヒネはなかったし、吐いた汚物にもモルヒネ別の手当は何一つ施さなかったと言う。そして解剖の結果は、酒の上の吐き気にすぎないから、一切薬は与えておらず、特番井看護婦の話では、ただ背中をさすったぐらいのもので、

ろう。王仁の消えて失くなることは先ずもって大方の希望でふ配まで浮かんだような有様だった、私ばかりの話じゃなかトに死んでるのかな、騙されてるんじゃなかろうな、そんなたばかり、屍体を眺めても溜飲が下るばかりで、こいつホン王仁が殺された時には、私の如きはただいい気味だと思っ

あったに相違ない。

がくい違っているから、本当の敗北意識というものがないの識はあっても、本当の嫉妬というものは少いのである。作風というぐあいに、こういう立場の作家同志は徒党的な対立意は王仁をほめる。王仁にお点の辛い評家は私に高く採点する。私と王仁は作風が全然違っているから、私を悪く評する者

苦しいものだ。 苦しいものだ。 さっと本質的なぬきさしならぬ才能に絡みついた問題だから、 違ない。作家の嫉妬は他人の名声流行などには案外淡泊で、 な才筆に圧倒されがちな丹後には、痛烈な嫉妬があったに相 な別を扱う角度や発想の角度が同型であるから、こういう場 人間を扱う角度や発想の角度が同型であるから、こういう場

があった。

客たちのこと、それからそれへと考えざるを得なかった。シヒシと考えさせられ、例の一馬の手紙のこと、招かれざる珠緒さんが殺されてみると、私は始めて犯罪ということをヒなどということにはまったく無頓着、念頭にもなかったが、私は王仁の消滅には祝杯をあげたい気持で、犯罪とか犯人

は当然で、 この山中では夜は特別冷えるから真夏でも雨戸を閉ざすの もかかっていたが、然し例の田舎の習慣で、 珠緒さんの寝室の廊下の雨戸も閉ざされており、 戸口の締り

はいつもゾロッペイなのである。 珠緒さんの寝室は、 私たちの住む洋館からも母 屋 から も人 滝

から、 洋館でも、 滝の音でピストルの音でも分らぬぐらい、別して、母屋のこ れて合せて六十尺ぐらいの飛瀑をなしており、 ツの区別なく犯罪者に見えないものはなくなるというタチだ どは、いささか音に悩むことも多いのである。 のへんは滝のすぐ下だから、音がたちこめている。 が二つある。 に知られず忍びこむことは容易で、その上、 我々文士は一種の精神分析派で、 あれからこれへと犯罪に就いて考えても埒のあくもの 南面 一つは一丈ぐらいだけれども、 一の部屋はさほどでないが、 思いつめればドイツコイ 北 ここの庭には 面 一つは三段に分 の私の部屋な 深夜になると 私たちの

御都合よろしかったら御越し下さいませ、 済ませるつもりにしていると、又、 も、この騒ぎではどうしたものか、 朝食がすんだら遊びにきてくれという歌川多門 下枝さんがやってきて、 ちょうど幸い、 という。 老からの 行かずに 話

な私の我がままのせいじゃ」

ではない。

ーええ

一下枝さん。

とんだことになりましたね

正しく美し あげて、 下枝さんは、 私を見た。その目は利巧で、よく澄んで、 いものだけをいつも見つめ考えているような目で あどけ な リンカ クの美しくととの 静かで、 った顔を

> なのだろうか? この可愛いい、 娘のカラダである。 私は信じられなかった。 あどけない娘が、ほんとうに多門老人の妾 このカラダは、 ま

「歌川さんはビックリ取りみだしていられやしませんか」

います」

「いいえ。

もう落着いて、

いつもと同じ御様子でいらっしゃ

変らぬ様子に見えた。 私たちが出向 いてみると、 まったく多門老人は、 ふだんと

クのない様子で、むしろ明るく生き生きと、 という、 れなかった。思えば私の取越し苦労で、この人は例の大人物 私たちに対する怒りというものは、 日本の英雄豪傑のあの型なのだろう。 もはや、 まったく見ら 向にクッタ

す。 ひいて、胃をいためたもので、閑居すると、ちょッとのこと なさんの方へ遊びにでたいと考えながら、 はもう、そうじゃない。むしろ、なつかしんでいます。 で病気する、 「サア、 ひところは、 サア、 病気がこたえる、 あなた方、よく来て下すった。 あなた方に腹を立てたこともあったが、 仕事のない身はもろいもので このところ風 私 の方からみ みん 邪を

とは知ってはいたが、そんな人間に限って、まさかの人事に却 は、 ない。いったいがこの老人は家事には超然たる人物であるこ 人の平然として全く何事もなかったとしか思われない態度に た二人の子供のうちの一人娘が殺されたというのに、この老 って激動して取り乱しがちなことはまま有ることであり、 多門老人は慈父のように機嫌がよかった。 いささかならず感動した。 まったく虚勢と思われる節が 私 は

げざるを得ないから、 うなると私もいささか反撥せずにいられない気持も首をもた ている。立腹と悲しみとは別の感情なのかも知れないが、こ と京子の場合などでも、大変な立腹だったということをきい

落ちのことと存じます」 「本日は大変なことでした。 思いがけないことで、 さぞ御気

「いやいや」

顔付ではなかった。いくらか気むずかしい様子に見えただけ 老人はさえざった。 さえぎったという以外には別にほ かの

私は然し、ひとつ腑に落ちないことがあるが」 も毛色の変った奴が生れてくるのだね。是非もないことじゃ。 多門老人は口をつぐんだが、すぐ明るい顔になって、 かも知れ 私がこんなものだから、 · 子 供

「これも私

句のせい

ぬ

まらぬことを色々と考えるのじゃろう」 「いや、私の取越苦労かも知れぬ。からだがヒマだから、 つ

てなしも出来ないが、これを記念に納めていただきたい。こ ンがものの急所を射ぬいていることが多いものです」 「それを仰言っていただけませんか。案外そんな漠然たるカ 「まアさ。この話は止しましょう。せっかくお招きしておも

「探偵小説がお好きなようですが」

縹゛渺たる静寂、これを孤独というのかね、身にしみる魂のれは外遊のみぎり北京で手に入れた八大山人の小品じゃが、 げて見せてくれようと思ってね、これはダイヤだが、十八カ ムライも何がな一つ人の気のつかぬ所へ意外な装飾をぶらさ ぎり巴里でもとめたネクタイピンですが、ポッと出の田舎ザ 深いものがある。それから、京子には、 これも私が外遊のみ 身にしみる魂の

> 本までブラ下げてきた。 れでまア、そう思わせて、 ラットあるのです。私がこれをノドクビにくッつけて歩いて のが、最近現れてきおったのです」 ってとりあわぬ始末で、私もどこかへ投げこんで忘れていた いても、 、誰もダイヤと思わぬ。ガラス玉だと思っておる。 私の死んだ女房なども、冗談だと思 ひそかに溜飲を下げて、 無事に日

多門老人は飄しているのとう 「々、仙骨を帯びてアッサリくれるけれども、

温情をわきたたせた。 は娘のように。慈しむあたたかさが、私たちにも自然の安堵と 小品とても、天下の稀品に相違ない。可愛がった昔の女を今 だろう。いささか薄気味わるい始末、 十八カラットのダイヤといえば、たいへんな金目のものなの もっとも、八大山人の

とか、風と共に去りぬ、というような翻訳本が主であった。 分ぐらいが探偵小説の翻訳本だ。涙香もある。ヴァン・ダイ がある。主として歴史の書物だが、いくらかある小説類の半 ンもある。小説本も、モンテクリストとか、レ・ミゼラブル そのとき私は気がついた。この部屋の書棚には色々の書物

半分だけ語ってきかせる。佳境に入ったところで口をつぐん に晩酌をくれないものだから、ドイルなどの探偵小説を一席、 説の愛読者で、家族のものが病体をおもんぱかって思うよう れづれに探偵小説の趣味を覚えたのです。岡倉天心が探偵小 で、それからどうなったのですかときくと、いやいや本日は 「若いころから涙香などを愛読しておったが、外遊 と私がたずねると、多門はうなずいて、 の折、

これまでと、じらしておいて、どうじゃ、あとが聞きたけれ

で、微妙で、いりくんでいるから、読むには確かに面白いが、ちょうど手ごろの一席になるね。近ごろの推理小説は、小味ばモウ一本もってきなさい。ドイルなどは、晩酌用の策戦に、

晩酌の策戦には適しない」

\*\*\*\*・、-「私も探偵小説は至って好きな方ですが、どんなものがお好

きですか」

っぱらこの探偵小説のためで」
読みつづけられない。私がむかし丸善へ足を運んだのは、もやらしくジラシたり、モッタイぶったりするから、気持よくです。ヴァン・ダインとかクイーンとか、無役に衒学で、い「私はイギリスの女流のアガサ・クリスチイというのが好き

みんな探偵小説だった。クロフツもあれば、「赤毛のレドメン」老人は書架の隅から積み重ねた洋書をとりだしてみせた。

「ジゴマ」フリイマン、なんでもある。

「それでしたら、このたびの事件についても、御感想がある

ことでしょう」

老人はしばらく口をつぐんでいたが、

「望月さんの犯人と珠緒の犯人は同じ人間かね? 同じ人間

又、口をつぐんだが、

なら……\_

あらゆる犯罪の可能性をもっている。どいつも、こいつも、どいつもこいつも、人殺しぐらいはできるのだ。どの人間も、「然しなんだね。矢代さん。あなたは、どう思うね。人間は

ともせず、私たちをジッと見つめた。そして、また何か言い多門の目が急にギラギラ光った。そして、その光を隠そう

やりかねな

めてしまった。 そうに、口がふるえたが、やがて思いかえして、喋るのをや

## 八 アリバイはただ一人

した三十女がよびとめて、た部屋の廊下を通りかかると、その部屋から洋装のスラリと多門の部屋を辞して洋館へもどるために珠緒さんの殺され

「モシモシ、ちょっと。あなた方、お名前は?」

「なぜ? あなたは何者ですか」

お名前をきいているのです」「私は警察の者です。皆さんのお顔を覚えておきたいから、

「ああ、なるほど」

私は思わずふきだした。

「すると、あなたは、アタピン先生!」

「マア、失敬な!」「すると」あなだけ

アタピン女史、柳眉を逆だてて、

して、アゲクの果に、このザマじゃないの」がレタ、ハレタ、イヤらしい。年百年中オカミの手数を煩わも女も、ロクな人間はいないのだから。文士だの女優だの、「何ですか、あなた方は。分ってますよ。ここへきている男

ツですか」さっそくアタマヘピンスケと来ましたか。犯人はどこのドイ「イヤ、ゴモットモ。御説の通りです。そこで、どうですか。して、ブククの男に、このサドしゃたしの」

「ヤア、失礼失礼」「おだまり」

行き過ぎようとすると、グイと手首をにぎって引きもどし

「名乗りませんか。失礼な

下さい。名乗りを脅迫するのは憲法違反だから、アッハッハ」「まアさ。 あなたのアタピンで私たちの名前ぐらいは当てて

私が巨勢博士や一馬夫妻と、一馬の部屋に落着いて、ユッ私はアタピン女史を怒らせておいて、逃げだした。

クリ話し合うことのできたのは、午後三時。

E二の貴骨が何えこ、安の全集の呂反元の士長、呂反邪長、クリ記し合うことのできたのは、午後三時

王仁の遺骨を迎えに、彼の全集の出版元の社長と出版部長、

はずで、この村には隠坊はいるが火葬場はなく、野天へ薪をた王仁の屍体がまだ本署から戻らない。戻り次第ダビに附す若い社員と王仁の弟子が一人、午まえに到着したが、解剖し

つんで焼く。まる一晩かかるのである。

たたくうちに表座敷に葬場らしいものが出来上ってしまった。どうして来たのだか、ちゃんと黒幕などが運ばれてくる。まる部屋の支度、坊主の交渉、火葬場とのレンラク、どこから火のついた如く別天地の段どりが起って、王仁の遺骸を迎え私ども実務にうとい者の集りへ事務家が加わるとにわかに

くその機会がきたので、

私は然し巨勢博士に秘密に話したいことがあった。ようや

京子はもう寝んでいたから、知らなかったと思うが」た。時間はハッキリしないが十一時ぐらいじゃなかったかな。は昨夜、自分の部屋へ戻ったが、寝つかれないので散歩にで「実は君たちにだけ報告しておきたいことがあるんだが、私

「食堂の戸口から出て、ブナの森へ行くつもりだったが、裏「ええ、でもお帰りになったのはウスボンヤリ覚えているわ」

那風の卓とイスをおいた部屋と二つあった。 堂を模してつくらせた茶室で、中には畳のしかれた部屋と支 にちぢめてつくらせたもの、釣殿というのも大和のなに 今度は釣殿から男が出てきた。先ず池の水で手を洗う。これ 誰だかまったく見当がつかない。ところが、しばらくたつと、 途中の姿だろうと思われるのです。女だとは分ったけれども、 殿から出て、御尊父の寝間の外をまわって勝手口の方へ帰る た。出て行くところは見ていなかったわけだが、 くつもりで滝壺の上へでると、下に釣殿が見えて灯がもれて 腹の夢殿のところへ行ったのだ。 木戸まで行くと気が変って、庭へ廻った。池をまわって、中 が、私はそれから十分ぐらいそこにいて、 て、女の消えた方へ去って行った。私の見たのはそれだけだ ンケチで手をふいて、 は海老塚医師です。半ソデシャツにズボンをはいていた。 いる。そのとき一瞬チラリと闇へ消える女の姿が目にうつっ 夢殿というのは、多門老人が聖徳太子の夢殿に模して小 庭の山の方へ登りかけたが、ふりむい そこからアズマヤの方へ行 戻ってきたから」 たしかに釣 かの

何かそんなことがあったのだろう」時々急患がきて、医院から電話のくることがある。ゆうべもいつごろからか、釣殿専門に寝泊りするようになったのだ。もない。海老塚さんは変り者だから、母屋へは寝たがらずに、が、戦争以来は自動車どころか、村全体に一台の人力車すら

「じゃア、八重にきいてみましょうか」

たしに村へ出ており、やってきたのは諸井看護婦であった。あやかさんは室内電話で女中の八重をよんだが、八重は用

「諸井さんは医院へ行らっしゃらなかったの?」

南雲さんが今朝から腹痛で、注射しているのです」「ええ、今日は警察の御用で午ちかくまでかかったうえに、

「お由良様が?」

「いいえ、南雲おじいさん」

「ゆうべ、医院に急患がありませんでしたか」

「ございません」

諸井看護婦は冷くジロリと一馬をみつめて返事をした。

会うようなことはなかったわけですね」

「じゃア、あなたは医院の用か何かで、

ゆうべ海老塚さんに

「ある筈がないと思いますが」

「海老塚さんは、ゆうべも釣殿へ泊ったのですか」

は存じませんが」「今朝はこのウチにいらっしゃいましたわね。ゆうべのこと

諸井女史は冷たく横を向いてうそぶいた。

「もう、御用はよろしゅうございますか」

「ええ、御足労でした。へんな質問で、気を悪くしないで下

名誉の御様子ですから」

頭を下げて、ふりむいて立ち去った。 ジロリと私たちに目をくれて、キチンと四十五度ぐらいに

「イヤア、屋外Eチヽずか可かで、ポチャポチャあったかゝ「とりすましたヒネクレ女め、体温まで冷いのじゃないか」

かも知れませんや」「イヤア、案外モチハダか何かで、ポチャポチャあったかい

婦人連をビックリさせた。と巨勢博士が処女趣味に似合わしからぬ言辞を弄して、

「どうだい、博士、誰か容疑者らしいものがあるのかね」

「いいえ、一向に」

毛をゴシゴシこすりながら間の悪そうな笑い方をして、一馬がこう訊いたが、博士は両手をうしろ頭へ組んで髪の

「警察の人たちは何か証拠を握ったのじゃありませんか」

一、怨恨だか、情痴だか、てんで動機も分りませんや」べていますが、益々雲をつかむぐあいだろうと思います。第「いえ、一向に。警察の人たち、まったくどうも根気よく調

現れているじゃないか」(は殺だろう。しかも、君、非常に微妙な事実の食い違いが「然し、君、風来坊の物盗りの偶然の兇行と違って、ともか

「ハア、それは、何ですか」

-43

御

ち去った。翌朝、珠緒さんが王仁の屍体を発見した時には、大塚山の意見をきいて貰おうか。珠緒さんが王仁の寝室からたという。ところが、それから二時間ほどのち、宇津木秋子たという。ところが、それから二時間ほどのち、宇津木秋子たという。ところが、それから二時間ほどのち、宇津木秋子たという。ところが、それから二時間ほどのち、宇津木秋子たという。ところが、それから二時間ほどのち、宇津木秋子たという。ところが、それから二時間ほどのち、宇津木秋子たという。ところが、それから二時間ほどのち、宇津木秋子たという。ところが、それから二時間ほどのち、宇津木秋子たという。ところが、それから二時間ほどのち、宇津木秋子たという。ところが、それから二時間ほどのち、宇津木秋子たという。ところが、それから二時間ほどのち、実力がに表った。翌朝、珠緒さんが王仁の扇体を発見した時には、大塚値の意見をきいて貰おうか。珠緒さんが王仁の扇座をかけて立な。秋子さんはワザとライターを置き残して、鍵をかけていて、大塚値の意見をきいて貰おうか。珠緒さんが王仁の房体を発見した時には、大塚値の意見を表して、いるというには、大塚値の表している。

と。まだ王仁の生きているうちに、一度鍵をしめた。殺して「僕に分るものか。ただ分るのは、犯人は鍵を持っているこういうことを意味していると思いますか」きは、まだ起きて、きいていましたよ。それで、先生は、ど「ええ、僕も珠緒さんがシャンソンを唄いながら立ち去ると

を意味していますか。え?

鍵がかかっていなかった。これは、

いったい、どういうこと

「ええ、たぶん、いましたね」ないかね」ないかね」をあけて室内へはいってきたとき、犯人は室内にいたんじゃから、鍵をかけずに立ち去った。ねえ、君、宇津木さんが鍵

「え?(本当かい?)僕のは深い根拠があるわけじゃないん)顔色を変えた。私も思わず緊張して、

博士はアッサリ答えた。一馬とあやかさん、京子は一時に

だが。犯人は、どこにいたんだ?」

だ、それぐらいのものでしょう」 見込みです。いくらか見込みという奴が立っているのは、まや。カングリ警部、八丁鼻、ヨミスギ刑事、みなさん、その王仁さんの寝台の下に。そこ以外には隠れ場所がありませんたぶん、そこに居るよりほかに仕方がなかろうと思いますが。「ええ、それはまア、宇津木さんの言葉に偽りがなければ、

御婦人連は緊張のタメイキをもらした。

あやかさんが叫んだ。

「なぜ、そこに、いたの?」

「いなかったという仮定が成立する根拠もありますか」案外、犯人は、そのとき室内にいなかったかも知れませんや」るかも知れません。まだまだ何も仮定してはいけないのです。「さア。そのナゼに説明を与えてしまうと、犯人にバカされ

が殺されたということだけでさア」
は、国下ヌキサシならぬことと云えば、王仁さんと珠緒さんさわらず、ヌキサシならぬ奴だけ信じる以外に手がないです外、無用意なのかも知れませんや。万事始めのうちは当らず、本っ考えてもいけないのかも知れません。つまり、彼氏、案ねてモロモロのテクニックを御用意の様子もあります。尤も、「有りますとも。実に、彼、犯人氏はテクニシャンでさ。か

んできて、僕の寝台へねてしまってから、僕はふと起きて仕まで起きて仕事をしていたのだ。あやかが僕の部屋へ逃げこ「僕も、おとといの、王仁の殺された夜は、暁方の三時ごろ

すると一馬がふと思いつめたような顔をあげて、

まいているが、却々はかどらないのでね。すると、たぶん、事をはじめた。去年からフランス象徴詩についてエッセイを

から、出る音だか、入る音だが、分りゃしなかったが」当な音でなければ聴えやしない。人の跫音はきこえなかったた。ねしずまった夜更けと云っても、この滝の音だから、相一時ごろだと思うけれども、隣室へ鍵をさしこむ音がきこえ

博士はうなずいて、

、っこのでになった。じゃア、奥様はズッとここに寝んで津木さんでしょうかね。じゃア、奥様はズッとここに寝んで「なるほどね。犯人氏なら手荒な鍵音はさせんでしょう。宇

いらしたのですね」

思いがけない質問に一馬はビックリして、

「ええ。おとといも、ゆうべも」

「そして、歌川先生は暁方の三時まで仕事をしていらしたの

「そうです。然し、おとといのことですよ。ゆうべは、もっ

ですね」

- 4 - 「暁方の三時まで、奥様はズッとやすんでいらしたのでしょと早くねました」

うね」

「全然、ねむり通しです」

でさ。歌川先生のお母様の御命日はいつでしたか」の。場所と云い、条件と云い、殺してくれと云うようなものされるには、誂え向きの特別席に寝ていたようなものですも人でない証拠はない。珠緒さんに至っては、まるでもう、殺立つ御方が現れたのです。そのほかの方には、どなたにも犯「やれやれ。すると、ここに、ようやく一人、アリバイの成

この最後の一言に一馬は顔色を変えて、当惑しきって暫し

は言葉を失っていたが、

分りゃしませんもの。然し、脅迫状については、要心の必要んや。王仁さん殺しと珠緒さん殺しが同じ犯人だか、それも事件とレンラクがあるのかどうか、まったく見当はつきませ「いえ、でも、分りゃしませんや。あの脅迫状と今度の殺人「来月の九日。やっぱり、何か、その日、ありますか」

そのとき王仁の屍体が到着したという知らせがきた。

はあるかも知れません」

九 火葬の帰り道

車に棺をつんで、ただちに火葬に出発した。 表座敷へもうけた葬場で読経と焼香が終ると、用意の大八

至るまで、棺につづいてゾロゾロと出てくる。セムシ詩人が木ベエ、人見小六、丹後弓彦、博士もピカーも、神山東洋に来客の男子はそろって火葬場まで行くことになり、一馬、

に勢ぞろいの見送りの娘子軍の中から、あやかさんが、森の妖婆の杖みたいなものに縋って玄関から出てくると、外

うよ。失礼させていただきなさいな」「内海さんはムリじゃありませんこと。半みちぐらいあるそ

「ええ、ほんと。私たち女だけ残されると、なんだか、さみ

しいわね」

と秋子さん。

「アラ、もてるわね。カジモドさん」

と、千草さんが大きな声で冷笑をあびせて、

「行っといで。まさか、図にのって麗人方のオモチャになり

-45-

たがる程、鈍感じゃないわね」

があり、彼は機嫌よくヘラヘラ笑って、れだからオレは好きなんだというような、内々奇妙なところれだからオレは好きなんだというような、内々奇妙なところ外きわまる下品な言葉で、然し又、セムシの奴は変り者だ。ものは自然にひねくれて下品になるものか、どうも然し、論まったく、どうも、デリカシイのない人だ。不美人という

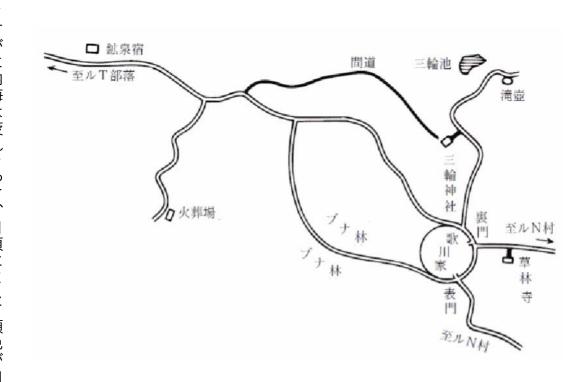
のヤツも、めでたくお骨になれないだろうからな」「ああ、行ってくるよ。ボクが引導渡してやらなきゃ、王仁

あやかさんが門の外まで見送ってきた。(誰よりも一人おくれて、コツコツ歩きだす。それと並んで、)

があった。すでに火葬の薪がつみあげられ、かたわらに隠坊の夜番小屋んで、スリバチ型に山がかぶさり、森に山鳩がないている。山の密林の中にあった。百、米、四方ほどの平らな草原をかこ、火葬場はブナの森を通りこして、山の奥底、人の通らぬ裏

えば、私の感慨もさすがに深い。独籍者の大きな肢体がこれで愈々煙となって消え失せると思います。ここで又、あらためて読経をやり、火をかける。傍若無人、ここで又、あらためて読経をやり、火をかける。傍若無人、

ならない。 山の日暮れのダンドリであるが、まだヒグラシはなく時期にヒグラシがなきだす、これが私の記憶に沁み残っている夏ののまにか谷からモヤがあがり、山々が暗く紫にたそがれて、いくらか、たそがれて、うすくモヤが浮きだしていた。いつ明朝お骨をあげにくることにして私達が引きあげる頃は、



しげだから、ピカーが、さすがに内海は疲れきって、日頃にまして顔色が白々と苦

「おい、

セムシの先生、

オレが押してやるから、大八車にの

で生き延びるとは造化の妙という奴だ。サア乗ったり、乗っ老少不定、酔生夢死、まったく、貴公なんぞがこの御老齢まれよ。棺桶の帰り車だが、エンギをかつぐこともなかろう。

たり」

きだす。ピカーがあとを押して車は威勢よく谷の道を登って内海が大八車にノコノコのっかると百姓が、車をひいて動

行った。

とかたまりに、ぶらぶら歩いていた。に立ち、丹後弓彦、小六、木ベエ、それに巨勢博士と私が一つづいて僧侶の一団と一馬と神山東洋が一とかたまりに先

したんじゃないのかね。巨勢君をのぞいて、ね」「珠緒さんのことは知らないが、この四人の誰かが王仁を殺」とつぜん弓彦が例の皮肉な顔で私たちを見廻して、

いるが、馬鹿正直の人見小六がやや荒い息づかいで、冷静な木ベエはフンとも言わず知らぬ顔の木ベエで歩いて

「なぜ、この四人の誰かなんだ。え?」

思案を重ねて、カケヒキのあることしか言えない男なんだな。とを言いだすんだ。だいたい君は、何かにつけて、肚で充分「この四人の中なら、さしずめ、君だろう。なぜ、そんなこ

君が、実は、王仁も、珠緒さんも、殺したんじゃないのか」

「だから、四人の誰かが、と言ってるのさ」

弓彦はいくらかテレたが、益々皮肉な笑いを光らせて、うじゃないか。探偵じゃないんだからな」じゃないか。我々がみんな文学者だから、言葉に責任を持と「君自身のことだけ、ハッキリ言ったらどうだい。君も作家

か追放するのが、 は文学者の道楽には面白いことじゃないか。陳腐の犯人なん てみたいのだ。王仁殺し、珠緒さん殺し、 必要はなかろうと思うが、どうかね。僕は、犯人をこしらえ くて、文学者だからな。真実を探したり、犯人を突きとめる 真実にしても、面白くもないじゃないか。僕らは探偵じゃな これも極めて有りうることらしいね。極めてありうるから、 君はそう思わないかね。僕が王仁を殺し、珠緒さんを殺す。 ふれたことは、真実であるにしても、面白くないじゃないか。 の無礼とか、それやこれやで、王仁を殺す、妹を殺す、 もないからな。又、たとえばだね。一馬が妹の問題とか王仁 いか。こいつを使って、 「たとえば、物盗り強盗が王仁を殺したんじゃ、全然面白く 僕らの義務みたいなもんだと思うんだが、 可能性の犯人というのを創作するの 面白い素材じゃな

小六は怒って返事をしなかった。

いかが」

え? こと、人間性に関して、何か、陳腐ならざる犯罪が…ッとした目あたらしさ以外に、陳腐でないものが有るのかい。りうることが、なぜ陳腐なんだ。可能性の犯人だって、ちょども、極めて即物的な作風なんだから、この殺人事件も即物いか。だいたいが、王仁にしろ君にしろ、可能性もあるけれ「なんだい、文学の話かい。ショーバイの話は止そうじゃな

「丹後は肚に一物があるんだろう。可能性の犯人とか、真実六がブリブリしながら、ひきとって、木ベエが静かな声で理論的にたたみかけようとすると、小

たよ。 陰性だとか、そんな事は作家の資格じゃないんだ。王仁はズ 礼な奴であったが、ザックバランで、愛すべきところがあっ ケズケ物を言うが、考えるだけは、ちゃんと、 に数歩負けているのは明かだよ。肚に一物とか、考え深く、 は陳腐だとか、実は、自分自身の弁護にすぎないのじゃない 君みたいな奴は軽蔑するな。王仁は、ともかく、傲慢 あの豪放な陽性にくらべりゃ、丹後が作家として王仁 別のところで 無

こだわっているから、思考も浅いし、 はそれも意識してるんじゃないのか」 られる事が怖いのか。ここには巨勢君もいるのだからな。君 珠緒さんを殺したのか。 んだ。ハッキリ言うがいいよ。君が王仁を殺したのか。 て言いだしたりすりゃ、君自身の弁護のために、きまってる 小さく、ケチなんだ。だから、君が、殺人事件の犯人に就 深い。だから、スケールが大きいのさ。丹後はケチな思考に にくらべりゃ、 簡潔で、断定的だが、 ' 君が殺したのではないが、 問題もせまい、 思考の根は、 犯人と見 はるかに 文学が

君が

い

鉱泉宿の主人は四十前後の、

丹後は皮肉な微笑を絶やさなかった。 谷を登って、村道へでると、

**しゃあ、** 僕はすこしぶらついて帰るから」

ものではなくて、 泉宿といっても、 ちの方には鉱泉のでる部落があり、 丹後弓彦は別れて、 よその土地から客のくるような名の知れた いわば部落の共同湯にすぎないのだった。 村とあべこべの方へ歩き去った。 鉱泉宿が一軒あるが、 鉱

> ぜひとも鉱泉宿で昔のカルモチンの有無をたしかめて買いた たが、近ごろは不眠症で、こまっている。村へきたついでに、 ッカケで、思いだした。そこで私も別れて丹後のあとを追っ のころは酒さえのめば睡くなるタチで眠り薬の必要はなかっ れ残りの品物があり、戦争中もカルモチンがあった。私はあ たが、三町も行くと丹後が戻ってきた。 いものだと予定をたてていたものだから、丹後の立去ったキ つ ている。 戦争前に仕入れた品物が買手がなくて今もって売

私はふと気がついた。あの鉱泉宿には雑貨、売薬などを売

かないそうだ。 「どうしたい? 鉱泉宿へ行くんじゃなかったのか」 「ああ。鉱泉宿へ行ったって、仕様がないさ。じゃア、 そこから宿までは四五町あった。ここには部落が十五軒し

ってるんだ。そうじゃないか。王仁の作品は現に丹後の作品

みんなそれぞれ考えているに極

考えている筈で、考え深いなんて事は、表面に見せることじ

ゃなくて、作家ともなれば、

安く売って大損さ。今はもう、いくらも残っていないね」 の相場を知らないから売らない方がいいさね。昔は知らずに まで目当にして、 がある青白いインテリ顔の男で、私の用件をきくと、 「そうさね。東京もんは抜け目がないから、ワシらのところ 買いだしに来たのが、時々あるからね。今

でゆずって貰うから」 探してくれない かね。 あれば、 むろん、ヤミの相場

百

倍かえ」 「ヤミの相場をワシら知らんもの。なんでも百倍だから、

そっ

談にして、品物を探してくれないかネ」 薬は百倍にもなっていなかろう。 「薬は昔から九層倍さ。食べ物の方は百倍かも知れ 然しまア、 値段はあとの相 ないが、

ところ

なかなか抜け目のな

世話をかけたから、何か買わないわけにも行かず、胃腸薬だ一つ一つ調べてみたが、カルモチンは、もうなかった。色々棚の隅にボール箱の中へ昔の薬が一とまとめにしてあった。

「なんの薬だね、カルモチンてのは?」一つなかった。

の虫下しだのその他二三品買って戻った。

めぼしいものは何

晩は、

と言ったが、

「ねむり薬さ」 カルモチンてのに

ったそうな」が来て、何やかや買って行ったね。そんとき、ねむり薬もあ客の、南雲さんさ、歌川さんの妹のお由良婆さまさ。あの人「そんなら、あんた、なんでも三月ほど前に、歌川さんのお

やってきた。 の前でバッタリー馬に出会った。彼は禅寺前の間道の方からる。そこから裏門へ廻るつもりで坂道を降りてくると、裏門家の山の裏手の間道をぬけると、三輪山へ行く山径に合流すの危いところだから、いくらか残る明るさをたよりに、歌川帰る途中で夜になった。ブナの森はあかりがないと足もと

「やア、君か。今じぶん、おそいじゃないか」

又今日も、

珠緒さんの屍体の枕もとには異様な白色の粉末が

一馬はビックリして、言葉をかけた。

まこまにようにあるようである。 あいにく、お由良婆さ売れ残っていたのを見かけたのだが、あいにく、お由良婆さ「鉱泉宿へカルモチンを買いに行ってきたからさ。戦争中、

に、いくら待っても誰ひとりいない。本堂に腰を下ろして、あげたのに。僕は草林寺へ妹の葬儀のことで話しに行ったの知れてしまったからな。手紙で言ってくれれば買っておいて「なるほど、そうか。あの鉱泉宿の残品も、近ごろはかなりまに先手をやられたあとさ」

医師であった。私たちを認めるとビックリたちどまって、今表門の方の坂から懐中電燈がポカポカ動いてきた。海老塚三十分もぼんやり物思いにふけって来た始末なのさ」

「王仁豪傑も一片の煙となりましたか」ときいた。

言うたびに、私はポカリとぶんなぐってやりたくなる。たち全体を茶化し皮肉るところがあるせいで、こいつが何かの虫がおだやかではなくなる。要するに王仁だけでなく、私れども、同じことをこのビッコの医者の奴が言うと、私の腹王仁ついに一片の煙となる。私の内に快とするところだけ

王仁の場合には、ゲンノショウコに催眠薬がはいっており、カルモチンを買いに、と言った。私はすっかり忘れていたが、へ出て他の三人と別れるときも言ったことで、私は鉱泉宿へそれは私が、一馬にも言ったが、さっき谷径を登って村道

乱しはじめていた。

私は然し、そのとき、

ひどいことに気がついて、

大いに混

みじめな気持になった。れているのじゃないかという気がして、いかにも私は不快な、ヘタな芝居をしているようなアンバイである。みんなに疑らことを故意にひけらかしているような次第で、何か如何にもまるで私は、私がカルモチンか何か催眠薬を常用しているこぼれていたというではないか。

た所に四名の坊さんが並び、多門老人と由良婆さまを混えてって洋館へ行こうとすると、母屋の表座敷、昼は葬場であっ海老塚医師は土間の入口から別れたが、私たちが前栽を廻

-49

食膳についているではないか。

一馬は座敷の縁側へ近づいて、

いもので、三十分も本堂に腰かけてガンバッていましたよ」「なんのこった。和尚さんはここでしたか。僕は又、知らな

と多門は舌打ちをして、伜の顔をながめて、「まったく詩人などという奴は世事にうとい奴じゃ」

げるのが日本古来の習慣じゃよ」「仏事のあとは、きまって桑門の方々を招じてオトキを差上

「何か御用か」

相な年寄であった。見たところは、ただ老僧というだけで、学者らしくもない貧の村の出身だった。戦争中から村の禅寺へひっこんでいるが、で大学で印度哲学史を講じていた日本著名な仏教学者で、こと老僧が笑いながら一馬にたずねた。この老僧は戦争前ま

こい。
広間へくると、もう食堂の用意ができて、一同一馬を待っ「いえ、御食事中ですから、又、明朝おうかがい致します」

ている。

食卓につくと、内海が語りだした。

殺すんだと言っていたそうだ。この先生は珠緒さんが又大のりゃ日本のガンだというテロリストなんだそうだ。ふところんだってさ。村の疎開者に復員の気違いみたいな文学青年だんがってさ。村の疎開者に復員の気違いみたいな文学青年だをひいた百姓が妙なことを言ってたよ。僕アお歴々の中に殺「僕は今日、棺桶の帰り車にのっけて来てもらったけど、車

うだ。警察もこの男に目をつけはじめたという話だよ」キライで、ああいう女が日本を亡すとか何とか言っていたそ

一馬は困りきった顔をしてきいていたが、

男なんだ。尤っ やかのところへ時々変な手紙をよこすんだよ」 シッポをまいて逃げたそうで、然しね、この先生は 仁にかかっちゃ問題にならない。 退したということでね、 会って何か言いがかりをつけたら、王仁にガンとやられて敗 支にいたんだが、その頃から孔子に凝って、今でも疎開 け、妻子も行方が分らなくて、少し気が変になってるという 根吉郎という製図工か何かの復員軍人で、 口作家だとか云うけど、この先生だって妙なんで、 屋の窓に、 いるそうだよ。人づてに聞いた話だけど、いつか道で王仁に 「その男は疎開者といったって、 孔子研究所とか、論語研究会という看板をだして 尤も気が変になったのは戦地にいた時からで、 痩せてヒョロヒョロの男だから、 村の出身なんだよ。 小犬みたいにキャンキャン 復員したら家が うちのあ 王仁をエ 奥田利

あやかさんも困った顔付で、

れるな、なんて」あることなんですもの。王仁さんみたいなエロ作家にだまさ「でも、ラヴレターじゃないわ。やっぱり王仁さんに関係の

もいますよ。その時、こんな話もしました。歌川多門方醜怪化的なものじゃない。まア、なんです、病的ですが、当ってしたカスリ傷です。そのとき彼は言っとったです。腕力あるやられたあとで私の医院へ傷の手当にきましたよ。ちょッと「気違いかも知れませんが、筋は通ってますな。王仁さんに

がたくさんいて、みんな譲り合ったんだろうと言ってましたかったそうですよ。特に名指さなかったから、たぶん、売女なる売女へ、という手紙をだしたというんですね。返事がな

海老塚が又不快なことを言う。

な

どうだい」
「オイ、その気取屋の君子ヅラの藪医者め、つまみだしたら

ピカーが腹を立てて、

をひいて戻ってきて、平然と、気むずかしいいつもの顔で元然し、ピカーが席へつくころ、医者は椅子をだいてビッコッコイショと持ち上げて、広間へ持ち去って、置いてきた。な連中の集る席へ、何だって、お前は出席するんだ」郎だ。曲学阿世という奴だよ。お前自身は何者なんだ。不快郎だ。曲学阿世という奴だよ。お前自身は何者なんだ。不快

ピカーは余憤おさまらず、

の席に坐っていた。

「なぜだい。外から忍んで来る事だって有りうるじゃないか」れだけの人間の中にチャンと居るにきまってらア」ロイ頭じゃないか。ふざけちゃ、いけないよ。殺人犯人はこ「ノートルダムの先生も、カタワのくせに、全然アマッチョ

と内海。

にいる御歴々の誰かでなきゃ、そんな芸当はできやしないや」ることが出来るんだぜ。鍵を握っているんだ。だから、ここるじゃないか。犯人は王仁の部屋の鍵をしめたり開けたりす「馬鹿な。ここのうちに居る者でなきゃ、できない証拠があ

すると、一馬がイライラ叫んだ。

「ヘッ」とピカーは吐きだして、「我々は探偵じゃないんだ。犯人の話は止そうじゃないか」

マラヌ話をしているから、尊公らの作品はいつまで経ってもえて酒をのみながら、あられもない、文学だの芸術だのとツ限るさ。食卓とは常にそういうものなんだ。男と女が顔を揃「よかろう。望むところだ。エロ話。これあるかな。これに

ちゃア。然し、何だな、僕は胡蝶さんの冷めたいオスマシがしょうや。今夜こそは、宇津木先生に、インネンをつけなくの小説だったよ。だから、エロを談じ、大いにエロを行いま

青ッポイのさ。

ともかく、

さすがに、王仁先生の小

大人

ロダンサーも飛鳥時代の原色エロさ。腰の線が、ふるいつきな趣味なんだな。飛鳥時代だな。尤も、ジャバだのバリ島のエ好きなんだが、どうも僕は、やっぱり日本人のせいか、仏像

たいのさ」

讃歎の色に変った。御婦人連は呆気にとられ、一同の眼は憎悪から、隠しがたいぶり、唄声、あざやかなもの、まったく南洋そのままの胴間声、りだした。土人の唄まで、ちゃんと心得ている。手ぶり、腰りだした。土人の唄まで、 南洋土人の腰ふりダンスをやピカーは、又、立ち上って、南洋土人の腰ふりダンスをや

十 気違いぞろい

九時四十分であった。

「千草はいませんか」

知らんです」

とって あいそのない返事である。 傍らにいた宇津木さんが、 ひき

にならなかったようね。そうでしたわね、海老塚さん」 「千草さんはズッとお見えになりませんわ。 食卓にもお見え

「ぼく、知らんです」

「あやかさま、千草さん、御存じ? 食卓にいらしたかしら」

「いいえ、お見えじゃなかったわ」

「まア、どうしたのでしょうね。こちらかと思っていました

けど、じゃアどこにいるのかしら」

らいというのだが、外に適当な部屋がないので不便を忍び、這んまり自由じゃなく、引きずるように歩き、階段の上下はつ 間に合わしているということであった。 うように、階段を上下している。老夫婦は夜の便所は便器で 一度中風でひっくり返ったことがある。それ以来、 老婦人はたどたどしい足どりで引返して行った。婆さまは 歩行があ

当夜のつどいは、神経的に、なんとなく鋭く、苦痛になるの 内海まで、 どうした風向きだか、 ツコクからむ奴で、先刻からだいぶ丹後にからんでいたが、 何かにつけて、チクリと意識に上るのが、不快なのである。 も仕方がない。誰かしら人殺しがまじっているということが、 「気むずかし屋の名医先生。ちょいと、君、ここへ掛けませ 木ベエはふだん酒を飲まないタチだが、たまたま酔うとシ 私たちは、みな酔っていた。ピカーも珍しく大量に飲み、 かなりビールのコップを重ねている。殺人事件の やにわに鋒先を海老塚にむけて、

> はまさしく、君だね られる由、ひそかに承っているが、 んか。ふん、イヤかね。よかろう。 僕の見るところ、 君は我々を気違いと解せ 気違い

「ヒヤヒヤ。名言、名言」

ピカーは大よろこびで、 一同を制し、

「謹聴謹

手を握ったり、 ころを権助オ鍋一党の風説から判ずるに、君はお加代さんの なければ君の診察はうけないそうだね。そのよって来たると ないか。又、加代子さんは君の診察がきらいで、立会人がい なるところへ御宿泊で毎晩なにがし嬢とゴジッコンの由じゃ 君は我々文人の私行をヒンセキの御様子だが、君自身は釣殿 が、君の場合だけは、この慎しみを適用したくなくなったね。 か。又、ちかごろは、下枝さんという可愛いい小間使いに殊 「僕は人のスキャンダルをあばきたてるのは、キライなのだ お乳を長くいじってみたりするそうじゃない

ささか異常、陰性、変タイ、 「よし、よし、そこだ」 と見たのはヒガメかね

いて判断しても、我々文人の人間なみの愛慾にくらべて、い ゃ何をやらかしていらっしゃるやら、当邸内の三件だけに就

言葉は をして何がなし私語を交すことにつとめようとするのは、 女らの社交的な思いやりと礼儀心のせいだろうが、 とピカーは大喜びだが、御婦 御婦人連の社交的性癖などを、 人連 はなるべく知らな やがて一気に凍らせ 木ベエの

いふり

彼

のほか御執心で、胸の病いがあるようだ、とか、どこか内臓

に異常があるようだ、とか、頻りに診断を受けさせるように

ホノメカシテいる由、以上、当邸内だけで三件、医院の方じ

る迫力をひそめていた。

飢え、 なさい。あの目、ギラギラ、気違いの目。人を殺す目。血に 君子先生。その目だよ、その目だよ。みんな見

血の海を見ても飽きたりぬ殺人鬼の目。この正体は隠

狂人の行いうる全てのことを行いうる狂暴無比な光であった。 びかかって人を殺すことのできるその一瞬の目の光である。 ラギラと狂人の光を眼に宿していた。それは、たしかに、と 彼は怒りにぶるぶるふるえ、逆上的な昂奮から、まさしくギ 八ツ裂きにもすることができる、ひねり殺すこともできる、 ではなかった。私は始めからその経過を見て気づいていたが、 な沈んだ目を光らせていたが、まさしく海老塚の目はその比 すことができないぜ。さア、見たり、見たり」 木ベエは酔いに青ざめて殺気立ち、彼自身ギラギラ悪鬼的

木ベエは海老塚をハッタと睨んだ。

婦人連は息をのんだ。

とに気がつかないのが、先ず変質者、気違いの所以じゃない るチャンスをつくらせようとしながらですよ。自分の為すこ 婦人とゴジッコンを重ね、下枝さんにそれとなくお乳をいじ 派だと思っているのだ。加代子さんのお乳をいじり、さる御 うのだか、ともかく気違いの一人ですよ。自分は純潔、 「彼はまさしく変質者、 、精神分裂というのだか、妄想狂とい 正義

う、どうする術もなく、そして彼は、言葉も、身動きも、海老塚の目は益々燃えた。それは極点まで見ひらかれ、 べてが失われている故に、今や、にわかに、唐突に全てのこ

つまり狂人の病症ですよ。皆さん、そうではないか」

ただ、他人の不純不潔を妄想する、彼の潔癖は

か。そして、

とが可能であり、何かが突発しそうな様子に見えた。 そのとき、ひきずる跫音がして、 お由良婆さまが、

諸井看

護婦に手をとられながら、はいってきた。

「千草がどこにもおりませんよ。どうしたのでしょう。

もし

や皆さんに御心当りはございませんか」

一座に別の恐怖が走った。

**そんなバカな。** まさか殺されやしないだろう」

ピカーが大声で喚いた。

いか」 さんの前だけれども、 「お婆さん、安心しな。あの子はサカリがついてるのさ。婆 あの子ときては、 満身これ性慾じゃな

がない。 一座はそのまま沈黙した。誰も、つづいて物を言いだす者

かな沈んだ声で、 すると諸井看護婦が、 水死人が水の中から物言うような静 -53-

「そうです。千草さんはアイビキにおでかけでした」 「なんですって? じゃア、あなたは知っていらしたの」

い顔には、とりつく島がなかった。 「千草さんはアイビキの紙片をお受けとりです。 お由良婆さまの呆気にとられた視線も、諸井看護婦の冷た ヒラヒラふ

り廻してお見せでした。私は読みはしませんが。そして、六

時ごろ、おでかけでした」

「存じません」

「誰ですか、男の方は?」

「申しあげては、 いけないでしょう」冷然と言った。

り、そして腕をユラユラふりながら、部屋から立ち去ろうとるような激しさで、ふりむいた。スタスタとビッコの尻をふったシグサだろう。昂奮のためであろうか。そして、飛び上海老塚が熊のようにユラユラと腕をふった。なんという変

と、廊下の入口で急にふりむいて、

した。

「バカヤロー」

あがるようにふりむいて、歩き去った。なんというハリサケルような声なのだろう。そして又、とび、為身の絶叫だった。小柄のくせに、まったく気違いの蛮声、

「ワハハハハ、ワハハハハ」

ピカーが、気違いのように笑いだした。

いか」のでもう、性慾のカタマリ、色きちがいの巣じゃなろか、まるでもう、性慾のカタマリ、色きちがいの巣じゃななツラをしていられるかい。淫売宿と云いたいが、それどこのウチは、元々、ここのウチが茶番そのものなのさ。マジメ「茶番だらけだ。なアに、殺人だって茶番じゃないか。ここ

ら、このに:湯のにのこうごいっ「ウルサイ!」ゴロツキ! あんたは東京へお帰り! ただ

あやかさんは怒りにふるえて、電気のようにビリビリ、神今、さっさと帰ってちょうだい」

「何だと、このヤロー。もう一度、言ってみろ」

経がとびだすような激しさだった。

く鬼だ。海老塚には殺人鬼のメスのような静寂があったが、そう言い終ると、ピカーの人相が変ってしまった。まさし「何だと」このヤロー「もう」度「言ってみろ」

ピカーときては、狂暴、人間の相ではなしに、鬼、狂いたつ

野獣であった。

のめり、服はさけ、膝を打ち、起き上ることができなかった。やかさんはモノの二間も振りとばされて、四ツん這いにツンんをつかみあげ、大きく一回転振り廻して振りとばした。あパッとハズミがついたとき、彼は躍りかかって、あやかさ

なところのある人で、キッと顔をあげて、

私たちが抱き起すと、すぐ起き上り、見かけによらぬ気丈

「ゴロツキ! 犯人!」

「この野郎」

然し、私たちがその次にアッと思ったときは、それどころは矢のような早業であった。とぶたれて突きとばされたときで、まったく、こいつの腕力我々がアッと思ったときには、もうあやかさんがピシャリ

あげていたのである。じゃない。奴はいきなり、かたわらにある大きな花瓶をふり 54.

われた。をなげ下ろしたが、誰にも当らず、床にくだけて、ミジンに人見小六が武者ぶりついたから、よかった。ピカーは花瓶

こみ、食堂から庭の方へ逃げだした。殺気をさとると、身をひるがえして逃げだした。食堂へとびピカーは猛牛の怪力で小六をふりとばした。あやかさんは

ピカーはすでに追っていた。

え絶えの所であった。けられ、あやかさんは散々ぶたれ、突きまわされて、息も絶私たちが追いつくことができたとき、庭の松の木に押しつ

私たちが鈴なりに武者ぶりついてぶらさがって、ようやく

引き分けたが、どうやら十間ほども引き分け、あやかさんも 婦人連にまもられて去りかけ、 の息をまとめているから、 、もう終りと油断したのがしくじり、 ピカーもフウフウーとまず牛

急に矢の如く追いだした。

身体だが、 それをさとると、 、まったく、あやかさんは、身軽な人で、スラリと細 魚のように一直線をひいて行く見事な速さがある あやかさんは、これ又、矢の如く逃げだ い

のであった。

ある。 駈け登るときツマズイたのが失敗で、若干距離ができたので 寝室へとびこんで内側から鍵をかけており、ピカーは階段を たちは後を追ったが、追いついた時にはあやかさんは自分の あやかさんは出てきた食堂から逆に屋内へとびこんだ。私

いる。 ピカーは狂気の如く、 私たちが追いつくと、 あや かさんの寝室の扉を蹴とばして

「この野郎ども」

私たちを追いまくり、

てやる。 「畜生め。ズベタめ。出てくると、殺してやるぞ。しめ殺し しめあげてやる」

グリしめ廻したが、散々パラ扉を蹴とばしたあげく、ごろん ピカーは自分のシャツの襟をつかんで、自分のノドをグリ

と扉の前へひっくり返って大の字にのびた。

づくと、起きあがって、とびかかってくる。ケダモノのごと そういうことが一時間ちかくつづいたろう。私たちがちか 飛びかかる。

くに吠えて、

私たちは諦めて、それぞれ自分の寝室へはいった。

かえって、喚きつづけているのだ。 室の扉を蹴とばすのがきこえるが、 ピカーは十分か二十分おきに起き上って、あやかさんの寝 あとは大の字にひっくり

ていたという。 ピカーは疲れて、 わめきつづけたということで、翌朝誰かが目ざめたころは、 私はあきれて寝てしまったが、 あやかさんの扉の外に大の字にねむりこけ ピカーはそれから三時間も

落ちついたが、 あやかさんは無事だった。ピカーも翌日はすっかり静 然し、はからざるところに殺人が行われてい かに

殺されていたのである。 して千草さんを探してみると、 セムシ詩 人がその寝室に殺されており、又、我々が手わ 千草さんは三輪山の森の中で け

附記 ましたが、どうやらヨミカタが足らないようです。 へ現れて、 いう名探偵がしきりに登場している由、 連続というのだから、事件ごとに犯人が違っているんだろう、 不連続殺人事件という題名が色々問題となり、 あの題名が手掛りさとカンのいいところを見せて行き 先ずヨミスギ刑事が拙宅 要するに不

ングリ警部は探偵小説の本の装釘の図案から犯人を推定する達 題名から犯人を推定するなんて、半七捕物帳の手口ですよ。 カ

ン、恐れ入りました。そう易々とトリックを見破ってはいけませ イヤなトリックね、とこれ又実に、さすがにアタピンアタマヘピ 八人死ぬそうだけど、殺した犯人が次々に殺されて行くなんて、

アタピン女史もはるばる九州飯塚から親書をよせられ、

は捕まらない。 人でしたから、まことにどうも、明治維新以後は、とても真犯人

安のために歎かわしい。ところで見栄をきるので、笑止というよりも、まことに日本の治ります。名探偵諸先生があんまりダラシなく半七捕物帳ぐらいの探偵小説ともなれば、作者は題名からして色々とカングッてお

とられないように願います。作者の方もハリアイがなくて困り果の訓話をのべる時があるでしょう。あんまり易々と犯人の手玉に今に巨勢博士が連続、不連続という事に就いてアッサリと一場

てております。

た。あんまり懸賞金なみで申訳ありません。十八カラットのダイ尚、作者から贈呈の懸賞金は世間並に一万円という事にしまし角田大探偵に挑戦状を捧呈。つづいて、式場隆三郎先生。田喜久雄氏が犯人当ての第一の名人の由ですから、よって謹んで、挑戦状の追加、乱歩探偵の説によると、探偵小説家の中では角

坂口安吾

ヤかなんか差上げたいが、

ないからダメです。

## 十一 火葬場からの戻り道

の扉の前で大の字にねむりこけていた。翌朝私が散歩にでるとき、ピカーはまだあやかさんの寝室

裏門をでて例の三輪山の方へさしかかると、

神山東洋と下男の喜作じいさんだ。「ホーイ」向うにステッキをふって、よびかける者がある。

はオシャレな御方だ」 「ばかに早起きだね、神山さん。ニッカーをはいて御散歩と

でしょうぜ。私ゃ見かけによらず心臓が弱い方なんだから、い話だけれども、これじゃアどうも又かと思わざるを得ない今もって帰らないのですよ。矢代さん、まったく縁起でもなませんよ。捜査です。千草さんが、昨日の夕方でかけたまま、あなた方文士と泥棒ぐらいのものですよ。私は散歩じゃあり「私はいつも早起きですよ。冗談じゃない。日中ねむるのは

は、やりきれませんな」

「一通り探したんですか」

薄気味わるくって、こんなジャングルみたいな山径を歩くの

から三輪池までは歩いてきましたよ」「まア大体、人間の通れるような径の上だけはね。三輪神社

陰鬱きわまる暗さと静かさがはりつめている。を見あげた。熊笹がはびこり、雑草が、蔓が、絡みもつれて、私たち三人は一しょに三輪神社の裏手へまわって密林の山

って、私ゃ、いやですよ、まったく」ングルじゃないですか。え、矢代さん。この中へ踏みこめた「まるで、いかにも人が殺されています、というようなジャ

そう言いながら、神山は地上に何物か認めて立ちどまった。

「オヤ、何だろう」

五六歩すすむと、ハンドバッグが投げすててあり、中のもられた跡のようじゃないか。するてえと、こりゃア」やら、おいでなすったかな。ア、ア、そこの雑草が踏みにじ「こりゃ、いけない。こりゃ、御婦人のルージュだよ。どう神山は拾いあげた。

<del>---</del> -56-

草さんが俯伏して寝ているように殺されている。 目隠しして、 のが散乱している。十歩ほどすすむと、大木の根の陰に、千 その目隠しの上から女の腰紐のようなもので締 フロシキで

め殺されていた。

御婦人の貞操についちゃア、大変紳士的な御仁じゃない できて、捨てたんだ。 まれた跡が、殺された場所じゃないかね。屍体をここへ運ん 「殆ど抵抗していないね。私たちが最初に見つけた雑草の そのあたりには抵抗し格闘したような跡はなかった。 千草さんはスーツにズボンをはいて、その服装は全然みだ 暴行もうけていないね。この犯人め、 か

踏

こっちの方に、 私と神山が現場へ案内して、朝食にもどってくると、今度は、 私たちが警官の一行に報告する、刑事、巨勢博士の一行を 内海明がその寝室に刺し殺されているという

れていなかった。

みると、 騒ぎである。 食卓に内海明が見えないので、あやかさんが迎えに行 寝室は 血 の海で、 パジャマ姿の内海明が部屋の 中央 って

り棚にある中の一つであった。 あった。 の床の上に俯伏している。 犯人は手を洗ったのである。 刺し跡があり、 短刀は洗われて化粧台の上にのせて 脇腹に三ヶ所、胸に二ヶ所、 この短刀も談話室の飾 頸び に

ほかに犯人の遺留品は見当らず、 内海の かたわらに犯人が室内へぬぎすてて行ったスリッパ それは内海の寝室の隣にある便所のスリッパであった。 の検視が終ったころ千草さんの遺骸と一緒に、 スリッパは足から二尺ほど離れてとんでいたが、 指紋もなかった。 県立病 があっ 屝

> 院の医師が出張して、草林寺の本堂を解剖室に仕立てて、 い二つの屍体の解剖が行われた。

> > 新

を怖れて執拗にメッタ刺しに刺しぬいたに相違ないという話 もう完全に死んだあとで、 全く覚らぬうちに背後から脇腹を刺され、 内へ迎え入れて殺されたか、たぶん顔見知りの仲で、 読んでいたらしく、本をふせて寝台を下りて、殺され 推定されたが、 したらしい。 のようで、便所へ立って戻ってきて殺されたのか、 ムシ詩人の殺されたのは、 ったところをメッタ刺しに刺しこまれ、 千草さんの殺されたのは十八日午後六時から七時 つまり顔見知りの犯行なのである。だから蘇生 内海は寝床の中でラクロの それを又、俯伏せに戻して頸を刺 夜の十一時から十二時ごろの間と 心臓を刺された時は よろめいて、 「危険な関係 犯人を室 の 間、 殺意を た のめ もの を セ

員を広間に集めて、 夕食後、午後八時半、 カングリ警部は私たち洋館居住 の全

であった。

立証していただく必要がありますが、まず総括的な情況 読経が終って点火して引きあげてから夕食までのアリバイを イに捜査 りいるワケに行かなくなりましたよ。みなさんを容疑者の中 から省くわけに行かない次第となりましたから、 いて、巨勢さん、 「さて、 へ御協力をお願い致す次第です。 みなさん。 引き揚げた時は何時でしたか」 こうなっては、 もう礼節を重んじてばか 望月さんの火葬に 虚心タンカ につ

ぐらい」 計なんかのぞくことがないタチなんで、 「それが、どうも、僕は性来ウカツ者ですから、 まア、 アイビキの めったに

「私は時計を見ました。読経が終り、火をつけた、さア、帰と博士が顔をあからめて苦笑すると、神山東洋が、

狂いのない掘りだし物でしてな、いかがですか、十万円なら、ろが、私の時計、モバードの安物ですが、一秒の十分の一と計を見ると六時六分、一馬さんは六時九分と仰言った。とこ一馬さんですな、に、お訊きになった。そこで私が自分の時ろうというとき、矢代さんが何時って、たしかそう若旦那、

んか。どうして寺間をお孔きこなったの一「あら、矢代さん、腕時計をつけてらっしゃるじゃありませするとアタピン女史がキンキンとカン高い声をはりあげて、

売ってもいいが、アッハッハ」

んか。どうして時間をお訊きになったの」

自分の所持品を全部年中身につける主義ですか」「きのうは机の上へ置いて出ましたからさ。 アタピンさんは、

「なんですって、アタピンさんとは失敬な」

「おだまり」

「こいで、メンドルは、皆に帰っして、こうであってある。カングリ警部はギロリと一睨み、なるほど凄い睨みである。

「それで、みなさんは全員一緒に帰られましたか」

答える者がない。すると神山東洋が、

大八車には内海さんがのってましたな、この一行が先発で、「先ずですな。土居光一画伯が大八車の後押しをして、この

若い衆が二人でひきますから、土居先生の後押しもいれて三

「大八車が、なぜ、ありましたか」 人、猛烈な速さでグングン谷を上って行きましたな」

「屍体を運んできたのです」

「屍体を運んできて、すぐ戻らなかったのはなぜですか」

· それは都会の人力車や円タクと違いますよ。 田舎の若い衆

ありませんか」むとか、色々火葬場では人手のいることがタクサンあるじゃが旦那の家へ手伝いにでて、すぐ帰りゃしませんぜ。薪をつ

警部はヨミスギ刑事をふりむいて、

「二人の若い衆はきてるか」

そして、和三郎に清という二人の若い衆をよんできた。「ハア、昨日の関係者は全部あちらの部屋に呼んであります」

「内海さんをどこまでお乗せしたかね」

「三輪山へ別れ径のところだね」「ハア、お屋敷の裏の山径の上でがす」

「ハア、その三十間ほど上手でがす。そこから三十間ほど坂

を降ると、別れ径でがす」

「なぜ裏門までお乗せしなかったのだ」

と仰言ったでがす。下り坂は乗り心持が悪うがすから」「そこから下り坂になりますで、もう、たくさんだ、おりる

「それに違いはありませんか、土居さん」

変らないことだアね」
っぱる車の後押してえのは、ダットサンの後押しとあんまりーバイのないただの道だアね。二人の若い衆がただの道をひてやっただけさ。あれからは、曲りくねっているだけで、コ火葬場からの谷を上りきるまで四五町のところを押しまくっ「僕は知らないね。僕はとっくに車の後押しはやめたからさ。

「車と一緒にいらっしゃらなかったのですか」

へきた時は、セムシの姿は見えなかったね」ガラガラ曲って忽ち見えなくなったよ。僕が三輪山の別れ径「車はすごい速力ですよ。ハズミがついていやがるからさ。

-58-

「どなたか内海さんを山で見かけた方はありませんでしたか」 答える者がなかった。

「土居さんが戻られた時、内海さんは戻っていましたか」

知らないよ。 ·いいえ、僕が一番さ。内海が二番目、それからあとはもう 僕は見張りをしているわけじゃないからな」

たのは宇津木さんだが、宇津木さんの方が時間の観念があり 「こいつは難問だ。僕が戻ったとき、 「あなたが帰られたときは何時でしたか、分りませんか」 初対面の御挨拶を交し

私も時間の観念がない方だから」 「七時ごろ、七時十分前ぐらい、そんなじゃなかったかしら。

そうだな」

「ほかの方は、皆さん御一緒でしたか」

ほかの方はだいぶおくれたようでしたな」 「私と一馬さんと和尚の一行が一とかたまりにその次です。

と神山東洋が答えた。そこで私が、

ました。これは論戦の気づまりによる一種の抒 情的御散歩と谷を登りつめたところで、丹後が別れて鉱泉部落の方へ行き にブラリブラリと論戦を交しながらのたくってきたですよ。 「左様。私と丹後と木ベエと小六と巨勢博士が一とかたまり

いうところだろうが、つづいて私が、同じ鉱泉部落へ薬を買

哲学的足どりで懐中電燈をピカピカやりながらやってこられ て戻ってきた。裏門で一馬にぶつかる、そこへ海老塚先生が にすれ違いましたがね。私は鉱泉宿で薬を買って、暗くなっ いに行きました。二町ぐらい進んだところで戻ってくる丹後

神山さんの御一行は一緒に戻られたのですね

んはいったん寺へ帰られた」 「左様です。途中で別れた者はおりません。 裏門で、

和尚さ

一馬がそれにつづいて、

三十分ほど本堂の前に待っていました。あきらめて戻ってく あって寺へ行った。いくら声をかけても答える者がないので ったのです。それでいったん戻りましたが、和尚さんに用が 「そうでした。ですから僕は和尚さんは寺にいるものだと思

ると裏門で矢代に会って、 んが来ておられたというわけです」 座敷へ来てみると、そこに和尚さ

間、誰かに会われましたか」

「なるほど分りました。それで歌川さんが草林寺におられる

「あそこは道から引っこんでおりますから、人ッ子一人見か

けません。つまり、僕にはアリバイがないわけです」

「丹後さんと矢代さんは各々単独で戻られた。そのほかの人

見さん、三宅さん、巨勢さんは御一緒ですね」

あげた。 「いいえ、僕が又、 単独です」と木ベエが冷めたい顔をふり

わけです」 通って、つまり内海の大八車が通ったという道の方を歩いた 「人見と巨勢さんはブナ林の径へ曲りましたが、僕は裏道を

「そのとき内海さんに会われたのですね」

の道は山の密林の間ばかり曲りくねって畑も田もないところ 「どう致しまして。全然、人ッ子一人見かけません。あっち

ですから、村の人の往来もなかったです」

そこへ海老塚医師がおくれて一人はいってきた。 お待ち致しておりました。お忙しいところお呼びだ

すが、 てして相済まぬ次第です。毎晩欠かさず当家へお見えの由で 今晩は急患がありましたか」

「馬鹿馬鹿しい。なぜ毎晩こなければならないのですか」

医師は腰を延ばすような構えをして、 横柄にギラリと目を

光らせた。そして、又、

「バカバカしい」と呟いた。

「海老塚さんが昨晩当家へ来られた時間は、 何時ごろでした

か

「そんな時間をなぜ覚えておく必要がありますか」

「病院を出られた時間はお分りでしょう」

「私は時計の番人じゃないです。鐘ツキ堂の堂守のほかの人

間は一々時計を見て生活するものではないです」

そう考えるのが自然だろうと思いますが、海老塚さんは、そ には、今は何時何分ごろだから、あそこへ着くと何時になる、 「しかしですな。一般に、我々がよそのウチを訪問する場合

うではありませんか」

塚先生。お分りか。警部の言われる通りだよ。人間がよその 「もしも、そうでなければ、いよいよ彼は気違いです。 海老

家へ行くために自分の家をでる時は、 必ず時間の意識がなけ

ればならぬものさ」

性的に執念深く、一つのことに深くこだわるタチであった。 には昨夜の記憶がまだあるのだろう。学究肌の木ベエは、 と、木ベエが突き刺すような冷めたさで言った。恐らく彼 女

診るのが職業だから、 「勝手に調べだすがいい。探偵はそれが職業さ。私は病人を それについては責任をもつ。 ほかのこ

とは知らん」

寺から来られた。海老塚さんは村の方から来られたのですね。 矢代さんは例の裏道、大八車の道をこられた。歌川さんは禅 「矢代さんと歌川さんは裏門で海老塚さんと一緒になられた。

そのときの時間は?」

中じゃ、 たんというところだから。そうじゃないかな。このへんの山 「まア、だいたい八時ごろでしょう。日がとっぷり暮れ 山にかくれて、日暮れが早いかも知れないな」 たと

私がそう言うと、警部は、

は ? \_ 川さん。歌川さんはいったん戻って又でかけられた。次に 七時か六時五十分ごろ。つぎに内海さん、次が神山さん、 「イヤ、分りました。じゃア、土居さんが一番に戻られて、

「僕と人見さん」と巨勢博士。

ね。御婦人方はどなたかその時間に外出なさいましたか」 た方もありますけれど、たぶん、 「私たちは全部そろって広間にいました。そこの調理場にい 「それから三宅さん。丹後さん。 揃っていたようですわ」 矢代さん。それで全部です

-60-

と宇津木秋子が答えた。

「揃ってと申しますと、どなたとどなた?」

私たちのところへ来て話をされたり、神山さんの奥様もそう でした。千草さまはこっちの部屋にはいらっしゃらなかった 「私と胡蝶さんはここに、あやかさまは調理場へ行かれたり、

と思います」

「そこで千草さんを最後に見た方は」

と、一座の中に加わっていた諸井看護婦がハッキリ答えた。

それは他の人々を威圧するような思い上った自信が籠ってい

す

るようであった。

そしてその一分前には私に一枚の紙片をお見せになりました」 「私はあの方が六時ごろ裏門から出て行かれる姿を見ました。

「その紙片を読みましたか」

ったそうに言いだした。 海さんは私に夢中なのよと、千草さんは得意の御様子でした」 本日、六時半より七時ごろ、三輪神社裏。委細面談の上。内 「その紙片は私が内海さんに頼まれてお渡ししたのでしたわ」 「読みました。不美人とセムシのランデブウ゚仕゚るべく候、 あやかさんが困ったような面目ないような顔付で、くすぐ

草さんのために詩をお作りではなかったのですわ」 たのですもの。千草さんはその詩のための存在でしたわ。千 る詩とかいうのを本当にイノチをこめて書くつもりでいらし ムシの密会などと仰言るだけですわ。あの方は醜婦にささげ ただ会いたいということを、チミモウリョウだの不美人とセ チミモウリョウの密会だなんて仰言ることがお好きなのよ。 たって、ありきたりの意味じゃありませんわ。反語ですのよ。 「内海さんはトンキョウな方なんですわ。ランデブウと云っ

「なぜ分るんだ。そんなことが」 と、ピカーが軽蔑しきった言葉を浴せた。

海の原稿しらべましたか」と、人見小六がきいた。 「いったい、その詩は書きだしていたのかい。警部さん、 内

すから。巨勢さん、その原稿はありましたか」 「さア、原稿は一応しらべましたが、私はその方の門外漢で

「ありました。然し、ただ題名が書いてあっただけのようで

をしない。

カングリ警部はそこで態度を改めて一座を見まわ

「昨晩は大変お賑かだったということでしたが」

を与える。 トリがこもっているという感じ、 この人は美人の天性というのか、 や肱や手の指にホータイしており、困りきった顔付であるが、に目を転じる。あやかさんは昨晩の負傷で、膝小僧や二の腕 ねエよとばかり、ソッポをむいた。そこで警部はあやかさん と、笑いを含んでピカーをジロリと見たが、ピカーは知ら すると警部の目はピタリと海老塚医師の上にとま どんな時でも一応どこかユ いつも冴え冴えとした印象

えているようだ。牙でもむきそうな感じである。 すぐ御帰りにならなかったのでしょう」 「私はまっすぐ帰りましたよ」海老塚の顔はまるで怒りに燃 「海老塚さんは昨夜は大変御立腹とのことですが、なぜまっ カングリ警

って、

とめて、 部はそんなことには無頓着、 海老塚の両手のホ ータイに目を

「ゆうべ、山径でころんだのです」

「その手のお怪我はどうなさったのですか」

昨夜当家をでられたのは九時半でしたね まっすぐ歩いて四時間半は時間がかかりすぎるようですな。 「海老塚さんは脚がお悪い御様子ですが、当家から病院まで、

ギラギラと大きな目を顔一パイ光らせて、 とは初耳であった。私は思わず耳をそばだてたが、海老塚は、 毎晩泊りこんでいた海老塚が、昨夜に限って帰宅 警部を睨んで返事 していた

「間の悪いめぐり合せで、昨夜にかぎって急患があった。午

前零時半です。病院から当家へ電話がきて、 が帰宅したのはそれから一時間半後の二時だそうですが、そ 殿へ海老塚さんを探しに行ったが、居なかった。海老塚さん 、諸井看護婦が釣

「僕は歩きつづけていたです」

けていらしたわけではないでしょうな」

の間、

海老塚さんは、

四時間半かかって帰宅の道を歩きつづ

海老塚は肩を張って、吐きすてるように言った。

手に怪我もした。 馴れな諸方の裏山道をさまよっていただけのことだ。だから れた空気を払い、僕自身をとりもどすために、やむを得ず不 はないだけのことだ。バカ者ども、 「ふん。僕は歩きつづけていた。然し、まっすぐ帰宅の道で フン。ここは犬の宿じゃないですか。フン、 ハレンチ漢どもの濁り汚

バカバカしい」 「だれかに会うとか、人を訪ねて話しを交すとか、そんなこ

とは、 「フン、この村に僕の訪問に値する何者がいるか、 なさらなかったのですか」 バカバカ

しい」

しめ、顔一パイの目の玉でギラギラと木ベエを睨んで、 「千草さんは昨夜九時半にはもう殺されていたからさ」 と木ベエがひやかした。海老塚は怒りにふるえ、拳を握り 息を

「奥様、昨夜は御災難でしたな。 カングリ警部はそのとき目をあやかさんに向けて、 お怪我はよろしいのですか」

のんだ。

ありがとうございます。左脚の膝がちょッと痛むだけ。 あ

あやかさんはニッコリと、

とはカスリ傷ですの」

く、蹴る、土居さんは十二時ごろまで、それをつづけていた のですね」 「奥様が寝室へ逃げこむ、 土居さんが追っかける、 扉をたた

えて、 ピカーは平然たる顔で、 恐れげもなく警部をハッキリ見す

後不覚になるじゃないか。 がねえのかな。グデングデンに酔っぱらえば、 オレの昨夜のことは、ほかの連中 誰だって、前

「オレはよく覚えていないのさ。警部さんは虎になった覚え

がオレ以上たしかに知ってやがるに極ってるさ」 警部はうなずいて、

したね」 「人が近づくと掴みかかったそうですが、一馬さん、そうで

には近づかざるを得ませんから。すると、襟首をつかんで、 「わざと近づいたわけではありませんが、僕の寝室へは いる

スリぬけて、寝室へ逃げこみました。巨勢さんなども掴みか 突きとばされた、その次には蹴とばされた、ようやくそれを

かられた口でしたね

「僕も寝室が近いもんで。扉から顔をだしてのぞいても、牙

をむいて、手をふりあげて、叫びをあげて、 たね。はじめの一時間ほどでしょう」

すると神山東洋がうなずいて、

をついて扉に背をもたせて、 パレな武者振りでしたなア。 ンたる眼光、仁王様のごとく怒鳴りたてていましたな。アッ 「左様、十一時ごろまでは、 + 扉の前. かつ歌い、 時ごろからは廊下に尻もち に立ちは かつ喚いておられま だかり、ランラ

-62-

せた背中がズリ落ちようとしているところでしたよ」て、のぞいてみたら、土居画伯はまさに居眠りつつ扉へもたをつげたのが、零時十八分でした。そのときソッと扉をあけんで読書していましたよ。土居さんの怒鳴り声が衰えて終りしたな。私は見かけによらぬ読書家ですから、昨夜も寝ころ

カングリ警部はうなずいた。

であっぱ、 、さなからスがいたそうな負付で、てれていたいたですが、土居さん、どなたが出入したか、話していただけませんか」 土居さん、どなたが出入したか、話していまの寝室の扉は、うまいぐあいに廊下を見通していますか 奥様の寝室の扉は、うまいぐあいに廊下を見通していますか 「神山さんは弁護士の御職業柄、カンドコロに時間の注意が

が、 いささかクスグッたそうな顔付で、てれていた

いてから後は、もうみんな寝てしまったのか、一人も出入りえていないのでね。然しなんだね、扉にもたれて、尻もちつたり追いかけたりしたかも知れないけれど、どうも、よく覚「どうもね、それは拙者は昨夜人の出入のたびに怒鳴りつけ

ピカーは頭をかいて、「土居さん御自身は扉の前から一度も離れませんでしたか」彼は考えこんだが、思いだせない様子であった。

がなかったようだな。

待てよ」

よいから、「小便ぐらいに行ったかも知れねえなア。どうも全然記憶が

神山東洋がキッパリ言いきった。「イヤ、絶対に扉の前から動きません」

尻めに悠々と眠ってしまわれたわけはないでしょうからな」 たらハッキリしやしませんか。 たことがなかったからです。それは誰よりも奥様におききし 「なぜなら、同じ位置で怒鳴りたてている声が五秒ととぎれ あやかさんはその言葉を真顔でうけて、 まさか奥様は虎のホ ーコーを

ましたのよ。日頃の不精のおかげのようなものでしたわ」できるという目安がついておりましたから。ですから、幸いじこみ放しておるものですから、とっさに鍵をかけることができるという目安がついておりましたから。ですから、幸いけましたが、昨夜に限って私の寝室へかけこみましたの。ないがましたが、昨夜に限って私の寝室へかけこみましたの。ないができるという目安がついておりませんでしたわ。私原の前で虎の叫び声がとぎれた時はありませんでしたわ。私「ええ、私は全部覚えております。十二時すぎるまで、私の

「犯人は窓からはいったのではないですかな」そのとき、神山東洋がきいた。

とも犯人は酔っ払いの心理を承知の上で悠々と仕事をしたも人殺しにでかけるワケにゃ行きませんでしょうからな。それ在土居さんは記憶がないと仰言るにしても、それを当にして「土居画伯があそこにガンバッていたんじゃア、よしんば現「なぜ、そう思いますか」

「仰言る通りかも知れません」のでしょうかな」

できたが、犯人は外から来た形跡はなかった。少くとも部屋を見せることが全然ない。私は然し巨勢博士からきくことがとカングリ警部は却々ねれた人物で、我々に捜査のシッポ

の窓からは来ていなかった。

易いようなものであるが、それがないので、素人探偵のとり理の足跡を残しているわけで、私のような小説書きには御しむしろ手掛りがないのであった。細工を施すほど、むしろ心細工を弄することが全然なくて、変な小細工を施さないだけ、この犯人は、窓から来たか、扉から来たか、そういう点に

きりだした。 以上の質問が終ったのちに、カングリ警部は狙いの本筋をつく余地がないのであった。

その平素の淳。良 その平素の淳。良な生活にも拘らず、一応のケンギをませとであります。かかる場合に同一邸宅の居住者である皆様 り推察致しまして、 様にお願い致しますが、皆様方の寝室と所持品を改めさせて 反証を示していただきたいのであります」 正な良識に訴えて御協力を仰ぎ、我々の捜査に皆様の有力な のはその為ですが、 るのであります。私どもが皆様方の寝室と所持品を改めます クするか、 いと思わ ランに申上げますが、 る皆様への敬意と致しまして、 いただきたいのです。それに就きましては、 れ得ないことは、 て四人の殺人が行われたということは、日本に於て空前 「さて、皆さん、御承知の如く、一軒の家で、三日にわたっ れますから、 何らかの方法を施さざるを得ないことが推定され 法治国の合理だろうと思います。 犯人の着衣に血コンの附着しない筈は 決して強制は 犯人は着衣をイントクするか、 つまり、内海さんの凄惨な出血情況よ 当方の捜査の主点をザックバ 致しません。 一応のケンギをまぬが 最高の文化人た ただ皆様の公 率直に皆 センタ が、 な

あくまで拒否した者は海老塚医師が一人であった。穏かからざる次第で、ただならぬ気配がうごいたが、結局、

の余地がなかった。の余地がなかった。とればり、あやかさんはり型で、問題のもの、即ち内海はB型であり、あやかさんはり型で、問題てボロボロにさけた衣服で、ついてる血液はあやかさん自身たのは、あやかさんのもの一つ、これはピカーにふり廻され然し泰山鳴動の例にもれず、結局、血の附いた衣服の現れ

こなかった。 我々のトランクの底までみんな改めたが、例の鍵も現れて

十二 セムシ詩人はなぜ殺されたか

あった。
オチオチねむられず、もっぱら昼寝で間に合せている様子で日本間のピカーほどの奴まで御多聞にもれず、鍵がないからつけたり、苦心サンタン、いささか神経衰弱の気味であるが、扉に鍵をかけただけではまだ足らず、紐でまいて寝台に結び連続三夜の殺人事件には大の男の我々もふるえあがって、

調査に同行すると、チを持ち五日にわたって同じ道を往復していたが、一日彼の非常に綿密にしらべているのを知っていた。ストップウォッ私は巨勢博士が火葬場から裏門までの道を時間をはかって

に、こんな小径があるんですよ」「普通に歩いて四十分から四十五分かかるんですがね、これ

る谷川沿いから、一尺ぐらいの小径が谷底へ降りている。ち火葬場から裏門までの行程のちょうど真ん中ごろと思われ

何

がさて、

別して御歴々の御婦人方、所持品改めときては

-64

ぬ状態ながら、密林の奥へ曲りこんで行く。ると、石を伝って谷を渡り、又さらに径のコン跡も定かならょッと見ると径とは気がつかないような細さで、谷底へ降り

の下に三輪神社がある。私たちは三輪神社の横手へ現れていくと、私は思わず、声をのんで凝視せざるを得なかった。目巨勢博士に導かれて雑草を分けながらこの小径を伝って行

あろう。

私は思わず叫んだ。

るのであった。

だろう」でまかして来たかも知れぬ。だから内海を殺したのわぬ顔、ごまかして来たかも知れぬ。だから内海を殺したのやりすごして帰ったのだな。いや、いや。内海に会って何くを殺したのだ。殺しておいて、別の道からやってくる内海を「なるほど、分った。犯人はこの道から先廻りして千草さん

せんか」「それでしたら、内海さんもここで殺す方が安全じゃありま

巨勢博士はニヤニヤした。

たく、ややこしい話でさ」 日後さんも先生も疑われて然るべきことになりまさア。まっかく、こんな小径があってみると、失礼ですが、三宅さんも「犯人がこの径を来たかどうかは分りませんや。然し、とも

普通に歩いて火葬場から裏門まで四十分から四十五分とし

て内海が戻る。アイビキの時間というものが殆どないような六時五十分か七時ごろ帰着して、それから五分か十分おくれには二十五分か三十分はかかるかも知れないから、ピカーがからなかったかも知れない。内海の足で三輪神社までの往復てみると、大八車はなかば小走りにきたのだから三十分とか

とおくれて戻る筈で、又、千草さんと一緒に戻ってくる筈でて、戻ってきたに相違ない。千草さんに会っておれば、もっえないので、内海は千草さんが来てくれぬものとカン違いしものである。すでに千草さんは殺されていた。だから姿が見

ないのですよ」「それを探しているのですが、千草さんの所持品には見当ら「諸井看護婦が読まされたというアイビキの紙はあるのかい」

はモルヒネがイントクされているのであった。 せいいい ちょう ところがあり、実は多門老人がモヒ中毒で、この屋敷にされていたというが、モルヒネは海老塚医院も秘密に所蔵しられの芝居でなければ、諸井看護婦のトリックだと思っていた。 ところがあり、まことにキザな理知ヅラである。あやかさん ところがあり、まことにキザな理知ヅラである。思いあがった 私は諸井という女が虫が好かないのである。思いあがった

に、諸井看護婦が居合わしたものだから、私はわざとイヤガラセ諸井看護婦が居合わしたものだから、私はわざとイヤガラセたまたま事件の話にうつった時、ちょうどビタミンの注射にある日、巨勢博士と私は多門老人の書斎にまねかれた。談

とになる。然し、又、これを逆に、あんまり疑られ易い手掛うなことだから、そんなバカな手口を残す筈はないというこ偵小説の流儀で云うと、看護婦にモルヒネ、あんまり有りそと水差にモルヒネが投入されていたそうだが、これを近代探最後に会われた人であり、おまけに珠緒さんの枕元のコップ「諸井さんは千草さんの生前もそうだが珠緒さんの生前にも

りを残すから却って疑られない、その急所を見込んで、わざ 諸井さんは、知性の勝ちすぎたお方だからね。失礼ながら、 とトリックを弄するという細工も成立つじゃありませんか。

三文文士は色々とカングッたり致しますよ」 あなたのように深遠な御婦人ともなると、謎のように、我々

拶代りに、お前さんが犯人じゃないかね、といっそ言いきっ てしまう方が清潔のような状態になっているのであった。 失敬千万な言い方であるが、近頃この家の客人どもは、挨

諸井看護婦は私をジロリと見て、

らっしゃいましたわね」 「矢代さんは火葬場から、 いっとうおそく、一人で戻ってい

が御立派だなア。失礼だが、 いかな」 「御説の通りですよ。ところで、諸井さんは、ずいぶん体格 小男なみの腕力がおありじゃな

巨勢博士はニヤニヤしながらきいていたが、

せんなア」 んと内海さんの場合は、それに該当するようなものがありま なんとなく思わせぶりな何かが残してあるのですが、千草さ 「王仁さんの場合は、靴のスズ、珠緒さんの場合はモルヒネ、

多門老人がききとがめて、

·いけませんや、そんな」と巨勢博士はてれて打消した。 「なるほど、それは面白い。さすがに一つの着眼じゃ」

え、矢代先生、文学もそうじゃないですか」 や。当人がいい気になるだけ、救われがたいもんでさア。ね 「着眼の妙という奴ほど、真相を偽り易いものはありません

「それは政治もそんなものさ。然し、巨勢さん、これは非常

だね。たぶん、あの日でなければならなかった謎があるに相 危険の際に、殺さなければならなかった、そこに謎があるの 内海さんの場合じゃね。土居さんが目を光らせていたという にメンミツに計画された犯罪でしょうな。ただ私が疑るのは、

違ない。 その謎がとけると、事件の一角に糸口がつく、そん

「その謎をどんな風にお考えになっていますか」

なものじゃありませんかな」

多門老人は答えなかった。そこで私

犯人を疑ることを知らないのじゃありませんか。だから、そ 草さんが殺されたという事実については知らないから、まだ の夜のうちに内海の息の根をとめることが是が非でも必要だ 「それはたぶん、内海は犯人を見たからでしょう。然し、千

「危急存亡じゃね。それにしても危い橋を渡ったものじゃ」 そのとき、巨勢博士が奇妙なことを言った。

った」

「一番危くなかったのかも知れませんや」

「ピカーさんが下の日本間にいると、内海さんを殺すのは、 「なぜ?」巨勢博士はニヤニヤしながら、

ちょッと、やっかいですからでさア\_

ことで何かを言いだしはしなかった。

多門老人はギラリと目を光らせて博士を見たが、

別にその

聖処女も嘘がお上手

さますと、 一週間は何事もなくすぎて、七月二十六日、午睡から目を 加代子さんが京子を訪ねて、私たちの部屋へ現れ

しで、加代子さんも今日は珍しくこっちの食卓へお客にくるたりしていたが、洋館の方の調理場では、夕食の支度に大忙この日は一馬の誕生日で、母屋の方の台所でも赤飯をたい

ことになっていた。

加代子さんは、まったくローたけき聖処女であった。然し があるのであった。 があるのであった。 があるから特別で、あやかさんの話になると、そ が見えないのである。そういう魔性の妖しさは、同性の敵 が見えないのである。そういう魔性の妖しさは、同性の敵 が見えないのである。そういう魔性の妖しさは、同性の敵 がらに、妙に娘らしい人で、結婚している女のよ なるのであった。 なるのであった。 がしないのであった。然し

実感を与えられる始末であった。ヤキモチヤキの美しい鬼、そんなものも有るんだなアという清純な生娘でも、やっぱり聞き手に苦しい気持を与えるから、らしく、相手を引きたてるようなもので、加代子さんほどの激しすぎる憎悪や嫉妬というものは、却って当人をみすぼ

ものだから、そうでないことを知っている私たちには、神経とは関係があったということを頑固なまでにきめこんでいるんが犯人だという風に思い決していたり、王仁とあやかさん屋靴の鈴が一つころがっていたというところから、あやかさところがあり、それが予言者的な形となって現れていた。かれ代子さんは、やっぱり病身のせいであろうが、宗教的な

「然し、加代子さん、それは違いますよ。王仁の場合には、だけがひびきすぎて扱いにくいところがある。

のですから」にねむっており、一馬は夜明けごろまで書きものをしていたにねむっており、一馬は夜明けごろまで書きものをしていたあやかさん一人だけがアリバイがあるのです。一馬のベッド

「お兄さまはお姉さまをかばっていらっしゃるのですわ。

お

がっとこういうぐあいであった。あやかさんの話になると、姉さまに完全にだまされていらっしゃるのですもの」

まったく苛々するのであった。ざッとこういうぐあいであった。あやかさんの話に

けれども、そんな話の途中に、偶然一馬とあやかさんが私

を訪ねてやってきた。

「あら、加代子さん、珍らしい」

物のようだから、そッと坐ってらして下さるだけで、自然に「今晩の食卓はたのしいわ。加代子さんは香気の高い高山植あやかさんは目をクリクリ、花粉がとびたつように喜んで、

コリして、な素振りを示すかと思うと、そうじゃない。嬉しそうにニッか用代子さんはそのお世辞に反撥をあらわして、うるさそう

花のありかが皆様にしみ渡るでしょう」

まるでシンからあやかさんの花やかさに見とれるようにウ「お姉さまこそ花束のようにかぐわしいのに」

ットリと言うのであった。

特別ひどいと私は思った。家、処世家なのである。それにしても、加代子さんの場合は、一本の潔癖そのものの娘まで、みんな天性のウソツキ、外交私はまさしく呆気にとられた。女というものは、こんな生

れば女はみんなこうであるが、我々男はめったに女の心底に 子さんの心底を知らされているわけなのだろう。心底を見せ またま京子と一緒のおかげで、私だけが、外交家でない加 のだから、いつも外交家的に生きておるのが自然であり、 子が一人、他の何人にもうちとけた思いをいだいていない思うに加代子さんは別して孤独な人であり、友達といえば

た

代

もなく、落付きはらっていて、 ふれる機会にめぐまれていないだけかも知れない。 馬は案外にも立場に窮したような困ったところはミジン

しているよ」

「論語の先生は正気なのかい」

さんのお薬はのまなければいけないよ」 ないそうじゃないか。 きなかったが、近ごろは海老塚さんの薬までイヤがって飲ま たそうじゃない 「加代子はもうからだはいいのかい。先日まで微熱がつづい か。こんな事件つづきで見舞いもゆっ 神経質すぎちゃ、 いけないね。 くり お医者 で

加代子さんは淋しそうな顔をあげて、

「それだよ。 「ええ、でも、 それがいけないことなんだ。 私、長生きしようとは思わないのですもの」 ねえ、 京子さん、

のかも知れないな」

そうでしょう

ことを言うから、こうアッ 明るい希望をおもちになると、 ってますわ」 「ええ、ほんとに、早く死ぬなんて、つまらないことですわ。 独断そのものである。いともカンタンに病気が治るような サリ 病気なんか、すぐ治るにきま いきられても、 当の病

馬は私に向き直って、

ちかごろ、

困ったものだね。

例の論

ついて行かれぬ気持であろう。

て貰うのが皆さんのためだ、奥田という人は天才であり聖人 塚さんの紹介状というものがバカバカしいもので、 が来合していたから、頼んで追い返してもらったがね。 がよろしいか、というのだよ。ちょうど八丁鼻の荒広介刑事 持参して先刻やってきたのだけれど、僕のところの客人方に 語研究会の奥田利根吉郎という先生が海老塚さんの紹介状を である、 度論語を講じたい、自分の方から出張するが、 というような常識はずれの文面だから、 いつが都合 頭がどうか 一席講じ 海老

なものだろう」 「狂信の徒はみんな要するに狂信だから狂人にきまったよう

場させてやがる。 見小六の近作なんかも、 丹後の小説なんかに出没しそうな人物だから、先生、 面白がって色々おだてたり冷やかしたりすることだろう。 ·愛嬌に一席講じて貰うのも面白そうじゃないか。さしず 戦争このかた狂人が主役を演じる御時世な 終戦以来は変人奇人狂人ばっかり登 め

ウと論語先生の抱き合せみたいなものじゃないか。実はね、 八丁鼻先生が僕たちに何かききたいことがあるのだそうだ」 ったくだね。坂口安吾という先生の小説なぞも、 「ヘソだしレビュウも論語先生も背中合せの萩と月かね。 たちは 代子さんと京子を残 べして、 部屋をでた。八丁鼻 ま

手伝いに調理場へ立去った。 は一馬の部屋に私たちを待っていた。 八丁鼻はアタピン女史と一緒であった。 あやかさんは夕食

のお

八丁鼻は武骨だけれども却々礼儀正しいところがあって、「御足労、あいすみません」

ペコンと一つ頭を下げた。(八丁鼻は武骨だけれども却々礼儀正しいところがあって)

ですが、望月王仁さんは敵がたくさんあったそうですね」「今日はひとつ、文壇の事情についてお話をうかがいたい

の

「どんな敵ですか」

々が喜びますか」(文学上の敵ですよ。望月さんがなくなられると、どんな方

大喜びです」されていましたよ。無礼粗雑な奴ですからな。もとより私も「先ず誰ひとり喜ばぬ者はありませんな。作家仲間に毛嫌い

「文士はみんなヤキモチヤキでしょう」

「あなたは自信がないんでしょう。才能が足りないからよ。とアタピン女史がキンキン喚くように突撃してきた。

だからヤキモチヤキなのね。あさましい」

よ。私たちは、たしかに頭が悪いんだな」「アタマヘピンとこないからね。まったく不幸せの至りです

「望月さんがなくなると、あなたの原稿の売れ口がますのね」

「御説の通りです」

なことは極めて有りそうなことじゃありませんか。もっとも、「それは考えられますよ。いろいろの可能性の中でも、そんすな、人を殺すということが考えられますか」「ところで、矢代さん、文学上の、つまり才能の嫉妬からで

能がますワケじゃアないからですな。文士の嫉妬は、名声のも知れません。ひとつには、人を殺したからって、自分の才古今東西、案外、実際には、そんな殺人は行われていないか

らないのが自然かも知れません」なるワケでもないとすりゃ、案外、こんな殺人はめったに起問題じゃなく、才能の問題だから、殺して自分の才能がどう

これは私の邪推でしょうか」 「なるほど、まったくそうかも知れません。何芸によらず、 らな。なるほど、殺したところで、自分の才能に変りがなけ もつづいて、皆様の御知り合いの方々が四人もつづいて殺さ 生活していらっしゃる。それも一度の事件じゃなしに、三日 生活していらっしゃる。それも一度の事件じゃなしに、三日 れる。別に岡ッ引根性という奴じゃなくとも、誰しも心に殺さ れる。別に岡ッ引根性という奴じゃなくとも、誰しも心ですか 芸の嫉妬で人を殺す、有りそうで、殆どきかないものですか これは私の邪推でしょうか」

を得ないでしょうな」「それはまア、誰しもいくらか素人探偵的な気持にならざる!

ようか、全く冗談半分、慰みでよろしいのですが」 矢代さんから冗談のように持ちだしていただく。いかがでしいただく。私どもが主宰しますと角が立ちますから、これをしさわりのない方法によってですな。たとえば、慰み半分でしさわりのない方法によってですな。たとえば、慰み半分でいたださんの秘密の意中をもらしていただきたい。勿論さ「いや、ごもっともです。人間の自然の気持が当然そういう

恐らく、その結果として、誰が犯人だという結論を持ってる人探偵気どりで各々何かとカングルところもあるでしょうが、「それは然し、結局つまらぬことですよ。だいたい我々が素

者はいないだろうと思いますね。私自身もとよりそうですよ。

犯人は誰かときかれたって、 とても答える推理の根拠がない

ですからな

もあるかも知れません。それぞれ自分勝手の方式で、 なくとも、 案でよろしいではありませんか。 「もとより、 誰がくさいとか怪しいとか、漠然と思っている方 それで結構ですよ。 分らぬ人は分らぬという答 あるいは又、 明確に 秘密の は 分ら

い法は・ 宰しておやりなさい。 るばかりのことですよ。アタピンさんの御司会などが、 ことじゃないのですから、あなた方は御自分で責任を持たな 疑惑をきかせていただければ有難いことですな 「私は然しその主宰者はごめんですよ。堂々とあなた方が主 ありませんよ。人を手先に使うなんて益々品が悪くな 角が立つといったって、元々品のよ 大変 い

面白かろうじゃありませんか」

ようなもんじゃないの。 も思っているなら、 できてるようなもんじゃないの。それで自分は品がよいとで せんか。 ですか。 コノコ遊びにくる心臓は毛が生えてるどころか、熊の毛皮で 「仰言いましたわね。品が良いとか、 あなたは歌川さんのオメカケとできた人じゃあ おまけにそのオメカケをつれて元の主人の 警察のやることなんかは、 身の程を知るがいいよ」 悪いとか、 神 御自分は 様 の審判 お宅へノ りま 何 の

さは消. しとばざるを得ないような大変なことになった。 犯人当てっこの投票遊戯などという慰み半分の 悠長

大変な御見幕である。

## 十四四 聖処女と最後

ような男であった。 ってきた。頬骨がとびだして、蒼ざめて、栄養不良の師が、背のヒョロ高い三十ぐらいの丸坊主の男をつれ 七時を告げた。 はチビリチビリとウイスキー 我々がまだ食卓につかず、 まさしくこのとき、 みんな広間に集って、 など嘗めているとき、 この部屋の鳩時計 栄養不良の見本の 海老塚医 飲み助組 てはい

海老塚医師がもったいぶった身振りで、

論語の研究家と申しますよりも、最も真摯誠実な論語 家であり、 「皆さん、 ここに奥田利根吉郎先生を御紹介申し上げます。 苦行者であり、 聖者であります」 の実践

の面持で一同を見すくめながら、 聖人は蒼ざめた顔をビリビリとふるわせながら、 何 か 必死

自体という奴なんだ。 るかい。 げもなく現れやがって、 猿は引っこめ。酒の「肴にもならねえぞ」 「オイオイ、それは論語の言葉じゃないぜ。 人はパンのためにのみ生きるものではないと申しますが」 気違い猿め。 レデー やせても枯れても芸術家は生一本の 和洋セッチュウの安説法てえのがあ メードと違うんだから、 ノコノコと怖れ 物

とピカーが腹を立てて、 青筋をたてて、 睨みつけた。

集りに君自身が顔をだすさえ無役、 「まったく不愉快千万じゃないか。 人見小六がそれをひきとって、 不快であるというのに、 おい、海老塚君、

我々の

我々の同意もまたず、

未知の人をつれてくるとは何事だい。

-70-

が、 我々は君の家の客人ではないのだぜ。論語は礼をといている ること甚しいじゃないか」 論語の先生、 そもそも出現の方法からして、 論語を裏切

馬も立腹して

を許しませんから、連れ去って下さい。あなたも当分この集 りには出席なさらぬ方がよろしいようです」 「海老塚さん、この集りの主人である私が、その人物の侵入

ビクふるわせながら、しばらく言葉を失っていたが、皮肉屋 の丹後が私の予想通りに、ゆっくりと、 はからざる一馬の語気に虚をつかれて、海老塚は唇をビク 尤 もらしい静かな声

礼儀などという常識論にこだわることはないさ。礼の常識を うのは、芸能人の心構に反するところじゃないか」 よ。いまだ真価を究めざるうちに、 わきまえざるところに、この聖人の偉さがあるかも知れ 「論語聖人の御説法なんて、東京じゃアきけないことだね。 向うみずに追っ払うとい な い

きがあらアな」 モノなんだ。王仁とお前とじゃアお月様とスッポン以上の開 言ってやがる。だからお前の文学は、いつまでたってもニセ 自分の好き嫌いも分らずに、新らしそうな型でばっかり物を 「いい加減にしろ。お前は型通りのことしか言えない奴だな。 ピカーは突ッ立ち上って、 聖人の肩へ両手をかけて、グル

当局に訴えずにカンベンしてあげるから、ドロンと消えて、 リと後向きに廻して、 「サア、歩いた。 家宅侵入罪という法律にも反しているよ。

なくなりなさい。

サア、オイチ、ニ、オイチ、

仕にでている。

母屋を廻って広間の方から食堂へはいってきたが、

彼の席の 海老塚が

神山東洋の奥さん木曾乃と女中の八重が、いつもの例で給 食事のコースが半ばをすぎたころ、

れてしまった。海老塚もそのあとを追って、 ず、ふらふらと押しだされて、食堂の扉から外へ突きとばさ 劣らざる豪傑の出現に、益々ただもう蒼ざめて二の句がつげ 医院のお世話になったこともあり、見るからに、王仁に貫禄 食堂の扉から一

この聖人は昔は王仁にひとたまりもなくノバされて海老塚

緒に去って見えなくなった。 食卓の用意ができた。

子で、彼の話にまともにあれかれ話を交している様が私たち 自分が坐った。おかげで京子は加代子さんから離れてしまっ 物ごとの四方山ばなしをきかせて頂こうじゃありませんか」 くどいたり致しませんから。あなたの深い静かな心に映った はね、あなたのような心の正しい深いお方は、からかったり、 通った感じだなア。丹後みたいなニセモノに比べると、もの 代子さん。いい名前だな、 ニセモノ芸術家には、イヤな思いをさせられるな。本人はい には異様であるが、然し生娘というものは、こういう男にか た。然し、加代子さんはなんとなくピカーがお気に召した様 の本当の姿を見とどけている深さがうかがわれるな。さア、 かると、手もなく手なずけられるものかも知れない。 お嬢さん、私はあなたの隣席へ坐らせていただきますよ。私 い気になっていやがるから、鼻もちならないこと。ねえ、 「まったく、気違い医者にも手こずるけれども、丹後という と、ピカーは、 加代子さんに椅子をすすめて、その隣りへ それにあなたはいかにも心の筋が 加

設けがないので、木曾乃さんが、

と隅から椅子を動かそうとすると、一馬がいつになく気色「お料理は用意してありますのよ。今、先生のお席を」

ここのことのです。あなたはそれでもこの集りにこうして出席「海老塚さん、この集りの方々とあなたとは気質が違いすぎばんだ顔をあげて、

ら身をひいていただきたいのです。お食事は母屋の方でおとえられるばかりのようですから、ただ今かぎり、この集りかかも知れませんが、ほかの方々は、あなたの出席に不快を覚なさるところを見ると、どこかお気に召していらっしゃるの

り下さい」

こいて、思いをいだいて忍んでいるギセイ者だよ」とピカーは胸をた違っているが、これは警官の禁足令によって、好ましからぬ「ヒヤヒヤ。まさしく、そうでなければならぬ。私も気質が

「いえ、ピカーさんの純情は誰方にもまして私が認めておりた。失礼ながら、女流流行作家宇津木秋子さんといえども、おなどという女は、孔雀の羽をつけた何んとかというアレでがなどという女は、孔雀の羽をつけた何んとかというアレで「まったく加代子さんの美しさ静かさ深さに比べると、あや「まったく加代子さんの美しさ静かさ深さに比べると、あや

と、宇津木さんが、赤らみながら、目にいっぱい媚を湛えますのよ」

きた。私も立って巨勢博士をよび、あやかさんの案内で、

あやかさんから一馬に話したものと見えて、一馬も立って

あなた、見て下さる」

当に私なんかは女のクズのようなものですから」「加代子さんなら、どんなに讃美なさってもよろしいわ。本

て言った。

ような青鞜詩人でいらせられる」いるのですな。寛仁大度、あなたは、まったく、ワタツミのに就ては、かねて知りつくしているのですよ。そこに甘えて「いや、秋子さん、相すみません。あなたの公正寛大な気質「いや、秋子さん、相すみません。あなたの公正寛大な気質

一言、ピカーさんをやりこめることを言って下さるのでしょ「こんなとき、せめて内海さんが生きてらっしゃると、何か

うに、ほんとに、にくらしい方ね」

というような事を言いやしませんか」と、人見小六が秋子さ「内海だったら、さしずめ、にくらしいネとは、人間的だな、

んの方を冷かした。

「人肉的というのさ」

「オレは女房を肉慾的にさげすむ御仁は軽蔑するな」と木ベエも不興げな顔を女房の反対側にそむけて言った。

とピカーはすましたものだ。

を人が隠れる姿が見えたと仰言るのよ。なんだか、怖いから、と仰言って、私も一緒に行ってあげたの。そしたら、庭の奥、かかさまと御不浄へ行ってきたのよ、一人じゃ怖いからささやいていたが、二人で立って食堂を出て行った。そのとき、あやかさんが立って隣席の京子に何かヒソヒソ

-72-

があるから、誰何してみると、ヨミスギ先生である。当然であった。すると、廊下の外、母屋の表座敷の方に人影内海の惨殺された隣りだから、御婦人連がそこを避けるのは屋と洋館をつなぐ廊下の便所へ行った。洋館の階下の便所は

「あら、刑事さんでしたの」

「ハア、ちょッとブラブラ何となく警戒致しておるのです」

「毎日ですか」と一馬がきくと、

れとなく警戒致しておりますよ」「そうですよ。あなた方が寝しずまってからも、私たちはそ

庭の滝の上の方にも、どなたか警戒していらっしゃる?」「じゃア、今、庭の奥の繁みへ隠れたのも刑事さんかしら。

鼻でも、いるのかな。いや、八丁鼻はほかの仕事がある筈だ「さア、どうですか。別に打ち合せてはおりませんが、八丁原の流の「クラトキーとなりだい」でしょう。

あやかさんはホッと安堵の様子であった。私と一馬は立っが、私がひとつ見廻ってきましょう」

のとき、コーヒーがくばられていた。いに木ベエと神山東洋が立って、用をたして戻ってきた。そロでたものだから、それにひかされたらしく、私と入れちがたついでに用をたして、私が先に戻ってきた。みんなゾロゾ

ピカーは茶碗を手にとり、なで廻し、ひねくり廻して、(八重がピカーのところへコーヒーをはこんで卓上へおくと、

ジロリと八重をにらむと、

「畜生め、相変らずかけた茶碗を廻しやがるな」

さの」
「お前さんが暴れてコーヒー茶碗をかいただから、自業自得

八重はピカーを好まぬらしい。

もっとかけているもの」「アレ、加代さまに、あれを上げればよかった。こっちが、

のである。 先日、ピカーが暴れたとき、卓がひっくりかえってコーヒ 先日、ピカーが暴れたとき、卓がひっくりかえってコーヒ 先日、ピカーが暴れたとき、卓がひっくりかえってコーヒ 先日、ピカーが暴れたとき、卓がひっくりかえってコーヒ 先日、ピカーが暴れたとき、卓がひっくりかえってコーヒ

こっちはいくらかカケ目が少いやね」「じゃア、加代子さんには、こっちの方を差上げましょう。

加代子さんはコーヒーをかきまぜて、一口二口のんだが、と、ピカーは加代子さんとコーヒーをとりかえた。

きながら眺めているうちに、茶碗を落して、にわかに、立ちなんとなく異様な顔付で、いぶかしそうに、ソッと茶碗を置

上ると、大きく目を見ひらき、胸をかきむしって、

のめるよ

らズルズルと床の上へ沈み落ちるばかりであった。気にとられて、抱き起そうとした時には、ピカーの腕の中かうに卓の上に四つ這いになり、倒れてしまった。ピカーが呆

をあげて、ピカーは加代子さんを抱き、ゆすり乍ら阿修羅のような顔・ピカーは加代子さんを抱き、ゆすり乍ら阿修羅のような顔・ジブリンリと匠のゴベジみ落ちるにだった。

をよべ。分らないのか。畜生め。やい、てめえら、何をボン「オイ、医者をよべ。何をグズグズしているか。早く、医者

ヤリ。オイ、医者をよべと云ったら。バカヤローめが」

外にもすぐ現れて、 京子と一馬がとんで行ってカイホーする、 一二分、脈をとると、すぐ、首をふって 海老塚医師は意

た。 そのとき、 錯乱した破れ鐘のようなピカーの声がとどろい

立上った。

代子さんは毒殺されたぞ。 「動くな。 外へ出るな。テーブルの上のものを動かすな。 オレの身代りに殺されたんだ。 加

生 ! のは加代子さんだ。椅子につけ。 オレに毒をもりやがったバカヤロー。みろ! 元の位置につけ」 死んだ

る。 がれていた。彼は憤怒に亢奮して、肩ではげしく息をしてい ピカーの狂暴な目はランランと燃えて、あやかさんにそそ

そのとき、 下枝さんが戸惑ったように扉をあけて現れ て、

「海老塚先生はいらっしゃいますか」

海老塚は顔をあげて、 訝しげに振向いた。 神山東洋が大き

「おりますよ」と答えると、

な声で、

「すぐ来ていただきたいのですけど。旦那様の御様子が変で」 そう云いながら、倒れている加代子さんに目をとめて、

ある。

神山東洋の大きな声が弔(鐘のように無気味にとどろいた。う少しで失神しそうに、こらえている様子であった。

附記 小説は、 伊東の住人尾崎士郎先生、訪客に告げて曰く、坂口の探偵 ありゃキミ、 犯人は「私」にきまってるじゃないか。 坂

> れ。 犯人はアレだ、「私」だよ、ウン、もう、 口安吾の小説はいつも「私」が悪者にきまってらア。だから、ハ、 分った。オイ、 酒をく

三鷹の住人太宰治先生、雑誌記者に語って曰く、犯人はまだ出

をだす、そいつだよ。きまってるんだ。 て来やしねえ。最後の回に出てくる。 たった一度、 最後の回にたった一度、 なにく わぬ

何くわぬ顔のヤツ。オバサン、ビール。じゃんじゃん、 この両探偵は作者の挑戦状を受けるだけの素質がない。 たのむ。 目り

ョウゼンだから、 細説は略す。

最も勇敢無類なのが、 九州の四丁鼻先生。 彼は遥々上京のつ

「いいですか、坂口さん、僕が今、犯人を当てきると、あとが書 で拙宅へ現れ、

い

うていいですか」 けなくなるです。 それでも、 あなた、 僕の言葉、 ききますか。 言

をたてる、それを全然別の人間がひそかに実行する。やれやれ 前ぶれは大袈裟なものだが、何のことはない。ある人間が筋

鼻先生と云い、九州人は多かれ少かれアタピンの傾向で、 それは「Yの惨劇」の手口じゃないか。アタピン女史と云い四

ソの探偵小説ですぜ。坂口さん、 るから、探偵小説の書きだしに女をハダカにするなんて、 丁鼻となる)は婦唱夫随、 埼玉県久喜居住の四丁鼻先生 温良な家庭に平和を愛していらっしゃ (九州の四丁鼻先生と合計して八 気が違ったんじゃないですか。

くなってしまった。天下に人なし。私はどうも日本人を買いかぶ 今月の挑戦状は、 もう差上げるだけの素質ある人物が見当らな だから八丁鼻が十二丁鼻になっても、ダメである。

っていた。探偵小説を書いたばかりに、祖国の叡知に絶望を知る

こは、残念、意外であった。

坂口安吾

## 十五 砂糖壺とピカーの手品

印された。女中の八重らが広間にカンヅメにされて、食堂と調理場は封女中の八重らが広間にカンヅメにされて、食堂と調理場は封加代子さんの屍体が運び去られ、私たちとそれに坪平夫妻、

の天才であります」
の天才であります」
が、我々の相手は、まさしく、悪魔の中だだかなければならなくなりました。我々の無能、まことに「皆さん、又々夜分御迷惑なことでしょうが、つきあってい彼らは先ず食堂と調理場を調査したのち、我々の前へ現れて、をしたがえて広間へ現れたのは九時半ちょッとすぎたころで、検視を終えたカングリ警部の一行が下枝さんや諸井看護婦

が」「今夕、異なる場所に於て同時に二つの殺人が行われました「今夕、異なる場所に於て同時に二つの殺人が行われました静を失い、満々たる闘志、年がいもなく気負っている。 カングリ警部もどうやらいささか昂奮の気味で、平素の冷

「 一 ツ ?」

て、宇津木秋子女史が思わず叫んだ。カングリ警部はうなずい

れましたところは、この一劃です。つまり御二方ともに、食「左様、二ツ。歌川多門氏とお加代さん。然し企らみの行わ

これこは全く驚いた。多見ど人はコーヒーではなく、プリ加里、歌川多門氏はモルヒネによって殺害されました」物に混入された毒物によりますもので、お加代さんは青酸

に、吸物、ヤッコ豆腐、オシタシという献立であった。々とは献立がちがっている。この日は鮎の塩焼、鯉のアライり、魚肉もごく淡泊なものに限って用いる例であるから、我先ず坪平夫妻が訊問されたが、多門老人は獣肉をさけておンの中へ混入されていたモルヒネで死んだというのであった。これには全く驚いた。多門老人はコーヒーではなく、プリ

っていた。 リーであるが、これはこの春以来あやかさんが作ることになり一であるが、これはこの春以来あやかさんが作ることになる。

覚えもございませんし、怪しいこともございません」あいだ、別に何事もなかったのですもの。その場から離れた「でも、想像もつきませんわ。私がプリンをこしらえているへ誰かがふりまいたという性質のものではなかった。

へ入れました」
へ入れました」
へ入れました」
のまして、居合していらした加代子さんと御挨拶などして、
にお会いしたいと仰言いますので、矢代さんのお部屋へ参
「四時ごろかと思います。刑事の方がお見えになって矢代さ

「奥様、もしや、お砂糖に」

の輝きがましてきた。 大きく見開いてオカミサンの顔を見ていたが、上気して、目と坪平のオカミサンが言葉をはさんだ。あやかさんは目を

-75-

゙いったい砂糖がどうしたのです」

らぬ習慣でした。ビート糖を用いまして、旦那様の召上り物 に限って、お砂糖だけは特別の砂糖壺のお砂糖を用いる例に 「旦那様はおからだにいけないそうで、普通のお砂糖は召上 カングリ警部にきかれて、坪平のオカミサンが答えた。

たが、 る多量のモルヒネが混入されていることが発見された。 ただちに食堂のお砂糖、お醤油、メンミツな調査が行われ 多門老人の砂糖壺に限って、 注意して見ればそれと分

致しておりますのです」

ものであった。 はいっており、 砂糖壺は一貫入りのガラス壺であるが、砂糖はまだ、半分 この日までは、料理に用いて異常のなかった

「プリンに砂糖を用いたほかに、別の料理に用いましたかね」 「夕食の召上り物にはほかに用いておりません」

「プリンの前に、砂糖を用いたのはいつごろでしたね」 と坪平が恐る恐る答えた。彼は顔色を失っていた。

したので、二合の牛乳にジカに紅茶とお砂糖を入れて煮まし 一御昼食の紅茶には用いました。 御昼食はサンドウィッチで

「相当多量に用いたわけだね」

たが」

と思いますが」 「まア、左様です。プリンに用いる分量ぐらいは用いたろう

- 歌川さんはそれを全部のみましたか」 坪平が答えることができずにいると、下枝さんが、

全部お飲みでした」

あなたがお給仕したのですね」

「ハイ」

「そのあとに別に異常はなかったのですね

゙゙゙゙゙゙ヹざいません」

「紅茶の支度はいつごろでした」

て、その十分前ぐらいに、いつも下枝さんがお膳をとりに参 「旦那さまの昼食は十二時半、夜食は八時と定めてありまし ちょ

カングリ警部はうなずいた。

うど十二時半十分前に出来たろうと思いますが」

られますから、間に合うように用意いたしております。

「十二時二十分から四時までの間に、 誰か砂糖壺に手をふれ

た方がありましたか」

坪平は恐縮して、

「手前は、どうも、 一向に、へい、 注意も致しておりません

「ずッと食堂にいなかったかね」

で

一服致しておりましたが、女房は後始末に一時半ごろまでは 「へい、昼休みに部屋へ退りまして、手前は、三時ごろまで

調理場におりましたかと存じます」

「ハイ、 て下さいまして、 皿洗いを致しておりました。神山様の奥様が手伝っ お部屋へ退りましたのは、

ざいます」 「その間に、どなたか調理場へ見えた方があったかネ」

宇津木様、矢代様の奥様、 三時すぎに私どもが調理場へでましてからは、奥様はじめ、 ろまでは、調理場へお見えの方はめったにございませんです。 「御昼食のあとは皆様オヒルネをなさいますようで、三時ご 丹後様、神山様の奥様、色々お見

えになりましたが、 砂糖壺に手をふれた方は御一方もござい

「一時半から三時までは、調理場は無人だったわけですね」

たしましたそうで、諸井さんが届けて下さいました」 「左様でございます。 ただ、二時ごろでしたか、鮎が到来い

「あなたがそれを受取ったのですね」

ておられますので、 が昼食後ヒルネ致しますのが習慣でして、皆さんそれを心得 外から口上だけで帰られましたのです。ここでは使用人たち 「いいえ、冷蔵庫へ入れておきましたからと仰言って、 休息の邪魔にならぬよう行届いた注意を 扉の

口と見つめた。 カングリ警部は興にかられた顔付で、諸井看護婦をジロジ

払って下さるのです」

あなたはちかごろ病院勤務は廃業ですかね

でございます」 由良さまの病態が悪化致しておりますので、 「午前八時から十一時半まで。千草さまの事件このかた、 旦那様の御命令 お

ものである。 でもカングリ鬼警部でも、 が変るものであるが、 れるほどの男でも、とかく男というものは相手によって態度 諸井看護婦は相変らず平然たるものである。大人物と言わ ても、ビクともしない面。魂は見上げた諸井看護婦は水の如き無表情、大公爵

鮎を運ぶ のも あ なたの仕事のうちですか」

ございません」 あの時間 に当家で目をさましている使用人は私のほかには

·そのとき調理場は無人でしたね」

「いいえ、一人、いた方があります\_

思わず一座は緊張した。 カングリ警部はサイカ丹田に力を

こめる身の構えで、

「誰でしたか\_

「お加代さま」

警部の全身に気魄がこもった。 混乱した人々の思いが気配となって動いている。 カングリ

「諸井さん。あなたは死人に口がない ということを勘定に入

れていますね」

諸井看護婦は冷然とうなずいて、

「そうかも知れません。 そのために、 私の言葉が信用され

いという馬鹿らしさを」

「お加代さんは何をしていましたか」

ると、お加代さまは、この広間の椅子にかけて読書しておら を入れているうちに、出て行かれたの だから、と仰言っていました」 れました。矢代さんの奥様を訪 「お水をのみにきたのだと仰言ってました。 ねたけれど、 っです。 私が調理場をで 私が冷蔵庫 おひるね のよう た鮎 -77-

ごろでしたわ。やっぱり読書していらしたのです」 「私もこの広間でお加代さまを見かけましたの。二時四十分

と胡蝶さんが言葉をはさんだ。

もう十一時ちかい時間になっていた。

お持ちのようですから、 「それでは、 神山さん、 職業柄、 夕食の様子について、 あなたは行届いた観察眼を おきかせ下さ

カングリ警部は苛々

しょう」 「そうですか。それでは皆さんを代表して、 私から申上げま

見えるぐらい、調べの席には堂に入った呼吸を具えているの なると、まるで貫禄が違ってくる。 なかったけれども、こうして指名をうけて一座を代表したと さすがに場馴れたものであった。 先刻までは カングリ警部もヒケメに まだ左程 では

である。

場の紹介があって、さっそくこの聖人が説法にとりかかり、 酒など飲んでおった時です。ちょうどこの鳩時計が七時をう シで歩いて行きましたか」 なた方は靴をぬいで母屋の方から来られたのでしたな。 でました。あのとき私は気がかりでしたが、海老塚さん、 食堂のドアから外へ突きだしましたよ。 うですが、 セッチュウの説法は怪しからん奴だ、人見小六さんも礼儀を 様にそんな文句があるかい、我々物自体の作家に向って和洋 人はパンのみによって生くるものにあらず、と言いかけます てヒョロ高 きに、海老塚医師が論語研究会、奥田なにがしという蒼ざめ 四分ほど、おくれております。この鳩時計の七時をうったと ちました。 へ集りまして、食卓の用意のできるまで、思い思いにビー 「先ず、 土居画伯が聖人をハッタと睨んで、バカヤロー 夕食のはじまる直前のことでしたが、私どもが 。念のために申しあげておきますが、この鳩時 結局主人の一馬さんが、 奴めと怒る、 軍服の人物をつれてきました。 土居画伯が、 、丹後さんだけが聖人の味方をし 廻れ右、 家宅侵入を許さずという オイチニ、オイチニ、 海老塚さんも一緒に 海老塚さんの一 め、 たよ 孔 子 /広間 計は ハダ ル あ

1

をしなかった。 のですが」 「これだけの前奏曲があってから、 海老塚医師は光る眼玉をグルグル廻しているだけで、 いよいよ本景に取掛かる 返事

するとピカーがさえぎって

取りかえたのが、 碗以上のカケがあるから、それじゃア代えてあげましょうと ると、あいにく、 なく、皆さん、お分りのことでさアね。そして、 きいてごらんなさい。これには指金がありますよ。計画がなってきやがる。そこにいる女中めが、そう言いおるのでさ。 これはあんたのよ、と云って、必ずかけたコーヒー茶碗を持 じゃないか。一週間ほど前から、あんたがコワしたのだから、 ども、然し、これだけの大家に、代りがないとは、おかしい たが、 そのあとで、急にゴチャゴチャして、まだ二三人出入があっ 矢代君、一馬君、巨勢君を語らって五人で食堂を出て行った。 そろって食堂を出て行った。まもなく戻ってきて、今度は、 画通り、 コーヒー茶碗を一 打ほどブッコワしたのは正しくオレだけれ ー茶碗だけは目ジルシがあるのだよ。フチがかけているのだ。 れていたのだ。警部さん、よくきいて下さいよ。私のコーヒ ってのことだ。その指金が何人であるか、それは言うまでも  $\Box$ いころになって、当家の令夫人が京子さんに耳うちして二人 「その次のことは、オレに言わせて貰おう。食事の終りに近 それは僕はよく記憶がない。そのときコーヒーが運ば なんか、 オレの茶碗に青酸加里を入れやがったのでさア。 アタピンじゃないが、 悲劇のもとさ。 加代子さんの茶碗もかけ オレだったら、 ピンときて、 ていた。 かねての計 青酸加里の オレの茶 すぐ叶 「 が あ

-78-

堂を出入した連中を調べてみりゃ、犯人はでてきまさアね」 きだすね。不死身でさアね。刑事さん、食事の終りごろ、食

「あなたは、なぜ、コーヒー茶碗をとりかえたのですか」 カングリ警部が珍らしそうに訊く。

とを人生の目的としているのだからさ」 あたりまえさ。 オレは御婦人のために犬馬の労をつくすこ

て加代子さんに差上げたのです」 「嘘おっしゃい。あなたが御自分のお茶碗に青酸加里を入れ

フンという顔をして、 あやかさんは怒りにふるえてピカーを睨んだが、ピカーは とりあわない。 あやかさんは怒り心頭

使いなんですわ」 スでもバクチ打よりもインチキが達者なのです。 るぐらい、子供だましにやれるんですのよ。花フダでもダイ 「この人は手品の名人なんです。コーヒー茶碗へ毒薬を入れ 指先の魔術

悠然として き物のような自在さである。 をからかうように、指先に碁石をはさんで、腕をつきのばし ピカーは碁石をひとつ、つまみあげた。そして、あやかさん ピカーのソファーのかたわらに、ちょうど碁盤があった。 指先の碁石は変幻出没、 ピカーは指の魔術を使いながら、 碁石が人をからかうような、 生

の巻、 「東西東西、ここもと御覧に入れまする曲芸は黒白夢幻の恋

はさむ。出没自由、 黒石のほかに、もう一つ、白石をつまんで二つ一時に指に 熟練の妙をきわめている。 ピ カ は悠々

とあやかさんを見すくめて、

して貰いましょう。 殺すのだ。すべて、 「殺人狂じゃあるまいし、オレがなんのために加代子さんを ハイッ、東西東西」 殺人には動機がある。 動機をさが

カングリ警部は、どうやら内心、昂奮を押えかねているら

しく、 した。おもむろに、 「奥様が矢代夫人と食堂をでて行かれたのは何か御用があっ しかし、先ず悠々とタバコに火をつけて、 あやかさんに向って、 人々を見廻

あやかさんは顔をあからめたが、京子もモジモジ答えるこ

とができないので、

「御不浄へ参ったのです」

仕方なしに、あやかさんが言った。

てですか」

いしてー 「一人で参るのが心細かったものですから、京子さまにお願 緒に行っていただいたのです。 便所の窓から、ふと

れたのが見えたのです。あそこには、アズマヤに一ヶ所、 滝のうしろの山の方を見ましたときに、誰やら、人の姿が隠 のほか燈籠に二ヶ所ほど灯がありますので、部分によってホ

ンノリ見えるところと暗闇と入り交っておりまして、私の見

でございますので、 瞬間のうちに暗闇へ消え隠れてしまったのです。こんな場合 た人影はちょうどその境界のあたりに当っておりましたから、 んに来ていただいて、 べていただきましたのです」 怖しくなって、主人や矢代さんや巨勢さ ちょうど長畑刑事もいらしたので、

カングリ警部はうなずいて、

「ヨミスギは、さっそく、 調べてきたのだね」

「ハア、さっそく駈けつけてみましたが、もう人影は見当り

ませんでした。なにぶん、直線に駈けつけるわけには行かな いところで、洋館をひと廻りして、 おまけに、庭の径ときて

は迷路のようなものですからな」 「それは一人じゃ、手に負える筈がないから、仕方があるま

カングリ警部は部下をいたわった。

「それで、みなさん、すぐ食堂へ戻られましたか」

たぶん、そうだったようだね」 「私はついでに用をたして戻りましたが、一馬も巨勢博士も、

私がこう言うと、一馬と巨勢博士はうなずいた。

「三人御一緒に食堂へ戻りましたか」

「一緒に戻る理由も別にありませんからな、別々に戻ったよ

うです」

「奥様と矢代夫人は、 先に、一緒に戻られましたか」

致しましたけれど、私どもも別に一緒ということを意識致し 「ちょッと調理場をのぞいたり、女中に言葉をかけたりなぞ

てはおりませんので、京子様が先でしたかも知れません」 「でも殆ど御一緒のようでしたわ。私も坪平のオカミサンに

から。別になんという理由もなかったのですけれど」 話しかけたりして、ちょッと調理場を眺めていたりしました

警部は大きくうなずいた。

「そのとき調理場にはコーヒーの用意ができておりましたか」

「用意はできておりました」

た。然し声は、決意にも拘らず、さすがに自然に低かった。 「私たちが戻りますとき、ちょうどコーヒーのお茶碗が広間 あやかさんは決然たる視線でハッキリ警部を見つめて言っ

> のそこのテーブルの上に並べられているところでした」 「お茶碗にはコーヒーがつがれていたのですか」

ここへ運んで、並べているところでした」 「つがれておりました。お砂糖もミルクも、調理場で入れて、

よせて、ゆっくり眺め廻していた。ピカーの茶碗のフチは一 ヶ所はやや大きく、一ヶ所は小さくかけていたが、 んの茶碗は二ヶ所に大きく、二ヶ所に小さくかけていた。 カングリ警部は食堂からピカーと加代子さんの茶碗をとり

「どっちの茶碗が土居さんの専用だね」 カングリ警部は顔をあげて、女中の八重を見た。

゙ハイ、そっちです」

と、まちがいなく、かけ目の少い方を指して答えた。

まま、新しく買ったことがございませんので」 「ハイ、ございません。戦争中からいくつとなく割りました 「ほかにカケ目のない茶碗はないのかね.

警部はうなずいて、

おまけに目の玉のとびでる値段だ

からね」 「近ごろは安物ばかりで、

それから、私と一馬に向って、

「あなた方も、そこのテーブルの上のコーヒー茶碗を見まし

たか」 私たちも、うなずいた。

「そのほかに二三人、 お立ちになった方があるそうですが、

どなたでしたか」

「私が立ちましたよ」

と神山東洋が答えた。 つづいて木ベエが、僕も、と答えた。

たよ。いくつかはテーブルの上に残っていたかも知れないが、「私が便所から戻るときは、それを食堂へ運んでいる時でし「あなた方もテーブルの上のコーヒー茶碗を見ましたか」

は然し、海老塚医師が、そのときコーヒーのコップを握って「僕が戻る時は、もうコーヒー茶碗はなかったようだな。僕

あんまり注意も払いませんでしたから、分りませんね」

飲みながら、調理場から出てきたのを見ました」は然し、海老塚医師が、そのときコーヒーのコッフ

警部は意外な顔をした。

「海老塚さんは食堂にいらっしゃらなかったのですか」

「僕は調理場で食事をしました」

る。神山東洋がそれをひきとって、アイクチのような冷めたさで、ブッキラボーの御返事であ

こうに一島にしず、昼光界にしておくにもではで聞う、めて別れていらしたのでしょうが、食堂へ戻っていらした。からね。食事の途中に海老塚さんが、たぶん聖人に因果を含とばして、前奏曲からいきなりフィナーレへ移ったものです「これには一場の説明がいるのですよ。土居画伯がマン中を

で、変質にはよういこのでしてないようにして欲しいと仰言った。それらこの席へは出席しないようにして欲しいと仰言った。それすると一馬さんが、海老塚さんと客人たちでは気質が違うか

で、食堂を立去られたのです」

も、ピカーは、面くらった様子であった。ワケがわからなく事実は、我々にすくなからぬ疑惑と動揺を与えた。その中で海老塚が、それからズッと調理場に食事をしていたという

「調理場の、どこのところで食事をとっておりましたか」

不機嫌に口をつぐんでいる。

という問に、

をしようとしない。ツボ平のオカミサンが代って答えて、料

海老塚はジロリと反抗を見せただけで、返事

は立ったまま、食事をしていたということであった。あっちへ移り、こっちへ行き、時には椅子にかけたり、時に理の性質によって、仕事場の多忙の場所が変化するたびに、

訊問が終って警官の一行がひきあげるとき、ピカーは、は立ったまま、食事をしていたということであった。

や

ゃ、いけないかなア」 「警部さん。オレは、もう、イヤになったね。東京へ帰っち

やむつかしそうな顔付で、

何かと好都合ですが」 差しさわりがなかったら、もう暫く滞在していただければ、「そうですなア。無理におひきとめは出来ませんが、特別の

の食べ物は、オレに作らせて貰うぜ」 だけれども、イヤだなア、オレは、とにかく、明日から、オレ作品も、もう描きあげているから、そっちの心配もないのだ「そうですか。別に用はないけれどもね。私は秋の展覧会の

「いけませんわ。そんな、あなたが、いやらしい。あなたこ

あやかさんが、叫んだ。そ、私たちを毒殺しかねない悪者です」

カングリ警部が口をはさんで、

日差向けますから、料理に立合わせたら」「そうですなア、それじゃア、どうでしょう、アタピンを毎

ポンと胸を叩かんばかりの心得顔。「ええ、心得ました。私の目の黒いうちは、大丈夫」

「この中に犯人がいらっしゃるか知れませんけど、私が睨んをごうだけです。

それから多門老人と加代子さんのお通夜をして、私のねた

のは二時すぎであった。

だら怖いんですよ」

## 十六 歌川家の秘密

ったが、金庫をあけると簡単にでてきた。警官からの希望で、多門老人の遺言状をしらべることにな

二日前に書いたばかりのものであった。もの。月日は、昭和二十二年七月二十四日、つまり殺されるしかし公式なものではなく、ただ多門の署名があるだけの

この遺言は一馬にとっては全く意外なものであった。

ことを書き遺しているのであった。白し、遺産の全部を一馬と加代子の両名で公平に二分すべき多門は先ず加代子が珠緒なきのち唯一の娘であることを告

両名に二十万円ずつ与えるようにと書いてあった。(そのほかに、分配に先立って、お由良婆さま、片倉清次郎)

「片倉清次郎とは、どなたですか」

て、休養している者です。もう、七十六の老齢ですから」「一生を当家につかえた番頭ですが、この春から病気になっ

は察せられた。害に有力な動機が見出されたということに関心を深めたこといて立ち去ったが、遺言状の発見によって、加代子さんの殺いて立ち去ったが、遺言状の発しによって、加代子さんの殺ーカングリ警部は遺言の写しをとり、片倉清次郎の住所をき

行にも殆ど困難な病体だった。そわれ、車にゆられて、主家へ弔問に来たのである。もう歩ところが警部の一行と行き違いに、片倉老人は家人につき

ることができなかった。(彼は主人の遺骸の前にぬかずいて、ものの十分は顔をあげ)

倉老人の話をきいたが、一馬と私もその席にいた。 警部の一行は行先を知って引返し、遺骸のある部屋で、片

「当家に仕えて何年ほどになりますか」

すが、敗戦とあれば、これも当然でありましょうか」りました。時世の移りかわり、又、当節の大変動にも驚きまわずかそれだけの額で、やっぱりその頃から屈指の長者であますなア。そのころは当家の財産も時価で十万か十二三万、「私の十六の年ですから、当年七十六、六十年の大昔になり

察せられた。 らの学歴もなかったけれども、着実な識見を具えているのが 片倉老人は病み衰えていたが、頭はシッカリしており、何

警部の態度も、自然に。改っていた。

「お加代さんの母親が自殺したということは事実ですか」

「左様です」

つめながら、た。カングリ警部は意外にも深いいたわりをこめて老人を見た。カングリ警部は意外にも深いいたわりをこめて老人を見られる人は目をとじて、念仏でも、呟くように口の中で言っ

ますが、決して他言は致しません。当家の古い傷についてもといるなどとは、まことに心ない業で、我ながら鬼のようだ強いるなどとは、まことに心ない業で、我ながら鬼のようだと思いますが、然し、片倉さん、今やこうして当家に続出しと思いますが、然し、片倉さん、今やこうして当家に続出した地でのです。一生の誠意と愛表面のことはとっくに理解しているのです。一生の誠意と愛「片倉さん、むろん我々も警察や役場の古い記録をしらべて「片倉さん、むろん我々も警察や役場の古い記録をしらべて

を打ちあけていただきたいのです」公人としては一切きかないことに致しますから、まげて真相

った。 理解の色が静かにこもって、警部の心を受けいれたようであ こう云ってカングリ警部は老人を見た。老人の眼に穏かな

ことが、一部の老人に言い伝えられているのですが、これは、「お加代さんの母親は、自殺ではなく、他殺であったという

いた。

老人は目をとじて、しばらく答えなかったが、

事実でしょうか」

非力で、 私の軽率、まったくのところ、 お梶様の持ち物だったのと、その場に残された死人の履物が、 首のうしろに一つ結んで、物置の梁にぶらさがったのが、シ 当家に御迷惑をおかけしておるのかも知れませんのじゃ。 の強い、ヒステリー症の御方であったが、何がさて、痩せて、 いうことを、 もので、そんな噂が今もって残っているのも、元はといえば のがれて自殺ということで通りましたが、秘密は必ずもれる のことで、縄をといて人口呼吸をしたと云って、難なく言い の紐も解いて隠して別の縄にスリかえた。山奥の駐在の当時 を見て、私がとッさにハッとして、お梶様の下駄を隠し、 お梶様のものと本人のものと片々ずつになっておった。 ゴキが切れて、下へ落ちて、 の人の首をくくった物置は今はとりこわして有りません 「警部さん。それは私にも分りませぬ。思えば私の軽率が、 人をしめ殺す腕力などのないことは、 私はズッと信じていますのじゃ。 ことぎれていた。このシゴキが 九分九厘まで自殺であろうと 冷静に考えて お梶様は気性 。それ 首 あ

老人は又、休息した。

きはひどかった。彼は蒼ざめ、全身が石のようにかたまって我々の驚きは深刻であった。私や警部にまして、一馬の驚けたのが、神山東洋という悪漢ですのじゃ」時、旦那様の秘書をして当家におり、私と共に現場へかけつに思いこんで、慌てましたのです。間の悪いことに、その当

実はこのことを若旦那様に申し上げよう為でしたのです」かりのことじゃ。私が本日、でましたのも、弔問のほかに、つもりでおりましたのじゃが、何がさて、今度の騒ぎは気がすじゃ。このことは、若旦那様も御存知ないかも知れませぬ。「神山東洋のユスリには、もう一つ、当家の秘密があるので

るのが、ただ今、当村に医者をしている海老塚晃二という仁して、二人の子供が残されたのじゃが、二人の遺児の弟に当い御方で、サギはやる、ユスリはやる、遂には強盗をはたらしたが、この子供が長ずるにつれて、まことにタチのよくなむれて生れた子供がありましたのです。この子供を遠縁にあ「旦那様がまだ二十のとき、東京の遊学先に宿の女中とたわ

みれば誰にも察しのつくことだが、とッさのことで、私は一途

どのM村に未亡人が百姓をして育てておられる。今はもう当三児のカシラはまだ十一ぐらいの幼少で、当村から十二里ほの玄太郎という御方は三年前に三児を遺して亡くなられた。ですのじゃ。この仁は、旦那様の孫に当る御仁じゃ。その兄

まったく蒼ざめてしまった。 カングリ警部も二の句のつげぬていたらくである。一馬は

、別に仕送りも致してはおりませぬ」

家と無縁で、

は秀才でもありましたところから、無医村の医者に仕立てるりませなんだのです。その遺児の玄太郎と晃二のうち、晃二が、死に至るまで歌川多門様の長子であったということを知よって、籍は実子としてありまするから、サギはやる、ユス歌川多門様の種であるということは露ほどももらしませぬ。新出多門様の隠し子を海老塚へ養子にひきとらせたとき、この「旦那様の隠し子を海老塚へ養子にひきとらせたとき、この

「それを海老塚医師に教えたのですね」したのじゃ」したのじゃ」この秘密を知りましたのが、神山東洋という悪者奴でありまあるということは、知るよしもありませなんだ。ただ一人、という名目で学費をだしてやりましたが、これとても、孫で

「神山めは、このことをも種にして、お梶様をゆすりおったていた。 片倉老人は、それには答えず、又、しばらく言葉をやすめ

りましたが、神山めは、海老塚に全てを知らせて財産分配のびっくりなされて私に真偽をききただされたようなことも有のじゃ。もとよりかような秘密を知る由もなかったお梶様は、「ネ」とは、このことでも種にして、ま材植ではできまった

もって、死にきれませぬ」らぬイノチじゃ。思えば、口惜しさ、このことばかりに、今たか知れませぬ。まことに、殺してやればよかった。惜しかけでしたのじゃ。私は神山めを幾たび殺してやりたいと思う訴訟を起させるが、それでもいいかと云うてユスリおったわ

深い沈黙を破って、八丁鼻が思わず一膝のりだした。

老人はハラハラと涙を落した。

新しい根をほじくり返してかからなきゃア」ではありませんな。フーム、こいつは、もう一度はじめから、「すると、お梶様が毒殺されたという風説は、根のないこと

カングリ警部は冷やかに、

かい」「一年前の白骨を掘りだして、毒薬がでてくるとでもいうの

それから片倉老人に向って、

や多門さんの実子は一人も生きておりませぬか」それから亡くなられた珠緒さん、加代子さんのほかに、もは「片倉さん、最後にただ一つ、おききしますが、一馬さん、

お方でしたじゃ」「ほかには一人も生きた方はおられませぬ。子供のすくない

十七 不連続殺人事件

ようであった。 当局の努力にも 拘 らず、確実な証拠は何一つ見出されない

内海殺しの場合にしても、二階の神山はピカーの目をゴマカ

神山と海老塚を疑ぐりだすと、『殆ど解決がついてしまう。

せないが、 できた筈だ。 海老塚ならば、 難なく階下の内海明を殺すことが

リバイが成立つのである。 けれども、 ただ一つ、千草さん殺しの場合には、二人のア

神山東洋は坊さんや一馬と一 緒に火葬場から戻ってきて、

をそろえて証明している。 御婦人連とズッと広間に話しこんでいたことは御婦人連が口

ŧ ので、彼はビッコであるから、並の人よりいくらか時間がか の時間には犯罪の余裕がない。七時二十分から八時までの間 六時から七時二十分まで三人の患者を順に往診しており、こ 結局返答をしなかったが、調査の結果、患者の証言によって、 部に問いつめられたり、木ベエにやりこめられたりしながら 馬にぶつかった。医院を出かけた時間について、カングリ警 かることも不思議ではないのであった。 海老塚は八時ごろ、村の方からやってきて、裏門で私と一 最後の患者の家からは、 歩いてちょうどそれぐらいのも

あった。 ってお がおり、 で手伝っており、調理場をはなれなかったことは多くの証· 神山夫人木曾乃さんも、当日はオトキの用意にテンテコ舞 ij 例の論語研究家も、 その町には彼のアリバイを証明する確実な証 その日は七八里はなれた町へ行 人

やっぱり、 であった。 ついて、 私は当局ばかりじゃなしに、巨勢博士も、 メンミツに調 このアリバイをひっくり返すことはできないよう 査していることを知っていた。然し、 海老塚と神山に

「ねえ、博士、 このいくつかの事件は、 犯人が別なんじゃな

> 海は、 いかな。 は不連続殺人事件じゃないのか」 ていても、 犯人が違っているんじゃないのか。 歌川家の家族に関する事件と、千草さんや王仁や内 動機も犯人も別な事件が入りまじっていて、 時間的には連続し

らです」 るからでさ。なぜなら、犯人は真実の動機を見出されること 自身がそこを狙っているからですよ。つまり、どの事件が犯 が怖しいのですよ。動機が分ることによって、犯人が分るか 人の意図であるか、それをゴマカスことに主点が置かれてい 不連続殺人事件と名づけるかも知れません。 かも知れません。私がこれを後世に記録して残すときには、 「そうですね。この事件の性格は不連続殺人事件というべ なぜなら、

「じゃア、すべての事件が同一犯人の仕業なのかい」 巨勢博士はニヤニヤしながら額い

た。

だけの曰くづきの人物が一堂に集められたこと、それが偶然「それは、むろんのこと、きまってまさア。なぜなら、これ によるものではなくて、犯人の意志によって為されたもので

あるからです。御ていねいに、僕まで呼び寄せやがったのだ から、いささか、 博士はてれくさそうな笑い方をしたが、 癪 にさわるじゃありませんか」 私は彼が、 すでに

「じゃア、 犯人の真実の動機はなんだね?」

何物かを握っていることを悟った。

巨勢博士は声をたてて笑った。

的な犯罪ですよ。すべてがメンミツに計算されているのでさ。 日本に於ける、最も知的な、最も雄大な犯罪なんでしょうな。 「それが分れば、犯人は分りまさアね。だが、恐ろしく計画

装うとか、そういう小細工は小細工自身がすでに足跡という この犯人は天才でさアね。インテリ型のケチな小細工がてん か。この犯人は、 ものでさア。 扉を糸に結んで自然にしまる装置をするとか、密室の殺人を で黙殺されているところなど、 すでに一つの心理を語っているでは 常に心理を語ることを最も怖れつつしんで アッパレ千万というものでさ。 ありま せん

り八月九日に完結するでしょうが、 件が犯人の真の目的であるか。ともかく事件は犯人の警告通 ているのかも知れませんぜ 日に完結するとは限りませんや。 「それなら、 なにも、 この警戒厳重のさなかに、 目的の殺人はとっくに終っ 真実目的の犯行が八月九 余分の犯行

ある証拠でしょうな。

犯人の真実の

動機は何か。どの殺人事

もの」

一馬はひどく気を悪くした。私は一馬に代って、

犯人が天才の殺人鬼で

いまさアね。この怖るべき沈黙性は、

をつけ加える必要はなかろうじゃない 一つまり、 八月九日に何が起るか、これは一つのクライマックスで 真実の動機を隠さなければならないからです。 か

然

馬鹿正直に当てにするのも、 れる。これが、 ないと思いますよ。恐らく次の犯行は、予期せざる型で行わ それで恐らく 対する警戒が加わる。 は時に一日に二つの殺人を敵てする、 みたいに義理堅いトンマじゃありませんぜ。 日の予告をだしたから、必ず八月九日に決行するというバ もあるでし 虚をつくのです。ひとたび毒殺が行われれば、それに よう。 この犯人の性格ですよ。だから、八月九日 彼氏の毒殺プランは終りを告げているに相違 僕は然し思いますな。 だから一気に二つの毒殺を敢行し つまり彼氏、常に虚を この犯人は、 なぜなら、 八月九 て、 犯 力

> とも知っていた。然し又、 ていた。 私は博士が片倉老人を訪ね、海老塚 然し、巨勢博士は、決して確信があるのではなかった。 一馬に疑いをかけているのも の生家を訪れてきたこ

なぜなら博士は一馬に向って

様は知らなくっとも、当家の跡とりの歌川先生には、お父様 とを知らなかったなんて、どうも想像がつかな から打ち開けてあるものと思いますが、 僕は然し、 、歌川先生が、 海老塚さん の叔 あんまり常識外れだ 父に当って いなア。 るこ

だよ。 嘘発見器よりも確かだぜ」 く愕然、 片倉老人が秘密を打ちあける席に居合わせたから見ているの は偽ることのできないものだ。 マネることのできない、つまり心の真相の発露だよ。あの 博士はあのとき居なかったから知らないのだが、 あのときの一馬の顔というものは、 色を失ったものだった。 こういう真実というものは、 あの表情はどんな名優でも 茫然自失、 私 、まった は 顔

とを、 らなかったなんて、すくなくとも神山東洋氏が知るほどのこ 東洋氏が知ってなきゃア、納得もできるけれど」 ア 手勝手の独断的なもので、 「そうですかなア。先生方の文学的方法というものは銘 なさそうだがなア。 家の相続人が知らないなんて、 歌川 嘘発見器みたいな正確なもの 先生がこのことを本当に今まで おかし い 7々得 神山 知

「僕は本当に知りませんよ。相続人といったって、 一馬はまったく気を悪くした。彼は正直にムッとして、 まったく、 ほかに相続人がないから相続するというだけ 僕なんか

考えものかも知れませんや」

は、

のこと。それに僕のオヤジという人物は、お前の代にはお前

僕よりも深く理解しているところがあったかも知れない。で もいいや、というぐらい、虚無に徹したところのある人物 すから、一家の古傷のような小さな秘密など問題にしていな 視しつづけていた人です。ですから、案外、文学なんかも、 少く、本来無東西というような、冷めたい人間孤独の相を凝 したよ。だから旧家の当主に似合ず、家というような観念は の勝手にやるがいい、 人間死んでしまえば墓なんかもどうで

それが凄く重大なことになっただけで、こんな事件でも起ら なければ、とるにも足らないことではありませんか」 かったのも当然ですよ。たまたま、こういう事件が起って、

巨勢博士はいささかてれながら、

「そうですなア。然し、なんですよ、それは僕みたいな氏も

財産を分配する、そういう事態の起る場合を想像すると、こ 富もない家庭の出来事なら、仰言るようなものでしょうけど、 の分配の金額は、とるにも足らないというわけに行かないだ まったく神山東洋氏のユスリのタネになるのも道理、当家の

ろうと思いますが」

すよ 配してやりますよ。僕は物質よりも、正義の方の味方をしま のなら、僕はユスリには応じぬ代りに、 「神山東洋が訴訟を起すというなら、そしてそれが正当なも 海老塚には遺産を分

馬は息をはずませて叫ぶように言い切った。

ところが巨勢博士は、私のことまで疑っているのである。

ねえ、先生

彼は私の部屋を訪れて、 私と京子の顔をニヤニヤ眺めなが

> たんじゃ、ありませんか。ともかくですな。 から加代子さん。加代子さんなんかは知ってたんじゃアなか ってるほどのことだから、 しや、先生は、海老塚さんが当家の孫だという一件を知って ったかなア。加代子さんが、臭いなア」 「歌川先生はああいうけど、歌川先生のことは別として、 お梶様に近い人、女中とか、それ ユスリの種にな

で

ò

彼は益々ニヤニヤしながら、

さんから、そんな話、きいたことがあったでしょう」 内ぶところにイキナリ飛びこむやり方であるから、京子もい 「ねえ、奥さん。奥さんは加代子さんの親友だけど、加代子 まったく露骨きわまる探偵ぶり、アイクチをふりかざして

ささか気を悪くして 「あら、巨勢さん、ひどいわ」

あなたは多門さんの愛人だった御方ですから、多門さんから 云ったって、全く、どうも、失礼を承知の上で、アグラをか も、その話がなんとなくもれきこえたというようなことが」 いて訊かざるを得ない性質のことなんで。実はねえ、奥さん、 「いいえ、ございませんでしたわ、そんなこと」 「イヤ、奥さん、悪くとらないで下さい。悪くとらないでと

「どうも、すみません」

と、京子は気色ばんで、さえぎった。

博士はてれて、ニヤニヤした。

「ところで、先生、 丹後先生は独身なんですか」

「独身らしいね」

「それで、愛人はいらっしゃらないのですか」

「珠緒さんには、丹後先生、相当、なんじゃなかったんです「どうだかなア。あんまり、そんな話は、きかないなア」

いこんでいるか、あんな、ひねくれ者のことは、私は考えて「いくらか惚れてはいたろうさ。あいつが何をどの程度に思

「まったく、大作家ともなると、気むずかしくて、つきあい「まったく、大作家ともなると、気むずかしくて、つきあい

みたくはないよ」

さが感じられる。

さが感じられる。

一途に掘り下げているような、たのもしらぬ狙いをつけて、一途に掘り下げているような、たのもしなると、軽率なところがなくて、慎しみ深く、何か我々の分ぎたと思った。これにくらべて、さすがにカングリ警部ともいささか、ウンザリした。私はどうも巨勢博士を買い被りす全然あらゆる人間を疑っているようなものである。私も、

めて見る人だが、お由良様の夫の南雲老人に相違ない。にしている。見ると、お由良様、もう一人の男の方は私の始男女の老人が二人、もつれるように道の上にうずくまるようある朝私が三輪山の方へ散歩にでると、危っかしい様子の

出来たことが、今日はもう出来なくなっているのですよ」「無理に歩いてみましたら、この有様で。年寄は十日前には様は困りきった顔にホッとした色を浮かべて、

私がすすみよって、どうかしましたか、ときくと、お由良

「あなたは御病気という話でしたが」

してね。少し無理かと思いましたが、千草の屍体があったとに、このオジイサンが、いつになく足腰がしっかりしてきま「ええ、さいわい今朝は気分がよかったものですから。それ

あげくに、疲れはてて、この有様ですもの。まだこの春は、いいいから、思い残すことがないように、四ツ五ツの子供なければ、もう出来なくなる、とりかえしがつかない、死んいが明日の我慢がないよりも、もっと我慢がなくなるからですよ。今した通り、今日できることが、明日、明後日には、もう出来なんなる、そういう無常が身にしみているからですよ。今した通り、今日できることが、明日、明後日には、もう出来のはかに、年寄のせつない思い、さきほども申し上げまい。

と、お由良婆さまは、色をなして、打ち消した。「カルモチン?」いいえ、そんな薬は」ルモチンを買いに行かれたそうですね」「そうそう。先日も鉱泉宿で、そのお話は承りましたよ。

鉱泉まで、さのみ疲れずに歩くこともできたのに」

うずくまっていた老人がきいた。「この方は、どなたじゃ」

子さんと結婚なさった方ですよ」「こちらは洋館のお客様で、矢代さんと仰言る方、ほら、京

「ああ、ああ、その御方か」

大男で、ら、背負ってと思ったが、痩せてはいても、五尺八寸からのら、背負ってと思ったが、痩せてはいても、五尺八寸からの私が手をだすと、それにつかまって、起き上った。なんな

「いや、いや、これで、充分、歩けまする」「じゃア、喜作じいさんにたのんで、車でも廻させましょう」

私の肩に縋って、歩きだした。

「諸井さんは、ジャケンな人ですのよ。

患者の散歩といえば、

カ

人は一服もるぐらいのお手伝いでも、平然とやりかねない鬼しますよ。まとまったお金でも握らせてごらんなさい。あの慾無道なのですよ。チップをはずめば、どんなことでも、致中で死にたかったら勝手に、と言う人ですからね。それに強附添って歩いてくれるぐらいの思いやりがあるどころか、途

息からムリに声をしぼって、 オジイサンも私の肩に縫ってフウフウやりながら、苦しいですのよ」

「ウム、そうじゃ」

よっぽど諸井琴路なるものが口惜しい存在であるらしい。

「身持は、どうですか」

ときいてみると、

というのでしょうね。いやらしい人」というのでしょうね。いやらしい人」というのでしょうね。いわませんよ。あの人はそのミイリで枝の先生だの、近頃では金廻りのよい百姓だのと、あの人のなか。私の兄(多門のこと)はもともとあれが病気の人であり「身持って、あなた。あんな人に身持なんか、あるものです

である。

、6日となどには、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これであった。私は道で神山東洋に会わなければ、すんでにノビるところ

諸井琴路。この謎の女が、この事件の片隅に、必ず謎の役て、お由良婆さまと肩をならべて歩きだした。

強慾無道の彼女の心をあやつる者は、誰であろうか。割を果しているということを、痛烈に考えざるを得なかった。

多門老人のマッサージをやっていた。その後も外出はしてい諸井であった。そして諸井看護婦は、その六時から七時まで、あの日、千草さんが裏門からでかける姿を最後に見た人が彼女のアリバイをしらべてみた。するとアッサリ失敗した。私はさっそく、七月十八日夕方、千草さんの殺された日の

十八 七人目

なかった。

八月三日であった。

鉄筋コンクリであるから、よその音もあんまりきこえないのといえば、歌川家の洋館の方がもっと静かだ。ガッシリしたとにしていた。ここもむろん静かであるが、然し、どちらか私はちかごろ昼のうちは鉱泉宿へでかけて、仕事をするこ

もので、それで私は鉱泉宿へでかける。気持をつつんで、顔つき合わしているというのは気づまりなれに、ああいう事件つづきで、お互に気心が知れないような然し、静寂ということよりも、私は単調に疲れていた。そ

で苛々と落付きなく、どこかを出歩いているようであり、全村の碁打を訪ねて、碁を打ちに行く。一馬も神経衰弱の気味中は外出したがる。バスに乗って町へ行く者もある。丹後は、この気持は私ばかりではなく、近頃は、みんな頻りに、日

然外出しないのがピカーと神山東洋で、

この御両名は連日賭

- 8

時々巨勢博士が加わる。これが又、負けず劣らずの御手並、けの撞球に打ちこんでいる。どっちも三百ぐらいの手並で、

みず、などと大変な意気込みで、神山東洋は早朝に目をさま一日中つきまくって勝敗を決する、全財産を失うともかえりある。この三人は昨夜から相談して、今日は朝から夕方まで遊びならなんでも達人、生れついてのバクチ打ちの性なので時々巨勢博士が加わる。これが又、負けず劣らずの御手並、

京子はN町へ買い物に行って、ついでに昔の知り人を訪ねすと、サイカイ沐浴に及んだという話であった。

私が九時ごろ、鉱泉宿へでかけようとすると、てくると云って早朝に出発した。

「ちょッと、矢代さん」

た。あやかさんが、私を認めて、よびとめて、目をかがやかせ

「今日こそ鉱泉へはいるわ。つれてって」

「今日は日曜だから、又、混雑するかも知れませんよ」

奥ですもの」
「あら、日曜なんかで、混雑すること、ありませんのよ。山

まったく、そうかも知れない。先日も鉱泉へはいってみた

で暮しているようなものなのである。 の方はいつも人がこみあっていて、男女混浴だから、み浴しないと損みたいに、殆ど一日ゴチャゴチャ湯ブネで、こういう山奥の湯治場は、お湯だけが楽しみのお客だかの方はいつも人がこみあっていて、男女混浴だから、あやかの、私も少々うるさくて仕事ができなかったぐらい、湯ブネいと云って、私についてきたが、その日に限って案外の混雑

のあとからついてきた。

った皮肉な目で眺めながら、私たち二人づれと、あやかさんの湯道具一式を変に興のこもがら、ユカタでぶらぶら歩いている。私たちが追いつくと、私たちがブナの森へくると、丹後弓彦がステッキをふりな

「あなたも鉱泉? 一しょに行きましょうよ」「珍らしいね。奥さん、御湯治とは」

「僕は今日は郵便局長のところで碁会があるんだけどね」

るものだからさ。それで、会場へ向って歩こうとすると、自ると、嫌いのタチでね。会は常に何の会であっても、雑然た「ええ、だから、つまり、僕は碁は好きではあるが、会とな「あら、局長さんのお宅はこっちの方じゃないでしょう」

「生れつきのヒネクレ屋なのね。足の向いたついでに、鉱泉然に足が反対の方角へ向って歩いてしまうんですよ」

宿へ行きましょうよ」

そう言いながら、ブナの森のマン中へんから、道のない森「そう言われると、自然に又、足の方角が」

「ずいぶんヘンジンね」の奥へ曲りこんでしまった。

とも、一組で忽ち賑いを呈するという特殊性があるのである。一家ケンゾク引越し遊山という奴だ。だから幾組の客もなく田舎の湯治客は二人づれ三人づれなどというのは殆どなく、この日の温泉は全くカンサンそのものであった。だいたいいです。白いといえば、黒いと言うにきまった奴ですよ」「ああいうアマノジャクとはマジメにつきあわぬ方がよろし

我々のほかに客が全くないのだから、あやかさんは張番をいる。

あやかさんは大喜びで、タオルや石ケン、一式かかえて私

たのむ必要もなく、 のんびり三十分以上も湯ブネで遊んでい

私の仕事部屋をのぞきにきて、

「ここは、ずいぶん、田舎にしては、粋なお部屋ね」

が、ごめんなさいよ、とていねいに挨拶して、通って行った。 「そうなんですよ。はなれのこの部屋だけ、特別なんですよ」 目の下がすぐ渓流である。私の部屋の窓の外を、山の漁師

「あら、ここは庭じゃなくって、道なんですの?」

ごらんなさい。私もちゃんと釣竿を買ったんですよ。仕事の に澱みがあって、このへんで屈指の釣場なんだそうですよ。 そこから、谷へ降りる道があるでしょう。あの降りたところ 「こんな山奥には、庭も道も区別がないんでしょうよ。ほら、 あそこで釣をするのですよ」

「釣れましたの?」

あいまに時々窓から降りて、

釣道具も、この宿で売ってる最下級の安物だから、 「まだ一匹も釣れません。時間が悪いからですよ。それに、 アユだの

ヤマベだのイワナをつるには無理ですよ」

「釣れたら、見せてちょうだいね。じゃア、さよなら」 と、あやかさんは帰って行った。

だめだ。昼食をたべて、 は仕事ができなくて、 の珍客が引きあげて行ったりすると、落付かないもので、 やっぱり、どうも、 ちょッと釣糸をたれてみたりしたが、 あやかさんみたい ヒルネして、それから少しだけ仕事 な珍客がきたり、 そ

八時ごろから八時半ごろにかけて、四五人の人々が戻って これは乗合自動車の時間のせいで、 N町からのもの、

をして戻ってきた。

舎の乗合は一向に時間が一定せず、三十分ぐらいのヒラキは N町行きのもの、いずれも最終が七時前後に到着するが、田 いつも見ておく必要があるのである。

急いでも、歌川家まで一時間ほどかかるのである。 町発は五時なのだから、町へでると、大概五時の終発のゴヤ に戻ってくる人が多い。この村へつくのが七時前後だが、 ッカイということになる。七時前後に村に着いて、 近頃はめっきり人々の外出が多くなったので、夕食の途中 男の足で Ν

間を往復しており、このN村はそのちょうどマン中へんに当 で戻ってきた。F町というのは、 木曾乃さんの三人であったが、一馬と丹後がF町からの終発 っていた。どっちの方へも、 この日のN町からの終発で帰ってきたのは、木ベエ、京子、 バスで二時間足らず、 つまりバスはN町とF かかるの

ってきたが、宇津木秋子女史の姿が見えない。 F町発の終発はおくれて、一馬と丹後は八時半ごろ家へ戻

である。

終発にも乗っていなかったそうだ。 と私が一馬にきくと、乗っていなかったという。 N町発の

「君たちのバスに秋子さんは乗っていなかったかね

日曜で休診なんですわね。町で諸井さんもお見かけしたけど、 きくと、 終発には、 「N町からの終発には海老塚さんが乗ってらしたわ。 「丹後は碁会へ行かずに、 御一緒でなかったのよ」と、京子が私に言った。 F町まで、 のしたのかい」と私が

「ああ、 君たちのおかげで、 鉱泉宿へも行くわけに行かなく

胡蝶さんが不審顔で、

宇津木さんはお部屋でお仕事していらしたわ。疲れて、おヒ 中は人見が講演して、午後は私がメーキアップやら、実演し この村の青年会と処女会の方々に、講演と実演の会で、午前 てきたのですけど、私どもが朝九時ころここを出るころは、 「宇津木さん、どうなさったのでしょう。私たち、今日は、

あるばかり、姿は見えないということであった。 胡蝶さんは出て行ったが、部屋には書きかけの原稿が

ルネでも、してらっしゃるのかしら。私、見てきますわ」

'n 食事を終ったころ、 カングリ警部がぶらりとやってきたか

った。 「警部さん、又、事件かも知れませんよ」と、神山東洋が云

暗鬼という奴ですな」 「なんですか。脅かしちゃ、 いけませんよ。 あなた方も疑心

ならぬ例ですからな」 は、よその土地じゃ笑い話だけど、 「宇津木秋子さんの姿が見えないのですがね、大人の迷い子 ここのウチじゃア、 穏か

「朝の九時ごろ、自分の部屋で仕事中の秋子さんを胡蝶さん 「なるほど。いつから、お見えにならないのですか」

町へ、矢代さんは?」 巨勢博士はもっぱら撞球の熱戦中でして、他の方々は、 が見たというのが、唯一の消息なんですよ。私と土居画伯と 丹後さんはF町へ、三宅さん、京子さん、 木曾乃はN 一馬

「私はあやかさんと鉱泉宿へ。九時ごろ出かけましたよ」 結局みんな出払ってるんですな。 私たち撞球組は有って無

> きが如きものですからな。いったい、いつごろ、どこへ、お でかけかな

そのとき、 ツボ平のオカミサンが、

「私は九時半か十時ころ、 宇津木さまがおでかけのところを

お見かけ致しましたよ」

「どこで」

場でお水をおのみになりましてね、 「この広間でございます。 ああ、そうそう、ちょッと、 おでかけですか、とお訊 調 理

きしますと、ええ、ちょッと、散歩よ、と仰言いました。そ して、お草履のまま、 食堂の方から外へ出て行かれましたよ

うです」

「そして、昼食の時は?」

ございます」 がへったわ、何か食べさして、と言ってらっしゃる筈なので の御用意は致してあるのですから、お帰りになれば、 「そういえば、 御昼食の時も、お見かけ致しません。 お食事 おなか

て、発見された 宇津木さんはその翌日、 三輪山の奥の滝壺で溺屍体となっ

附記 性格について、 んな動機が違うんだなどと、まことにどうも何人寄っても猿智慧 愈 々、皆さんの御手並拝見ということになります。 アタピン女史や九州の四丁鼻先生など、犯人は何人もいて、 前々回の附記で約束の通り、巨勢博士は「不連続殺人事件」 親切千万、 事件も終幕に近づいてきました。 至れり尽せりの話と云わなければなりません。 所見の一端をもらしてくれました。 次回をもっ まことにも 打切り、 の

んでした。 が必要である、 るだけ小さい恥ですむように、探偵小説を作るとなると、菩提心 うしても、見込みがないらしい。どうせ恥をかくにしても、でき で、私の方から、ここまで親切に至れりつくしてやらないと、ど ということなどを、 私はこの年まで気がつきませ

です。 べく皆さんの被害を軽くするように 専 ら至れり尽している次第 まったく、大の大人に恥をかかせることは悪徳ですから、なる

オレは靴を買えばいいんだからな。 てこい、ソッとノートを調べてくるんだよ、賞金を半分やらア。 と、道義タイハイ、スポーツマンシップを失っております。 けたり、答案を合作しようや、ちょッとスパイやってくれ、 うるさいのに、困っております。賞金を山分けにしようと持ちか ちかごろは小生の身辺の人物を買収にかかるテアイが現れて、 日本小説の編輯員は私の身辺の一人物に、オイ君、犯人をきい

地なしと申さなければならないのでしょう。 を、分らないとは、よくよく因果なタチであり、 らつら思うに、これだけ懇切テイネイに分るようにしてあるもの くても尚、心を鬼にしなければならぬ小生も悲しいけれども、 ちゃんともう目的まできめて買収にかかるなどとは悲しい。 先ず、 同情の余 か つ

坂口安吾

## アリバイくらべ

三輪神社の前を流れる渓流がある。

三輪池も水カサが増す

もの渦があって、ここでは水泳も釣もできないのである。 をたたえている。ヒッソリ澱んでいるようだが、実はいくつ は陽の光のそそぐことが珍らしいほど深く落ちこみ、。碧の色 ぐらいの深いトロをなしている。 がちょうど三輪神社から曲りこんだ谷底で滝壺となり、 の山々の泉をあつめているもの、 と流れこむようになっているが、本来は水源が違って、 四方はきりたつ岩で、 平時も水量が豊富で、

渦の中で廻っていた。 和服姿の宇津木さんはこの水面に浮かび、ユラリユラリと

には格闘の跡など認めるよしもなかった。 明も相当量の降雨をみたから、足跡なども消されて、崖の上 山中の朝夕にはよく雨が降り、八月三日の夕方も、 いという証拠があるわけでもない。平地はヒデリつづきでも、 崖の上から突き落されたものらしいが、さりとて自殺でな 四日の未

ということであった。 だいたい食後三時間か三時間半ぐらいに殺されたものだろう して例の草林寺で解剖が終ったのは夕方、胃の消化情況から、 宇津木さんの屍体は翌四日の早朝発見され、警察医が出張

けで、食事はテンデンバラバラだ。 七時半には歌川家を出発しなければならないというようなわ 極めて不規則になっている。 近ごろの食堂は、 外出の連中が多くなって、時間も人数も 一番バスにのるには男の足でも

正確なところは分らない。大体兇行は十時半から十一時とい であるが、さすがの神山もこの日は自慢の時計を睨み忘れて、 も胡蝶さんも一緒で、だいたい七時半前後という一同の記憶 けれども、昨三日、秋子さんの朝食は私や京子も神山夫妻

う見当であった。

諸井看護婦、下枝さんらを広間にあつめて、 四日の夕食後、カングリ警部は我々、それに海老塚医師、

「まったく私も自殺したくなりますよ。毎々皆さんの御迷惑、「まったく私も自殺したくなりますよ。毎々皆さんの御迷惑、「まったく私も自殺したくなりますよ。毎々皆さんの御迷惑、「まったく私も自殺したくなりますよ。毎々皆さんの御迷惑、「まったく私も自殺したくなりますよ。毎夜時の後の出来事としまして、我々はこれをも一つの殺人と解して捜査に当ることが当然だろうと考えをも一つの殺人と解して捜査に当ることが当然だろうと考えをも一つの殺人と解して捜査に当ることが当然だろうと考えるだけの次第です」

と、八百屋みたいにクダケて出るところ、却々もって我々縮ですが、今回もよろしくゴヒイキに願います」いただく必要がありますので、毎々の御愛顧に甘えすぎて恐序と致しまして、一応みなさんの昨日のアリバイを承らせてであった。「さて、又、いつもの口上で恐縮ですが、捜査の順カングリ警部は先ずこう挨拶をのべた。彼は益々インギン

日はズッとN町へ行っておられたそうですね」「先ず順序と致しまして、三宅さんにお訊ね致しますが、昨

「それにしちゃア、

君のミレンは女々しかったじゃないか」

をあしらうコツを心得たものである。

木ベエはうなずいて、

かけて、終発で帰ってきたのです」早目にしてもらい、七時半前に出発しました。一番バスでで「僕はその前の日にツボ平のオカミさんにたのんで、朝食を

でしたか」 「その日、奥さんに何か変った様子をお気づきになりません

「すると日常も奥さんと御交際がなかったのですか」ということは、つまり、あの女が、僕とす実上夫婦でないということは、つまり、あの女がが、僕と事実上夫婦でないということは皆さん御存じの通りですれない奴でしたから、あとは皆さんの御想像にまかせますよ。が、僕と事実上夫婦であったことは皆さん御存じの通りですが、僕と事実上夫婦であったことは皆さん御存じの通りですが、僕と事実上、あの女は、しょっちゅう変った様子ですよ。「僕から見れば、あの女は、しょっちゅう変った様子ですよ。

態ですから、他人じゃなしに、敵ですな」「それはもう、全然、他人よりも疎遠ですよ。つまり交戦状

は御二方になかったのですか」て忘れがたいところです。それで、失礼ですが、和平の意志「なるほど。いや、不穏なる国際関係という奴は、身にしみ

々は、すでに離婚しているようなものでした」ですから、イヤな奴と和平の必要はないですよ。要するに我のですよ。国家は永遠かも知れませんが、人間は五十年の命「ありませんでした。国際関係と違って、これは宿命的なも

-94-

と、ピカーが遠慮なく口を入れた。

果てた、さもしさ、あさましさなんだ」 果てた、さもしさ、あさましさなんだ」 果てた、さもしさ、あさましさなんだ」 果てた、さもしさ、あさましさなんだ」 果てた、さもしさ、あさましさなんだ」 果てた、さもしさ、あさましさなんだ」 果てた、さもしさ、あさましさなんだ」 果てた、さもしさ、あさましさなんだ」 とは、また、うす汚い根 とじゃないか。宇津木さんよりも、お前さんの根性が見下げ はじゃないか。宇津木さんよりも、お前さんの根性が見下げ とは、また、うす汚い根 といが、尊公のミレンは、もう一つおまけがついて、ウヌボ いが、尊公のミレンは、もう一つおまけがついて、ウヌボ

いらしたか、そんなことも御存知ないのですね」「すると三宅さんは、その日、奥さんがどんな予定をたてて子であった。カングリ警部が要領よく、とりなして、本ベエは蒼ざめて目を怒らせたが、反撃の言葉に窮した様

「全然知るところがありません」

でしたか」

ければ、全然アリバイはありませんね」てきましたが、そんなところで僕の顔でも覚えていてくれな本屋をひやかすとか、そうそう、買物といえば、雑誌を買っ

でもあるわけですか」か。御当家の皆さん、N町行きは一番バスというような習慣「それにしては、一番バスとは早々の御出発ではありません

答える者がないので、木曾乃夫人が、

ございますから、概して二番で参るようでございます。昨日も、女は、支度や何か、それに歩く足も殿方にくらべて遅う「昨日は私もN町へ参りましたが、二番で参りました。私ど

京子様と御一緒になり、又、三宅様とも御一緒になりました京子様に別れ、私は買物を致したりして、又、偶然終発で、とも御一緒になりました。私どもはN町の大正通りで降りて、は京子様と御一緒に参りまして、停留場で看護婦の諸井さん

「矢代夫人も御買物ですか」

のです」

カングリ警部は頷いて、次に、諸井看護婦に、間という呉服屋の奥様。私昨日はズッとそこにおりました」この土地に住んでおりましたから、そのころのお友達で、本「いいえ、私、お友達をお訪ねしましたのです。二三年前、

るわけではないでしょうな。あなたは、どちらへ、おでかけさか、あなたは、患者たちにも、警官なみに突き放して答え「私はどうも、あなたに物をお訊きするのが苦手だなア。ま

できるだけ、こまかく教えていただきたいものです」「それだけの御用件で終発まではかからないと思いますが、「昨日は日曜の休診日で、薬を仕入れに参りました」

「あとは、ブラブラしていました。こんな山奥から町へでれ

っともで、恐縮です」「いや、ごもっとも。あなたの仰言ることは、いば、誰しもブラブラ致します」

つも、

方が覚えていてくれなければ、どうにもならない。ひやかしたりしたが、顔見知りがいるわけでもないので、先しているのは京子だけ、木曾乃さんは色々の買物をしたり、バイについて、こまかく一々訊ねかけたが、結局、ハッキリカングリ警部は如才なく応酬しながら、各人のN町のアリーカングリ警部は如才なく応酬しながら、各人のN町のアリ

とどけてお スで帰ってきたというが、 スの終点の 諸井看護婦は二番でたって十二時三十分にN町につき、 出来てい その中間 前 いて、町をぶらつき、二時半の発車前に戻ってき る薬の包みを受けとってバスに の二時間は、 に ある薬屋で薬を仕入れて、二時三十分発の バスがつくと先ず薬屋へ註文書を ただ町をぶらついていたというだ のって帰ってき バ

時三十分。それから終発の五時まで、 というだけであるから、 最もひどい のは木ベエだ。 始発でたつとN町 ただブラブラしていた へつく の が十

けで、

アリバイはなかった。

りそうなものじゃありませんか」 あなたの顔を先方が見覚えているというような交渉ぐらい有 ·然し、三宅さん、六時間半ですよ。 どこかーヶ所ぐら

然意識 かり、 から、 いうものは、 「それは常識論ですよ。人間には色々の性癖 それ は 型通りに行くものじゃアありません。 バラバラで統一された全景がないものです。僕はそ がどの方角か、 ただ同じような道と家と森と寺の記憶があ どの道 の次にどの道 があ 知らな があるか、 るも い土 の るば 地 で کے す

ŧ のバ その間 アリバイをつくっておいたでしょうがね はアリバイを意識して生活しているわけじゃアないから。 ラバラの諸方の位置に、 こんな事件が起っていることを知っていり 人 間 ...との交渉がなかったとしても、 散歩をたのしんでいただけで、 仕方がない。 ちゃ

カングリ警部はうなずいて、

乗合わしていましたか」 ところで、 三宅さん、 番バ スに、 どなたか御存知の方が

> 僕は、 しい いえ、 人の 顔など見ないタチだから、 僕はこの村に顔見知りもありませんから、それに 気がつきませんよ」

「海老塚さんは御一緒ではなかったのですか」

「一緒ではありません」

と木ベエが答えた。

「すると、 二番バスには矢代夫人、 神山夫人、 諸井さん。 海

老塚さんは?」

海老塚は、 何をツマラヌことを、 とい う顔付 で、 そ れ でも

返事だけはした。

「三番は 何時ですか」

「僕は三番です」

海老塚が答えないので、 警部はバ スの発車時刻表をとりだ

した。 時刻表は次のようなものであった。

F町発 N村着 町着 10.30 12.30 8.40 7.00 10.40 9.00 2.30 11.00 12.40 5.00 3.10 1.30 5.00 6.40 8.30 N町発 → N 村着 F町着 9.20 10.50 7.30 11.00 12.30 9.00 2.00 10.30 12.20 2.30 5.00 4.20 6.00 6.20 8.30

「海老塚さんは、 <u>+</u> 時四十分発、 午後二 時三十分N町

なるほど」 カングリ警部は心得たもの、 ヒネクレ医者との問答を省略

して、今度は一馬に

「歌川さんはF町へ行かれたのでしたね」

から、午後零時半ごろ親戚へついて、三時すぎにはそこを出始発で出発して終発で帰りましたが、歩行の時間があります「そうです。F町から又一里ほど山奥の親戚へ行ったのです。

発しました」

ただし下りの場合ですね」
ただし下りの場合ですね」
ただし下りの場合です。距離は一般と同じことで、この家から、だいたい僕の並足で、どちらも、一時間十五分ぐらい、落の停留場へでるのです。距離は一般と同じことで、この家かそれに、私たちは、F町へ行くときは、N村へでずに、T部行の停留場まで三宅さんと御一緒ではなかったのですか」
ただし下りの場合ですね」

「ハハア。そんなコースもありましたか」りませんが、合計して一里半ちかくはあるでしょう」宿まで、半里余り、鉱泉宿からT部落までは、一里まではあ降りて行くとT部落の停留場へでるのですよ。ここから鉱泉「つまり、ブナの森を通り、鉱泉宿を通りこして九十九折を「T部落と申しますと、どちらの方へでるのですか」

やむなくブラブラという口でしょうが、何時のバスに乗られたのですよ。要するに丹後さんも、自然に足がF町をむいて、局長の碁会にでておりまして、御手合せをたのしみにしてい側へ歩きだしたということですが、実は私もヨミスギと二人、「丹後さんは局長の碁会に出席される筈のところが足が反対、カングリ警部は珍らしそうな顔。こんどは丹後に向って、

鮎を食って、ヒルネをして、帰ってきましたよ」 いうのがそれでしょう。F町へついて当ズッポウに歩いていらんなさい。なるほど、すると、十時五十分N村発F町行とがスの通る道へでましたね。折からバスが来かかったから、「九時ごろ、矢代寸兵氏とあやか夫人とブナの森で別れて、下か時ごろ、矢代寸兵氏とあやか夫人とブナの森で別れて、「九時ごろ、矢代寸兵氏とあやか夫人とブナの森で別れて、中本ぬいて、あたりを見廻す。警部がそれと察してライターー本ぬいて、あたりを見廻す。警部がそれと察してライターを

たのしかったのですわ」もぬるい湯ですもの。けれども私がぬるま湯がすきですから、ちかく、湯ブネにつかって遊んでました。燃料節約で、とて「いいえ、四五十分遊んで、すぐ戻ってきましたの。三十分 タトー

それで、奥様は、鉱泉宿にズッとおられたのですか」

「相分りました。その方が碁会よりも保健的で、結構ですよ。

「存じませんけど、白く濁っているのです」「あそこの泉質は何ですか」

う。
この辺の名物の蚊がいないので、それだけ何かがあるのだろこの辺の名物の蚊がいない。然し、あの鉱泉の近辺だけは、のも見かけたことがない。かすかに特異の臭気はあるが、そる。傷にきくという話であるが、別に病人が湯治にきている私も毎日はいっているが、実は何泉だか、知らないのであ

カングリ警部は最後に私に向って昨日の動勢をたずねたが、

鉱泉につかってヒルネをしたり、それからいくらか雑文をか き、仕事ができなかったので、ちょっと釣糸をたれてみたり、 私はあやかさんと九時ごろ家をでて、九時半ごろ鉱泉宿へつ いて夕方戻ってきたことは、すでに述べた通りである。 すか」

筈で、彼が特別、バスの時刻表を睨めまわしてチクチクとつ リ警部もぬからず、そのへんはとっくに思いめぐらしている バスで帰ってくるということも考えられるからであろう。 ても、引返して、秋子さんを殺しておいて町へ戻り、五時 のバスで行ったかどうかも明かではなく、始発で行ったにし ついているのは、たとえば木ベエの場合などは、実際に始発 史を殺してくるという芸当が不可能なわけではない。 とがないから、私が釣のふりをして、三輪山へ行き、秋子女 然し、もとより、私のハナレへは宿の者もめったに来るこ

演と実習をやっており、又、神山とピカーは巨勢博士と共に 小六、これは十時から三時まで青年会と処女会の連中に、講 完全に容疑者のうちから除外できるのは、胡蝶さんと人見

「ところで、海老塚さん」

賭けの玉ツキにかかりきっていた。

です」 十二時四十分までの行動について、説明していただきたいの 「あなたは十二時四十分のバスでN町へ行かれた。九時から カングリ警部は改まって海老塚を見つめた。

塚さん。私が忍んだという意味は、私はあなたの人権を尊重 尊重して、ずいぶん忍んできました。よろしいですか、 「よろしい。海老塚さん。私も今日までは、あなたの人権を 例 の如く、ギラリと目を光らせて、答えなかった。 海老

> という意味です。今日は、 して下さらなければ、私の方から申上げますが、よろしいで した、それに対するあなたの返礼は、我々への侮蔑であった 、もう、忍びません。 あなたが説明

あらわに軽蔑を示して、ソッポをむいた。 海老塚は忿怒と反抗に燃え狂う目をクル リと一廻転して、

を変えたらしく、じゃア、釣殿にいるから、下枝さんをちょ す。それをきくと、あなたの顔色が変った。 諸井さんは先刻の話の通り、二番バスで町へ出かけておりま 女中の八重に、諸井看護婦をよんでこいと命じた。ところが バッタリ会った筈ですね。あなたは歌川家の台所へまわって、 門をくぐりました。そのとき、散歩にでかける宇津木さんに あなたは昨日、九時四十分、乃至、五十分ごろ、歌川家の裏 ッとよこしてくれと云って釣殿へ行きました」 「では、 カングリ警部も堪忍ブクロの緒が切れた様子であった。 私から、代って、あなたの行動を説明しましょう。 急にあなたは心

の

ていたのか、八丁鼻とヨミスギが海老塚の左右に寄り添うよ に海老塚を見すくめて、目じろぎもしない。かねて命を受け と叫んだが、カングリ警部はビクともせず、突き刺すよう

「無礼者! 嘘だ!」

海老塚は蒼ざめてブルブルふるえて、

らさげて待っていて、お前はたしかに胸の病いの様子がある。 そく釣殿へ行きました。すると、 うに立っていた。 「八重から伝言をうけた下枝さんは、何事だろうかと、 あなたは、もう聴診器をぶ

今日は健康診断をしてあげよう、

と下枝さんの手をとりまし

した」
も、ハダカにしてしまうぞ、と、やにわに接吻しようとしまけて、コラ、言われた通りにしろ、さもないと、抑えつけて用がございますから、と答えると、急に飛びかかって押えつ感じて、いえ、病気ではございません、それに今は、ほかにた。下枝さんは、あなたの様子がただ事ではないのに恐怖を

「デタラメ言うな! 無礼者!」

が左右からその腕をかかえた。まるで躍りかかるように殺気立って叫んだが、二人の刑事

この十二時四十分のバスは二十分おくれて午後一時ごろN村 あなたの計画は破れ、 叫しました。幸いに、このとき池を散歩にきたお由良婆さま 飛びかかり、とうとう抑えつけたとき、下枝さんが悲鳴を絶 す。さて、海老塚さん、それから、あなたがバスに乗るまで、 しましたが、その時が、十時か十時十分ごろだということで なたは、それから、狂気のように、苛々と、歌川家をとびだ れで足りなければ、お由良婆さまに来ていただきますか。あ した。いかがですか。 が悲鳴をききつけて、釣殿をのぞきにきました。かくして、 あなたは振り放されては、飛びかかり、振りはなされては、 へつきましたが、その一時まで、どこで、何をしていました 「下枝さんは、驚いて抵抗しました。逃れようとしました。 カングリ警部はますます冷然と海老塚を見すくめて、 下枝さんは虎口を脱することができま この席には下枝さんもおりますが、そ

「バカヤロー。キチガイ!」 海老塚はランランたる眼光でカングリ警部を睨んでいたが、

ングリ警部は手で制した。いて、部屋を出て行った。刑事が追って行こうとすると、カーやにわに両腕をふって、とびあがって絶叫すると、ふりむ

すると、海老塚は、廊下のところで振りむいて、

「キサマらは天罰によって皆殺しにあうぞ。キチガイ共め!

大馬鹿ヤローめ!」

ゴリラのように手をふって、ふりむいて、去った。

「なぜ、逮捕なさらぬのですか」

と、神山がきいた。

「なぜですか」

「何の証拠もありませんよ」カングリ警部は平然と答えた。

二十 第一級の容疑者

のである。けて出た室内に、机の上に一枚の紙片がおかれていたというやかさんが青くなってやってきた。部屋へ戻ったら、鍵をか善警部の取調べが終って、部屋へ戻ったと思うと、一馬とあ

ペンで、それは今までの例と同じく歌川家の用箋を用いたものに、

## 八月九日、宿命の日

と書かれている。

ついており、我々全員、草林寺へでむいて、解剖室から元のその日の夕方は秋子さんの屍体を火葬場に送るためにゴタ

本堂へ半分化けそこねているような乱雑なところで、お経を

うけたまわり、車につんだ秋子さんを見送って、戻ってきて、 たのであった。 カングリ警部の取調べを受けてようやく自室へ引きあげてき であり、そのときは自室に戻る余裕がなくて、食卓につき、 やがて食事となった。一馬とあやかさんは何かにつけて多忙

一馬夫妻と私は巨勢博士の部屋をたたいた。

々の話をきいても、一 博士はトランクをひっかき廻している最中であったが、 向に驚きもせず、

「ハア、そうですか」

とはない、ただ一足の靴下にすぎないのである。 物か見つけだして、ようやくホッとしたのを見ると、 益々多忙にトランクをひっかき廻している。そして彼が何 何のこ

「何だい、その靴下は? 何かの証拠物件かい」

あの子を訪ねるコンタンなもんで、あの子はキレイ好きです 「いえ、あした、旅行しますもんで。ついでに、東京へでて、 とイヤ味を云ってやると、エへへと笑って、 靴下だけは何です、 僕はいつも彼女の命令によって心

掛けているんでさア」

から、

敗北遁走というわけかい」 と、嬉しそうである。

いいえ、勝利にいたる道でさア」

と、一つ息ごんでみせて、

っちゃって、まったく、失敗しましたよ。しかし、なんです。 面目ありません。タマツキの賭なんかに夢中にな

命の日か。八月九日までには帰ってきますが、歌川先生御夫 犯人は逃しゃしません。何ですって?(ああ、 八月九日、 宿

> 昼も、一人歩きはつつしんで、なるべく数人かたまって暮ら びつけるのも結構です。食べ物にも御注意下さい。それから、 妻は呉々も御注意下さい。部屋の鍵は紐でグルグル巻きに結

うことですな」 して下さることでさア。要心第一。人を見たら、 巨勢博士は今度は新しいネクタイをとりだして、思わずニ 人殺しと思

「なんのために、旅行にでるのさ」

我

コニコしている。

私が、こうきくと、

「物的証拠を探しに、 「証拠は、ここには、 です」 ないのかね」

に於いて。然し、物的証拠がないのですよ。そいつを探しに、 ぬきさしならぬ姿を現しているのですがね。それから、心理 「ハア、ありません。ただ、犯人は、時間と空間の関係に、

でかけるわけでさア」 「じゃア、君は、犯人を知っているのか」

よ証拠がなきゃ、時間と空間の算式だけで、法廷へもちだし だす証拠にはなりかねますんで、然し、なんでさア、いよい なんしろ、時間と空間の算式なもんで、こいつは法廷へもち ないという、こいつはハッキリしたもんでさア。けれども、 まさア。 「ハア、それはもう、どうしても、その御仁でなければなら ヤケでさアね。 散々なめられちゃって、まったく、

くさったな」

「どこへ行くのだい」 と、頭をかかえた。

「方々ですよ。天下僕」なく、どこまでだって、こうなりゃ、

-100

意地とヤケクソで、水の中でも、くぐりまさア」

と、てれたように、ニヤニヤした。

るのは十二名、巨勢博士が旅行にでると、十一名になる。ん、内海、秋子さんが殺され、海老塚が遠ざかり、残っていころで、この食卓の顔ぶれからは、王仁、珠緒さん、千草さみんなそろって、食卓についた。みんなそろってと云ったと翌朝の食卓は、秋子さんの遺骨を迎えることもあるので、

神山東洋が巨勢博士に、

いかな」

「巨勢さん。物的証拠をさがしに旅にでかけるそうですが、「巨勢さん。物的証拠をさがしに旅にでかけるそうですが、

「巨勢さん。物的証拠をさがしに旅にでかけるそうですが、

巨勢博士はニヤニヤ返事をしない。

ピカーが口をだして、

「じゃア、宇津木女史や王仁や内海は、どうなるんだい」「そいつは分りませんよ。動機は単純明快と申したのです」単純明快か。犯人は誰だい? え、わが悪徳弁護士先生!」形に見立てられて、恐縮だな。加代子さん殺しが目的なら、「へえ、オレをねらえば殺人鬼か。それは又、とんだデク人

「まア、それは別と致しまして」

丹後が冷笑するように言う。

じゃ、うるさいもので、と、神山弁護士、話をさばくに巧みであるが、文士が相手

「何が別なの?」

と、丹後がきく。神山はちッとも騒がず、

誰も返事をしなかったが、神山東洋は平気なもので、ひとつ判定を下そうじゃありませんか」

「先ず、千草殺しの場合ですな。火葬場からの戻り道、単独「先ず、千草殺しの場合ですな。火葬場からの戻り道、単独「先ず、千草殺しの場合ですな。火葬場がある人の場合ですがあるが、一馬さん、一馬さんががないがら、これもケンギの戻った人は、みんなケンギをまぬがれない。二三人連れだで戻った人は、みんなケンギをまぬがれない。二三人連れだらん、丹後さん、矢代さん、以上五人の方にはアリバイがながら、これもケンギな。第一着の土居画伯、第二着の内海さん、一馬さんが組みで帰って、草林寺で戻った人は、みんなケンギをまぬがれない。二三人連れだで戻った人は、みんなケンギをまぬがれない。二三人連れだらん、丹後さん、矢代さん、以上五人の方にはアリバイがなる。第一着の土居画伯、第二着の内海さん、一馬さん、三名の方にはアリバイがない。第一番の土居画伯、第二番の内海さん、一馬さん、三名の方にはアリバイが、手換といり場合ですな。火葬場からの戻り道、単独により、千草殺しの場合ですな。火葬場からの戻り道、単独

誰も口を入れる者がないから、神山夫人木曾乃さんが口を

はさんで、

しょう バイの必 「でも、 要もないでしょうよ。 着の土居さん、 第二着の内海さんは、 あたりまえに歩い たお時間で 別にアリ

神山は我が意を得たりとうなずい

どのふざけた遊びが許せたわけで、その虚をついて、しめ殺 に限って、ケンギの外におくべきかも知れませんな。 画伯は内海さんの先を越して戻られたから、まア、土居画 した、そう想像ができるでしょう。 いようですな。つまり、非常に親しい同志だから、 て、フロシキごとしめ殺されていたというのが、普通じゃ い、千草さんが、顔にスッポリとフロシキを目隠しにかぶっ のとき、千草さんを殺して来た でかけたが、千草さんが見えないので戻ってきた。 つですよ。なぜなら、私はこの村の地理にくわしいから心得 「それもある。内海さんは千草さんとアイビキに三輪神社 容疑者から、まぬかれがたいようですな。 土居画伯も単独だから、 単独は、 かも知れないですよ。 すると、 ともかく、 内海さんなん その間に 、ケンギの一 、目隠 然し、こ 私は然 い った .土居 じしな 佰 か な ^

> こに、 ケンギの外におくべきでしょう。 ヌケ道を一ッ走り、みんな、 の の人は、みんなケンギをまぬがれ 場合は内海さんよりも先に帰っているから、 もう一つ、問題がある」 やれますよ。 そのほかの方はいけ ないのです。 然し、 これ ただ土居画伯 ですな、こ は かない。 きまア、

神山は人をくった顔付であった。

千草さんが殺されていたとしたら」 時まではアリバイがあるのですが、 そのあとの一時間は明白ではない。 発の千草さんを見た人はない。要するに千草さんが何 まで家にいたか、五時ごろまでは見た人がいますけれ 井看護婦の証言ですよ。ところが、そのほかの人々は六時出 たい、千草さんが六時ごろアイビキにでたという、 主義ですが、問題が問題ですから、 「私は元来この場所におられぬ方々については言をさけたい 実は六 諸井看護婦は六時から八 仕方がありませ 時以前 これ すでに ども、 は諸 つ

線、偽証、却々額面通りに受けとれ 気配は、 を隠すことができなくなってしまった。 「ともかく、田舎のアンチャン、 それまで、一向にとりあわぬ顔付の一同も、に 気にかけていないように、とりすまして、 カアチャンの犯罪でも、伏 ないもので、必死 神 山 わかに緊張 の そんな 知

通説です。 ていらした。 廊下を見晴らす位置に土居画伯が目玉をむいてガンバリ通し 驚くべきものがあるものですよ」 「さて、次に、 彼は興をそそっておいて、すぐ、 然し、 だから、二階には犯人がいない筈だというの 内海殺 土居画伯が酔っていた、 しの場合ですが、このときは、二 話題をうつした。 ということは、

ても、

山へでると、三輪山を一廻りして歌川家の裏門まで戻ってき

あたりまえの道を歌川家まで歩いたのと、十分か十五

こういうヌケ道があるから、

単独

低いという程度のも キコリが歩くような、

のです

がね。ともかく、

この間

道

を三輪

輪神社へでる間道があるのですよ。道というよりも、

まれに

そこの草だけが踏まれて生え方が少し

火葬場から峠へ上るでしょう。

あそこから、二

ちょッと人目につきませんが、谷をわたって三

三町くると、 ていますが、

分の相違しかないのです。

-102-

すがね。便所は土居画伯の鎮座の位置の反対側のことですか所へ行っても、土居さんもインネンをつけなかったと思いまさんあたりからは、相当はなれているのだから、ふらりと便顔をだしても怒鳴りつけられたかも知れませんが、もう丹後下の位置に近い人々、一馬さん、巨勢さんなどは、ちょッとっぱり考慮しなければならない。土居画伯が鎮座まします廊

彼は面白そうにジロジロと人々を見まわした。

らな」

ない。決して、実際の真理を洞破しているという性質からきと見せかけて、階段を下りることができるように出来ていまと見せかけて、階段を下りることができるように出来ていまと見せかけて、階段を下りることができるように出来ていまその次が三宅さんと宇津木さん、その向いが一つ空室をおい「丹後さんと向いあって人見さん御夫婦。丹後さんの隣は私。

「まア、まア、矢代さん。これは単なる可能性を論じているたか、ということじゃないか」とよりも、問題は、私が便所へ行ったか、それをピカーが見て内海を殺せると云ってるようじゃないか。然し、そんなこ「君の言うようじゃ、まるで私なんか、いつでも階下へ降り

ているものではないのだから、私も癪にさわって、

「だからさ。ピカーの酔っ払っていることをとりあげる以上、私は目下、単なる可能性の限界を申上げているのです」の記憶はハッキリ致しておらぬ始末で、そこにつけこんで、にすぎないですよ。あいにく、土居画伯は酔っ払って、当時一まデーまデー条件さん。これに単なる可能性を論してしる

「こうに、ふし。 こうない 四型 うっこう ぶんにないないったのは、あやかさん一人だけじゃないか」も、巨勢博士も、便所へ行くことができた筈だ。外へでられ丹後の部屋から遠方だけを問題にするのは当らないさ。一馬

とができた筈です。然し、廊下の遠い方なら、たぶん、土居室内の者は、土居画伯の喚き声によって、その状況を知るこなど、近い位置から扉をあけると、土居画伯は噛みつくようは酔っ払って翌日の記憶にないかも知れませんが、私たち、は酔っ払って翌日の記憶にないかも知れませんが、私たち、はか、近い位置から扉をあけると、土居画伯は噛みつくようほど、丹後さんを限界においたのは、おかしいですな。一馬によったくです。これは私の推理のあやまりでしたな。なる

たらしい。神山はすぐ、話をかえて、 一座はどうやら、今度は、その真理によって、説得せられ 103-画伯は喚かなかったに相違ない」

で、文句を言う気もない様子であった。りはなしているが、ピカーはもう、うるさいや、と言う顔付神山は加代子殺しをピカー殺しの間違い説からアッサリ切

ほか、 老塚、 数分間をお 最もケンギをまぬがれることができません。 λ 入し得た者は、 「加代子殺しは問題ですよ。この場合、毒薬は、 及び、 加代子さんとコー て投入する時 小用に立った、 巨勢さん、 調理場にいたツボ平夫妻、 ヒー茶碗をとりかえた土居画 三宅さん、 間 あやか夫人、 は ないのであります。 それに、 京子夫人、 木曾乃、 むしろ、 、私です。 ある特定の ح 八重、 佰 れ 土 一馬さ 居画 その を投 海

伯が、 ピカーは勝手にしやがれと言わんばかり、 超特別に疑られて然るべき立場にあります」 とりあわ なか つ

た。

れ、若しも新らたに客人がふえた場合は、土居画伯同様、カ川家のコーヒー茶碗は土居スサノオノミコトによって破壊さ して、 毒薬は土居画伯のコーヒーにはいっていたことから推して、 ませんよ。 しが狙いとすれば、 とですな。 犯人が知っていなければ、 ケたコー かは知らないのですよ。更に、又、それ以上の大問題は、 茶碗はカケているとは はそれを見分けることができても、 「然し、 居画 常にそれを取り扱っているツボ平夫妻、 はとるに足らずと見るものですが、 ヒー 問題は、 次に、 私は犯・ 茶碗を割り当てられる運命にある、このことを は何 ح もし又、犯人は土居画 人は元 の ケンギの第一はコー ر الا 知っていても、 カケてい 々加 この犯行はなりたたないというこ っても、 代子殺し るコー 他の我々は、土居画 最 大 あ どのように ヒー [伯でないとすれ へのケンギをまぬ 狛 ヒー茶碗をとり いで、 茶碗 さて、 八重、木曾乃 ということで 土居画 . カ 加代子 ケて かえ 伯 い 暗 歌 る の

> 理で、然し、 るには、 ような火急の場合による手違いも有り得たろうと思われます。 こでトッサに目についたカケ茶碗に毒薬を投入した、という 子さんのコー は知ら を知っては 居画伯にくばってしまった。 ていた、 ケ方の少い は当家に精通したものに限られている筈であります」 カケたコー 以上のべました通り、 はいたが、 人の予定によれば、 な それを給仕人の八重が、 かった。 この家の調理場の事情に精通しなければならない道 ヒー茶碗を用いるであろうということを知ってい 方の茶碗、 い 一々コー 元来、 ヒー た。 然し、 茶碗がカケたものである筈のことを知っ これが、 当日は加代子さんにくばられる筈に . L 加代子さんの殺害を企む以上、 加代子さんがこの食堂へ現れた場合は つまり土居画 カケた二つの茶碗の正確な見分け方 茶碗をしらべる余裕が 一つの場合。 あるいは又、 うっ 佰 かり常々の のコー ŧ 犯人は 一つの場合は、 L なかった。 かね 茶碗 習慣通 そ の犯 て加 は り土

代 て そ

ぬ に十一名出席 なるのかね。 ったようじゃないか。王仁や内海や宇津木さんの場合は 神山君 私はいささか腹にすえかねて、 殆んど、 っ 話 して きまっているようなものではないか」 の様子では、犯人は、 歌川家の遺産問題が犯罪の動機とすれば、 いるが、 犯人 たるべき人 歌川 家の遺 物 は、 産問 題ときま ŧ どう

犯人がいるかも知れません。 断定できないことですよ。同一の犯人かも よるか、 「それはです 犯人によって、 別の 犯人によって行 な。この幾つか 各々バラバラに、 場合によっては、 の犯罪が、みんな同 ħ ているか、 事件が構成され 知 れませ 幾つかの れ は の犯 ڔؖ にわ ているの 別々 かに 別の

犯人は、

加代子さんのコー

ヒ |

茶碗はカケた茶碗であること

の

口をだした。

にして、次に、宇津木殺しの場合を見ようじゃありませんか」 かも知れません。然し、その問題に就いての考察は後まわし 神山は犯人を見ぬいているような落ちつき払った口ぶりで

も 亦た けです。次に一馬さんはF町の親戚へ行っておられて、これ 推定時間十時半乃至十一時には完全にアリバイが成り立つわ では同じバスに乗り合わせていたのですから、これ又、犯行 当家を出発する必要があり、十時四十分から十二時三十分ま 京子さん、諸井看護婦、木曾乃、この三名はその一時間前 た人物のうち、二番バス、つまり十時四十分N村発に乗った ん御夫妻、 せていましたからな。次には、演劇講習会へ御出席の人見さ の三名は、 巨勢さん、 先ず、あいにくですが、タマツキゲームの三人組、土居さん、 あった。 「一昨三日は朝食後夕方まで完全なるアリバイをもつ人物は、 ほぼアリバイに疑いはないようですな。 これもアリバイは完全です。次に、N町へでかけ 私の三人を筆頭にあげなければなりませんな。こ ちょッと便所へ立つのももどかしいほど角突き合 さて、 あとに に

相当の曲者ですよ」

丹後は黙して答えなかった。

にはちゃんと街道へでて、乗りこんでいるぜ」「僕は君、ブナの森からブラリブラリと、十時五十分のバスと、丹後弓彦がねむそうな目を案外キリッと神山に向けて、「これは、又、おどろいたね。僕も亦、容疑者のクチかい」と、神山はちょッとてれくさそうに、ニヤニヤした。

残りました、御五ツ方」

たしか時計をお持ちでないようですが、拝察するに、ここ十全然御時間の観念がお有りではないようですからな。先生は「けれども、失礼ですが、丹後先生、先生のブラリブラリは、

べた上で、顔つきかなんか、見にくるだけのことなんです。 のしゃるんじゃありませんか。先生は十時五十分のおつもり おっしゃるんじゃありませんか。先生は十時五十分のおつもり なた上で、顔つきかなんか、見にくるだけのことなんです。この村の者で、十二時二十分のバスに先生と乗り もちゃんと知ってることなんですよ。あのカングリ警部 もちゃんと知ってることなんですよ。あのカングリ警部 で、十二時二十分のバスかも知れませんぜ。実は証拠がある で、十二時二十分のバスかも知れませんぜ。実は証拠がある 年か十五年間、先生は時計を所持なさらずに、生活していら

を犯して、又、もどる。そして夕方五時に何食わぬ顔、バス乗ったにしても、N町から、様子を変えて戻ってきて、兇行も、なきにしもあらず、ですな。次に三宅さん。三宅さんがから、鉱泉組の矢代先生とあやか夫人、この御両名は、例の「さて、宇津木殺しの可能の方は、ただ今の丹後さん、それ

疑者を、もう一度、改めて、ならべてみましょう。えをとっておきましたから、ただ今申上げた四ツの事件の容「実は、オセッカイのようですが、私はかねて、ちゃんと控神山はニヤニヤしながら、フトコロから手帳をだした。

件の容疑者をまぬがれることができません」

れから、最後に、海老塚先生、以上のオン五ツ方は、この事

に乗って帰ってくる。それも不可能ではないようですな。

宅先生。丹後先生。但し諸井嬢の偽証の場合可能也。 千草殺し 土居画伯。内海先生。一馬先生。矢代先生。三

三宅先生。矢代御夫妻。その他、母屋の住人。 内海殺し 丹後先生。人見御夫妻。神山夫妻。宇津木先生。

一馬御夫妻。矢代御夫妻。巨勢博士。海老塚先生。加代子殺し、土居画伯。ツボ平夫妻。神山夫妻。三宅先生。

宇津木殺しの丹後先生。あやか夫人。矢代先生。三宅先生。

海老塚先生。

あった。 動機に関係のある人物が容疑者の中に現れてこないのですな」 上四ツの バラであるのに比べて、最も主たる犯行に思われますが、 は明らかに動機に一貫性があり、他の四ツは各々動機がバラ 人事件のうち、多門殺し、珠緒殺し、 後先生。さて、 殺しにアリバイがあります。 能性をもつ方は、矢代先生。 この説明は人々に深い印象と、多くの興味を与えたようで 以上のようになりますな。 全部に可能。 事件の共通の容疑者を調べてみますと、この主たる 皆さん。まことに奇妙な話ですよ。 。三ツの事件に可能な方は、 矢代先生の奥様は最後の宇津木 通観しまして、全部に通じて可 次に三宅先生。この御二 加代子殺し、この三ツ 海老塚先生、丹 七ツの殺 方だけ

る一貫した計画殺人であるか。前者の場合は、先ず、常識上、がって、各々犯人を別にする犯罪であるか。同一の犯人によ第一の問題は、この七ツの事件は、動機のバラバラな、した「すると、これはいったい、何事を意味していますか。先ずと、神山は、悠々、落付きはらって人々を見渡した。「さて、これからが問題ですよ」

先ず、 な。 偵の能力なしに、徹底的に、 時に探偵的才能もあるわけですが、 先生方は天才的であらせられる。 りだす商売ですからな。然し、我々が平凡なのに比べると、 これは、 素質をもっておられる、という意味でもあります。ただし、 らですよ。 は違いますよ。探偵は、つくる人ではなく、見つける人だか 罪者ですよ。いわゆる探偵小説の流儀によりますと、 可能なことですな。それはまったく、文学者は、大概、 不可能ですな。テンデンバラバラに殺し合う、そんなことは、 べようもありませんが、 いうことは、逆に、文士の皆様方は、たいがい、大犯罪者の く、それが真理ですよ。そしてですな、それが真理であると ない方だから、大探偵の素質があるのだそうですが、まさし は大犯罪者の表と裏だと申しますが、そうじゃないようです 小説をつくる文学者は、大犯罪者の裏と表ですが、 いかに芸術家の異常世界に於きましても、 弁護士にも当てはまります。これ又、皆様方には比 矢代先生の御説によると、巨勢博士は小 ともかく、 ただもう、 平凡な我々は これも、 天才的な先生方は全然探 大犯罪者の素質だけ 人間関係をつく いささか不 犯罪者と同 、大探偵

まり、 ょ。 合には、 件を構成したか、 つも二つを同時に含めているような笑い顔をする奴であった。 「この七ツの事件を、 この犯行のどの一つかが、 犯人の狙いなんですよ。 しからば、 気の弱そうな笑いと、嘲弄するような笑いと、 ということが問題になりますが、 何故、 同一犯人の一貫した計画殺人と見る場 犯人はレンラクのないバラバラ事 真の動機をくらますためです あるいは、 いくつかが、 これがつ

をお持ちなのですな」

工が必要か。なぜならば、動機が分ると忽ち犯人が分ってし かすための細工にすぎない犯罪ですよ。なぜ、そのような細 の真に目的とする犯罪であり、他の犯罪は、その目的をごま

神山東洋は、 巨勢博士と同じことを言いだした。

「動機は何だい?」

まうからですよ」

と私がきいてやったら、

「さて、その動機の問題ですがね

と、又、変な含み笑いをした。

ヤツガレ如きが動機を云々する手はありませんよ。最も動機 も利害の大なるもの明白なるもの、 の明白なるもの、必ずしも、犯人の真の動機とは限らず、最 「なにぶん天下の大犯罪者が一堂に会しておられるのだから、 必ずしも、 犯人の真の目

的にあらず、 巨勢博士は答えない。すると丹後が、 ですかな。巨勢博士、いかがですか」

れる歌川家の財産関係の犯罪の容疑者たるべき人物が、姿を 宅だけが全部の犯罪に共通しており、 「神山君は、 四ツの事件の共通の容疑者をあげて、矢代と三 最も主要な犯罪と見ら

るよ。 現していないと云ったね。然し、君、共犯者ということがあ の短時日に七人もの人間がバタバタ殺され、それが警官の警 している場合が有りうるじゃないか。だいたい、半月あまり 単独では共通していなくとも、二人乃至数人で、 共通

重のさなかなのだからな。共犯者なしに、

出来ることじ

「ごもっともです」

と神山はうなずいた。

たとしたら、その結果は、どういうことになるのですか」 何事を企んでいるのですか。八月九日に、僕がこんど殺され 気がかりなのは、八月九日のことですよ。いったい、何者が、 のないことだから、全然気にかけていませんよ。僕が不安、 然し、ケンギだの、容疑者だのと、そんなことは、身に覚え よ。事態が、そうなっているのだから、仕方がないね。 どこやらにおりますか」 実があるのですな。このお二方に、さらにほかの共犯者 には、御二方とも決定的に不可能だというヌキサシならぬ事 妻ですな、このお二人が共犯としましても、内海殺しの場合 「然しですな。歌川家の問題として、たとえば一馬さん御夫 「まったく、僕が、第一級の容疑者であることは、 すると一馬がいささかフン然たる面持で言った。 認めます -107-

語気衰え、不安と恐怖のために、自然と顔がゆがんでいる。 巨勢博士が、時計を見て、立ち上った。 はじめのフン然たる勢いに似もやらず、語りすすむうちに、

くれちゃって」 神山さんの大推理にウットリしちゃって、 必ず帰るつもりですが、皆さん、お大切に。なんしろ、もう、 「時間がきましたから、僕は失礼します。八月九日までには、

た。 挨拶もそこそこに、慌てふためいて、とびだして行っ

二十一 密会と拷問と拘引

その朝食後、鉱泉宿へでかけてみると、宿の亭主が気味悪

すっかり時間がお

そうに、

「又、昨日は大変なことで」

「やア、知っていますか」

「昨日は警察の方が二度もここへ見えられまして」

「やれやれ」

この朝も、 追っかけるように出かけて行ったが、 間をはかりながら、歩き去ったということであるが、 神山東洋である。 がに油断のならぬところがある。 である。然し、奴、悪漢だけのことはあって、 のアリバイを調べに行ったに相違ない。オセッカイな弥次馬 は六尺ぢかい草相撲の横綱みたいな男だというから、これは きいてみると、一度はカングリ警部の一行で、 巨勢博士が慌てふためいて立ち去ると、彼も亦、りながら、歩き去ったということであるが、実は、 彼はハナレの窓から渓流へでて、 これはN町で、 見る目はさす あと来た男 時計で時 木ベエ

事件の性質を知らない亭主は、刑事が調べにきたものだかあい。性質を知らない亭主は、刑事が調べにきたものだかの性質を知らない亭主は、刑事が調べにきたものだかまったく、こうなると、私自身も、テンカンの発作かなにかまったく、こうなると、私自身も、テンカンの発作かなにかまったく、こうなると、私自身も、テンカンの発作かなにかまったく、こうなると、私自身も、テンカンの発作かなにかまったく、こうなると、私自身も、テンカンの発作かなにかまったく、こうなると、私自身も、テンカンの発作かなにかまったく、こうなると、私自身も、テンカンの発作かなにかまったく、こうなると、私自身も、アンカンの発作かなにかまった。

が、やがて、

面白そうに笑いだした。

そのとき、

神山東洋が、

母屋をまわらず、外から食堂へ、

扉をあけて、はいってきた。彼は呆気にとられて、見ていた

彼はコツコツ、ビッコの跫音をひびかせながら、食卓を半

「急害者」「こいてミニー」るのである。のである。かのである。かのである。からど私の正面へ廻った。そこには木ベエがい分廻って、ちょうど私の正面へ廻った。そこには木ベエがい

「偽善者! 三宅木ベエー」

えたまま、実際、木ベエの耳の下を指先でグリグリ突きまわまるで槍術の構えのようだ。彼は指さした手を槍の如くに構のような大袈裟な身振りだが、もっと満身の気魄がこもって、工の横顔を突き刺すように、指さした。まるで野球の審判員海老塚医師は大喝一声、右腕をハッシと突きだして、木ベ

「偽善者! 三宅木ベエ!」

した。

もう一度、さらに大喝一声して、

エ! 返答いかに。これ! 汝、偽善者! 三宅木ベエ!」密通致しておるではないか。これ! 汝、偽善者、三宅木ベ汝、正義の仮面をかぶり、妻の不貞を罵りつつ、諸井琴路と琴路と密会したぞ。汝、先日、余を罵って、何と叫んだか。「八月三日、日曜日、汝、三宅木ベエ、N町に於いて、諸井

うのでさア。アッハッハ」うか。気の毒ながら、密通のやり損じ、実は、ふられ男といは、何です。海老塚先生。お次の文句は、私が教えてあげよ「偽善者、三宅木ベエ。アッハッハ。傑作!(傑作!)お次

さして、ハッタと三宅木ベエを睨み、れたが、神山の言葉が終ると、委細かまわず、再び腕をつき海老塚も神山東洋の傍若無人の差出口に一時は呆気にとら

-108-

「返答いかに! 汝、偽善者、三宅木ベエ!」

カングリ警部の一行が、どやどやと乗りこんできた。 警官の一行を見ると海老塚は調子づいて、 珍らしく、自動車の警笛の音が玄関の方にひびいていたが、 ハッシと木ベエ

をかぶり、 「諸君! 余を罵り、妻の不貞を罵り、 見 よ ! 偽善者、三宅木ベエ! 彼、 彼、正義の 偽善者は 諸井 仮面

を指さし

琴路と、密通いたしておるぞ」 官が左右に寄りそって、腕をとらえたのは、 烈々たる気魄をこめて、偽善者木ベエを指し示したが、警 海老塚その人で

あった。

彼こそ、 「汝ら、何をするか! コラ! 無礼者! 見よ! そこに、 偽善者! 正義の仮面をかぶり」

小さな海老塚を吊り上げるように、抑えてしまった。 八丁鼻と南川友一郎巡査は、左右から各々両腕をかかえて、

カングリ警部が、すすみでて、

ばなりません」 「海老塚さん。 お気の毒です。 一応同行していただかなけれ

「何を、汝ら、 腕をとられた海老塚はバタンバタン足をならして、 ねぼけるか。そこにおる、彼、三宅木ベエこ

偽善者であるぞ。汝ら、無礼者

そ、世を偽る、

いのです。それは、 「イヤ海老塚さん。警察は、偽善者をどうすることもできな お釈迦様やキリストの領分でして」

とカングリ警部は笑って、

犯人をつかまえなければならないのです。 「お気の毒ですが、偽善者をさしおいて、 我々は先ず、傷害 諸井琴路看護婦を

> ければならないのです」 らしめた現行犯として、 拷問し、全身に無数の火傷と刺傷を与えて瀕死の重態に陥入 まず、 海老塚晃二氏を逮捕いたさな

海老塚は二人の刑事に連れ去られた。

「どうも、 お騒がせ致しました」

「いったい、どうしたのですか」 Ł カングリ警部が立去ろうとするのを、

と、きくと、

院の鍵をかけ、諸井看護婦を裸に縛りあげて、焼火箸と、「イヤ、もう、無茶ですよ。今夕、病院が終ると、先生、 ておりますが、命をとりとめれば、よろしい方ですよ」 らか医者の心得がありまして、兵隊流に荒っぽく何とかやっ 掴みとられ、何がさて、医者が犯人じゃア、手当の仕様もな てられぬ惨状ですよ。肉はこげ、 けつけたのですが、まさしく、狂人のふるまいです。目も当 私たちは近所の人から悲鳴の密告をうけて、海老塚医院へ駈 めたのですね。その結果、つまり、偽善者、三宅木ベエ、と 科のメスだの鋏だの取そろえましてね、驚くべき拷問をはじ いでしょう。それでも仕合せにヨミスギが看護卒か何かいく いう件りを白状させて、ここへ乗りこんで来たわけですよ。 一面に血はあふれ、毛髪は -109-

「イヤ、それはまだ、調べて見なければ、 カングリ警部は帰って行った。 分りません

「すると、今までの事件も、彼が犯人ではありませんか」

と、私がきいたが、

「イヤ、どうも、驚きましたな。食堂へはいってくると、 神山東洋はようやく椅子に腰を下して、 ヤ

姓オヤジで、三宅先生と、海老塚医師は、各々の旅館に今か 諸井琴路看護婦の白状はいささか、 偽善者、三宅木ベエの件でN町を調べて歩きましてね。 なシレ者ですな。 いて、三宅先生の名をだすとは、諸井嬢も驚くべき冷静知的 ほかなりませんや。焼火箸の大拷問の今はの際にも、 今かと諸井嬢を待ちかねつつ、ついにフラれた悲劇の当人に 八月三日に諸井看護婦が密会したのは、 面くらいましたぜ。私はしかし、 偽善者、汝、三宅木ベエときたから、これには私も全く たしかに、これも、 昨日から今日一ぱい、 間違っているのですよ。 大犯罪者の素質をそな 隣村のヤミ成金の百 嘘をつ その、 実は

うだが、そうやって、みんなのアリバイを調査しているのか 看護婦と、こうなっていたと分ってみれば、うなずけること 「君は、 であった。彼も亦、 一人であった。 木ベエは一言も語らなかった。なるほど、然し、いつから 彼が意外な憎悪を海老塚に示すようになったのも、 何かい、 鉱泉宿 女々しく、嫉妬深く、邪推深い変質的な へも私のことを取り調べに行ったそ 諸井

えた一人ですな」

Ł が神山東洋にきくと、

私

に手をふってネ、 上へフラフラと飛びだしてきて、こうユラユラと泳ぐみたい アリバイがありましたな。 きな性分なんですなア。私はF町も調べました。 「ええ、そうでさア。根が弁護士ですから、こんなことが好 十二時二十分という奴にお乗りだったんですよ。道の 自動車の車掌も運転手もよく覚えていまし 丹後先生はダメ。丹後先生はヤッ 一馬さんは

> く、バスの始発の件ですなア。 でしたね たよ。だが三宅先生。あなたは然し、諸井嬢のことはとにか あなたは始発には乗りません

神山は木ベエを見つめたが、 木ベエは相手にならず、

全然

返答の様子がない。

色も変らない。変りようもないのである。蒼ざめて、ゆがみ、 時四十分、 拠はあるのです。なぜなら、三宅先生は始発でなしに、 のです。 「海老塚医師が諸井嬢と三宅先生の仲を疑りだした。疑る根 木ベエは又、答えなかった。答えようともしなかった。 十二時四十分まで、この村のどこかにおられた筈です」 つまり三宅先生は七時半前に当家を出発された。 つまり、海老塚医師と同じバスでN町へ行かれた

白いかね」 「神山君、 丹後が皮肉いっぱいに、 たのまれもしないのに、岡ッ引きが、そんなに面

神山東洋、

ビクともせずに

彼はうつむいて、人の話も、

きこえない如くであった。

暮しながら、ちょッと探偵心を起さなきゃア、 っぽど、変テコリンだと思いますがね 「アッハッハ。これだけ矢つぎばやの殺人事件のマンナカに その方が、

ょ

これは昨夜から、 査が二階の両端の階段の降り口のところへガンバッている。 その晩、私たちが寝ようとすると、八丁鼻と南川友一郎巡 カングリ警部の命令で、こうなったのであ

馬が八丁鼻に、

ヤア、御苦労さまです。 でも、 もう、 いいのじゃないかな」

「ハア、何ですか」

「いえ。海老塚さんは、留置されているのでしょう」

「ええ、そうです」

ますが」「こんなに警戒して下さらなくとも、もう、よかろうと思い

ことになっております」「ハア、ともかく警部の命令で、八月九日までは、こう致す

うった。 一馬は海老塚が捕えられたので、どうやら一安心の様子で

# 二十二 「八月九日 宿命の日」

| stuck 食管に集っているが、Blをばかりの原下にらて下量アタピン女史が一日目玉を光らせてガンバッている。||日の深夜には、約束の八月九日が始まるのだから、食堂には||八月八日の夜になっても、巨勢博士は戻ってこない。この

ある。とヨミスギが両端にガンバッている物々しい警戒ぶりなのでとヨミスギが両端にガンバッている物々しい警戒ぶりなのでみんな食堂に集っているが、空室ばかりの廊下にも八丁鼻

夕食にはカングリ警部も出席していた。

い次第です」
事件はまさしくスエヒロガリで、まったく、どうも、面目なにとっては、スエヒロガリは何より困ったことですよ。このロガリとかなんとかエンギをかついでいましたが、我々警察「八月八日、午後八時か。みんな八ですな。戦争中はスエヒ

カングリ警部が、そのとき、本署から電話がきた。それをきいて戻ってきた

さぬそうですな」

「イヤハヤ、どうも、海老塚さんが、本署の保護室で、目下「イヤハヤ、どうも、海老塚さんが、本署の保護室で、目下「イヤハヤ、どうも、海老塚さんが、本署の保護室で、目下にイヤハヤ、どうも、海老塚さんが、本署の保護室で、目下になるそうですな」

ことになった。坊さんの読経があるだけである。るし、間違いも起き易い。そこで、法要は来年まわしというの当日でもあるから、来会者の方も気持が悪いにきまってい法要がある筈であったが、この連続の殺人事件であり、問題の如く問題のお梶様の一周忌であるから、例年ならば盛大なの日は多門老、加代子さんの二七日であったが、明日は例

神山がカングリ警部に向って、

際、八月九日に起るものですか」のめられると、凄味がありましたよ。ところで、事件は、実たなア。第一、目が、ちょッと、こう、三白眼で、ジッと見「そうですなア。まったく、あの看護婦は、大犯罪者的でし

です。 査に当っておられるそうですが、あなたの心眼では、いかが ありませんので、残念です。神山さんは、甚だメンミツに捜 「それがハッキリ分ってくれれば、こっちはシメタものです 何がさて、我々は、海老塚先生のような神通力や心 ひとつ、遠慮なく、 御意見をきかせていただけません 眼が

「私がひとつ、警部におききしたいのは、解剖の結果の、 兇

か

せん」 体が発見されておりまして、 申されません。 ますが、 死後二十時間、 行の推定時間ですな。 一そうですね。 我々とても、 幸い、 そのために、推定時間はほぼ確実とは思われ まず、ほぼ確実とは思われますが、絶対 あれは絶対のものですか」 今度の場合は、七件ながら、早々に屍 それを絶対としているわけではあ 最もおそいのが、 宇津木さんの りま とは

すか」 「千草さんの目隠しというのは、どんな風になっていたので

すが、 たものです」 胸にたれたフロシキごと、その上から縄でクビをしめて殺し 三角巾がダラリと胸の方まで垂れておるわけです。 「あれ 額から後へまわして結んであります。つまり顔の前面に これを二つに折りまして、つまり三角巾型に折りましれはですな。これは千草さんの持物の濃紺のフロシキで ですから、

えらアね」

の空想としても、

グアイに、でっちあげりゃア、殺人だって、芸術的鑑賞に堪

芸術的なリアリテがあらア。

万事こういう

クビをしめた、 クレンボでもしようというわけで、 「すると、 そんな風な想像も、 ですか。 犯人とは非常に仲のよい間柄 メカクシをした、そこを してよろしい余地がある で、 カ

と見るべきかも知れませんな」 「御説の通りです。ともかく合意の上で、 ピカーが横から蛮声をはりあげて、 自ら目隠しをした

かのホンモノの鬼がきて、 「それじゃア、なんだぜ。 しめ殺しやがったのさ」 カクレンボしているところを、

ほ

「まさか、 神山はふきだしたが、

かけて、 カクレンボをしますかね あなた、年頃のお嬢さんが、 わざわざ三輪山へで

「イヤイヤ、ヤリかねない。 ピカーは真顔になって、 左にあらず」

そこで内海先生が、どこかへ、もぐりこんで、 なんて、そんな月並な芸当が、できるもんか。それに比べり ゃ、カクレンボの方が、よっぽど、やりかねないことなんだ。 もなことは、やれないぜ。あたりまえに抱きあって接吻する ヘホンモノの鬼がきて、しめ殺す。どうだい。これは、 「千草という醜女のバカ娘とセムシ詩人じゃ、どうせ、 隠れる。 まと

神通力をあらわすことがありますからな。 的神通力を拝借いたす意味で、ひとつ打ちあけて申上げます ところが、 「イヤ、まったくです。芸術家の直観や空想は、時として、 カングリ警部も笑いだして、 回目の事件、 かも知れませんよ。それでは、 望月王仁さんの事件に、 あるいは、そんな 皆さんの芸術 屍体の寝台の

あやか夫人の部屋靴の鈴が一つ、ころがっていたので

すよ。これは、皆さんの神通力で、どういうことになります

なければならぬ。すべては、明白じゃないか」「いや、それだ。まさしく、君、警部、それですよ。そうこ

ピカーは、目をかがやかせて、叫んだ。

あやかさんは、恐怖に沈んで、大きく目をあけて、警部を

「私は、当家へとついで以来、望月さんのい見つめた。

「ウム。さすがこ、このキソネも、見上げに又さっまだ一度も、はいったことがございません」「私は、当家へとついで以来、望月さんのいらした部屋へは、

「ウム。さすがに、このキツネも、見上げた奴さ」

ピカーは思わず唸った。

は、ほざきやがるよ。トルコやインドのハーレムじゃあるま当家へとついで以来、足をふみ入れたことがありません、と「弁解の文句も、ここまで、くりゃア、人を驚かしやがるよ。

人のヒルネ部屋だい。気のきいた蚊は、一晩のうちに、一々とを言いやがる。こんなチッポケなウチはハーレムじゃ料理か。成上り者は広大な天下を知らないから、とんでもないこいし、十人も泊りゃ一ぱいの、たった二棟のウチじゃアない

の部屋で血を吸って歩かアね。人をバカにするな」

あるのですよ。そして、その上に、鈴だけが一つ、落されてなら、寝台の下は、望月さんの洋服の上衣でキレイにふいて奥様があの部屋へ落してこられたものではありません。なぜ「いや、奥様の仰言る通りでしょう。その鈴は、たしかに、カングリ警部は、とりなすように、うなずいて、

今夏は申 1 夏阜ヾ:いたのです」

今度は神山東洋がうなった。

「そいつは、奇妙な謎ですな。すると、犯人は、故意に、

やか夫人の鈴を置きのこして行ったわけですか」

いたものやら、いかがですか、皆さんの神通力は」「そうですなア。鈴も鈴ですが、なんのために寝台の下をふ

いです」
いです」
となたか、我々に助言をよせていただければ幸ないかと推察される根拠があります。もしアイビキのためと津木秋子さんが三輪山へ行かれたのも、アイビキのためでは、津木秋子さんが三輪山へ行かれたのも、アイビキのためでは、津木秋子さんが三輪山へ行かれたのも、アイビキのためでは、中のです。実は、皆さん御承知の通り、この事件には再の助言が欲しいのですが、ちょッと、失礼な問題ですが、場の助言が欲しいのですが、ちょッと、失礼な問題ですが、場の助言が欲しいのですが、ちょっと、失礼な問題ですが、場の助言が欲しいのですが、ちょっと、失礼な問題ですが、場の助言が欲しいのですが、おれば神通力ではありません。皆様

ありませんよ。なぜなら、時間がちょッとたつうちに、必ず、あるいう御婦人は、然し、アイビキの当人には殺される筈がらんのだね。宇津木さんは、淑徳も高く、又、愛慾もいと深答部君は、人間性というものの崇高なる実相を認識されておや森を歩きやしないさ。然しそれは何も失礼なことじゃない。「そりゃア、まア、そんなものだろう。あの人が、ムダに山

るけれど、うわべだけです。実際は、邪魔な女じゃないからきまとう奴だ、悪女の深情け、そういうところもチョットあ次の男にお移り遊ばす性質で、こいつ執念深い、うるさくつ

「口引回白は、ここがようしゃ」なり。即目分うな「アッハッハ」神山が、たまりかねて、ふきだした。

な

「土居画伯は、さすがなもんですなア。御自分の心境ばかり「土居画伯は、さすがなもんですなアね。土居先生は、まったらないとは」、述べていらっしゃる。然し、あなた、男が女らないとは」でする。述べていらっしゃる。然し、あなた、男が女が出居画伯は、さすがなもんですなア。御自分の心境ばかり「土居画伯は、さすがなもんですなア。御自分の心境ばかり

れは」「すると、土居先生が、アイビキの当人かも知れないぜ、こら、殺しやしないと言うのさ」「いえ、なにさ、オレの言うのは、アイビキの当人が、だか「いえ、なにさ、オレの言うのは、アイビキの当人が、だか

と、神山東洋がゲタゲタ笑いだした。

うに、アイビキにでかけられたのですか。いったい、その根えませんからな。まったく、罪なことですよ。然し、ほんとんでたんじゃ、ハア、ちょッと、あの方の部屋へ。そうも言のかね、男のお部屋へ御出張あれば、よろしいものを」「然し、なんだって、又、アイビキに、山だの森へでかける

拠は確実ですか」

「マルービタート トント゚ローセル にこう)、ペド゙ドドトが、たが、と、神山にきかれて、カングリ警部は、柄になくテレていと、神山にきかれて、カングリ警部は、柄になくテレてい

のようなものをケイタイしておられるものですか」のですな。それとも、宇津木さんのようなお方は、年中、そためにのみ使用せられる性質の品物が、数種あらわれてきた「実はですな、宇津木さんのハンドバッグから、アイビキの

シナミはないのさ。警部はまったく人間性を劣情でしか理解イをまたげば、七人の敵あり。天下に、これほど、大切なタ「それこそ、淑女のタシナミさ。昔から言ってらアね。シキ

できないのだなア」

「イヤ、どうも、恐縮です」

とつ、頭を下げた。と、カングリ警部は怒りもせず、ニヤニヤと、ピカーにひ

食事を終って、一同が広間へ立った。

広間の中央柱に、紙が一枚、はりつけられている。

「おや、何だろう」

った。 それを見つけて、まっさきにのぞいて見たのは、丹後であ

- 丹後はてんで気にかけずシャレのめしたが、我々は驚いた。ごろハヤリのポスターだね」 「やれやれ。又、現れたね。八月九日、宿命の日、か。ちか

海老塚の魂が、火の玉式にころがりこんで、紙をはりつけて、ているうちは、と、彼は内々心に安んじていた筈だ。まさか変ってしまった。無理からぬことである。海老塚が逮捕され一馬は紙を睨んで、立ちすくみ、ひきつるように、顔色が丹後はてんで気にかけずシャレのめしたが、我々は驚いた。

どこかの隅に息を殺しているわけもない。

のを認めた。い目玉で人々の顔を一つずつ、喰込むように睨みつけているい目玉で人々の顔を一つずつ、喰込むように睨みつけているふと、私が気がつくと、カングリ警部が火をはくような鋭

い。

#### 

しいです。レターペーパアでもかまいませんが、文字はハッキリ限り、簡にして、要をつくして下さい。原稿紙でなくとも、よろいけません。推理は、どんなに長くても構いませんが、出来うる廷へ持ちだして、起訴することができるだけの、推理がなければ、さて答案ですが、犯人の名前だけ当てたって、ダメですよ。法

いておいて下さい。 答案の宛先は、日本小説社、です。封筒に探偵小説解答、と書

した楷書で書いて下さるように、呉れ呉れもお願いします。

ームを贈り物し、一つ無邪気にシカメッ面のシワの洗濯をやりまソ面白くもない世の中に、何日、何時間か、たのしい休養のゲ作者の意図するところは、皆さんに、知的な娯楽を提供し、クータまで、附記で、さんざん、ダボラをふきとばして恐縮ですが、

しょう、という微意にほかなりません。

ような心なき業は致しませんから、安心して、解答をお寄せ下さしたがって、迷答、珍推理を発表して、皆さまに恥をかかせる

りませんよ。などと、これだけオダテテおくからには、そんな天で、満点の答案をお書きの御方は、日本一の名探偵にまちがいあまったく、もって、巨勢博士と同じようにピタリと推理のお方まったく、もって、巨勢博士と同じようにピタリと推理のお方量といたします。その代り、犯人の当った答案が一つもなくとも、皇上いたします。のはイヤですから、最優秀の答案に、御一人に賞金を分割するのはイヤですから、最優秀の答案に、御一人に

東西東西。
さて、作者の演技は終りました。これより皆様の御熱演、ハイ、

明白でありましょう。

才は一人も居ないや、アッハッハという意味であること、これ亦、

## 〆切は昭和二十三年四月十五日。

坂口安吾

## 二十三 最後の悲劇

その夜の警戒は厳重を極めていた。

両端から各室の扉を睨み合せている。刑事が、一馬あやか夫妻の前には八丁鼻がガンバリ、廊下の洋館の階段を上ったところに、私の部屋の前にはヨミスギ

階下にはカングリ警部と南川巡査が非常用のハシゴまで用

たちの誰かが便所へ立つと、送り迎えするという念の入れ方 意して庭の様子をうかがっている。 遊撃がアタピン女史で、これは階上の廊下をブラブラ、私 女中が酔いざめの水を運んできても、先ずアタピンがと

すると、 八丁鼻がムッツリと、 そのコップを横どりして、

りあげて毒見をする。

怒り顔

「オレによこせ」

「何をするのよ」

゙オレが毒見をしてやる」

ガブリと口に含む。

「あら、まア」

アタピン先生、ビックリ、八丁鼻を見つめているうちに、

みるみる、大感激をあらわして、

の。うれしいじゃないの。 「マア、マア、あんた、親切ねえ。そんなに私を思っている そんなに実があるなら、 あんたと

結婚してあげるよ」

八丁鼻は不興げに目を光らせて、

「バカぬかせ。オレには女房があるのだぞ」

が二人でいいじゃないか。あんたの半分、私が可愛がってあ も女房になってあげるよ。オメカケはキライだからね。女房 「なによ。女房ぐらいあったってヘイチャラじゃないの。

「そんなの、あるかい」

げるよ。みんなじゃ、つけあがって仕様がないよ」

ど手頃のものなのよ。だから、四丁鼻だけ可愛がってあげよ 「バカだね、あんたは。恋愛なんて半分ぐらいずつでちょう

「ふうむ、そうか」

「うれしいだろう。ねエ、ちょいと」

と、アタピンに頬ッペタをつつかれて、八丁鼻はグニャグ

ニャする。アタピンはすっかりノボセあがって、 「今夜は、素敵じゃないの。この秋に、東京のフグ料理で結

婚式をあげようよ。あんた、貯金、もってる」

「恥をかかせるもんじゃないよ」

「うん、よしよし、フグぐらい、私がたべさしてあげるよ」

この時ばかりは羞しくて出られたものじゃないなどとは素人 の考え、明方の四時というころに、濡れごとの扉を距てた向 いやはや、奇怪な濡れごと騒ぎ、いかなる妖魔も殺人鬼も

屋である。 う側に、けたたましい悲鳴が起った。 一馬とあやか夫人の部

てしまった。 争う必死の音がする。力つきて倒れる音。そして音は終っ

「オイ、二人はこの場を動くな」 扉を押したが鍵がかかっているから、

カングリ警部と二人、外から窓を叩きわって、はいる。 八丁鼻は階下へ駈け降りる。かねて用意のハシゴをかけて、 電燈が消されているから、二人は用意の懐中電燈で室内を

てらした。

倒れ、その上に折重って俯伏しているのは一馬であった。 床に人が倒 れ てい る。 胸もあらわにあやか夫人が仰向 けに

「現場をみだすな。スイッチを探して、電燈をつけろ」 カングリ警部の命をうけて、八丁鼻は電燈をつけた。

散りこぼれている。青酸加里のようであった。る。デスクに飲みのこしたコップの水があり、白色の粉末が一馬を抱き起してみると、すでに、苦悶の果、息絶えてい

て、あやか夫人をだき起そうとすると、夫人は目をあけた。あやか夫人の口からも血が流れていた。一馬を横手へ寄せ

「どうしましたか」

傷ではなかった。
せ、手当を施してみると、舌を噛んでいるだけで、大きな負せ、手当を施してみると、舌を噛んでいるだけで、大きな負る血に気付いて、絶望的な戦慄をあらわしたが、うがいをさかそうとした。二人が寄りそって抱きおこすと、口から流れと意識がもどったらしい。悲痛の色を目に宿して、首をうご夫人の答えはない。ボンヤリと目をあいているうちに、ふ

げた。 寄せてある一馬の屍体に気づくと、小さな、絶望の叫びをあるかの大人は全く我にかえって襟をかき合せたが、横手に

「何事が起ったのですか。思い起して下さい」

であった。 夫人はしばらくそれを同じような鋭さで見返しているばかり、と、カングリ警部は鋭く夫人を見つめて返答を待ったが、

「あなた方、いつ、いらしたの」

です。何事があったのですか」けて、窓を叩きわって、窓の鍵を外して、とびこんできたの「今きたばかりですよ。室内からの物音に、外から梯子をか

部は首を横にふった。夫人はウツロの目をむなしく戻したが、手応えがないので、祈るように二人を見上げた。カングリ警あやか夫人は一馬の屍体を抱き起して膝にのせたが、もう

夜が明けそめている。あやか夫人は戻ってきて、寝台に腰い風が吹いてくる。自然に気持が落付いてきたようであった。に寄りそいながら窓まで歩いて行った。破れた窓から、涼しり、考え考え作がみながら、寝台からデスクへ、椅子へ、何かやがて一馬の屍体を膝から下して、寝台に手をかけて立ち上

「いいえ、私たちが飛びこんできて、つけたのです」「電燈がついていましたか」

を下した。

あやか夫人は、うなずいた。

と申しました」と申しました」と申しました」とまで起きていました。私がいつ目をさまして、主人はおそくまで出るには、暗闇でした。私はおそくまで起き、主人はおそくまで起きした時には、暗闇でした。私はましたが、そのときは、殺意を感じるほどの強い力ではありましたが、そのときは、殺意を感じるほどの強い力ではありましたが、そのときは、殺意を感じるほどの強い力ではありましたが、そのときは、殺意を感じるほどの強い力ではありました。そのうち、ふと目をさました明には、暗闇でした。私はに主してはおそくまで起きていました。私がいつ目をさまして「主人はおそくまで起きていました。私がいつ目をさまして

がないのです」
に手向いました。そして、ころげ落ちて、そのあとは、覚えすくめられたと思うと、クビをつきあげてきたのです。夢中ウウという、唸り声がもれました。にわかに劇しい力で抱き「私は呆れて、何がダメ、とたずねました。答えの代りに、カングリ警部はうなずいて、その先をうながした。

カングリ警部はうなずいた。

いませんでしたか」
「もっとよく考えてみて下さい。御主人は、ほかに何か仰有

あやか夫人は考えていたが、首を横にふった。

たのですね」とのですね」とのですね」をの手が廻ったから、もうダメ、そういう風に申され「なるほど。死んでくれ、もう僕はダメなんだから。なるほ

「いいえ、ちがいます」

あやか夫人はキッパリと云った。

でした」
でした」
でした」
でしたが、主人は机に向って、考えこんでいたのいつ目をさましても、主人は机に向って、考えこんでいたのいが、あの方が捕われてからは安堵しておりましたのです。でしたのです。主人は海老塚さんを犯人と信じておりましたから、あの方が捕われてからは安堵しておりましたのです。でしたのです。主人は昨夜、寝室へ来てから、無慙なほど、やつだけです。主人は昨夜、寝室へ来てから、無慙なほど、やつ「そんな風には申しません。もうダメなんだから、と申した

タンがとんでいた。むしられた傷があり、彼のパジャマもひきむしられ、胸のボむしられはじめた。顔や手にあやか夫人の抵抗をうけて掻き、カングリ警部はうなずいた。そして彼は改めて一馬の屍体のカングリ警部はうなずいた。そして彼は改めて一馬の屍体

「危いところでしたな」

と調べ終ってカングリ警部は云った。

「あなたは気絶なさったから、よかったのです。抵抗をつづ

たのです」う。あなたが死んだものとみて、御主人は覚悟の自殺をされけていたら、ふたたび生きかえることはできなかったでしょ

「なぜですか」

たために、逮捕ができなかったのでした」した。我々には分っていたのです。ただ、物的証拠がなかっ「お気の毒ですが、これまでの惨劇はすべて御主人が犯人で

「ちがいます」

あやか夫人は叫んだ。

席を離れたことはございません」主人は一しょに食堂へはいりまして、食事の終るまで一歩もを見た覚えがありますから、間違いはございません。そしては、柱のハリ紙はなかったのです。そのとき私は何気なく柱「私は存じております。昨夜、私どもが食堂へ参ります時に

い面持であったが、とカングリ警部はうなずいて、困ったような、くすぐった

「ごもっともです」

だけは、通じた筈です」の日。つまり、犯人に対する宿命の日。この皮肉は、犯人に「実はあのハリ紙は私どもが致したのです。八月九日、宿命

きた。十一時ちょッとすぎるころ、巨勢博士が戻って十時半ごろ。十一時ちょッとすぎるころ、巨勢博士が戻って本署から鑑識の一行が、自動車をいそがせて到着したのが、得意の色、やがて八丁鼻に命じて、はじめて扉をあけさせた。 呆然たるあやか夫人をシリ目に、カングリ警部はいささか

ついに歌川家滅亡、という意外な結果に、私が広間にボン

きた。 ヤリしていると、巨勢博士は食堂の出入口から、とびこんで

メッポウ駈けだしたんですけど、この節は運動不足で」 「道で警察の自動車が追いぬきやがったもんで、それから盲 と息をきらしているところへ、二階からカングリ警部の一

「やア、巨勢さん、お帰りですか。一足おくれましたな。 お

行が降りてきた。

留守のうちに、悲劇はついに終りましたよ」

「終った? すると、歌川先生が殺されましたか」

いや、歌川一馬氏は、 自殺しました」

あった。 巨勢博 士の顔色が変った。虚脱にも近い苦悶と落胆の色で

ああ、 ヤ、 絶望的な悔いの苦痛がきざまれた。カングリ警部は笑いだ おそかったか! 一生の不覚だった!」 僕は、バカだ。不眠、不休。然し、

毒です。然し、私どもも、昨夜は不眠でしたよ。然し、とも して、 「ひどくお忙しかった様子ですね。不眠不休ですか。 お気の

かく、落ちつくところへ落ちついたようです」 巨勢博士の全身に、すさまじい怒りがこもった。

「畜生め!(もう、逃さない。ああ、然し、手おくれだった!

然し、仕方がなかったのです。今さら面目もありませんが、

ツラの皮だけはヒンむいてやります」 「誰のツラの皮をヒンむくのですか」

'犯人の、です」

歌川一馬氏は自殺しましたよ」

カングリ警部は涼しい顔で答えたが、巨勢博士はそれに

着していなかった。

「歌川先生は、毒薬でなくなられたのですね」

「左様、青酸加里です」

「いいえ、然し、何か、一晩中、書いては消し、書いては消 「遺書はありますか」

あるいは遺書をかくつもりだったかも知れません。目下、 したものがあります。ひどく消しつぶして判読できませんが、

識に廻してあります」

巨勢博士はうなずいた。

ことも、 この殺人を予期していたのです。それが自殺の形で行われる 「遺書ぐらいは用意してあるだろうと思っていました。 すでに準備ができていることを知っていました。

殺の形で殺される準備ができていたのです」 一回目の殺人のとき、望月王仁氏殺害のとき、 歌川先生が自

巨勢博士の決然たる断言ぶりに、

カングリ警部も呆気にと

られた様子であった。 「ともかく、別室へ来ていただきましょう。憎むべき殺人鬼

たちは不承不承巨勢博士について、 の手口を説明いたしましょう」 巨勢博士はカングリ警部と刑事の一行をうながした。 立ち去った。

犯人現わる?

った。昼食が終るころにアタピン女史がやってきて、 昼食のとき、巨勢博士と警官たちは食堂へ現われてこなか 一同に

服十数名の人達が壁に沿うてグルリと包囲の態勢をとった。席へつく。警官、巨勢博士の一行がそれにつづいて、官服私さん、ツボ平夫妻まで、関係者一同ゾロゾロとはいってきて足どめを命じた。食器が下げられると、南雲老人夫妻、下枝

かに語りだした。 巨勢博士はいささか沈痛な諦めたような顔付で、やがて静

テーブル正面の設けの席についたのは巨勢博士であった。

ーが現れたので、犯人はそれをチャンスに、 を頼みにしていましたが、八月九日、 ていたからです。今さら仕方がありません。 しの時にすでに準備が完了して、いつでも行える用意ができ を要する殺人と違って、 なぜなら、千草殺 の犯行を延ばしてくれやしないかと空頼みしていましたよ。 「この犯人は相当に粋好みの茶人だから、私 内海殺しのようなセッパづまった緊急 最後の仕上げは、 宿命の日、 第一回目 私は犯人の自信 最後の仕上げを の戻るまで最後 例 のポスタ の王仁殺

神山東洋が口をいれた。

華々しく打上げたように思われます」

キリ、して下さいよ」いたところですが、一馬さんは、自殺、他殺、ひとつ、ハッ「我々カンヅメ組では先程から流言横行、大いに悩まされて

「それは申すまでもなく他殺です」

「ハハア。これは奇怪。して、犯人は?」

更年と思うのにいこが、巨勢博士はそれには答えなかった。そして、しばらく神山

東洋を見つめていたが

可能性の推定をされましたが、あの第四回目、内海殺しの状「神山さん。あなたは正確な観察眼で、先日、犯人の推定、

前で喚いていられる、それからの可能性の問題ですか」「左様ですか。あの晩、左様、土居画伯があやか夫人の扉の況に就いて、も一度、くりかえして下さいませんか」

たもので、その紙片に書かれていた男の名前も読んだ、といた、その紙片はあやか夫人が男にたのまれて千草さんに渡した。九時何分ごろでしたか、お由良婆さまが諸井看護婦と一「いいえ、その前に、先ず我々が食事を終えて広間にいまし

と、神山はメモをしらべたのちに、「左様、私のメモはかなり正確に記入してある筈なんだが」巨勢博士はそれまで云って、あとを神山にうながした。

られませんという返答でした。そして、それから……」

うのですね。その男は誰ですか、ときくと、それは申し上げ

「その死闘の原因は?」

するに、たぶん、つまらぬキッカケで」「それがハッキリしないので私のメモにもないのですが、要

巨勢博士はうなずいた。

ないほど、ハッキリした理由のない、つまらない言いがかり「それが重大なんですよ。つまり、あなたのメモにも記載の

と仰言った。笑いだして、 ゴロツキ、 から喧嘩が始ってしまったのです。 バ カヤロ あなたこそ東京へお帰り、 それをきくと、 まるでこのウチは色キチガイの巣、 と叫んで立ち去る、 あやか夫人がフンゼンとして、 すると土居画 事の起りは、 こう叫 ばれ 伯がゲタゲタ 淫売宿だ、 たのです。 海老塚先生

これが格闘の始まりでした。

それから……」

合う。 者かが階下へ降りて内海さんを殺すことができたかも知れな しておられて、 ことができない けておられたわけです。その時間に内海殺 十二時半すぎるころまで、 とができた。それから近づく者に掴みかかって、土居先生が 夫人は一目散に、幸い自分の寝室へ逃げこんで鍵をかけるこ を打が擲している土居画伯をとって押えて、引き分けたです 行った。これを又我々が追跡して、松の木の陰にあやか夫 追跡しており、 いって、 がビリビリさける始末でしたな。ようやく私たちが てあやか夫人にとびかかってフリ廻した。あやか夫人の ですか、土居先生、いささか酒乱の兆ありですな。 つづけた土居先生をはじめ、 「まったく、 博士は再び神山にうながした。 アッと思うと、 なぜなら土居先生の眼をごまかして、 で一段落と思うとさにあらず、三たび猛然、 わける。 そうでしたな。 このテンマツに記憶がないそうですから、 から、 食堂から、 すると又、 土居先生、 という次第です。然し土居先生は あやか夫人 庭の暗闇 土居画伯の虫の居どころの わけられながら御両名がわ 二階の居住者にはアリバイ 神山はうなずいて すでに猛然とあやか夫人を へ、あやか夫人を追 の 寝室の前 しが行わ 階 下 に喚きつづ - へ下り 'n 割っては 突如とし あやか · が成 つって 衣服 泥 喚き め せ き る 何 人 い

い。ここが、大いに微妙です」

「確実に犯行の不可能な人は誰でしょう?」

「それは、

あやか夫人、

土居画伯、

御両名にきまっています

気魄にあふれていた。 巨勢博士はうなずいた。そして一座を見渡した目は激しいよ」

な犯人のたてたプランのこととて、 らぬ心理上の足跡を残してしまった。 処する方法の打合せも立ててあったに相違ありません。そし その夜のうちに、更に内海さんを殺さなければならない必要 その時の手筈も立てていたので、 その期間に、この土地へ旅行し、 とげることができたのですが、 て、予定の如く、 が起ったのです。元よりかかる事ある時も予定 た。と、思わざる失策に気づいたのです。そしてどうしても、 な犯人のことですが、 なかった。千草殺し、 儀ない事情によって、 たものと思われます。 春ごろ一時ヒゲを生やしたことがあっ メンミツに計画をたてたに相違ありません。現に犯人はこ してどこかに手落ちのあるもので、この時犯人はヌキサシ たものでありました。 へ旅行し、三輪山へでる間道なども充分に調査 「皆さん。この殺人事件は、 かなり巧みにその方法を実行して打合せ 予定を外れた緊急の場合も予想して、 それほどメンミツに計画 恐らく犯人の一人は変装 内海殺しがそれでした。もとより周到 予定を外れた殺人を行わなけ 恐らく十ヶ月以前 机上の 千草殺しはなんなく片づい 土地の地理を充分頭に入れ 恐らく日本第一級の心 案とい 然し、 たそうですが、 うも さすがに天才 して、 しながら、 に計画 の上、極めて してこ のは往々 ħ たぶん ばなら の土 [せられ な の

家が揃いながら、皆様ほどの達人が尚この足跡に気付いてお られぬ。 私も亦この足跡に気付くことができたのは、 かなり

巨勢博士は口惜しそうに一息ついた。

後日のことでありました」

犯人の残した唯一の足跡とは何か? これは犯行の順を迫う て自然に説明いたすことと致しまして、先ず犯人の名前から 負の手どころとも申すべき唯一の急所でありました。然らば、 の足跡で、内海殺しは犯人にとっても危急存亡の瀬戸際、 - 恐らくこの心理上の足跡 が、 この事件に犯人の残した唯 勝

って、 然としているので、すぐ、 座の緊張した動揺 ŧ しずまった。巨勢博士は神山 巨勢博士があんまり事もなげに に向 平

申しあげます」

は ? 「先ほどもおききしましたが、 内海殺しの最も不可能な方々

「あやか夫人、 土居画伯」

巨勢博士はうなずいて、

アリバイをつくりつつ、同時に更に重大な役割、 内海さんを殺させる必要があった。つまり土居先生は自己の ることによって皆さんを居室に封じ、 先生は喚きつつ掴みかかるに相違ない。 ありました。もし皆さんのどなたかが扉から顔をだせば土居 は皆様の扉を見晴らし、その出入を見晴らす絶好の位 置に絶えず喚きつづけていたのですから。そして、その 「左様、土居画伯は先ず最も不可能です。なぜなら、同一位 その間に他 なぜならば、 つまり監視 . の 何 人かに そうす 置 で 位 :置 ŧ

た。

巨勢博士は顔色一ツ動かさない。そして静かに、

うなずい

の役をつとめておられたのです。そして、土居先生の巧妙な

まとわぬ裸体でおでかけであったかも知れません。一か八か 海さんを殺しに行かれたかも知れ を隠すことができたでしょうし、 あやか夫人は洋館の居室以外のどこへでも、血に汚れた衣服 ういう便宜をつくられたわけです。 りそのとき、どこかに指紋が残っていても言い訳のたつ、 内海さんの寝室へ起しに行かれて、 室へ戻ってこられた。然し、もしものことを怖れて、 り、内海さんをメッタ刺しに刺し殺して帰られた。 監視に掩護されつつ、あやか夫人は居室を忍びでて階下へ降 の危急存亡の時であり、 て、短刀を洗って処理し、 の監視の掩護がありますから、あやか夫人はきわめて落付い お二人の全智と冒険はここに賭けら 血にぬれた手足を洗い、 ない、 あるいはズロース一枚で内 事件の発見に先立って、 事件を発見された。 あるいは全然、一糸 悠々と居 土居先生 つま

ピカーのせせら笑いが起った。

れていたのです」

大先生、 茶番や落語の興行と違うんだ。変な当て推量で済むことじゃ アないぜ。 「名探偵先生。何がヌキサシならぬ心理の足跡なんだ。おい、 かりそめにも八人殺しの犯人という問題なんだぜ。 ハッキリした証拠をきこうじゃないか」

先ず、 当代稀れな資産家であることを知り、 やか夫人と再会されて激しい恋慕を寄せられるや、 しますが、恐らく土居先生とあやか夫人は、歌川一馬氏があ 「ヌキサシならぬ足跡は、 第一回の 犯行から、 いずれ順を迫うて説明いたします。 順にしたがってお話 計画的に離婚して、 いたすことに 歌川家が

の実行に最も必要な道具立ての一つでありましたのです」げた。それだけアクドク不和の種をつくることも、この計画らあやか夫人と喧嘩別れをして、執拗に手切金まで、まきあ以前に予定せられていたものであります。土居先生はことさやか夫人を一馬先生にめあわせた、つまり殺人計画は、結婚

おうじゃないか」が、共犯の証拠になるのかい。ハッキリした証拠を云って貰「バカバカしい。大先生の手にかかると、仲の悪いことまで

した」

巨勢博士は平然と、とりあわない。

風聞、加代子さんのお母さんの変死のこと、はについて探りうる限り探りあげて報告する、 先生、 かね の登場が不自然でなくなるように仕組まれてあるカラクリが 犯罪を加味した意味が与えられて、 与えられ、又、私という素人探偵が指名をうけたところに、 れるところに、 さんという憎まれ者が、土居先生という憎まれ者と並ん おまけに私、 が殺したか云々の脅迫状じみたものを一馬先生に送り、三宅 先生を招待させる。 んをそそのかして、 かくて手筈はととのったのです。あやか夫人は巧みに珠緒さ 先生は変装して当地へ旅行してメンミツに地理を調べあ のこと、すべてが報告され、ここに資料がととのって、 「あやか夫人は昨秋一馬先生と結婚されるや、 ての計 矢代先生御夫妻をお客にまねいたのです。このとき、 加代子さんのお母さんの変死のこと、珠緒さんの身持 画通り、 四人が指名をうけて参集致した次第です。神山 招かれざる客、という意外なことに自然さが 先ず、望月王仁、丹後弓彦、 お三方が招待に応じたので、お梶 招かれざる客、土居先生、 土居先生という場違い者 神山御夫妻、 お梶様変 歌川家の事 内海明の三 脱様を誰 土居 げる、 . で現 死 <u>,</u> 情 の

て、即日第一回目の犯行が計画通り実行されることになりまな仕掛があるわけでもあります。かくて予定の全員が参集しうが、未知の素人探偵をつりだしたところに、御両人の巧妙が歌川家の食卓の雑談などから私の存在を知られたのでしょにとっては全然未知なお方であります。恐らく、あやか夫人ひそんでいました。そのうえ、土居先生もあやか夫人も、私

のようにあどけなく、ほかに何の意味もない顔付に思われた。ジメな身のある話を一生懸命きいているという顔付で、童女だが、このときチラと見ることのできた夫人の顔は、何かマ私の席から、あやか夫人の顔はよく見ることができないの

二十五 致命的な手違い

巨勢博士は言葉をつづけた。

を与えた上、刺殺するという方法がとられましたが、王仁先りました。これも亦、メンミツに計画された要件の一つであいことを拒否され、階下の和室に一室を与えられることとななることを忘れてはなりません。のみならず、土居先生のみ家にただ一人の新参者である同氏にとって最も有利な条件と「土居先生の到着即日から犯罪が行われるということは、当

あやか夫人に疑いのかかる怖れがある、

ぐには先ず眠らせることが必要であり、

生は腕力ある巨漢ですし、

御婦人との交渉も多く、これを防

然し眠り薬一方では

以上の理由から、

り薬を与えた上での刺殺という手のこんだ方法がとられたも もたらし、 命的な手違いとなり、千草殺し、ひいては内海殺しの必要を となって、 のと思われ 一つの手違いが起った。 御両名をはからざる苦境に追いこんだのでありま ます。さて、ゲンノショウコに眠り薬を入れる段 この手違いが、結局、 致

した」

深刻きわまる破綻をもたらす結果となった。 うと仰有りながら賑やかに登場致されたのです。計画は図に 千草さんというアマノジャクが存在し、土居先生の熱演にフ 薬を入れるチャンスが構成されたわけでしたが、ここに一人、 窓からとび下りて行くという協力ぶりで、あやか夫人が眠り 当り一同は窓から首をだして眺める、蛇ずきのツボ平さんは、 んだ大蛇を退治た、 青大将をブラ下げて、食堂の窓の下を通られ、ニワトリをの です。そのとき、 あり、他の一団の人々はその反対の離れた場所におられたの ておられ、そこはゲンノショウコの煎じられつつある近所 られた時です。あやか夫人のみは一人離れて肉パイをつくっ の宇津木秋子さんなど、それに、千草さんとあやか夫人がお オソバを打っていましたので、ツボ平御夫妻をはじめ、 つづけざるを得なくなったのであります」 ンと鼻もひっかけないお嬢さんが現れたために、この計画は 「さて、 ピカーは、 ゲンノショウコが煎 もはや我関せず、という様子であった。 つづいて内海殺しというセッパづまった犯行を かねての計画通り、 腹をさいて晩メシのオカズを出してやろ じられていたとき、 土居画伯が一間ほどの つまり、 調 理 ひ 場 見 学 Ū١ では で て

> ろが、 じていた千草さんはビックリして、どうも変ね、じゃア、 ことをお知らせ致しました時、テッキリ珠緒さんを犯人と信 ることを見ていたのです。それで私が珠緒さんの絞殺された に近づいた人が、 緒さんが殺されてしまった。そこで千草さんは、ふと気がつ 前に、煎じたヤカンに投入されたものだと判り、 人は珠緒さんだと思っていました。 っぱらあやか夫人と向い合った位置にいましたから、煎じ薬 スコへうつして冷やしたのですから、そう信じていた。 ったい、そう叫んで、にわかに考えこんでしまったのです。 いた。千草さんは土居画伯の蛇使いにも鼻もひっかけず、 「現場を目撃したわけではなかったのです。千草さんは、 と神山東洋が、あまり興ものらない声で質問した。 眠り薬はフラスコへ投入されたものではなく、それ以 珠緒さんを除いては、あやか夫人一人であ 珠緒さんが煎じ薬をフラ おまけに珠 とこ

ŧ

犯

ろうとするところへ宇津木さんが来た。慌てて寝台の下へも り盗みだした合鍵を土居画伯の部屋へ置いておくというよう 筈のものでした。言うまでもなく、そのとき、土居画伯 宇津木さんが偶然王仁さんから預って、自分の部屋にお な方法で入手して、 仁さんの寝室におられたのです。 戻りましょう。その夜の午前一時ごろ、宇津木さんが王仁さ んの寝室を訪 「千草殺しは順を追うて語ることと致しまして、王仁殺しに れたとき、鍵がかかっておりました。その鍵は 内側から鍵をかけて、 恐らくあやか夫人が予定通 さて、 仕事にかか ほ王 ĺ١ た

千草さんが眠り薬投入の現場を見ていた次第ですかな

ここに、千草さんが殺されなければならなくなった絶対の必

要が生じたのです」

巨勢博士は至極平然と語りつづけた。

去り、 犯人の狡智の手段でありまして、この置き残された鈴一つに、 ミの上に残った跡で身長などが分る恐れがあったからであ 歌川一馬先生を自殺の形で殺す時の用意がこもっていたので ましょう。 んの心臓めがけて一 ぐる、 寝台 宇津木さんがやってきて、再び戻られた時に、王仁さ そしてキレイにふいた上へ、わざと、あやか夫人 の下を王仁さんの上衣でキレイにふいたのは、 撃のもとに刺殺する。 短刀の指紋をふき ゴ U)

ていた。 芸術を味う人の感動に似あらわした。意味は異るにしても、芸術を味う人の感動に似善さすが冷静な巨勢博士も、はじめて、いささか顔に感動をす」

した。 寝ておられました。 の意味に於てこのアリバイは必ずしも成立は致しません。 証言でありますから、警察当局はこれを疑るかも知れず、 つまり、 机に向っておられた。愛妻はその間ズッと目の前に寝ており、 「御承知のごとく、その夜、あやか夫人は一馬先生と一室に 天 地 もとより、このアリバイは夫と妻との関係に 当夜アリバイのある唯一の人はあやか夫人でありま にただ一人、一馬先生その人だけは、 おまけに一馬先生は午前三時ごろまで、 あやか夫人の ある人 そ の

> 殺せられたのであります」 も有りうるのです。そして、 あやか夫人のすすめる青酸加里を、催眠薬と信じて飲むこと ゆる人を疑る時も、 意のためです。 巧妙に設定せられているのです。 る人が犯人として疑わるべき場合にも、 らざる事実であります。 人のすすめる飲み物を疑うことなく飲みほすでありましょう。 のため、 人では有り得ない。この絶対の信頼が、第一回の犯行に於て、 ではあり得ない。一馬先生にとってのみは、これは疑うべか つまり、 なぜなら、 一馬先生を自殺と見せかけて、殺す時の用 あやか夫人を信頼 即ち、一馬先生にとっては、 一馬先生は、 その予定の如く、 即ち、これは最終回の準備 あやか夫人のみは犯 最後に至って、 恐らく、 一馬先生は毒 あやか夫 あらゆ

だろうと考えていたのです。然し、あるいは、犯人は、昨夜、ました。私は犯人が私の帰るまでこの犯行を行うことがないしてはいましたが、然し、それ以上に、犯人を買い被ってい人を私の忠告によっても多分疑ることのない一馬先生を予想と神山東洋がきいた。巨勢博士は顔をゆがめた。

をかけようとしている。

しかも、

あやか夫人は、

絶対に犯人

巨勢博士もしばらく暗然と面をふせた。

のであることはタシカです。

何者かが、あやか夫人にケンギ

ら在ったものではなくて、犯人の作意によって、

キレイに拭かれた場所におかれてあります。

さすれ

ば以前か

おかれたも

も一方に、王仁さんの部屋にあやか夫人の鈴がある。しかも、歴然たるアリバイを信じて疑うことが有り得ぬのです。しか

## 二十六 絶体絶命の悪戦苦闘

巨勢博士は顔をあげて語りつづけた。

草さんがガクゼンとして、どうやら、眠り薬の件であやか夫 その正確な意味は、 という一曲ある人物の存在を見て、容疑者の範囲を手広くす ぜモルヒネの粉末をこぼしてきたか、海老塚とか諸井看護婦 ぬ場合です」 しを行わねばならなくなりました。まさに一刻も猶予のでき 人を疑りだした様子ですので、ここに矢ツギバヤに、千草殺 ではカンタンでした。ところが珠緒殺しが発見されると、千 るために、そんなイタズラを残したのかも知れません。然し、 のアイロンのコードで殺して、電燈を消してひきあげた。 事はカンタンで、土居画伯が忍んで行って、部屋に有り合せ さいと云わぬばかりの好地点にあるのですから、きわめて仕 だアゲク熟睡しました。元々、 酔っ払いの珠緒さんは、この日は特に泥酔して、 第二の珠緒殺しですが、 私にも推定はできません。さて、 珠緒さんの寝室は、殺して下 これは極めてカンタンです。 吐き苦しん ここま な

であった。いる。あやか夫人も童女の如く、ただ耳をすましているよういる。あやか夫人も童女の如く、ただ耳をすましているよう件のヤマであるらしい。ピカーは平然として、口をつぐんで善博士の顔に熱情があらわれた。どうやら、これからが、事

草殺しの手筈を打ち合せたものでしょう。先ず、あやか夫人りました。何かの方法によって、土居画伯とあやか夫人は千「その日の午後は予定によって王仁さんをダビにふす日であ

などと、夢にも思ってみなかったのです」とづかったからと千草さんに渡しました。まさかにアイビキの手紙を人にひけらかして見せよういた。まさかにアイビキの手紙を人にひけらかして見せよういた。まさかにアイビキの手紙を人にひけらかす性質のもので、さすが練達のあやか夫人も、わが性がらかす性質のもので、さすが練達のあやか夫人も夢にとづかったからと千草さんに渡しました。それを真実めかすなどと、夢にも思ってみなかったのです」とつかったからと千草さんに渡しました。それを真実めかすなどと、夢にも思ってみなかったのです」

思われてならないのであった。博士は語りつづけた。のイタズラで、今に突如として別の真犯人を指名するようにて、あやか夫人が犯人であるとは思われず、全てが巨勢博士のとなりつつあるようであった。然し、私にとっては今もっ私にとって半信半疑の真相が、どうやら信ぜざるを得ぬも

土居先生は大八車のあと押しをやめました。そして、すこし我々の視界から消え去りました。谷をの正人びきですから猛烈な勢いで、みるみる谷径を登り、ま屍体をつんできた大八車がカラのまま帰えろうとするのをま屍体をつんできた大八車がカラのまま帰えろうとするのをまので、とっさにその利用をはかられ、言葉巧みに内海に時が六時六分、偽造のアイビキの文面では、午後六時半から「火葬場について読経を終って火をかけ、さて帰ろうとした「火葬場について読経を終って火をかけ、さて帰ろうとした

草さんが諸井看護婦に示 急坂を辿っておられ、降り休んでは降り、枳 り一足先に戻られた。 たの やりすごして、 いました。 は易々と終り、 のうちの一つであったに相違ありません。こうして千草殺 ら当然除外される位置にあるという、 土地不案内と目せられますために、 きこの土地は始めてのことであり、歌川 る前に大八車を降り、 に走って先廻りをして、 るまで恐らく五分とかからなかったに相違ありません。 締め殺し クレンボでもしようじゃな 生があとからヒョッコリヒョッコリ歩いてくるぜ、 社の裏へでてここに待って か知りませんが、 例の偽造のアイビキの手紙を奪いました。 晴天の では降り、相当の時間 てしまった。 即ち、 ĴΪ 家へ戻られ キレ 間道へとびこみ、猛烈な全速で走って三輪神 犯人御両名は危機を脱した筈でしたが、 申すまでもなく、 キと申すべき最大の危機が待 その間に土居先生は易々と先廻りし 内海先生は石コロだらけの急坂にかか ただちにハンドバッグをひっかき廻し セムシの フロシキをかぶせておい たのでありました。土居先生は 大八車をやりすごして、内海さんよ いか、 たという、 いた千草さんに話しかけ、 をつかって、石コロだらけ 危い足で、一足ずつ休ん まア、 間道の利用ということか 例 これもメンミツな計| はからざる事実が のアイビキの手紙 、家へ到着して三日目 どんな風に持ち これをやり終 ちかまえて ひとつカ なんなく どッ を千 表向 では かけ 判 直ち 海 て 先 の

カ ー 勝手にしやがれ、 愈々、巨勢博士の、 を見たが、 彼はすでに吾関せず、 バカバカしいという様子であった。 い わゆる事件の急所である。 全然人ごとのように、 私は又ピ

くまでに、

争うフリをして、

打ち合せをとげる、 御両名にとって、

つまり、

吾々が当時見

の必死、

凄惨な格闘こそは、

致したからであります」

す。

知れず、 先生をそ 容易でもあ 手紙の偽造が発見する。 婦が広間 ふり廻す、 急場にそなえてピンチに処する方法をきめておかれたのでし です。即坐に内海殺しの手筈を打合せなければならない あります。 言明をはばかったにしても、母屋の誰かにもらしているかも 看護婦を殺すか、 主も発見する。 人が千草さんに手渡しているのですから、 れれば、それを言わずにいられる筈はありません。さすれ イビキの男の名前の言明をはばかりましたが、 土居先生が追っかけて、 ょうが、それがつまり、 いのであります。これを防ぐには、 いかばかりであったか、 っている、それと判ったときの土居画伯あやか夫人 かけた、 「あの夜、 千草さんが殺されたとは知らない その打 その手紙を諸井看護婦が見せられた、 の 日記 へはいってきて、 もはや一刻の猶予もならぬ、 あげくに、 ij, 夜 合せの方法、 九時何分ごろでしたか、 のうちに殺す以外に危機を脱する道 に残しているかも知れません。 そして事件の全貌が自然に発覚せざるを得な 又 いずれかしかない。条件として内海殺し 諸井看護婦は広間に於てこそ男の名前 あやか夫人が 例の格闘、 それは多分、 のみならず、 もはや計算、 つかまえる。ほかの人たちの追いつ 千草さんは六時ごろアイ 人気ない戸外へ つかみ合い、ぶんなぐる、 内海先生を殺すか、 お由良婆さまと諸井看護 から、 周到 偽造の手紙をあやか夫 熟慮の余地も 熟慮 な御 おのずから偽造の さすれば、 諸井看護婦はア の余地もない 兇行が発見さ 男の名前 両名がか は の 逃 な あ ビキに げ去る、 りませ 諸井 ねて の の ば、 海 の が

した筈です」 て感じたよりも、さらに必死、絶体絶命の悪戦苦闘でありま

ったか。それは多くの人々にも、同様の心境のように思われやか夫人を真犯人と信じることが如何に出来がたいものであとは有りうべからざるものに思われた。それにも対らず、あ博士が、今までのことは冗談です、真犯人は、と言いだすこしてみると、あやか夫人が真犯人であったのか。もはや巨勢私も、そして多くの人々も、どうやら説得せられてきた。

けた。 日勢博士は我々の思惑などはおかまいなしに、言葉をつづ

を見け。あらか失人がそのた見り奄隻のあるに、下へ降り、下へ降り、下へ降り、に食ってかかって、自らのアリバイをつくりつつ監視の役目土居画伯が、あやか夫人の扉の前で喚きつづけ、顔をだす者状々が駈けつけるまでに、内海殺しの手筈の打ち合せを仕遂如く戸外へ逃げ去り、土居画伯はこれを追跡、追いつめて、「御両名は筋書通り巧みに格闘を演じ、あやか夫人は脱兎の

ります。巧妙に又周到なあやか夫人は、すでにこの夜の突発 く習慣をつくって人々にも信じさせ、この急場に自室へ逃げ 事に備えて、 やか夫人は最もケンギの外に置かれ、 協力していようとは知る由もない我々にとって、当の犯人あ 妙な方法です。 談話室より短剣を持ちだして、 を果す。あやか夫人がその監視の掩護のうちに、下へ降 名だけ 平常から自室の扉の内側は鍵をかけッ放してお 表面犬猿ただならぬ御両名が、 は絶対に犯人ならずと結論さるるに至ってお 自らのアリバイをつくりつつ監視の役目 内海先生を殺す。 神山さんの推理に於 かくの如 まことに巧 り、 くに て

> ない。 がなかった、そして、 天ヘキレキであり、 ことを益々信ずるに至ったほどでありました。 すが、矢代先生その他におききしたところによっても、 鍵がさしこんであったなんて、話がウマすぎると疑ったので なければ、 こむことが不自然でないというメンミツな用意をととのえて の足跡を残すに至ったのであります」 メンミツに準備せられた犯罪も、この日の危機があまりに しろ全てが長日月に計画せられたメンミツ極まる犯罪である しておく習慣であったという、益々話がウマすぎるので、 か夫人はズボラな方で、 の寝室に起居していられるあやか夫人は、 おいたのであ 。私は始め、 この急場に自室へ逃げこむという言訳が成り立た ります。即ち、土居画 そんなにウマク自室の扉の内側に かつ重大であったがために、 さすがの御両名も、 常々鍵を自室の内側へカケッ放しに 伯の到着以来、 それだけの用 然し、 熟慮の余地 一馬先生 ちゃんと かほど 、あや

### 二十七 心理の足

巨勢博士は我々を見廻した。のことやら、皆目見当がつかなかった。それに応ずるように、我々文士もそれが商売のようなものだが、まだ私には、なん巨勢博士が先程からクドク説く心理の足跡、心理といえば

両名の演出があまりにも真に迫り、疑念をはさむ余地を断っきにならない。それは皆様の手落ちではなく、恐らく犯人御練達の方々であります。その皆様にして、この足跡にお気づ「同席の皆様は恐らく日本最高の心理通、人間通と申すべき

て疑うことを忘れていられた、 りにも表面 由を私流 ているからでありましょう。 あやか夫人、 の 附け加えますなら、 事象を盲信しすぎていられた、 御両名の不和を、 然し、それにも一つの不遜な理 皆様が犯人の計画通 そこに心理の足跡を見逃す根 絶対の真実と盲信せられ つまり、土居画 り、 あ ま

にいささかテレて面はゆい様子である。 弱気の都会人で、自慢のキライな巨勢博士は、自分の広言拠も生れたのだと思われます」

先生、 思ったのです。 あやか夫人に向い土居画伯が暴力を揮いかけたとき、 即ち、この部屋には、人見さん、矢代さん、三宅さん、 況を、皆様自身の念頭に思い描いていただきたいと思います。 あまりに事が突発的で、我々の予期せざるうち、 か夫人を助けたではありませんか。その晩とても、 ん矢代さん神山さんらが奮然と土居画伯に立ち向って、 をまもり闘うに相違ない人々であります。現にその前夜も、 やか夫人の味方たる人、土居画伯の暴力に対してあやか夫人 は真に迫っております。然し、皆さん、もう一度、当夜の状 さらに、あやか夫人は戸外をめざして走り去りました。 して猛烈な格闘、ブン殴り、 予もならず、 って彼を取り押え、 「さて、 あやか夫人は殴られ、フリ廻され、投げとばされており 神山さん、 然し我々は我にかえるや、 晴天ヘキレキのピンチにのぞんだ御両名は 互に言葉尻をつかんでケンカをはじめ、 すると又、距てられたまま二言三言言い争っ 私、これだけの男が揃い、この男は全部あ 距てました。 掴んでフリ廻し、投げとばし、 それで事は済んだと我々は 当然土居画伯に躍りかか そうです。 アッと思う 寸刻の 突如と 人見さ 一馬 演技 猶

> の如く、 外へ逃げ去るなどとは、 外へ向って逃げ去ることが自然でありましょうか。自ら死地 味方の方へ逃げこまずに、 離れ、駐在所も亦一里離れておるのであります。 ぬ。戸外を廻って母屋へ逃げても、 あやか夫人の最大の味方たる者の大部分がその場に居合して 私が心理の足跡とよぶのは、ここであります。なぜならば、 や、脱兎の如く戸外を指して逃げ去りました。 ればならぬ。そうせざるを得なかった理由がなければならぬ」 人のいない戸外へ向って逃げねばならなかった必然性がなけ 暴行を受けているのに、味方の中へ逃げこまずに、暗闇 されて投げつけられ、 へ赴くことではありませんか。我々の目の前ですら、フリ廻 法逃げだすことは自然であるかも知れません。然し、あの晩 でしたら、 不案内な夜道などで、深夜にオイハギに出会ったような場合 人と老いはてた下男の外にはおりませぬ。 伯はあやか夫人に飛びかかり、あやか夫人は身をひるがえす たと思うと、我々の予期せざるうち、再び突如として土居画 からざる奇怪事であります。即ち、 いるのです。戸外には何もありませぬ。誰も味方は 巨勢博士は言葉をきった。然し、 現に味方の大部分がその場に居合わす場合に、 我々はオイハギをのがれて暗闇に向ってメクラ滅 衣服はさけて膝から血が流れるほどの 人間の心理に於て、 味方の居るべき筈の そこには、どうしても、 母屋の男は老いはてた病 村の人家は一 およそ有りうべ 即ち、皆さん、 ない暗闇 我々が土地 おりませ 、その 里も の戸 の

くことができませんでした。その翌朝、内海さんの惨殺が発「私も演技の妙にだまされて、その日は、その不自然に気付テレたものか、すぐさま言葉をつづけた。

さが、 ハイ、 たのは、 上 の 敵・ は 画伯は平然として、敵てあやか夫人にとびかからない。 見されたとき私がようやくそれに疑念をもつことができま によみがえり、 しさの不思議さが、はじめて、不思議なものとして私の さでは、 こが私の ナと思ったのは、 毒をもるものですか、あやか夫人がそう叫ばれた。 と申されますと、 自分もいつ毒殺されるか分らない、こんな家にいたくない、 です。のみならず、それが終って、尚言い争い、土居画伯 然として、 人とよび、 ことはなお 毒殺せられ 内海殺しの夜は、 あの物凄い格闘となった。ところが、この日は、 ようやく目に映じてきたのでありました。私が御両 ったい、 、この日にまさるものはない。それにも拘らず、 気にかかった、 それから一 の激しさでは、そして又、言葉にこもる悪意の かたわらの碁石をつまみ上げ、黒白夢幻の恋 指の魔術師とよびました。すると、 暗闇 があった折に、あやか夫人は土居画伯を指し 御記憶に明かなことと思いますが、さっそく平野 た当夜 それにつづいて、 へ逃げ なぜだろう?
そう思った時、 その時でありました。何か勝手が違う、 お前が犯人じゃ 悠々と指の魔術を御披露あそばされたもの のことでありました。 週間 なんでもないツマラヌことがキッカケ 去ったという有りうべからざる不 の後、 すると、 歌川多門先生と加代子さん あの心理の足跡、 私は気づいたのです。 ないか、 皆さんも、 お前 土居画伯 あ のほ の格闘 、あの あやか 私がハテ かに 言葉 の 土居 そう これ 誰が に 平 白 意識 の激 そ犯 日 が、 夫 名 が の の

の周到きわまるカラクリを見破ることができたのは、

その時でありました。

あまりにも、

おそすぎました。

子さんは表向き女中なみの待遇をうけているのですから、

コーヒー茶碗は土居画伯以上にカケたものが当ります。

だんはこの食堂へ来ることのない方ですから、

とのえ、

先

生の

誕生日を予定しました。

加代子さんはふ

加代子さんの

た茶碗がまじることになりましたから、

これを利用

して筋書

加代子さんと同時に、多門先生を殺害する手筈をと

ようや

定的な説得力には、 思いと、ピカーの平然たる顔と、それは奇妙に調 しも不自然ではなかった。心理の足跡とはいえ はありません ピカーは相変らず、 又 あまりにも巧みな演技、 どこか不足なものがあっ 平然と沈黙 L あまりにも、 ていた。 その沈 た。 巧みな計 和のとれた、 我々の 尚それが決 黙 は その 必 画で

要するに、

変に間の抜けた痴呆状態をつくりだして

いるので

あった。

そろいの茶碗 連夜の乱舞によりましてコーヒー 見せかける、そういう用意をととのえたワケであります。 ぜておき、プリンの中ヘモルヒネを仕込んだのですが、 先生の場合、 でしょう。問題は加代子殺しであります。幸いに土居画 ヒネを入れておく、それを気付かずにプリンへ入れたように ケンギをこうむりますから、 ンの中へモルヒネを仕込んだだけでは、 の仕事はカンタン明快で、 「さて、 巨勢博士は語りつづけた。 五回目の多門 あやか夫人が多門専用の では満足のものが不足になって、一つだけカ 加代子毒殺事件にうつりま あやか夫人も別に苦心 先ず、 茶碗が一ダース余もか 多門専用の砂糖 砂 糖 あやか夫人が直ちに 壺 へモ は ル ヒネ なか 壺ヘモル った プリ け、 伯 ヶ

すれば、 ばかりであ って、 想の如く広間にコー その頃を見はからって、矢代夫人をさそって便所へ立つ、予 指の魔術 行われたワケであります。以上で主要なる殺人目的 と又しても、 土居画伯はあやか夫人をハッタと睨んで、奴メがオレ 代子さんと茶碗をとりかえた、 ません。巧みに毒薬を入れたのち、巧妙な手段によって、 を設定されたというワケであります。これだけの助演が完了 上に並べられていたコーヒー茶碗へ毒薬を入れうるチャンス らが便所 すからその必要の方々も数人おられて、 て又何人か便所へ立つのはよくある現象で、 返しました。 慌てて食堂へきて、便所の窓から庭に怪しい人影を見たと云 必要で、 コーヒー さんにすすめる。この妙技を成功させるには、 す、あの人こそ犯人です、 まして、 一馬先生、 これはあやか夫人の役割です。即ち、 あとは土居画 へ立たれた。 という天才的の妙技によって、 茶碗に毒薬を入れうる可能性をつくっておくことが と怒り、 りますが、 人々がにわかに何人か立ちますと、それにつ あとは最後に主目的たる一馬先生の殺害が残る 矢代先生、 ا ا あやか夫人は土居画伯をさして、 こうして、五六名の方々に、 か 伯 その中間に、 が並べられているのを見届けて ねて計画 の手練の妙技に狂 あの人は指の魔術の天才ですから、 それに私を誘って便所へとって そして演技は見事に成功し、 の カ 不連続殺人事件の不連続 ケアイ漫才の 神山さん、三宅さん 毒薬を入れて加 い の 食事の終り時 他の人々に あやか夫人は、 ある筈は 広間 の大半を 名演技が ウソで を殺そ から、 の卓 あ れ ij 加 で

土居画;

伯

がコ

I

ヒー

茶碗をとりかえてあげる、

そのとき例の

来の方

々よりも待遇の落ちるのは自然で、これを利用して、

す。 そこに土居画伯を待ちかねている宇津木さんと、 さんと三輪山 とっているうちに、必ず次の不連続興行の端緒が握れるもの 致したのです。内海殺しは突発的な危急存亡の大事ですから、 ところから、私も賭けのタマツキに一枚加わることに致し 山さんと土居画伯が毎日タマツキの賭けに熱中しておられる 次の事件の端緒をつかみ得るだろうと狙いをつけて、幸い るに心理の足跡を発見し得たことによって事件 事件の真相をつきとめることができましたので、 で肩を並べて滝壺を散歩しながら、 あやか夫 と信じていました。 まったのです。そして土居画伯につきまとい、ここにつきま は例外中の例外で、 にあやか夫人が短剣を握って出演するに至りましたが、 はないと思いましたので、 し得た、 たる一石を投じておく必要があ かかれてしまったの の のです。又しても、これが私の失敗でした。 工 か八か、 一げました通り、 に選ばれて滝 兇行にあやか夫人 かくなる上は、 というだけのこと、 人は 土居画 白刃の下をくぐる千番に一番のカネ合いで、 の滝壺でアイビキの約束をむすびました。 当日鉱 壺につき落されて溺 佰 私は多門加代子殺しの終って後にようやく 最後の一馬殺しをのぞいて、 次の事件を待って現場を押える以外に手 いです。 この軽率な見込み 泉宿 (の出番はもはやなかろうと私は考えてし の走った間道を駈けぬけて滝壺へ現れ、 へ遊びに行き、 土居画伯 即ち土居画伯 一つとして物的証 り、宇津木秋子さんがイケニ 死 とつぜん宇津木さんを突 につきまとってい は しました。 その帰途に、 もの 私はカン違い ひそかに宇津木 拠は の の 見事 それ 何く 全 不連続方 先ほども申 な 貌 、わぬ顔 千草殺 に れば、 を推理 い も要す これ ので つい 面 を た 神

鉱泉からマッスグ戻ってきたように御帰館あそばされた次第へ現れ、ブナ林の方から何事もなかったように、そして、今き落しました。そして再び、今来た間道を駈けぬけて元の道

# 二十八 ぬきさしならぬ物的証拠

であります」

勢博士に欠けている最後 そのどちらにも、 たる二人の男女の無心さにも説得されずにいられ て我々は、 顔、そこには反抗的な太々しさを見ることもできない。 にはいられなかった。 ところなくその真相をバクロせられている。私も説得されず しならぬ物的証拠に外ならない。 そして二つの説得力が妙な平衡状態を保っている、 あざやかな推理であった。 そして童女のように聴き耳をたてる無心なあやか夫人の 巨勢博士の推理に説得されながら、同時に、 最後の説得力が欠けているのだ。そして巨 然しなお平然として無関心なピカーの のものは、 不連続殺人事件の全貌はあます 言うまでもなく、 なかった。 ぬきさ つまり そし 犯人

先生すら、父多門氏が惨死せられて、片倉老人の打ちあけ話海老塚、諸井の両氏は周到なる犯人すらも予期せざる人物で医師と諸井看護婦があのようなことにならなければ、この二医師と諸井看護婦があのようなことにならなければ、この二医師と諸井看護婦があのようなことにならなければ、この二条が、最後の仕上げの犯行にうつりますが、もしも海老塚がし巨勢博士は、そのような説得力の平衡状態が一向に苦然し巨勢博士は、そのような説得力の平衡状態が一向に苦

信じ、 ければならなかったのでしょう。こうして、 自身も舌を噛みきって一時喪心するほどの狂言をはたらかな ないために、あやか夫人は無理心中を迫られた格闘 で通る筈ですが、真犯人としての自殺という証拠が残されて 恐らくあやか夫人が催眠薬をすすめたものと思われます。そ 余りあります。不安のあまり寝もやらず明方に及んだ同氏に、 安堵しておられた一馬先生の驚愕顛倒、不安のほどは同情に せん。ただ警察の方から話をおききしただけですが、この事 殺という形による殺人事件が予定通りに行われることとなっ 仕上げも当初の計画に戻らざるを得ず、即ち、一馬先生の自 して諸井看護婦を傷害し、留置されてしまったので、最後の られることとなったでしょう。幸か不幸か、海老塚氏は発狂 価値が大であり、もし海老塚氏の発狂という事件がなければ なかった、 ことを知らなかったほどであります。したがって犯人も知ら をきかれるまでは、海老塚氏が多門先生の孫に当る人である い、もうダメだ、という一馬先生の告白を世に伝えるために、 して、一馬先生は青酸加里をのんで死ぬ、 広間の柱にハリ紙を見られたからで、事件の犯人を海老塚と ん一馬先生は、今朝明方ちかくまでイライラと寝もやらず煩悶 までの推理が正しいように、次の推理も正しい筈です。 件は私がすでに十日以前から予定していたことですから、 たのであります。私はまだ一馬先生毒殺の現場も見ておりま し、不安に沈んでいられたことと思います。なぜなら、前夜、 馬殺しの容疑者として最後の仕上げに最も大きな役割をふ 海老塚氏の逮捕によってもはや身に危険のなきものと それだけに、この予期せざりし人物の出現は利用 それだけでも自殺 十ヶ月来の計画 の跡を装

-132

す せられた犯罪は、 まんまと最後の仕上げを終ったのでありま

して、 の最後の仕上げ、挑戦、 とは相手にならぬという様子である。当然ここに、 ピカーは平然として、 まさしく巨勢博士は、 質問一つしようとしない。 攻撃がなければならぬ筈である。 変りばえのない声で、 淡々と最 巨勢博士 バカなこ そ

後の挑戦をきりだした。

要があり、幾度かの会合と打ち合せをとげることが必要であ ります。 通じて、かつ、それを骨子にメンミツな打ち合せをとげる必 ん。 どの知友に協力をたのんで、 人の写真を握って東京へ帰り、写真を焼き増して、三十名ほ の都市を遠く いう話でした。してみれば、 かけられてもその夜のうちには必ず帰ってこられたという、 ツボ平御夫妻からききだしましたが、あやか夫人は単独で出 御夫妻の宿はツボ平氏の家でありますから、私はそれとなく で二人は会見せられておる筈であります。 メンミツな計画犯罪を行うためには、 から、必ずどこかで会っておられる筈であります。これだけ しょでしたが、 は二度必ず上京される習いでした。上京は常に一馬先生も 一度も一人で出かけられて泊ってこられたことはなかったと 「私は東京へ行きました。あやか夫人は結婚後、月に一 千葉、八王子に至るまで、 土居先生とあやか夫人は文書で往復することは危険です したがって、あやか夫人の上京のたび、必ずどこか 離れる筈はあり得ない。 上京中の行動は必ずしも一しょではありませ 東京はおろか、 会見の場所は東京か、 待合、 旅館、 私は土居画伯あやか夫 事前にあらゆる事情に 。上京中の一馬先生 横浜、浦和 東京周辺 度 又

> の待合の女将と女中は、 落ちあって、静かな半日をたのしんでおられたわけです。そ あまり離れていない焼け残りの待ち合に、 番で東都を出発いたしております。 したのです。御両氏は、 つぶしにきいて廻ったのです。その結果、 月に一度あるいは二度、必ずそこに 私の同僚につきそわれて、 夕方五時には、 御両名の巣を見出 お膝元も、 おそくも 今朝の一 都心を

り、今朝の出発を知らせたものです\_ はじめた。 「これは、ただ今、友人から、私にとどいた電報です。 巨勢博士は電報をひらいて机上にのせ、 巨勢博士はポケットから一枚の紙片をとりだした。 それを静 かに読み つま

ここへ到着いたす筈であります」

ンニテタツ」 「セミマルノ オカミトジョチュウ、 ヨテイノトオリ、 イチバ

合の名前です」 巨勢博士はつぶやいた。「セミマル、セミマル。これは、 待

ころである。 下へくずれ、二三度床板をつかむように遣いだして、やがて、 やか夫人が胸を抱くように掻きむしってフラフラと倒れると て前へとびだした。あやか夫人の椅子が倒れ、 くずれて、動かなかった。 そのとき一方の壁際から物音が起った。数名の刑 ピカーは、なお平然として、 刑事の抱きとめる手がおくれて、あやか夫人は 顔色ひとつ変えな 立ち上ったあ 事が慌て

た。 工呼吸のようなことを施していたが、 事の中にまじっていた医者が進みでて診察し、 やがて諦めて立ち上っ 数人で人

シラミ

立ち上っていた。 五名の刑事が寄り添い両手をシッカととっている。ピカーは ないようであった。 つめているが、恐らくその極めて一部分しか見ることができ 私がふと気付いてピカーを見ると、ピカーの左右、後に、 あやか夫人の倒れた姿をテーブルごしに見

オレとあやかとが犯人であったことを、今や、公然と認めて カーが、だよ。さすれば分明ではないか。つまり、オレは、 のところへ行きたいと云っているのだ。犬猿ただならざるピ 「カングリ警部殿、わかるでしょう。オレがあの人、あやか 「あの人のところへ、行かせてくれたまえ。あの人、あやか」 カングリ警部は判断に窮して目玉をむいて黙っている。 ピカーは、けわしい視線をカングリ警部にそそいで、

あげているのだ」 「じゃア、オレの腕をとるのも、よしたまえ。しばし、最後 カングリ警部はうなずいて、 承諾の意を表した。

ル正面の巨勢博士のうしろを通るとき、軽く博士の頭をなで の自由を与えよ」そして、ピカーは刑事の腕をふりはらい、 一人ノッシノッシとテーブルを廻って歩いて行った。テーブ

ずいた。 らそうなことを言いすてて、あやか夫人の遺骸の前にひざま 「うまく、 やった。 探偵 小僧氏。汝、賞讃さるべし」と、偉

女中ごときが現れたところで、それが何物でもないではない たが、顔をあげて、誰にともなく、 「バカだったよ。死ぬ必要はなかったのだ。待合のオカミや あやか夫人の手をとって、 その死 顔を数分間もみつめ てい

するものへの情誼により、 これ、犯人の、また、ひとつの告白なり、 してくれたよ。今となっては、もはや、仕方がない。自殺は、 か。そんな証拠を吹きとばすぐらい、それぐらいの智恵をオ レに信じてくれてもよかったじゃない 良人ピカー氏も、 か。はやまったことを か。よろしい、愛 つきあって告白

致すであろう。アーメン」

った。 づけした。 一ながら、それは人の心にしみいる悲しさを伝える姿でもあ ピカーはあやか夫人の手をおしいただき、長く長く、くち 。あまりに長い時間であった。そして、兇悪なピカ

それがピカーの最後であった。 ピカーはあやか夫人の手をはなし、 よろめいて前へ倒れた。

「犯人さがし懸賞」 正解者発表

完全正解(九十五点)賞金一万円

正解(九十点)賞金各五千円

東京都目黒区上目黒五ノニ五五九

片岡輝夫氏

庄司公彦氏

酒井淳氏

田中碩氏

大阪市東区瓦町一丁目一番地 高知県幡田郡中村町

三等 東京都中野区野方町一ノ七九五 正解に近し(七十点)賞金二千円

四 等 部分的正解 (五〇点) 賞金 千円

東京都新宿区戸塚町四ノ七五八 東京都新宿区下落合一ノ三六九

東京都目黒区洗足一四六三

村田モト子氏 新井完氏

大井広介氏

#### 選後感想

ろといえば、 片岡、 ばならなかったか、それも完全に推理しておられる。不足のとこ とだけである。 外の暗闇へ逃げ去ることが不自然なる事、を見逃しておられるこ べて一分の狂いもない。 なぜ千草、 ピカーあやか共犯を推定された答案は全部で八通。 内海が殺されねばならなかったか、 靴の鈴が一馬殺しの準備であったこと、あやかが戸 酒井四氏は巨勢博士の推定と完全に同じく、 内海殺しに先立って、 各殺人の手口、 なぜ格闘しなけれ そのうち、 す

氏を最上席とした。三氏は甲乙をつけがたい。きわめ、一分の狂いもなく、他の三氏にややまさっているので、特に片岡氏はその他のあらゆる細部にわたってメンミツ適確を

前記四氏にくらべると、よほど落ちる。細部についての検討も不られて、他の三氏を捨てることは作者の忍びがたいところであっられて、他の三氏を捨てることは作者の忍びがたいところであっられて、他の三氏を捨てることは作者の忍びがたいところであっられて、他の三氏を捨てることは作者の忍びがたいところであっられ、なにピタリと細部にわたって当てられると、本当に、うれしい。これは、最上席のみ一人という約束だったが、正解が四名もお賞金は、最上席のみ一人という約束だったが、正解が四名もお

は大いに狂ったところがあって、作者に敗北を感じさせるもので井広介探偵は、ともかく犯人は当っているけれども、細部に於て四等の村田、新井、それに私の挑戦者の一人である四丁鼻の大

比していた。

然し、

これも作者がなにがしの敗北料を支払うに値

とにした。はなかった。然し犯人が当ったという事に就ては敬意を表するこ

ランミャクをきわめ、犯人の名が当ったという以外に取柄のある的事実から論理的に推定したものではない。だから細部の解釈もこれは探偵小説の一種の公式的解釈の利用にすぎず、一々の具体して遺産問題だけであるという観念的な論拠から出発しており、大井広介探偵のごときは、これだけの殺人を犯すには、動機と

小説は合理的でなければならぬ。来ているのだ。探偵小説の従来の公式などは問題じゃない。探偵ってよいことではないかと思う。つまり、ピタリと当るように出タリと推理された方が四人もあったということは、私がむしろ誇私は思うに、巨勢博士の推理と全く同じように一々の細部にピ

ものではなかった。

九九パーセントぐらいが不合理なものだと思っている。みならず、全世界の探偵小説の九十九パーセント、否、九十九、させそれを、合理的に解けと云ったって無理である。私は日本の人間性を不当に不合理に歪めて、有りうべからざる行動を実在

る限り、必ず犯人は当らない。のが、一応最も便利で、有効に思われる。ところが、消却法によその三十人の中に必ず犯人がいるのであるから、消却法というもるほど探偵小説は、現実の犯罪と違って、登場人物が三十人なら、犯人の間違った答案の多くは、消却法を用いられているが、な

をもつ人物が、実は犯人であるという、そこにトリックがあり、ると、まッさきに犯人でなくなってしまうような完全なアリバイよる限り必ず失敗するようにつくられたものである。消却法によいわば探偵小説のトリックとは、消却法を相手にして、それに

説のトリックはそういうものだと鵜呑みにして疑っていないの為や心理をムリヤリにデッチあげて、又、作者も読者も、探偵小このトリックにムリをして、そこで人間性をゆがめ、不合理な行探偵小説の妙味があるのである。然し、従来の探偵小説の多くは、

でいたので、程へて本のことをフト思いだした時には、どうながく気持になり、その本を心理通の友人が探してくれる話であるが、を紛失した。その本を心理通の友人が探してくれる話であるが、を紛失した。その本を心理通の友人が探してくれる話であるが、をがしたことがあって、もう題名も忘れたけれども、ある男が本感心したことがあって、もう題名も忘れたけれども、ある男が本感心しても見つからなくなってしまったの短篇探偵小説をよんでしても見つからなくなってしまったのである。

ò 性、 はうれしい。 私のかねての目的が達成せられた一証左ではないかと思われ、 教えてくれたのは、先程申した佐藤春夫氏の短篇だったのである。 になっていた。その探偵小説の人間的な合理性ということを私に ンたる大殺人事件を展開させ、 ッサンによるものをいうのであって、探偵小説を愛読して、 その意味に於て、完全な正解が四氏もおられたということは、 私が犯罪心理の合理性というのは、こういう人間性の正確なデ 合理性という点で裏切られるたびに、 人間的に完全に合理的な探偵小説を書いてみたいと思うよう 犯人の推定をフンキュウさせなが ひとつ自分で、ケンラ 人間 私

す。

さった皆様方、又、愛読を賜わった皆様方に厚く御礼申し上げま

これは作者の虚をついた妙作であった。熱心な答案をお寄せ下

あろうに、長野の秋元氏の正解の答案であり、いきなり完全正解もっとも、私が答案の山の中から最初にとりあげたのが、事も

一に正解が全部あり、次々に、いささかギョッとさせられたので当てているんじゃないかと思った。運悪く私の見た始めの三分の解答案で、もうダメだ、これは大変なことになった、五六十人もであるから、このときトタンにギョッとして、こらイケナイ、そ

たもので、て思い及ばざる着眼点から、作者の向っ脛をカッ払って出てきて思い及ばざる着眼点から、作者の向っ脛をカッ払って出てきで、これはまさに前代未聞の発想法により、現代推理小説のかつ最も答案の名作は森川信一座の俳優木田三千夫氏からのもの

ある。

坂口安吾